量よりは質を
醜よりは美を
情熱と理想
幻想と詩心
熱心と誠実
鈍重にして執拗
鋭敏にして深刻

一陽会五十年史

清新にして深奥なるものの創造に勉励し
新時代の美術を推進せんとする
制作上なんらの制約によって拘束されることなく
尖鋭なる未完成をこそ推薦し
前人未踏の新分野の確立に努力する

一陽会五十年史 編集委員会 編

一陽会

一陽会五十年史 [目次]

[口絵図版] ……3-36

鈴木信太郎／野間仁根／島岡徳太郎／米良重博／荻野康児／鍋 利彦／山路貞護／丹下富士男／
中田 豊／森由太郎／山谷誠一／長谷川三千春／植本 力／浅野孟府
片柳忠男／小川哲郎／勝 一晃／北山泰斗／大石可久也／荻原宗晃／佐野儀雄／田所満雄／
森 秀雄／萩原光朔／田辺栄次郎／五十嵐一朗／柳瀬修次／坪井正光／大場吉美／沢 オイ／
鈴木 力／笹野 弘／谷岡 久／上嶋敏男／鍛田 猛／浜田 清／山田 治／沢田正太郎／星 芳香／
角 美貴子／中村秀雄／細川 尚／岬 和男／野間博治／中村 輝／山崎 猛／島嶋文彦／小池基男／
三輪乙彦／六崎敏光／石黒 功／土屋瑞穂
・[第四十九回一陽展の審査委員]

[本文]

一陽会五十年の回想……北山 泰斗 44

[総括] 一陽会の五十年史……宝木 範義 50

第1章 一陽会の創立 〔～昭和三十年〕

◇戦後の二科会の再建 61
◇東郷青児との訣別、二科会脱退 77
◇「一陽会」の結成へ 83

第2章 伸張する一陽会 〔第一回展・昭和三十年～第九回展・昭和三十八年〕

◇「第一回一陽展」の開催 97
◇創立会員の周辺 118
◇第四回展を東京都美術館で開催 126
◇彫刻部の発展 I 140
◇地方別ブロックの確立 I 〔関西支部の開設〕145／〔北陸支部の開設〕152／〔中部支部の開設〕155

○一陽会第一回展の思い出〔昭和三十年〕江川光信 105／○五十年はずいぶん昔です〔昭和三十年〕大野隆之 107／○遠い日〔昭和三十年〕山田忠史 109／○「一陽会会章（バッジ）」〔昭和三十二年～三十五年頃〕渡辺喜久蔵 135／○一陽会関西クラブ〔昭和三十年～三十二年〕150／○「加能各界人秘ライン（洋画壇）」〔昭和三十四年〕154／○「元気した新人群 第3回中部一陽展」〔昭和四十年〕159

第3章 高度成長期の一陽会 〔第十回展・昭和三十九年～第十九回展・昭和四十八年〕

◇価値観の多様化の時代と一陽会 172
◇「新生一陽会」への道 187
◇「一陽会の解散」と、第十三回展の再出発 192
◇版画部の独立 199
◇地方別ブロックの確立 II 〔関東支部（関東ブロック＝東京支部、千葉支部、神奈川支部、茨城「一陽会」）〕202

○デモンストレーションの日〔昭和四十三年六月二十日〕192／○鈴木信太郎先生祝賀会〔日本芸術院会員新任三編 昭和十四年〕194／○荻野誠児先生の思い出―荻野先生からの葉書―〔昭和四十四年十二月〕飯田晴夫 197

第4章 経済高揚期の一陽会 〔第二十回展・昭和四十九年～第三十三回展・昭和六十二年〕

◇委員制の導入 225
◇第二十一回展を新東京都美術館で開催 230

◇『一陽会会報』の創刊（昭和五十五年） 238
◇彫刻部の発展Ⅱ 253
◇地方別ブロックの確立Ⅲ（『長野支部』270／『新潟支部』274／『秋田グループ』275／『青森一陽会』276／『札幌グループ』276
◆創立会員 野間仁根の逝去（昭和五十四年） 278
○一陽展と私 山崎 猛 257／○初めて野外展示場を使用したいきさつ（昭和四十五年・第十六回展） 髙嶋文彦 259／○「内なる生命」を彫刻に―ありし日の中村晴先生を偲んで― 三輪乙彦 261／○彫刻部に彫刻展示室を！ 中村義孝 266／○一陽展（本展）長野初巡回の頃（昭和四十三年） 脱内カツテキ 271／○「一陽会賦」（昭和五十一年頃） 272／○長野展を振りかえって 神林 茂 273／○釣キチ天狗 交遊録―日本美術振興釣クラブ始末記―（一陽会外史） 昭和四十四年―一 田所崗雄 280

第5章 新時代の一陽会（第三十四回展・昭和六十三年～）

◇常任委員制の導入（昭和六十三年） 301
◆創立会員 鈴木信太郎の逝去（平成元年） 304
◆創立会員 髙岡徳太郎の逝去（平成三年） 308
◇一陽会の平成の歩み 312
◇「国立新美術館」（東京・六本木の美術展示施設）への対応 326
◇地方別ブロックの確立Ⅳ（長野・一陽会）332／（福島グループ）333
○半折 髙岡徳太郎 307／○一陽会の事務局の推移 317／○一陽会の役員（質の推移） 318／○阪神淡路大地震に遭遇（一陽会関西支部） 322／○追悼 福木力先生 髙嶋文彦 335

【座談会】一陽会の五十年と明日への展望 337

［出席］――北山泰斗、横張修次、坪井正光、沢オイ、諏野弘、杉山司、石川三知代、髙中陽一（記録係）、髙嶋文彦、六嶋敏光、中村義孝（記録係）、玉木範義（オブザーバー）

*

○一陽会会員（常任委員・委員）録 356
○一陽会支部活動の記録 /103

一陽会五十年の回想

北山 泰斗

一陽会は、二科会を脱会された画家十二名、彫刻家二名の先人達が、一九五五年七月、一陽会を組織し、Declaration〔宣言〕を掲げて公募展として創立した。星霜を重ね、二〇〇四年の秋、五十周年展を迎える。この記念事業の一環として「一陽会五十年史」の刊行を企画することになった。

一陽会五十年の変遷を辿ると、諸相において些少の混乱も皆無とは言えまいが、一陽会は平穏であった。個性溢れる画家や彫刻家の集団であろうから、思考の差異による葛藤を生ずるのは至極あたりまえのことであろう。むしろ、穏やかすぎては不可思議できえある。個々に内包するエネルギーが冷めているのだろうか、燃え滾るような意欲が会の活性化を促す要因になりはすまいか。

旧都美術館は、二階が全て展示室で、一階正面左に食堂があり、両側面には搬入出口や収蔵庫が並び、審査室も設けられていた。私が会員として初めて審査室に加わった頃、あの薄暗い一隅に、鉄塊を逆さまにしたような灰匣がいくつか配され、これを囲むようにして、創立会員の先生方は談笑しておられた。話題の殆どが漢方薬や鍼や灸、指圧といった中国治療の話に花を咲かせていた。この様子を眺めて、三十歳そこそこの私は場違いの空間に居るような衝撃をうけた。審査員が集い、今年の作品のありようとか、会の運営についての計画とかが、当然話し合われているものとばかり想像していたが意外だった。審査前の間合いをたもっていたのだろうか。

先人達の審査風景も懐かしい。和やかと言えば言えなくもないが、あのような審査が罷り通っていたのかと唖然とした記憶が残っている。

年長の鈴木信太郎先生を「信さん」と呼び、年下の高岡徳太郎先生を「高岡君」とよぶ野間仁根先生は、両先生の中央の椅子に座り、この三先生の両側に創立会員が並び、後列に会員が席に着く。前に並べられた三点の作品に、

「信さんほどの絵を選ぶかな。」

「真ん中の絵がいい。」すると、

「高岡君はどうかな。」

「右の作品がいいと思う。」

そこで野間先生は、

「それじゃ左の作品にしよう。これできまりだ。」

審査員は一斉に爆笑。この滑稽とも思える情景は延々と続く。ふざけているように見えて意外や意外、素晴らしい作品が選ばれているのだから不思議でならない。老練な先生方のなせる「わざ」かもしれない。

ほどなく、旧都美術館の仮設のような会場事務所に、野間先生から呼ばれた。

「これからの美術団体は、新しい作品が集まらなくては会の発展はない。君が適任だと思うがやって呉れないか。新しい作品を選ぶのに相談したいから、わしゃの右後に居るようにして呉れ。」

と、審査室での席が定められた。さらに、

「抽象の部屋の陳列も頼むよ」と。

このお言葉に、「なぜ私ごとき若輩者が」と、疑念を抱く反面、意欲の高揚を覚えた。

かねてから交遊があって、無所属になったばかりの森秀雄氏に参加協力を促し、同意を得て、新進気鋭はもとより、意欲の旺盛な新人に呼びかけよう。時を待たずして森氏が他の会に所属していた棚瀬修次氏を招き入れ、私の教え子も数名を入れて、徐々に基礎が構築されつつあった。

彫刻部も植木力先生を軸に、山崎猛氏、横沢英一氏が活力のある新人に呼びかけ組み込んでいった。絵画部も彫刻部も共に若者の参加で会の雰囲気が一変し、活気が漲るようになって「一陽会は変貌した。この季節、趣味の衣を纏う人達が少なくなった印象をうけた。この頃「おれたちの発表の場だからな」と嬉しい言葉がよく耳に入った。

一九七四年、創立二十周年記念展を前にして、創立会員七名と、絵画部八名、彫刻部二名の会員を加え委員制が確立された。会も発展して二十年余を経ると制度の改革や改正を余儀なくされる。既存の「一陽会内規」も整備を迫られて、勝一晃氏、佐野儀雄氏、五十嵐二朗氏と私で議論を重ね整えた。

一九七九年師走、二十五回記念展の報告を兼ねて、入院中の野間先生を見舞うことになり、鈴木信太郎先生の娘婿の後藤敏夫氏と勝一晃氏と私で伺った。枕辺に呼ばれ、先生は呂律がまわらぬ様子であったが、介護しておられたお嬢様の佳子さんの口伝てによると、「一陽会をよろしく頼む」とのことで感激無量だった。そして暮も押し詰まって逝去された。

会の発展には支部の躍進こそが不可欠である。各地方支部の拡充と連携を図るようにとのことで支部強化が開始された。支部とは、当初本展からの作品を移動展示する地域と定めていた。北海道支部、関東支部、北陸支部、長野支部、中部支部、関西支部が組織されていた。その後、各地区がそれぞれの指導者によって、構成員を増やし、

今日では支部の情況に変化を生じた。北海道支部がグループに、関東支部が、東京支部、神奈川支部、千葉支部、茨城一陽会に分割した。支部員の増加、そして支部展の会場確保の困難さが要因である。また一昨年から、地理的条件で、北陸支部から富山が独立して支部を創設している。当初、勝一晃氏と私は、札幌、千葉、富山、金沢、福井、長野、名古屋、大阪と目まぐるしく旅を重ねた。各支部では、何人もの会員が加わり地域の活性化に努めた。

支部展で特筆しなければならないのは、名古屋の名鉄百貨店である。第七回展から第三十五回展まで、一陽展を開催して厳き、宣伝から全てを賄ってくださったご好意に満ちた支援に深謝したい。

会五十年の三割足らずの期間であるが、『一陽会会報』はそれなりの足跡を残したと自負している。もと関東ブロックの代表に任ぜられて、このブロックの質的充実を図るには何を成すべきか思案に暮れた。既存の研修会や下見会に留まず内容の充実を図ることで、支部員の意欲の高揚と活性化が望めよう。

美術評論家や詩人を研修会に招き、講演会を催し質疑応答もあって、予想以上な好評を得て、これほどまでに歓迎されるのであれば、一支部員のみに止めず、会に所属する全ての人達に聴講が叶うよう、紙面ででも伝えられぬか。常に脳裏から離れなかった。

地方支部との連携を図り、本部に寄せられる活動や活躍振りの情報とを合わせて伝える手段として、会報に辿り着いた。編集には、荻原宗晃氏、山田治氏、鈴木雅弘氏、それに石川三知代氏に、講演の録音テープからの原稿起こしを依頼、講師の先生に目を通して厳くなど、きめ細かな協力を得て、体裁は整いつつあった。予算の関係でページ数も限られていたが、嬉しいことに鈴木信太郎先生が「一陽会会報」の題字を書いてくださった。会報は誌上討論の場であり、互いの情報媒体の場であり得ればと願って発刊した。まるで渇望していたかのように、意外に多くの称賛と支持が寄せられ、編集者一同満悦であった。徐々に予算も増額されたが、それでもタイプ印刷で、手弁当であったが、多くの人からの感謝の手紙や激励の言葉に癒され、労苦を忘れ十五年間に三〇号を刊行した。マン

ネリ化しているのではなかろうかと自己反省もあり、新しい目で、新しい理念で会報が蘇生され継続されることを望みつつ降りることにした。

一陽会の草創期は、趣味で描いた作品と、画家と、画家を志す人たちの作品が、渾然一体となっていたのではなかろうかと回想されるが、その後一陽会は著しく変貌を遂げて、草創の頃の面影を一新したとまでは言えないまでも、躍進の道程を歩んでいる。今日、意欲に満ちた新人や中堅の諸氏の活躍振りを歓迎したい。会としては予てから会外活動を奨励して、国際展やコンクール等に積極的に参加することを促してきたが、予期せぬ受賞者の続出に、会の充実を知らされる。

一陽会は、野間仁根先生のお人柄による舵取りで、常に先生のユーモリスト振りが会の人々を和ませ笑顔の多い会を構築されたと思われる。一方、高岡徳太郎先生は、広報と展覧会場の確保と拡張に尽力された。今日では、創立の頃を記憶する人は稀であろうが、第一回展から三回展まで、高島屋日本橋店で絶大な支援のもと開催された。都の美術館に会場を移してからも多大な援助を戴いたことは、先生の業績に他ならない。

刊行にあたり、困難を極めた微細な資料をも収集され、ご苦労された三好寛佳氏と、三好企画のスタッフの皆さんに深謝したい。

創立の精神と、時の流れと、人々の思考と行動が、どのように五十年を形成してきたのかを、多角的な資料の収集にあたり、会内外からの情報を普遍的な視座に立って正しく把握し、一陽会五十年の歴史と会の現況を、それぞれがつぶさに見据えて真摯に認識し、明日に向けてどのように改革すべきかを問う動機になれば、五十年史刊行の意義がある。そして一陽会が幅広く社会に理解され、会の精神が伝播されるよう願っている。

（一陽会代表）

二〇〇四年九月

昭和49年、一陽会は「創立第20周年記念展」を旧東京都美術館で開催した。(写真提供・山谷錬一氏)

[総論] 一陽会の五十年史

宝木 範義

新しい時代の到来とともに出発した一陽会

一陽会は昭和三十年七月の結成以来、戦後五十年の長きにわたって誠実に美の追求をになってきた美術団体である。一途にこつこつと努力を積み上げてきたその制作は、地味だがすがすがしい印象を残す、真摯な態度が特筆される。それというのも、創立にあたって中心的な役割を果たした、鈴木信太郎、野間仁根、髙岡徳太郎らの美術界に対する意識が、今もなお組織の骨格をなしているからであろう。

昭和三十年前後といえば、まだ戦後の混沌がいたるところに渦巻いていた頃で、今思えば昭和の第二の青春だった。そうした時代のあれこれを二、三振り返ってみると、昭和二十九年には、造船疑獄と洞爺丸の遭難があったが、その一方で「七人の侍」と「ローマの休日」が封切られて映画が人気を集め、また美術関係では、「読売アンデパンダン展」の前衛芸術が加速してゆくのと同時に、画壇全体を総覧する「毎日現代展」が始まった。一陽会結成の昭和三十年は、砂川闘争と自由民主党の成立の年である。「日本伝統工芸展」はこの年からスタートする。また、三十一年になると経済白書が「もはや戦後ではない」と経済復興を謳いあげた。そして、石原慎太郎の「太陽の季節」が芥川賞を受賞して話題となり、ただちに石原裕次郎主演で映画化された。前年末にとくなった安井曾太郎を偲ぶ「安井賞」も設定され、その展覧会が国立近代美術館で翌年から始まることになる。

こうして昭和三十年近辺を考えてみると、戦後美術界のみならず、国民生活そのものが盛り上がった、新しい時代のスタートが切られている。ただ一陽会の場合は、我が国のモダンアートの源流であった二科会から分離したといっても、同様の足跡を示した昭和二十年の行動美術協会、また昭和二十二年の第二紀会（昭和二十八年に二紀会となる）の結成とは、やや時代背景が異なることになる。

しかも、今の目で見ると、この一陽会結成の頃に最大限に盛り上がった活力は、個人を解放してより自由な活動を保証する一方で、従来の組織を再構築して新時代への対応を促したことで、その後の社会をある程度規定することになったようだ。実際、戦後の美術団体の本格的な調整はこの一陽会をもって一段落し、以後はむしろ団体展以後の時代、無所属の個人活動の作家が増えてゆく時代、と呼んできしつかえない段階へと向かうのである。

ともあれ、やがて昭和戦後期を貫いていくことになるものが、当時一挙に出現したという印象がある。一陽会の結成はこの意味で、時代の分岐点に位置したと言っていいものであった。

表現者集団へと再構築されてきた一陽会

私自身、この流れを受け継ぐ四十年代、五十年代と、以後三十年余にわたって、新制作展、一水会とともに、秋の第二陣をなす一陽会の展評を「三彩」、『東京新聞』、『新美術新聞』といった活字メディア、あるいは以前NHKテレビの「日曜美術館」の最後の十五分にあった団体展評のコーナー、またNHKではその後を承けて始まる「BS美術館」の団体展中継など、考えてみればずいぶん多くの分野であつかってきたのである。

しかし、このような美術ジャーナリズムと展評の時代が、昭和の六十四年間の終幕を迫うようにして、あわただしく姿を消したことは、ここで改めて指摘するまでもない。今、それからさらに十六年を閲した一陽会の半世紀にわたる活動を回顧する機会をうえられて、改めて古い執筆記事などを読み直した感想を述べてしまうならば、平成十六年秋に迎える第五十回記念展は、過去の例に照らしつつ、一陽会が次の五十年を構築する重要な立脚点、あるいは再スタート地点とすべきもの、ということに尽きるのである。

さて、本書中にも、私が『三彩』に書いた昭和六十三年秋の団体展評が引用されているから（第五章、三一六～三二〇ページ）、その頃の雰囲気を偲ぶ一例としてご覧いただきたいが、その翌年、昭和六十四年（平成元年）の『三彩』誌上の団体展評では、秋の第二陣の一陽展に関する部分を、私は次のように書き始めている。

〈一陽展では、主要な活動を担っていた鈴木信太郎の遺作展示があった。九三歳の大往生であったが、黒田清輝以来の明治洋画を伝える、おそらく最後の人ではなかったか。一陽展は小川哲郎「あめ上る岬」に代表されるような、穏和な画風を完成させてゆく方向と、森秀雄「偽りの青空 MY DREAM」のハイパーリアリズムの流れと、二つに大きく方向を別けているが、このような多様性というのも、今後の団体展のひとつのありかただろう〉

そして、右の二作品についてやや詳しく感想を述べたのちに、佐野儀雄、鈴木力、土嶋敏男、小松富士子、岬和男、神門四郎の名前をあげている。これらの画家たちは、表現傾向からしてかなり多様性を帯びており、必ずしも何らかの描写の特徴によって一貫しているというわけではないが、当時、私は自己の確立にきちんと取り組んで成果をだしつつある画家たちをまず評価したいと思っていた。

この当時、一陽会自体が過渡期にあったことは、誰もが認めるだろう。本書においても、第五章「新時代の一陽会」の起点は、常任委員制をスタートさせた、前年の第三十四回展に置かれている。昭和から平成に移り変わる数年は、昭和史と一体となって活動してきた感のある一陽会にとっても、次の時代へと転じるべき時であった。その意味で、常任委員会の発足は、創立会員から若い世代へのバトンタッチが緊急の課題となっていたことを示すものだった。野間仁根の死後、だれもがそれとなく感じていたものが現実となったとも言えよう。創立会員の指導力に頼る運営から、若い感覚を受け入れて、時代の息吹きを吸収しつつ活動する、表現者の集団としての美術団体へと再構築すべき時が近づいていたのだ。新体制の確立を見届けるかのようにして鈴木信太郎が世を去り、さらにその後を追うように、高岡徳太郎が世を去るのは平成三年のことであった。

私の『三彩』展評はまずはじめに、一時代を築いたリーダーたちが世を去ったからといって、ただちに一陽会の作家たちの制作を貫く精神的なものが変わる、ということではないだろうと指摘しつつ、同時に時代の変遷にともなう美意識との擦り合わせは画面の上で常に必要である、またこの点で、鈴木信太郎逝去後の一陽会には、例えば当時すでに先端的な写実表現として注目されていた、ハイパーリアリズムの作家たちを初めとして、会独自の方向性がはっきりと模索されていたことを評価するものであった。だが、なにせ十五年以前の原稿であれば、私が名前を挙げた画家たちのなかからも、すでに物故者がでているのはやむをえない。

一陽会の、新しい表現者集団のひとつの選択——百年遅れの呪縛の時差からの脱却

秋の団体展第二陣の特徴は、具象への信頼に根差しつつ、自己を見つめる制作をいかに展開するか、というやや きまじめとも言える態度にあったと思われるが、新制作展が抽象系の作品を含みつつ活性化を行い、一水会があくまでも自然の再現にこだわったのに対して、一陽展は具象という大枠に依拠しつつ、内容的にそれを更新し

たハイパーリアリズムをいち早く摂取して、新時代と新表現への関心を積極的に示したあたりに、昭和三十年結成のスタンスをいかした、自由で若々しいエネルギーが感じられた。創立会員が支えた結成時の屋台骨が、二科展を舞台としたフォービスム的なモダニズムに立脚したとすれば、次の世代はその後を継承する筈の抽象美術を飛び越して、一挙にアメリカ現代絵画に接近してしまうのである。うがった見方をすれば、常任委員会の手に一陽会の運営がゆだねられたことは、現代絵画の根源をなすピカソの「アビニョンの娘」が描かれた一九〇七年に、我が国では初めての官展・文部省展覧会（文展）がやっと始まったという、百年遅れの時差を宿命とする、近代洋画史の呪縛がかろうじて解かれたことも意味していた。

常任委員会世代にとってモダンアートとはおそらく印象派から抽象に至る、時代を追っての展開というよりは、印象派、象徴派、立体派、野獣派、表現派、ダダ・シュール、抽象派、ハイパー・リアリズム、メディアアートなど、様々な欧米近現代美術の表現様式が一列に輻輳びした豊かな、しかしアナーキーな表現世界としてあり、好きなスタイルを自由に参考にできるポストモダン的な情景を呈していたのだろう。これはある意味で脱近代であり、戦後の熱気が冷めてクールな雰囲気が創造の周辺に立ち込めることでもあった。具体的な現象としては、テレビなどの電波メディアの定着にともなって、新聞、雑誌など活字メディアが発言力を弱め、美術批評界も大きく様変わりすることになった。

とは言え、それから更に十年余りの歳月を経た昨年の展覧会企画には、七十周年を迎えた独立展、八十周年を迎えた春陽展など、我が国の美術運動にあって大きな役割を果たした、団体展の活動を改めて振り返る回顧展がいくつか続いて、団体展というだけでそっぽを向く従来型の意識とは、ちょっと違った受け止め方も現れつつある。実際、一陽会がここに創立五十年を迎えたことに示されるように、日本の団体展は相次いで活動の節目を迎えつつあり、改めてその活動の歴史を公平な眼で問いなおすべき時に来ている。右に触れたように、団体展の時

代に続いて、ピカソ人気などが示した、個人・独創という現代の創造力崇拝が、団体展は古臭い無用の産物という常識をはびこらせることになった。芸術創造はあくまでも個人によるもので、徒党を組んでことにあたるとは何事かというわけである。団体展は日本でのみ通用する恥ずべき形式という意見もあった。

たしかに人間が集団として活動すれば、組織内派閥、秩序維持の思惑などが働いて、純粋な芸術への志向を妨げることになるだろう。だが、それも芸術なりアートなりが、日本の社会活動の一画にきちんと位置したうえでの話である。今、あたりを見回してみて、吹き抜ける風のいかに冷たいことか。以前は展覧会場として有効だった、足場のいいターミナル・デパートのなかのセゾン美術館、東武美術館、小田急美術館などは、とっくに姿を消してしまい、銀座の画廊もすっかり様変わりしてしまった。団体展の観客に至っては減少一方である。『新美術新聞』恒例の「二〇〇三年の美術界をふりかえる」（二〇〇三年十二月十一・二十一日合併号）で私は、〈文化圧殺の時代を生き延びるための方法はあるのか〉と題して、この日本における文化基盤のひよわさを背景とした現状を指摘したが、公立美術館までもが身売りしかねない昨今の状況には、民族性にさかのぼる芸術軽視の体質があるのではないか、ときえ思っている。一体、国家としての成熟度を評価される最大の基準である芸術に、これほど無関心な国がほかにあるだろうか。

芸術・文化の生き残りを模索する時代——一陽会は団体展活性化と存続意義確立の先陣に立て

日本では国立博物館、美術館、大学などの外部評価が話題となっているが、国際社会で一国家のありかた（一国民と言ってもいいが）を評価する際のポイントは、経済力でも、軍事力でもない。芸術力である。パリのルーヴル美術館、オルセー美術館、ロンドンの大英博物館、ナショナル・ギャラリー、サンクトペテルブルグのエルミタージュ美術館、ニューヨークのメトロポリタン美術館、ニューヨーク近代美術館、グッゲンハイム美術館と、著

名な美術館、博物館がいずれも首都のど真ん中にあるのは、それぞれがフランスの顔、イギリスの顔、ロシアの顔、アメリカの顔として機能していることを、国民全体が理解しているからだし、例えばフランス人はルーヴル美術館に所蔵、展示されている作品を、世界の人々に、フランス国民の誇りとして見てもらいたいと思っているからだ。これは、イギリスも、ロシアも、アメリカも同様だろう。

だが、残念ながら、日本にはこの意識がない。日本では美術文化のみならず、文化全体が、暇な旦那衆の芸事にすぎないのである。したがって、美術館は国民の誇りの場ではない。上野を例外とすれば、多くの美術館、博物館は足場の悪い、バスを乗り継ぐ辺鄙な公園の片隅に追いやられた、閉散とした建物に甘んじている。日本には一生美術館を訪れることなく生涯を閉じる奇跡のような人がいるのではないか、という冗談が冗談ではないくらい真実味をおびるのである。日本の行政はまず自国民が日常的に美術館、博物館に親しめる体制を確立すべきだ。そしてその上で、海外の異文化に対しても積極的に門戸を開くべきだ。戦前の富士と桜を復活せよと言っているのではない。浮世絵や漆、陶芸や水墨画を通じて、日本の文化と美術の神髄をもっときちんと示せる体制を整えるべきである。だが、目下のようなありさまでは、不格好な経済大国でこそあれ、自国の美の誇りを持てぬままであり、国連にいかに巨額の拠出をおこない、周辺諸国に少なからぬ経済援助を毎年続けながら、日本と日本人は依然として国際社会から軽視されつづけるだろう。

一陽会も次の展覧会場として視野にいれている、六本木の国立新美術館の建設にあたっても、（良識ある）メディア各紙を初め、多くの美術関係者は反対一色であった。にもかかわらず、私が管理運営委員として参加したのは、ここにからんでくるからである。六本木の大展示施設で民間活力を生かした展覧会を実現する。あるいは、美大の卒業制作展を開催する（これは委員会で私が主張したことだが）ことで、その存在を生かせるのではなかろうかと思ったからだ。実際、日本には美大生がこれだけいるにもかかわらず、まともな卒展会場がない。なぜ国

立美術館は美大の卒展をやらないのか。大学の四年間を美術に賭けた、美術界が最も大事にすべき美大生の成果発表に、関係者は無関心でいてはならないのである。美術教育の現場で活躍する会員が多い一陽会では、この私の意見はおそらくそれなりの賛同をえられることと思う。

国立新美術館に対する反対意見の多くは、そこが学芸員の研究を反映せぬ、団体展の貸会場であるからというのであり、また収蔵品を持たない施設が美術館を名乗ることなどおこがましい、というのであった。この良識といい、態度といい、あまりにも教条的な学芸員至上主義である。昭和三十年このかたの天才神話を引きずったままである。平成十六年の美術をとりまく厳しい状況を無視して、ご隠居の小言風の太平楽を決め込んでいるように私の目には映る。もう一度言う。いまはもうそんな時代ではないのだ。美術をアートと言い直してみたところで、美術文化の退潮に歯止めはかからないだろう。それはけっして不景気のせいではない。この国では美術文化が必要とされていないのだという現実にたって、改めて美術文化が生き残るすべを全ての常識を捨てて、考え直すべき時にきているのだ。

一陽会の活動は初めに述べたように、派手さのない、むしろ地味で着実なものである。それゆえに私は大きな期待をもっている。日常生活に密着した活動のなかで、日々の表現を社会に浸透させていけるなら、これ以上効果的な活動はない。全国各地に広げられたネットワークは一陽会の貴重な財産だが、これをいかして会員相互が支えあい、この冬の時代をのりこえてゆける力となることができるなら、これこそ団体展の最も有効な活用方法だと思うのである。国立新美術館も勿論そのための場として活用すればいい。もう個人でやってゆくのが難しい時代を迎えつつあるなかで、制作を維持する拠り所として、団体展の意義をもう一度見直さなければならない。年に一度の発表であれ、発表の場が確保されることは重要だし、仲間を得ることはそれ以上に重要である。そして、そのメリットを把握しなおしたうえで、受賞のありかた、展示のありかた、運営のありかたなど、より多く

の会員が参加して満足のいく一陽会が、いかに作ってゆけるかが今後五十年の活動を支えるだろうし、ぜひそうしていって欲しいものである。

（たからさき　のりよし・美術評論家）

第1章　一陽会の創立

［一昭和三十年］

一陽会設立結成の日。台東区鶯谷の小料理屋「喜多八」にて

二科会脱退を決意し、新団体結成に意欲を燃やす高岡徳太郎（手前左）、鈴木信太郎（手前右）、野間仁根、荻野康児（奥）。

◇戦後の二科会の再建

昭和三十年七月十五日、新しい美術団体「一陽会」が台東区谷中の老舗の小料理屋「喜多八」の楼上で設立結成し、かねてその動向を注視し取材のために集まってきていた新聞各紙の取材記者に発表された。

そのメンバーは、二科会から袂をわかった鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎、栄良道博、荻野康児、鍋利彦、山路真護の七人の絵画部会員をはじめ、丹下富士男、森由太郎、中田豊の三人の会友、そして一般の出品者だった山谷錬一、長谷川三千春が従い、さらに彫塑部からは植木力、浅野孟府の二人の会員が行動を共にしていた。

各紙はこぞってこの「一陽会」の設立の経緯を報じているが、その論調は、単に〝二科会内部の分裂騒動〟を報じるという傍観の視点を離れて、美術団体が抱えている問題点を改めてこの期に検証するという、幾分切迫感のにじむものであった。

> 三人の幹部の退会から起こった二科会のごたごたは、東郷青児氏の「独裁」制を会員の「合議」制に切り替えることで一応落ち着いた形である。今度の二科会問題は、美術界にとって久しぶりの騒動（註1）だったが、この二、三年、危機を叫ばれてきた美術団体の苦悩の現れとも見られた。その苦悩はいずれも幹部会員の独善に対する一般会員の批判と団体運営の行き詰まりなどから起こっている。二科会は何処へ行く？　これはまた他の多くの美術団体の問題でもある。……
>
> （「二科会の分裂と美術界」『朝日新聞』昭和三十年七月十五日付）

「三人の幹部」、つまり敗戦後の新生二科会を東郷青児とともに引っ張ってきた、鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎が、袂を連ねて同志とともに二科会を退会するというのである。当時、東郷が目差していた、展覧会の興業化や第四十回（註2）記念の事業として、二科会を社団法人にしようという方針に違和感を抱いたことが直接のきっか

けであったと報じているが、「三人の幹部の退会から起こった二科会のごたごた」ではなく、ごたごたの挙げ句の退会であった筈で、この経緯は少しこまかくたどっていかなければならない。

鈴木信太郎、野間仁根、髙岡徳太郎らの幹部の退会で顕在化した二科会内部の「ごたごた」は、戦後の新生二科会を率いてきた東郷青児との単なる路線の相異ということだけではなく、そもそも新生二科会の再開・誕生の経緯そのものに騒動の遠因はあった。

新生二科会の誕生のいきさつを、髙岡徳太郎が後年詳しく自著（註3）に書き記している。

髙岡は戦前、戦中期の二科会にあって当時少壮の評議員として会の運営に加わっていた。

> 戦況は敗退続きで、夏になると学童疎開が始まり、もう絵どころの騒ぎではなくなってきた。文展も公募を取りやめることが決まり、二科会も十月に幹部会を開いて一時解散ということになった。そういうわけで、戦前の二科展は十八年の第三十回を以て、一応終止符を打ったわけである。
>
> この年ほどの団体も展覧会を自粛したが、十一月に「戦時特別文展」なるものが開かれて、これには二科からも参加する者が多かった。展覧会の主旨は「国土、国風を讃えるもの」となっていたので、僕は「農の秋」と題する風景画を出した。……
>
> （髙岡徳太郎「渡欧、二科会」『平和の大本 髙岡徳太郎』平成元年十二月）

昭和十九年の初めから、各団体展は作品の公募を中止して、会員、会友、招待者のみで展覧会を継続することを模索していた。秋の美術のシーズンを前に院展がいち早く展覧会の中止を発表したが、二科会は三越百貨店で（十月十五日から）、新制作派協会も同じく三越で（十一月はじめ）公募抜きの展覧会を開催する旨を一旦は発表した。しかし、九月二十八日、定例次官会議において、戦況の悪化に伴う挙国一致体制のもと、美術団体の活動禁止を意図

した「美術展覧会取扱要綱」（公募展の禁止）が決定、発表された。これで、公募展は日本美術報国会が主催するもの以外の美術団体は事実上活動が禁止された。

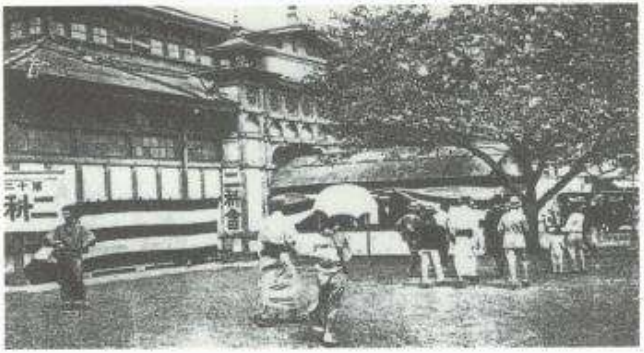
二科会は十月六日、熊谷守一、正宗得三郎、宮本三郎、向井潤吉、東郷青児、田村孝之介、栗原信、渡辺義知、髙岡徳太郎の評議員が集まって幹部会を開き、二科会の解散を決議しその旨を発表した。

この総会の議長は、会計責任者でもあった正宗得三郎であり、正宗のもとには会員名簿、会計帳簿、会の印章、いわゆる会の“三種の神器”があった。次第に激しくなる空襲を避けて信州（長野県下伊那郡三穂村伊豆木）に疎開することにしていた正宗は、東京在住の髙岡徳太郎に「会員名簿」と「会計帳簿」を預けることになった。

いつの日か再起を果たす筈の会の資料を、たとえ空襲が激しくとはいえ遠く信州の疎開地まで持って行くことは念頭にはなかったようだ。必ずいつの日かという思いは、正宗に限らず多くの胸中にあった。

二科会のメンバーも、故郷へ帰る者、疎開する者が増えて、

初期二科会の会場（第12回展・大正14年）、上野陳列館。



東京は随分寂しくなった。そんなある日、僕は宮本三郎さんと一緒に正宗得三郎先生に呼ばれた。正宗先生は長老格で二科会の帳簿類一切を保管していらしたが、ご自分も故郷へ疎開するに当たって頼みがあるとのことだった。

「じつはこの帳簿類だが、これは二科の再建に必要な大切なものだ。時が来たら自分が指示するから、高岡君、そのときまでこれを預かってくれ。頼むよ」

と正宗先生は僕に包みを渡された。宮本さんも疎開が決まっていたので、先生は東京に残る僕に託したのだと思う。二科会にとって大事な品々とは、会史を記した名簿と会計帳簿である。僕がこれを預かったのを知っていたのは、ほかに東郷さんだけだった。

このことからも判るように、正宗先生をはじめ二科の誰もが、これほど歴史と実績をもつ団体を解散したまま潰してしまおうなどと考えていなかったのは確かである。戦争が終わったら、また二科展をやろうじゃないか、みんなこういう気持ちを抱いて各地へ散って行ったのに違いなかった。一年も経たぬうちに、どんな事態が起こるか予測できなかったし、僕自身、深い考えなどなしに先生から渡された包みを預かったのである。……

（高岡徳太郎「渡欧、二科会」『平地の大木　高岡徳太郎』）

昭和20年3月10日の空襲で罹災した都電浅草車庫近。

当時、正宗得三郎は中野区住吉町のアトリエ付きの家に住んでいたのだが、昭和二十年四月十三日、十四日の空襲で自宅が罹災し焼け出されてしまった。長野への疎開は早くから決めていたものの、荷物の輸送や片付けに手間取り、疎開が遅くなってしまっていた。正宗はこの中野の家のアトリエを大変気に入っていて、強い愛着を持っていたという。戦況が切迫し周囲からも早期の疎開を促されながら、旅立ちが遅れていたのは何も片付けに手間取っていたばかりではなさそうだが、ともあれ、この折の空襲で正宗は家と共に多くの作品を焼失してしまった。

従って正宗の信州への疎開は、家の焼失直後早々に実行された。そして信州での疎開生活は、昭和二十四年の初めに都下北多摩郡西府村本宿（現府中市本宿）に移り住むまで四年近くの長期間に及んだ。

この正宗の長き不在は、戦後の二科会再生の行方を大きく左右することになる。

ともあれ、日本国中を戦火で焼かれ、陸海軍人、民間人合わせて三〇〇万人にのぼる犠牲者を出して、八月十五日、第二次世界大戦（太平洋戦争）は終焉した。

高岡徳太郎は、激化する空襲のもと久我山でかろうじて戦禍をまぬがれていたが、昭和十九年の大晦日に都下奥多摩町の梅沢に疎開をした。ここでは、充分ではないとしても何とか食糧の確保が可能だったし、さらにこの地ならではの、日本画家の川合玉堂、作家の吉川英治との親交が高岡を喜ばせた。

そうして、敗戦の日の二日後、高岡は思いもかけない客を迎えた。それは信州に疎開している筈の二科会の画友・東郷青児であった。

八月十七日の朝、疎開先の家で僕は何気なく外を見た。すると下の道をリュックを背負った男が登ってくる。あまり東郷さんに似ていたので、家内と「よう似た人がいるもんやなあ」などと話していたら、それが本物の東郷さんだったのである。

終戦の翌々日のことだ。まだ、さしあたってなにをしようかと考えてもいなかったところへ、信州にいるものだとばかり思っていた東郷さんが、しかも一人で奥多摩へやってきたのだから、僕は本当に驚いた。

東郷さんは笑顔で、「高岡君、元気か！」と相変わらず威勢がいい。でも不意討ちを食らってわけが判らない僕は、「元気か、やないですよ。なにしに来たんですか」と、ひとまず家に上がってもらった。

彼の第一声は、「高岡君、僕たちの手で二科会を再建しよう」だった。僕はびっくりして飛び上がりそうになった。でも東郷さんの様子を見ていると、どうもここ二、三日の思いつきとは到底思えない。大分前から、戦争が終わり次第動き出そうと心を決めていたように思えた。東郷さんは、「一日も早く再建しなければ、戦前のような勢いのある二科会は生まれない」と言った。

（高岡徳太郎「渡欧、二科会」『平地の大木　高岡徳太郎』）

この東郷青児の、疎開先の高岡徳太郎訪問は、後に様々に喧伝されて物議をかもすことになる。つまり高岡の手許にある、正宗得三郎から託された二科会の「会員名簿」を自分に渡して欲しいという要望を despite してのことで、「それ（名簿）を手許に置きたかったのかも知れぬ」（『二科七十年史』昭和六十年八月）と二科会が編んだ記録できえも、この折の東郷のあまりに素早い行動に、幾分いぶかしげな評言を投げかけている。

「旧二科会会員の幹部級ではなく、なぜ自分なのか」

確かに高岡の手許には、正宗得三郎から預かった二科の帳簿がある。それが目的なのではないか。高岡がそのように、最初にいぶかったのも当然のことだった。ところが東郷は、二科会の名簿のことなど一切口に出さず、ただただ会の早期再出発の必要性を熱っぽく力説したという。新生二科会を一緒に担って欲しいという懇請が、この日の高岡訪問の主なる目的であったようだと、高岡自身回顧している。（概説『平地の大木　高岡徳太郎』）

東郷は以前より、高岡徳太郎の商業的感覚の良さと、人を束ねてゆける寛容で柔和な人柄に一目置いていたというから、敗戦の動揺が下るやいなや、二科会再建の具体的な施策を高岡徳太郎という協力者を念頭に置いてあれこれとめぐらし、間髪を入れずに実行に移したという次第であった。勿論、高岡の手許に託されていた「会員名簿」や「会計帳簿」が、会再建にあたって有効なステータス・シンボル（主導的地位の象徴）になり得ることは計算の内に有った筈である。ともあれ、東郷の動きは早かった。この早さが、非賛同者の機先を僅かに制して、戦後の東郷を中心とした新生二科会の発足を可能にしたと言っても、決して過言ではない。

ともあれ、高岡徳太郎は東郷青児の主張に賛同し、ともに二科会再建に取り組むことになった。

取り敢えず再建の本拠となる事務所をつくらなければならない。ここでまた、戦時中食糧を分けてくれた岩崎通信機の島村君に、全面的に援助してもらうことになったのである。もし、彼の援助がなかったら、僕たちの苦労は、何倍にも膨れ上がっていたことだろう。島村君はまず、終戦のため操業停止となった軍需工場の神風会館を、事務所用にと貸してくれた。鈴木信太郎ら何人かの元会員たちもやってきて、僕たちはこの会館の一室で何度か打ち合わせをした。いずれにしても、各地に散っている旧会員と連絡を取り合うことが先決なので、みんなで手分けして会員たちに向け「二科再建の趣意書」の発送にかかった。終戦直後で郵便事情は最悪だったが、それでも九月上旬、「二科再建有志一同」の名で発送した封筒は、とにかく一応全員の手許に届いたのである。

しかし、戻って来る返事の内容は、あまり芳しくなかった。荻野原の東京へ出て来ても、住む家はない、収入の道はない、では暮らしていけないと、二の足を踏む人たちが殆どだったのだ。石川県小松にいた宮本三郎さんからは返事がなかったが、ずっと後になって、やはり同じ理由で、「返事のしようがなかったんだ」と言われたものだった。

「こんなに早い時期に、果たしてできるのか」という懐疑的な人や、まったくなしのつぶての人も多かった。その中で、東京にいた向井潤吉さんからは、「参加する意志はない」と、はっきり断ってきた。「戦争中も絵（戦争画）を描き続けてきた自分としては、異なった考えを持った人たちと組むことを潔しとしない」というのがその理由だった。僕はこのはっきりした態度に納得すると同時に、その気持ちがよく判った。向井さんはまもなく同志と計って「行動美術協会」を創設することになるのである。（高岡徳太郎「渡欧二科会」「平地の大木　高岡徳太郎」）

「二科会再建有志一同」の差し出し名で「二科再建の趣意書」を旧二科会の会員に宛てて発送したのが、昭和二十年九月上旬であり、終戦事情が最悪だったとはいえ、程なく〈再建の趣意書〉は会員の手許に届いた。多くの会員はこんなに早い時期の〈二科会再建への呼び掛け〉は、恐らく夢想だにしていなかったに相異なく、その驚愕はそのまま、呼び掛け人の中心である東郷青児、高岡徳太郎、渡辺義知（彫塑）への反撥となった。旧二科会においてはこの三人の発起人よりもキャリアも年齢も上の会員が多く、呼び掛けに諾々と応じてその風下にうずくまる積もりなど毛頭なかったに違いない。「二科会再建」は多くの会員の悲願ではあったが、まさに機先を制せられたといっていい。

ます、この二科会再建の呼び掛けに応じなかった、向井潤吉、古家新、田中忠雄、榎倉省吾、伊谷賢蔵、柏原覚太郎、岡田謙三、小出卓二、高井貞二、田辺三重松は、弾かれたように素早く反応し、同年十一月五日に行動美術協会を結成した。「結成の辞」で次のように咆哮、気焔を上げている。

> 戦ひは終つた。吾々は新しき文化の黎明を迎へやうとしてゐる。戦争中を身をもつて果敢に生きて来た吾々は更にそれに数倍する責任の重大さの自覚に立つて美しき愛情と新鮮なる勇気とに結ばれたもの。今ここに行動美術協会を結成して力強く踏み出すことになつた。
>
> 吾々は解散に到るべくして解散した旧二科会の復活には何等期待するところがない。吾々は新生日本美術を樹立し世界文化に貢献せんとする目的のために諸種の美術活動を強力に実践せんとする熱意に燃えてゐるものであるが、徒らなる論議よりも先づ行動、混しく黙々とこの路を邁進せんとするものである。

"解散に到るべくして解散した旧二科会の復活には何等期待するところがない"と会再建への呼び掛けを峻拒している。しかし二科会の解散は、戦況の悪化に伴う当時の政府の方針によって否も応もなく解散させられたのであって、行動美術協会の結成に加わった旧二科会の会員の多くも、いつかはと、二科会の再出発の日を待ちわびていた筈であった。つまり東郷青児、高岡徳太郎が主導する"旧二科会の復活には何等期待するところがない"ということだったのだろう。

そしてさらに、戦前期の旧二科会を第一期とし、その正統の後継として戦後新しく第二の紀元を興すことを謳って、熊谷守一、栗原信、黒田重太郎、中川紀元、田村孝之介、鍋井克之、横井礼市、正宗得三郎、宮本三郎の九名が、昭和二十二年四月二十八日に第二紀会（後に二紀会）を創立した。

また彫塑の渡辺義知は、東郷、高岡とともに二科会再建を目差していたが、第二紀会創立を目差すグループに加わり、やがてそれとも分かれて、自らを「正統二科」と唱えたが、美術界変革期の激浪の間に消えてしまった。…

……この、再生二科会の彫刻部門を主導する営だった渡辺義知の「正統二科」の主張は、昭和二十一年三月、在野諸団体の復活、あるいは新たなる台頭と呼応するように立ちあがった、文部省主催日本美術展覧会（日展）、戦後日展と大きく関わりをもっていた。この第一回日展は、芸術院会員が審査し旧文展の委員と審査員を無鑑査にするというもので旧態依然とする声が高かった。そこで文部省は第二回展（同年秋開催）にむけて「無鑑査の撤廃」「審査員の公選」を打ちだし官展改革の方策とした。旧帝展、文展の無鑑査、特選受賞者（約八百名）、官設、在野の主要十五団体の会員（約三百名）を展覧会委員とし、この展覧会委員の互選によって審査員を選ぼうというものであった。これを受けて二科会は八月末に総会を開き、「日展の民主化にともない、これまでの官展不出品の会是を削除し」、日展の審査員公選に参加することを決定した。これに対して、彫刻部の渡辺義知、松村外次郎、絵画部の名井万亀らは「二科会は官展絶対不参加の在野精神を貫くべきである」と唱えて反撥し、官展の立ち上げに加わろうとする東郷青児をはじめとする大多数にたいして、「二科会を名乗る資格はなく、自分たちこそ正統二科である」と主張し、その旨を報道機関に通達し公的に声明を出した。二科会はこの三人を除名処分としたが、昭和二十一年九月一日の戦後最初の二科展は、同時に二つの二科展が並行するという奇妙な事態となった。これが、「正統二科」「ふたつの二科展」のいきさつである。……

また、東郷、髙岡の二科会再建の発起に反撥した者だけではなく、敗戦直後のこの時期、それぞれにそれぞれの事情があった……。

戦争、敗戦という重い時代の変遷のなかで、なかなか立ち上がれない事情もあった。髙岡とともに、正宗得三郎から二科会解散についての相談を受けた宮本三郎は、疎開先の石川県小松で「二科再建の趣意書」を受け取ったが、戦後の重い立ち上がりに呻吟していた。

……主として敗戦の心理的衝手の深浅が理由になったと思う。尤も私達の仲間でも戦争に責任や自責の多少を感じないで済む人もあったが、それらの人達は、元来政治的に敏捷な方ではなかったのである。友情や芸術上の対立が在った訳のものではないが、素早い誘いを受けて立つには、私など時間が必要だった。……

（宮本三郎「美術手帖」昭和二十六年一月号）

宮本三郎は、藤田嗣治、小磯良平、中村研一、田村孝之介などとともに日本の絵画史上に残る、優れた戦争記録画を描いているが、敗戦とともに進駐して来た占領軍、連合国総司令部（GHQ）による戦争犯罪人（戦犯）の追及が始まると、画壇内部に「戦争画」あるいは「戦争画を描いたこと」への譏訴にも似た気運が生じた。たしかにGHQは、戦中に戦意高揚を目的として描かれた戦争記録画を、昭和二十年末から翌二十一年半ばにかけていっせいに接収したが[註4]、描いた画家を訴追しようという動きはなかったし、実際なかった。このいたって日本的な陰湿な〝譏訴〟の主な対象とされたのは藤田嗣治（後にフランスに帰化。レオナルド・フジタ）だが、GHQに接収された一五三点の作品の作者、あるいは何らかの形で戦争記録画に関わった者は、少なからずこの宮本三郎の述懐と同様の心境にあったのではないだろうか。旧二科会に限っても、行動美術協会や第二紀会に名を連ねた画家たちのうち、少なからぬ人々が戦争記録画を描いている。

東郷青児と髙岡徳太郎が送った「二科再建の趣意書」は、そうしたとりどりの重い逡巡のうち届いたことになる。

長野の正宗得三郎からは、髙岡徳太郎にあてて厳しい詰問が届いた。

「あれほど頼んだのに、なぜ東郷と二人で再建を進めたのだ。」

高岡は、会の再開をめざして日夜エネルギッシュに動き回る東郷青児を間近に見ていて、東郷と言い交わした「二科会再建」を貫徹するしか今はありえない、と信念を持っていた。

「よそより遅れたら、二科の建て直しができなくなります」と答えるしかなかったという。

旧二科会は、こうして行動美術協会、再建二科会、第二紀会に分化してそれぞれの道を歩むことになった。この旧二科会系の会派と相前後して、戦中に解体された美術団体は確実に復活への道を探り、美術界全体も次第に活気を取り戻していった。

敗戦の年、昭和二十年一杯をかけて各会派は会再建、あるいは新規設立の準備に奔走し、翌昭和二十一年春から展覧会を再開した。——四月、国画会展、独立美術協会展。五月、春陽会展、美術文化展。九月、二科展、日本美術院展、新制作派展、一水会展などである。

昭和二十一年九月、第三十一回二科展は絵画部、彫刻部の他に工芸部、理論部を新たに設けて、五十五名の会員で展覧会活動を再開した。戦前の美術団体の展覧会の概念を根本から覆す、東郷流の奇想天外の発想を盛り込んだ、「芸術の大衆化」を標榜する新生二科会が出発した。

……いよいよ戦後の再建した二科会の公募展を開催することになりました。朝日新聞社その他の各新聞社の文化部、学芸部の面々は、戦後初めての展覧会でもあり大々的に報道して下さったようです。会場は上野の美術館。久我山の二科会事務所より出発、銀座を通り上野公園会場まで裸女モデルを東郷氏と私の乗るオープンカーに同乗させ道中を練るというプランは、かつての戦前にはない出来事であり物珍しさもあって見物人が押しあいへしあいで大変な事でした。これによって二科会のイメージを一般の人達に知って貰うのに大変効果があったようです。道中、警視庁で一寸とがめられたりしたものの、黒人踊りと裸女モデルの行列を上野公園まで練り歩き、美術館前広場で黒人踊り等をして大いに二科会展覧会の蓋明けを宣伝したものです。これが又戦後初めての展覧会であったので大変うけて見物人が列を作る有様で、うれしい悲鳴をあげました。戦前の二科展は絵画愛好家等、一部の人の鑑賞の場でしかなかったのが、裸女と黒人の裸踊りで一躍有名になり、一般大衆の中に二科会の存在がしみ透るようになりました。東郷さんのアイディアでした。（高岡徳太郎「二陽会の夜明けまえ」「二陽会会報」第三号　昭和五十六年十一月一日）

東郷青児が企画・アイディアを出し、高岡徳太郎が警視庁、管轄署などへの許諾申請や、行事の諸準備の細部にわたる手配というように、二人が文字通り車の両輪となって新生二科会が出発した。

戦前の二科会が、創作の競いの場として、またこく限られた好事家、愛好家のためだけの鑑賞の場であったのに較べて、一般大衆の関心を喚起するような、展覧会興業の場にしようとする東郷青児の意図は、戦後早々のもの珍しさもあって、大きな反響を呼

戦後二科会の審査風景。

び、マスコミに話題を提供した。

だが、会内部の意識の乖離は、この再出発の時から始まり、次第に大きなものになっていったといえる。

派手なパフォーマンスの甲斐あって、二科会は他の団体では考えられない程の入場者数を誇るようになった。入場者が増えればそれだけ会計が潤い、さらに積極的な広報活動が可能になる。出品者も増え、次第に会員数も増えて、戦前期に劣らぬ盛況を呈するようになった。そこで問題になるのは、潤沢な金とその使途の如何ということになってくる。

さらに、展覧会を興業化し、展示場をイヴェント会場にしようとする東郷青児にとってみれば、展示される作品は、勢い人目を惹く派手なものか「大作主義」に傾倒してゆく。

東郷青児とともに戦後の新生二科会を再建し、以後十年間、会の健全経営に腐心して来た高岡徳太郎が〝二科会の変質〟をしきりに慨嘆するようになった。

正確にいうと、これは〝二科会の変質〟ではなく、広く絵画の大衆化をはかり、展覧会そのものをイヴェント化しようとする東郷路線の、当初から見込まれたごく当然の経過と成り行きではあった。

ともあれ、作家個々の地道な制作と、その成果発表の場としての展覧会活動のあり様を求める声が、会の創立四十周年を祝うための企画が沸騰するこの時期に、一挙に表面化した。

僕たち三人（鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎）は、ほぼ同じ時期に二科の会員になったこともあり、気の合う仲間だった。大作主義にどんどんエスカレートしていく当時の二科のなかで、「目指すもんが違うてるんやないか」という不満を持ち始めていたのは事実である。でも大衆の関心をよぶために、東郷さんが推し進めた大作歓迎のやり方すべてが間違っていたとはいえない。事実、二科展は他団体の展覧会とは比較しようもないほどの入場者数を誇っていたのである。

その二科から離れることを決心した真の原因について、当時を含めてこれまでにもいろいろと取り沙汰されてきたが、この際、当事者の口から本当のところをきちんと語っておこうと思う。原因は端的に言って、東郷さんという人間に対する不信感ということに尽きた。それも金銭上のトラブルに関する不信感である。〈高岡徳太郎「二科会脱退、一陽会」『平地の大

GHQの友人と鋏に興ずる東郷青児、高岡徳太郎（手前左）。昭和25年冬。

二科会恒例の前夜祭のパレード、大いに一般の注目を集めた。

鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎らの離脱に集約されてゆく。二科会内部での東郷青児個人への不信・疑惑・反撥は十年の間に幾層にも重なり、もうのっぴきならないところに来ていた。先の渡辺義知の「ふたつの二科」の顛末にしても、東郷は同様の事態の再発を防ぐために「二科会」の名称を商標登録することを主張し、その事務処理を高岡徳太郎に委ね、申請の代表者の名義を高岡とするように指示し、高岡はそのように登録をすませた。ところが後日登録台帳を閲覧したところ、申請の代表者名は「東郷青児」に書き換えられていたという。高岡は、釈然としない奇妙な疑念を抱いたと伝えている。さらに二科会の年代史は、こうも慨嘆している。

戦後十年近く経つと、東郷が二科内の者たちに与えた不信や疑惑の種は、かなりの量に積み重なっていた。人を騙す癖があると、もし東郷をそんな風に見れば、それを裏付ける種は、いくらでも見付かるようになった。それに若い会員たちは、個々では東郷の相手ではない。東郷に不服があっても何も言えはしない。そのため、東郷の家で会合があったあと、会員達の何人かは、東郷の家に近い久我山に越して来た笠置季男の処へ寄り、夜遅くまでマッカリを呑み、東郷をそしって憂さを晴らすことがあった。

これは、東郷不信が徐々に二科内に根を張り出したということだ。東郷は、迂闊にも気づかない。不信の根は、やがて、現実の事件となって、突発する。

（『二科七十年史』前出）

◇東郷青児との訣別、二科会脱退

東郷青児と大多数の二科会の関係者は、まさに「突発」とでもいうべき衝撃に出くわすことになるのだが、鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎の決意は、揺れながら反撥しながら、だがゆっくりと固まっていった。

戦後二科会が再出発した当初、まさに東郷の片腕となって会の運営に携わった高岡徳太郎に限らず、鈴木信太郎にしても野間仁根にしても、戦前の二科会では考えられない自由で斬新な、イヴェント重視の会の運営や、極端な大衆受けを狙った作風の奨励にしても、さほど奇異にも思わず、そうした作品の氾濫についても、とやかくいう気はなかった。

ただ、創作三昧の日々に潰かって、「いつも、自分が描きたい絵を描いていたい」と願っていた。

しかし、そうした創作三昧の身にとっては、二科会そのものが、だんだん居心地のよくない場所に変わって来てしまっていた。

高岡が野間から、「二科を離れたい」という気持ちがあることを聞いたのは、なんでもない雑談の折だった。その折は、「いずれ、なんとかしよう」というくらいの話の成り行きで終わっていた。

だが、同じ久我山の住人だった鈴木信太郎の家で歓談していたとき、鈴木も同様のことを言うのを聞いて、高岡は考えこんでしまった。

自分にもそういう気持ちがまるでないとは言いきれない。だがそれまではまだ漠然としたものでしかなかった。それが、野間と鈴木の口から同様の考えを聞いたときから、その思いは俄かに現実感を伴ってきた。

もしかしたら、これは一つの大きなチャンスなのではないかと、高岡は思うようになった。

「野間や鈴木は自分とはまるで別種の人間であるというところに、行動を共にする必然性と意義があるのではない

か」。

「この二人は絵を描くことしか知らない人間だから、年々複雑化してきている日本の美術界でやっていくのはむずかしい。だが、自分がその部分をカバー出来れば、存外うまくいくかもしれない」。

鈴木、野間、高岡の三人が一緒になって、高岡が二科会再建の途次、東郷青児と組んで発揮した手腕と方法を役立てれば、あるいは可能性があるかもしれない。

高岡は、自分が二科を抜けることについては、さほど未練も心配もなかった。

なぜならば、この時期、二科会の経営は完全に軌道に乗っていて、自分がいなくなっても大きな問題が起きる不安はなかった。もしこれが再建途上にならば、経営の一端を担っていた自分が辞めるのは無責任すぎるし、考えもしなかった筈である。

野間が懇意にしていた銀谷の小料理屋「喜多八」の二階に、鈴木、野間、高岡の三人は上がり込み、額と膝を接して話し込んだ。

「展覧会の純粋性を欠かないという方針で、新しくやってみようじゃないか」。

新しい出発に向けての考えをまとめた。

そして手紙や電話で二科会の同様の志の者に連絡をとり、

「同じ考えでやっていこうという人は集まってほしい」と呼びかけた。

具体的には、「東郷さんと別れて、自分の思い通りの活動に精出したい人は来てほしい」というものであった。

三人からの「誘い」を伝え聞いて、当初、後にやはり自由な創作の場を求めて二科会を飛び出すことになる岡本太郎や、二科会の彫刻を束ねてゆくことになる笠置季男もやって来た。

しかし、いくら一緒にやろうといっても、二科会を出た後一体どうなるのか見当もつかない状況なのだから、二科会に残って東郷のもとにいる方が、安全だと考えるのもまたもっともなことであった。

正直なところ、三人にも不安がなかったと言ったら嘘になる。

昭和三十年七月五日、鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎の三人は上質半紙にタイプした「二科会退会声明書」を手分けして新聞各社に配って歩いた。

〈私達三人は二科会を脱会する決意をした。

永い年月二科会に育てて貰って来た事は先輩諸兄に感謝したい。尚も知らず知らずのうちに二科会の姑や小姑の立場に似た年齢になってきた。いつまでも二科会に安住していることは面白くない。我々三人は脱皮したい。なにかまだ働けそうな気持がする。

二科会から確かに三名が退会しても何の痛痒も感じないであろう。それ程二科会は多士済々である。我々三人が退会することによって却って後進に道を開くことになり、二科会としても亦更新の機会が得られることになるであろう。

右退会の声明とします。

昭和三十年七月五日

鈴木信太郎　野間仁根　高岡徳太郎〉

声明文を受け取った新聞各社は、こぞって当日の夕刊で三人の二科会退会の主旨を報じた。

声明文を見て分かるように、この二科会退会の文意は、あくまでも二科会からの静かな退出であり、自分たちが抜けることで大きな混乱が起きないようにとの、慎重な気遣いの伺えるものである。鈴木、野間、高岡の二科会退会、そして一陽会創立へと向かう志が、けっして排他的なものではなく、心穏やかな主張であることを語っている。

この声明文を出した直後に、野間仁根が綴った文章が残っている。――七月五日、退会届を使いに託して二科会に提出し、三人で新聞各紙を回った折の様子と、そのいくぶん高揚した心情までも伺うことができる。

高岡徳太郎と鈴木信太郎がやってきた。

二科会への退会届を書くことになったが、さて持ち出したその紙は。長らく折りたたんであったと見えて、いくつもの折目の条がついている。そのうちに美濃半紙を買ってきた。三人は退会届を書いて書名した。

「ははあ、できた」この二片の紙きれが三十年の殻を破るその破り道具であったかと、いまさらながらしげしげと打ちながめた。使いに封筒を渡すと、「箱はございませんか」という。雨にぬれないように手紙を紙箱に入れて上包をかけると、使いは家をでかけた。

雨はひとしきり激しくなる。すると庭の小笹はさわさわとゆれ立った。雨滴に打たれた竹葉の一枝は、ひょいと身をふるわすが、すぐぴんと立ち上る。次の雨に打たれてまたまた身をふるわす。そうして全体としては風に吹かれつつ、なびき、さらさらと葉ずれの音を立てる。

退会届を出してから三人は車に乗ると、有楽町、日比谷、銀座の各社新聞社をあいさつに歴訪した。雲は低くたれて雨は降ったり止んだりする。定刻に遅れては困るがと時計を見ながら昭和通りを坂本へ走っていると、夕刻四時すぎであるが、西の空はうす明るくて、夕焼けのアカネに染まって、その部分がきらきらに美しい。坂本の脱会披露の会場にはもうみなさんが待っていて、退会の動機やら、さてこれからの先行きについて話り、意見交換などにおよんだ。

鈴木は紅潮しながら、いまや大いに語り始めた。灯りは彼の素朴な顔を一段とさえざえに輝かせる。

「このスイッチのコードは最早用をなさないよ。もっと強く引こうものなら切れるよ」と高岡はからからと朗笑したのである。

朗笑よ、熱弁よ。三人は久しぶりにおおいのとれた笑いを、いま軽々と、身も心も解放された喜びにビールの杯を重ねた。

鈴木は扇を忘れ、高岡はコーモリ傘を忘れた。忘れることはいいことだ。すべてを忘れてただ解放の朗笑である。

家に帰ると、家族はまだ起きていて、激励の電話にここでも笑い興じていた。

「ね、父ちゃん、脱退が遅すぎたそうですよ。だって早ければ早いほど出世なさるんですって。いまからでも遅くないそうですよ」

かえりみて三十数年、ようやっと殻から脱皮することができた。反感でもなければ不服でもない。これは天の摂理である。解放感のこのあじわいはいったい何にたとえよう。さっぱりしてすがすがしい。

灯りに照らされた笹の葉は、雨滴に打たれながら、次なる雨滴に打たれながらさらさらと身をふるわせ、全体としては風に吹きさわぎながら、かすかな葉ずれの音を続けている。

（野間仁根「日曜随筆　露の世」『毎日新聞』昭和三十年七月十日付）

当然のことながら、この鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎の「二科会脱退声明」は、東郷青児をはじめ二科会全体に計り知れないほど大きい衝撃を与えた。二科会では秋に迎える四十周年記念の行事として前夜祭を、例年

に増して賑やかにやろうと案を練っていた矢先でもあった。

鷲谷の小料理屋「喜多八」の二階に陣取って同調者への呼び掛けをする脱会組に対して、東郷は早速、去就に迷う会員の残留の説得を始めた。

残留組の会員が西銀座の「小鼓」に集って、善後策に大童となった。

東郷は、この際に噴出した独裁批判をかわすために、自ら会経営の前面から後退し、若手会員の中から運営委員を選び、合議制による民主的な運営策を打ち出して、会運営の改革を訴えた。

その結果、退会組に身を寄せようとしていた者の過半は残留にとなり、東郷たちが心配した二科会の崩壊は、取り敢えず食い止められることになった。

早速改革人事が公表され、若手会員の会運営前面への起用と、東郷青児が顧問に引く由が、明確に表明された。

背水の布陣とはいえ、ここでも東郷の明解な判断と迅速な処置が、二科会の崩壊を救ったといえる。

〈二科会の改革人事　常任運営委員　岡本太郎、大沢昌助、寺田竹雄、笠置季男／運営委員　藤井二郎、服部正一郎、北川民次、松本弘二、松井正、鷹山宇一、山口長男、吉井淳二、吉原治良／幹事　野村守夫／会計　吉井淳二／事務長　青山龍水／顧問　東郷青児〉

「二科会脱退声明」を発表した十日後の七月十五日、鷲谷の小料理屋「喜多八」で、絵画部十二名、彫刻部二名、合わせて十四名が正式に二科会を退会して、新団体「一陽会」の結成をめざすことになった。

◇「一陽会」の結成へ

昭和三十年七月十五日付けの『朝日新聞』の報道記事「二科会の分裂と美術界」は、各方面に大きな衝撃を与えた。「美術界を揺るがす騒動」と大仰に報道されたせいでもあるが、ことが画壇の今後の在り様に大きく影響を与えかねない問題であっただけに、美術界全体に投げかけた波紋は大きかった。

そして皮肉にも、二科会内部に在って日頃憤懣を洩らしていた者にとっても驚天動地の衝撃であり、突然突き付けられた出処進退の如何に一様に煩悶としたが、畢竟、東郷青児を中心とする残留組の説得や、会の改革案が早々に打ち出されると、その多くが残留の列に戻って行った。

ただこのことは、遠い時間の経過の外で郷愁することではなくて、残された証言のひとつひとつに耳を傾けてゆかねばならない。後に一陽会の彫刻部を率いる植木力も、驚愕の朝を迎えていた。

昭和三十年の夏、高岡徳太郎氏が鈴木信太郎氏、野間仁根氏と三人で二科を脱けるというニュースは、あの朝、新聞で初めて知ったのだが、それはもう驚いたなんてものじゃなかった。横着して寝床で新聞を拡げたら、写真入り、数段抜きの大きな記事が目に飛びこんだ。思わず僕は台所にいた女房に「おい、二科はもうダメだぞ」とどなったくらいショックは大きかった。

早速、彫刻部の一人から電話があり、「どうする？」と言う。それで、「彫刻部は厄介だから今度は作らないんじゃないか。俺達は次の分裂のとき参加しようや」などと答えたのを覚えている。

ところがすぐ、高岡氏がやってきた。

僕が、「随分、思い切ったこと、やりましたね」と言うと、「そう思いますか」といったん言葉を切ってから、「入ってくれますか」と訊かれた。僕は即座に「入りましょう」と答えて、それから高岡氏と二人で彫刻の何

人かの家を廻った。……

〔植木力「高岡徳太郎を語る」「平地の大木　高岡徳太郎」〕

植木力が高岡徳太郎を案内して回った先々での反応は、いまひとつ明解なものではなかったようだ。それまで二科会を脱会したいと言っていた者に限って、いざ誘いに行くと態度をガラッと変えて断固として拒否する人や、俄かに二科会の看板が大事に思えるのか妙に臆病になる人がいて、人の本心が露呈する様が興味深かった、と植木は回想している。

その帰り道、高岡は植木にむかって、「植木さんは随分いさぎいいんだね」と感慨深げに言ったという。高岡たちが作ろうとしている美術家集団は、まだこの時期は、同人展の形にするのか、公募展にするのか判然としていなかったのだから、誘われた側も不安に思って俄かには応じられなかったのも無理はなかった。

植木力の場合は、高岡徳太郎をはじめ鈴木信太郎、野間仁根について格別の思い入れがあった。純粋に創作活動に没頭する姿勢に共感を抱いていたからである。だからこの三人とならやって行けると躊躇なく決心した。そして、そもそも植木が二科展に初入選（昭和十三年）した折、舞台美術家の吉田謙吉（註3）の紹介で、最初に面識を得た二科会中枢の作家が高岡徳太郎であり、以後絵画・彫刻のジャンルを越えて親交があった。

山谷錬一は当時二科展の一般出品者だったが、七月五日の『読売新聞』夕刊に掲載された「二科会脱退声明」を読み、同様に出品者の長谷川三千春と語らって、鈴木、野間、高岡の動きに同調するべく、早速行動を起こした。

六日の朝、私は野間先生に逢い、長谷川君にも逢い、鈴木、高岡両先生とも連絡をとりつつ新団体結成の足固めのための日が続いた。創立に参画したメンバーは十四名であったが、最初の顔合わせをして、会結成の声

鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎らの二科会退会と、残留組の鳴首協議の様子を報じる新聞報道。

理想と現実が矛盾

一陽会はこう歩きたい

―鈴木信太郎・野間仁根両氏にきく―

二科と別れて反省

日本画壇の直面するもの

文化

明を出したのは七月十五日、鷲谷の小料理屋の老舗「喜多八」の二階であった。

その日は各新聞社から取材班の記者が来る、激励の電話が鳴るで、ひとしきり組織本部なみの慌ただしさに忙殺された。これでむしろ同志の私たちは確信のメドもつき意気は益々旺んに燃え上がった。……

〔山谷鎌一「一陽会かくて誕生」『一陽会会報』第三号　昭和五十六年十一月一日〕

昭和三十年七月十五日、鷲谷の小料理屋「喜多八」の二階に鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎をはじめ、米良道博、荻野康児、鰭利彦、山路真護、丹下富士男、森由太郎、中田豊、山谷鎌一、長谷川三千春、そして彫刻の植本力、浅野孟府の十四名が顔を揃えた。七月五日の鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎の「二科会脱退声明」以来、脱退組と残留組に分かれて、双方の確執が行き交った末に、新たなる創作者集団として、そして新たなる発表の場を求めて集った顔触れであった。

この日までに、高岡徳太郎の奔走で、日本橋高島屋を会場に九月一日を初日として公募展を開催する段取りが出来ていた。展覧会はその後大阪高島屋、そして福岡、熊島と巡回する手筈まで整えられた。……このことは、たとえ高島屋グループの協力と後ろ盾があったとしても、改めて高岡の手腕に瞠目しないわけにはいかない。戦後の二科会を再建し、事実上二人で運営してきた実績が見事に生かされた。

発表の場としての会場の確保は出来た。緊迫感のある新風を堂に受け入れるために公募展とした。

そして肝心の会の名称が決まらないままでいた。

さまざまの名が候補として上ったが、高岡は「二」は絶えず分裂を繰り返すが「一」は数字の始まりで無限の発展を約束するめでたい字だ」と言い、誰かが「一」と太陽の「陽」を加えた「一陽会」としたらどうか」と言い、これを支持する声が多く上った。

――また、高岡の回想によると、新しいグループ立ち上げの報告と相談に高島屋の飯田新一氏を訪ねたところ、諸々の協力を約してくれた上で、「新しいグループをつくるのなら」と、易者に依頼して「前途洋々間違いなし」という「一陽会」の名を、飯田氏が決めてくれた、としている。

さらに、同様に易学上のひとつのヒントとして、牛込高田の穴八幡宮の祭事「一陽来復」(註6)から採ったのではないかという意見もある。――

ともあれ、会の名称は「一陽会」ということで、一同の賛同が得られた。ふたたび山谷鎌一の回想によると、「信さん書いてみな」の声で、

鈴木信太郎が巻紙に独特な風格ある肉太の書体で「一陽会」と大書し、それを荻野康児が大広間の鴨居に画鋲で貼りつけた。

「よし、これでゆこう」

と野間仁根が言った瞬間、「一陽会」の歴史が始まった。

註1　「久しぶりの騒動」――昭和十年、当時の文部大臣・松田源治が美術界の挙国一致体制をすすめる名目で、帝国美術院改組を発表した。この改組案には、既成の在野団体との人的交流も含まれていて、その人事をめぐって美術界挙げての騒動になった。

註2　「第四十回」――昭和十九年、戦局の悪化に伴い政府は「美術展覧会取扱要綱」(公募展の禁止)を決定施行し、二科会を含む美術団体は自主的に解散する。二科会は同年十月六日に解散する。

従って、昭和十八年の第三十回展が戦中期の最終となる。ちなみに二科会が解散を決議した時の議長は正宗得三郎。

昭和二十年十月、東郷青児、高岡徳太郎らの手で二科会が再出発し、翌年、第二十一回展として開催する。従って昭和二十年に第四十回展を数えた。

註3

「平地の大木　高岡徳太郎」（平成元年　株式会社ノバ・マネキン四　私家版）

大阪府堺市での生いたちから高島屋宣伝部勤務、画業を志して渡欧、二科会での活躍と二科会退会から一陽会設立、その後の画業というように、高岡徳太郎の人と画業がつぶさに窺える内容になっている。戦後の二科会、一陽会の動向を辿る上で貴重な文献であり、巻末には作品集も添えられている。

「高岡徳太郎」――明治三十五（一九〇二）年大阪府生まれ。天彩画塾、本郷研究所修了。昭和九～十年渡仏、アカデミー研究所修了。二科会を経て一陽会創立に参加する。

大阪高島屋宣伝部に数年間在職、その間ポスターの制作に才能を発揮、「名宝人形展」ポスターは、ドイツ美術雑誌「クンスト」に掲載され人気を博したが、画業に専念するため退社、渡欧。帰朝後は画業に専念する。

註4

「戦意高揚絵画の接収」――戦後日本を占領統治していた連合国総司令部（GHQ）は、昭和二十年末から二十一年中頃にかけて、戦中に戦意高揚を目的に描かれた絵画（戦争画）を、括収集－接収した。これにはGHQの民間情報教育局美術記念物課、工兵司令官部が関与して実施されたが、性質が禁じられたような画家の戦犯訴追を目的とするものではなく、戦意高揚絵画を日本国民の目から隔離することと、接収後米本国に移管して戦勝記念展示を主目的としていた。接収された絵画は一時旧東京都美術館に三宅にわたって保管されていたが講和条約締結直前の一九五一年米国に移送・移管された。そして昭和四十五（一九七〇）年、これら米国に移管されていた絵画一五三点が、永久貸与の名目で日本政府に移管された。現在、東京国立近代美術館で収蔵されている。

註5

「吉田謙吉」――舞台美術家の吉田謙吉（明治三〇・一八九七～昭和五七・一九八二）は、築地小劇場での舞台美術の経験を生かして、昭和十年代のはじめに「生活美術研究会」を興し、各ジャンルの仲間と生活空間を芸術的思考で彩る試みを進めた。生憎時代は戦争へと大きく暗転していたが、昭和十五年、「新生活美術　第一回展示会」（十二月二十六日－三十日　於・資生堂ギャラリー）を開催した。参加メンバーは、吉田謙吉、植木力、武田鹿乃子、山本武夫、菊岡久利。／「新生活美術　第二回展示会」（昭和十六年十二月二十六日－三十日　於・資生堂ギャラリー）参加メンバー（同人）は、吉田謙吉、植木力、大野玉枝、奥田政徳、金丸重嶺、菅能由為子、菊岡久利、北川民次、北川冬彦、小池福太郎、高岡徳太郎、富村斐子、信田洋、林依佐美、山本武夫、吉田（武田）鹿乃子。

註6

「一陽来復」――易でいう、陰暦の十一月が復の月にあたり、十月に除の気がようやく尽き、十一月の冬至に陽の気がはじめて帰ってくることをいう。

冬が過ぎて、春の季節が始まること。物事の苦しい時期が過ぎて、幸運が見えはじめることに通じる。牛込高田の穴八幡宮では、十二月の初冬至の日に冬至祭の祭典を行っている。穴八幡宮ではこの冬至祭の日から翌年の節分まで「一陽来復御守」を頒布している。

牛込高田の穴八幡宮の
「一陽来復」のお守袋

第2章 伸張する一陽会

【第一回展・昭和三十年
～第九回展・昭和三十八年】

一陽展の宣伝バスの前で，野間仁根を中心に。（昭和35年頃）

「科会を退会した頃の野間仁根

上野駅に掲げられた高岡作「馬の親仔」の前の高岡徳太郎と額を製作した植木力

第2章　伸張する一陽会

一陽会創立／第一回展（昭和三十年・一九五五年）～第九回展（昭和三十八年・一九六三年）

一陽展（東京本展）及び会員・会友推挙　授賞の記録

昭和三十年（一九五五）

創立

・七月五日、鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎が「二科会退会声明書」を発表する。
・七月十五日、一陽会を創立。（創立会員）　鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎、米良道博、荻野康児、鱸利彦、山路真護、丹下富士男、森由太郎、中田豊、山谷蒹一、長谷川三千春（以上絵画）、植木力、浅野玄府（以上彫刻）。

第一回展覧会――（九月一日～十一日　東京・日本橋高島屋）

［会員推挙］　横方寅雄（絵画）、伊本淳（彫刻）。
［会友推挙］　近藤長三郎、松下明治、西山陶二（以上絵画）、中村輝、根本熱、名塚桐虫（以上彫刻）。
［受賞者］　◎**一陽賞**　高根秀雄（絵画）　◎**青麦賞**　磯戸茂（絵画）。
◇大阪・高島屋、福岡・大丸、盛岡・農業会館（十月）で開催。

昭和三十一年（一九五六）

第二回展覧会――（八月二十八日～九月九日　東京・日本橋高島屋）

［会員推挙］　近藤長三郎、松下明治、西山陶二（以上絵画）、中村輝（彫刻）。
［会友推挙］　片柳忠男、岡本緋典、磯戸茂、山内靖己（以上絵画）。
［受賞者］　◎**一陽賞**　沢田重隆（絵画）　◎**青麦賞**　村上英男（絵画）　◎**特待賞**　久松雅子、勝一晃、小野竹喬、野間佳子、指田由米（以上絵画）、郷倪三、水野清、綿引淳人（以上彫刻）。
◇大阪・高島屋（九月）、福岡・大丸（十月）、秋田・木内百貨店（十一月）で開催。

昭和三十二年（一九五七）

第三回展覧会――（八月二十七日～九月八日　東京・日本橋高島屋）

［会員推挙］　片柳忠男（絵画）。
［会友推挙］　沢田正太郎、勝一晃、飯田慶三、田辺栄次郎、小野竹喬、指田由米、村上英男、野間佳子、沢田重隆、小出泰弘（以上絵画）、水野清、綿引淳人、金田忠（以上彫刻）。
［受賞者］　◎**一陽賞**　沢田正太郎（絵画）、金田忠（彫刻）　◎**青麦賞**　山本ひろの（絵画）　◎**特待賞**　荻原栄一、堀内千里、小川哲郎、山田治、上田春雄、弓削次雄（以上絵画）、郷倪三、宮川和博、山崎猛（以上彫刻）。
◇九州・大牟田松屋（九月）、金沢・丸越（十月）、大阪・高島屋（十二月）で開催。

昭和三十三年（一九五八）

第四回展覧会――（九月二十二日～十月十日　東京都美術館）

［会員推挙］　田辺栄次郎、沢田重隆、飯田慶三、村上英男、沢田正太郎、指田由米、小出泰弘（以上絵画）、根本熱、金田忠（以上彫刻）。
［会友推挙］　堀内千里、荻原栄一、国本克己、小川哲郎、上田春雄、八重垣逸郎、内田古郎、弓削次郎（以上絵画）、権藤武政、榊山勝（以上彫刻）。
［受賞者］　◎**一陽賞**　田所満雄（絵画）、権藤武政（彫刻）　◎**青麦賞**　峯岸義太（絵画）　◎**特待賞**　長頴子、市川勉、江川

光信、宮越弘三、中村秀雄、原健二、山田首、大石可久也、片岡真太郎、小林内（以上絵画）、関野初代、栗原春代、宮川和博、森川正之（以上彫刻）。

◇大阪・高島屋（十一月）、金沢・大和百貨店（十二月）で開催。

昭和三十四年（一九五九）

第五回展覧会

（九月二十二日～十月十日　東京都美術館）

・スタンリー・ウィリアム・ヘイター主宰のパリの版画研究所より特別出品。

（会員推挙）　小川哲郎（絵画）、鶴引淳人（彫刻）。

（会友推挙）　田所満雄、山本ひろの、長嶺子、市川敏、大石可久也、山田首、中村秀雄（以上絵画）、宮川和博、森川正之、山崎猛、郷悦三（以上彫刻）。

（受賞者）　◎**一陽賞**　みのわ淳（絵画）、宮川和博（彫刻）　◎**青麦賞**　鶴田猛（絵画）、福士勝男（彫刻）　◎**特待賞**　黒野住夫、斎藤光子、千種園子、高尾千代光、井黒四郎、五十嵐二朗、大塚伊次、野中重利（以上絵画）、林百菊、福田浩子、リチャード・C・テイム、森川正之、名塚樹也、神山勝、山崎猛（以上彫刻）。

◇大阪・高島屋（十月）、金沢・大和百貨店（十二月）で開催。

第六回展覧会

（九月二十二日～十月十日　東京都美術館）

（会員推挙）　田所満雄（絵画）

（会友推挙）　小林内、みのわ淳、鶴田猛（以上絵画）、福士勝男（彫刻）。

（受賞者）　◎**会友賞**　堀内千里（絵画）、神山勝（彫刻）　◎**一陽賞**　北山泰斗（絵画）　◎**青麦賞**　角美貴子（絵画）、関野初代（彫刻）　◎**特待賞**　宮本清、北山マミ、月見里シゲル、星原満朗、美谷順一、都豊子（以上絵画）、中島英美、村山功、バグル・ダニエル、大野春代、吉田美智（以上彫刻）。

◇大阪・高島屋（十月）で開催。

昭和三十六年（一九六一）

第七回展覧会

（九月二十二日～十月十日　東京都美術館）

（会員推挙）　堀内千里（絵画）、水野清、宮川和博、神山勝（以上彫刻）。

（会友推挙）　角美貴子、五十嵐二朗、宮本清、北山泰斗（以上絵画）、土井要輔、大野春代、関野初代（以上彫刻）。

（受賞者）　◎**会友賞**　山本ひろの（絵画）、福士勝男（彫刻）　◎**一陽賞**　栗原和美（絵画）、土井要輔（彫刻）　◎**青麦賞**　五十嵐二朗（絵画）　◎**特待賞**　梶山俊夫、与儀達治、杉本和子、越智映介、笹尾誠一、浅井一介（以上絵画）、桜井克也、宇田靖夫、横沢英一、高橋正裕（以上彫刻）。

◇名古屋・名鉄百貨店、大阪・高島屋（十月）、新潟・小林百貨店（十一月）で開催。

＊春、会友・水野清（彫刻）逝去。

昭和三十七年（一九六二）

第八回展覧会

（九月二十二日～十月十日　東京都美術館）

（会員推挙）　上田春雄、小野忠郎、みのわ淳、萩原光観（栄一）、国本克己（以上絵画）。

（会友推挙）　月見里シゲル、斎藤光子、峯岸義太（以上絵画）、加藤博二、横沢英一、吉田美智（以上彫刻）。

（受賞者）　◎**会友賞**　上田春雄　◎**一陽賞**　峯岸義太（絵画）　◎**青麦賞**　鈴木力（絵画）、横沢英一（彫刻）　◎**特待賞**　梶山

俊夫、谷俊彦、杉本和子、与儀達治、北山マミ、福井昭雄、永井芳末、森山敬典、上野富蔵（以上絵画）、吉田美智、長崎茂、洪谷三郎、三輪乙彦、六崎敏光、中島荘三郎（以上彫刻）。
◇大阪・高島屋、名古屋・名鉄百貨店（十月）で開催。◇鹿児島・鹿児島市立美術館（昭和三十八年二月）で開催。
＊八月、会員・丹下富士男（絵画）逝去。

昭和三十八年（一九六三）

第九回展覧会——（九月二十二日～十月十日　東京都美術館）
〔会員推挙〕勝一見、野間佳子、八重垣逸郎（以上絵画）、福士勝男（彫刻）。
〔会友推挙〕鈴木力、越智暎介、栗原和美、笹尾威一、井黒四郎、与儀達治、上野富蔵、北山マミ（以上絵画）。
〔受賞者〕◎**会友賞**　野間佳子　◎**一陽賞**　中村亮一郎（絵画）
◎**青麦賞**　郡慧子（絵画）、石黒功（彫刻）　◎**特待賞**　松本幸治郎、大羽悟郎、佐野儀雄、小松久子、森鳥八州樹、山本圭吾（以上絵画）、小池修男、蜜波雄伸三、長崎茂、児嶋務、高橋正祐（以上彫刻）。
◇大阪・高島屋、名古屋・名鉄百貨店（十月）で開催。
＊会員・沢田重隆、みのわ淳（以上絵画）、会友・弓削次雄（絵画）、名塚樹也、権藤武政（以上彫刻）退会。

◇「第一回一陽展」の開催

《一陽会は第一回展を開催する。
本展覧会の主体は会員と出品者諸君の絵画、彫刻によって構成する。
一陽会は無垢である。そうして若い。
量よりは質を、醜よりは美を、実を発揮したい。
情熱と理想。
幻想と詩心。
熱心と誠実。
鈍重にして執拗。
鋭敏にして深刻。
いづれにもせよ現代性の認識と新時代的創意創造である。
しかるが故に勿論一流一派に固定偏愛することはない。
かえって尖鋭なる未完成をこそ問題として提案したいところである。
一陽会は未だ何等の制約によって拘束さるるところがない。
汚染と悪風を知らない。
一陽会は発足誕生以来僅に四十五日を経ているに過ぎない。
前人未踏の新分野を明らかに樹立することこそ一陽会の希望である。》

（『第一回一陽会美術展覧会』図録　昭和三十年）

この、第一回展の図録の巻頭に記された宣言文は、以後一陽会の歩みの座右に常に置かれることになる。殊に「実親なる未完成をこそ問題として提案」し「前人未踏の新分野を明らかに樹立する」というくだりが、新しい美術団体の若い清新な作家集団の意気込みを、よく言いあらわしている。

この宣言文は、会の創立からおよそ半世紀を隔てた時点においてなお、世相と世代をこえて会是として継承され、毎年、展覧会図録の巻頭を飾っている。

会の設立とともに準備した日本橋高島屋での最初の展覧会が、いよいよ目前にせまった。

会の事務所は東京都台東区上野桜木町の野間仁根方とし、東京都美術館の地下の一室を借りて仮事務所とし、各方面への連絡や印刷物の発送を行い、作品の搬入会場は、都美術館の仮事務所と共立女子大学の大講堂を借りて、搬入、審査、入選発表の諸準備を行った。

さらに、宣伝車を用意して、放送局、新聞社等への挨拶廻りをするなど、皆で手分けしてこの難事業に取り組んだ。このあたりの手順のすばやさは、さすが戦後の二科会を取り仕切った高岡徳太郎らの手腕と窺えるが、鈴木信太郎も、野間仁根も先頭に立って奔走した。鈴木も野間もまだ五十代、米良道博、植木力、浅野孟府、山路真護、長谷川三千春、森由太郎、中田豊、荻野康児、鱸利彦、丹下富士男、山谷錬一など四十代の若さであった。この十四名が創立会員となって、一陽会の第一歩が印されることになった。

一陽会の動向を取材していた新聞記者の幾人かは、

「お互い（二科会と一陽会）に競争相手ができて、活気が出るんじゃないか」

と励ましとも思えることを言ってくれたが、当事者としてはとてもそんな呑気な心境ではなかった。会の設立から間をおかずに、すぐさま第一回展の作品公募を始めていて、「果たして作品は集まるのだろうか」それがまず心配だった。

ところが、搬入会場には、思った以上に沢山の新しい傾向の作品約二九〇〇点が集まった。一同はひとまず安堵の胸を撫で下ろした。

だが、創立第一回の作品公募でも、当時にしてみれば二科入選と一陽会入選とでは、会の歴史の長さからいっても雲泥の差があり、入選の重みの違いは、これはどうにも致し方のないことだった。

昭和三十年九月一日、旗揚げの第一回一陽展は、日本橋の高島屋で幕を開けた。

［第一回一陽会展］（九月一日～十一日　日本橋・高島屋・他大阪高島屋／福岡大丸／徳島農業会館にて開催）

［出品作家］

○会員［絵画］

鈴木信太郎（八点）　野間仁根（七点）　高岡徳太郎（六点）
荻野康児（七点）　米良道博（七点）　鱸利彦（四点）
山路真護（三点）　丹下富士男（六点）　森由太郎（二点）
中田豊（五点）　山谷錬一（三点）

第1回一陽展図録
（表紙装画　鈴木信太郎）

一陽会福岡展図録
（表紙装画　鈴木信太郎）

長谷川三千春（三点）　（以上六十一点）。

○会員〔彫刻〕

浅野孟府（一点）　植木力（七点）　〔以上八点〕。

○一般出品者〔絵画〕（入選点数、居住地）

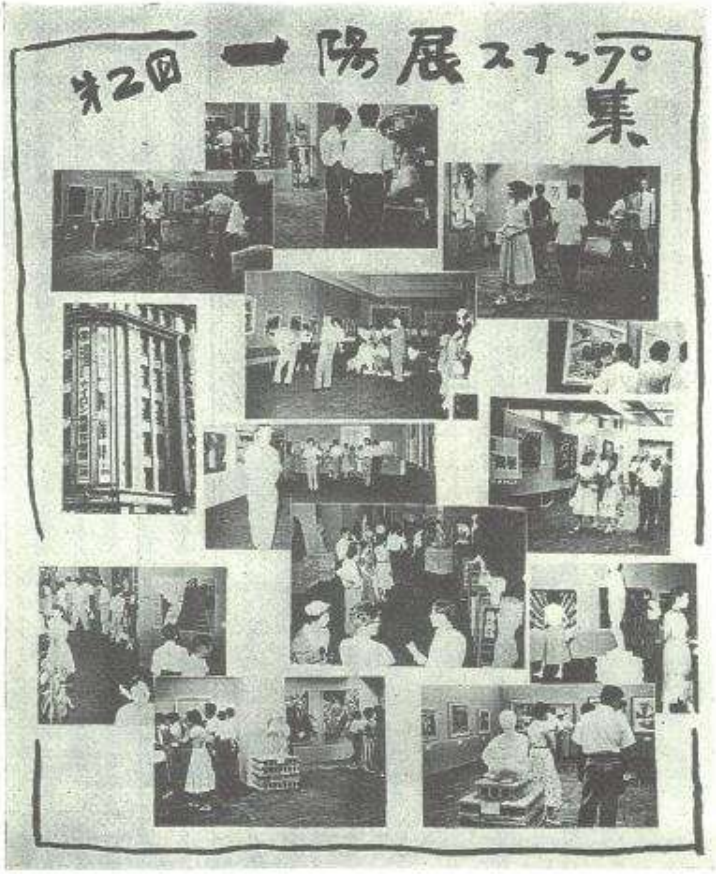
西山陽二（三点、高知市）、萩原英一（三点、東京都）、石野隆（二点、横浜市）、近藤長三郎（二点、東京都）、勝一平（一点）（二点、東京都）、棟方寅雄（二点、弘前市）、邑重勝久（二点、岩国市）、大野隆之（二点、浦和市）、小野竹喬（二点、東京都）、塩見禎士（二点、東京都）、沢田正太郎（二点、東京都）、沢田重隆（二点、東京都）、与儀達治（二点、東京都）、山田治（二点、東京都）、新井恵美子（一点、鎌倉市）、阿部光（二点、横浜市）、赤羽真純（二点、東京都）、伴敏子（一点、東京都）、千種園子（一点、川崎市）、江川光信（二点、東京都）、後藤泰洋（二点、一宮市）、後藤俊春（一点、東京都）、藤田悟（一点、徳島県）、藤川貫造（二点、秋田市）、原友木（二点、東京都）、白都満（二点、東京都）、久松雅子（一点、東京都）、堀内千里（一点、東京都）、石田徹（一点、札幌市）、今村春吉（一点、長崎市）、石田茂吉（一点、東京都）、今井鑓人（一点、東京都）、今井信男（一点、東京都）、市川鶴（一点、横浜市）、伊藤博次（一点、秋田市）、木本重利（一点、東京都）、橘野松恵（一点、東京都）、菊池豊（一点、東京都）、河原太郎（一点、東京都）、河井光吉（一点、東京都）、小宮宗太郎（一点、東京都）、熊田藤作（一点、東京都）、角美貴子（一点、東京都）、小林内（一点、東京都）、片柳忠男（一点、東京都）、嘉数能愛（一点、東京都）、小谷野半二（一点、東京都）、木下誠一（一点、東京都）、葛西康（一点、秋田市）、郡想子（一点、東京都）、森島忠（一点、大阪府）、水沢順子（一点、川口市）、益子昭雄（一点、水戸市）、村上英男（一点、千葉市）、松下明治（一点、京都市）、永井芳松（一点、愛媛県）、中山安（一点、東京都）、中村隆正（一点、秋田県）、南東敏子（一点、名古屋市）、樋戸茂（一点、東京都）、中嶋正治（一点、彦根市）、野間佳子（一点、東京都）、大沢寛（一点、川越市）、小川博典（一点、東京都）、岡本知一郎（一点、静岡県）、小野貴二（一点、東京都）、大沢勝三（一点、佐野市）、尾野清（一点、広島市）、大野啓吉（一点、東京都）、指田由米（一点、八王子市）、斎藤康子（一点、岡山市）、鈴木国威（一点、東京都）、榊山勝（一点、堺市）、杉本和子（一点、新宮市）、鈴木一夫（一点、東京都）、滋野季夫（一点、東京都）、塩津誠一（一点、岡山市）、高橋凡平（一点、佐倉市）、田代利夫（一点、横浜市）、田名網敬一（一点、東京都）、高根秀雄（一点、佐原市）、高橋隆比古（一点、千葉県）、田村満（一点、東京都）、田町英夫（一点、福岡市）、竹内健（一点、東京都）、上野富蔵（一点、東京都）、上田春雄（一点、奈良県）、鷲上岩雄（一点、東京都）、山本峰生（一点、東京都）、米倉兌（一点、福島市）、吉田秀雄（一点、大山市）、山内靖巳（一点、東京都）、山田首（一点、武生市）、矢田部和子（一点、東京都）、山下俊信（一点、大分市）、吉武友嶺（一点、東京都）、八重垣逸郎（一点、東京都）　（以上百十三点）。

○一般出品者〔彫刻〕（入選点数、居住地）

伊本淳（二点、藤沢市）、中村輝（二点、東京都）、根本熊（二点、函館市）、名塚樹也（二点、横浜市）、金田忠（二点、東京都）、綿引淳人（二点、東京都）、石原照治（二点、鎌倉市）、栗原春代（一点、函館市）、山崎猛（一点、茨城県）、大島久（一点）、白石正義（一点、堺市）、水野清（一点、姫路市）、郷悦三（一点、岐阜市）　（以上十九点）。

創立会員、出品者を合わせて、絵画百七十四点、彫刻二十七点の展観であった。

都市型の中央画壇の美術団体であるだけに、東京都（都下も含む）からの応募出品者が約四割強と圧倒的だが、



高島屋で開催された一陽展の会場の様子が窺える貴重な資料（『高島屋五十年史』より）。

次いで神奈川、千葉、愛知、秋田、埼玉、大阪、岡山、広島というように、各地方から出品者を集めている。勿論、出身地あるいは本籍地を記載して出品した例もあるだろうが、五十回展を迎えようとしている時点の、現在の一陽会の地方支部の広がりと重なる部分が見られる。さらに、北は札幌、函館、弘前、南は長崎、大分、福岡、そして愛媛、徳島からも出品されている。

そして、第二回展以降に繋がっていく新会員、新会友、受賞者が以下のごとく発表された。

〔新会員〕　樓方寅雄（絵画）、伊本　淳（彫刻）

〔新会友〕　近藤長三郎（絵画）、松下明治（絵画）、酉山園二（絵画）
中村　蝉（彫刻）、榎本　勲（彫刻）、名塚樹也（彫刻）

〔受賞〕
一陽賞　高根秀雄（絵画）
青麦賞　櫛戸　茂（絵画）

第一回一陽展に対するジャーナリズム、一般愛好家の関心は非常に高く、一陽会の新しい船出を応援してくれる意味もあってか、新聞各紙上にも好意的な評が多く掲載され、大変な反響があった。

「一割増し美術展開幕　四分五裂・混乱の和　（F）」

《美術の秋が始まった。二科会、行動美術協会、日本美術院（いずれも十九日まで上野都美術館）、青龍社（十一日まで日本橋三越）、加えてニューフェースの一陽会（十一日まで日本橋高島屋）と、花やかである。

ことしの各会搬入数は、前年に比べて二科の四割増しをトップに平均一割はふえている。例年より一団体多くなったのに不思議な話だが、その一陽会でさえ二千五百点も集まっている。美術ブームと喜んでいいだろうか、一夜で画家が生まれるはずはないのだから、出品層のレベルが下がったと考えたほうが当たっている。

この第二陣の洋画団体だが、二科と行動は終戦直後に分裂したもの、一陽はほんの一ヶ月ほど前に二科からの脱退組でもとをただせば同じ穴のムジナ。そのためか、一陽会が「創立第一回展ゴアイサツ」と宣伝カーで都内を練り歩けば、ことしは自画と発表していた二科会が例年どおりの前夜祭を決行しいつもながらの悲しき日本画壇風景を展開していた。

さて作品だが、……一陽会は野間仁根、鈴木信太郎、高岡徳太郎がそれぞれ六点出品しているのが看板。ざっと以上のとおりだが、二科会は〝首つり〟モチーフの絵が十余点、行動美術でもうちひしがれたような人間像を描いた作品が相当ある。現実の苦悩にぶつかっているのだ、と各会の会員級は語っているが、果たしてこれが現実なのか……。》

（『毎日新聞』昭和三十年九月二日付「学芸」欄）

会創立早々の作品の公募で、二千五百点を越える作品を集めた一陽会の健闘に驚きの声をあげているが、また、この一陽会への対抗上か、自粛する筈だった例年の前夜祭を派手に挙行した二科会に、「…いつもながらの悲しき日本画壇風景…」という醒めた評言を投げている。これは、一陽会の「宣伝カー」にしても例外ではないはずで、すでに、画壇とジャーナリズムの感覚の微妙なずれがこの時点で生じている。

一陽会第一回展の思い出（昭和三十年）

江川　光信

第一回展の旗揚げのことは、当時の新聞の社会面で偶然知った。小さな欄ではあったが、発足会員たちの名前も出ていた。私はその前年武蔵野美術学校を卒業し、鈴木信太郎先生には学生の時に教えを受けたこともあり、好きな作家だったので、俄かに出品する気になった。

当時を思い起こすと、キャンバスは高価だったので、今の新宿歌舞伎町あたりにあった呉服問屋で麻地を買ってきて、幅が狭いので妹にミシンで縫い合わせてもらって木枠に張り、膠を溶いて塗ったあと乾かしてからホワイトを塗って仕上げた。こうして完成した絵は五十号で、何点だったか忘れてしまったが一人では持ち切れず、弟にも手伝わせて電車で持っていった。搬入場に着くと入口の外で時間をかけてトントンと手製の額縁をとりつけて出品した。

そして数日後、五十号一点が入選の知らせが届いた。この時は〝天にも昇らん〟気持ちになった。そして第一回展の初日、会場は日本橋高島屋の上の方の催物場で、入口は赤白の幕できれいに飾られ、「第一回一陽展」の字が実に堂々としていた。入って見ると、会員の先生方の絵はさすが見事で、入口近くに並んでいた、自分の絵はなかなか見つからず、最後にやっと一番隅の壁に発見、思わず「あった」と心で叫び、あらためて嬉しさがこみ上げてきた。

懇親会は上の方の大食堂で盛大に行われた。二科から分かれて新しく結成された創立会員の先生方が正面に一列に並んで座っており、シャンデリアの光で一段と輝いて見えた。一般出品の我々は、お互いの顔が見えるように、話が出来るように座ったが、どうもみんな自分より偉く見えた。

この折、中央に座られていた野間仁根先生の挨拶の中で、今でも私の記憶の中でぬぐい切れない言葉がある。お酒も入り全員がくつろぎ始めた頃だった。みんなが静かに聞き入る中で、仁王様のような顔つきでギョロリと一般出品者を見回し、関西なまりの独特の節回しで、《出品者諸君、来年からはこれだけ描きましたとみんな持ってくるのではなく、コツコツと描きためておき、その中から自分で〝これは！〟と思うものを選び出して持ってきてほしい》と結ばれた。会場全体が静まり返り、野間先生のとなりに座っておられた鈴木先生をはじめ、全創立会員の先生方が大きくうなずいておられた。

私もお陰様で出品しつづけていつの間にか五十年になるが、キャンバスを張っている時、筆が進まず困っている時、完成してほっとしている時、……等々、いろいろな折に、今でもあの時の場面が時々頭に浮かんできては、自己反省している、長いようで短い五十年だった。

（絵画部会員）

「一陽会展評　公募作品の若々しさ　福島繁太郎」

《鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎の三君が二科会をやめた時、公募せずに三人展を開いた方が純粋であるという声が多かった。僕もぼんやりそんなふうに感じていたが、一陽会を結成して作品をいざ公募した結果をみると、やはり公募してよかったと思う。若々しいこの生気は既成作家だけの同人展では求め得られない。

一陽会は公募したが他の展覧会のように上野の美術館で開かず、デパートに会場を求めた。美術館で開くほどのスペースがないから必然的に中型の展覧会になる。これがよかった。一般出品者の中から筋のいい新人を拾いやすいのである。上野のような大展覧会では鑑賞者はいたずらに疲れてしまって、どれもこれも同じに見えて新人を見つけがたい。さて、一陽会第一回展の公募作品の中では沢田重太郎をおもしろいと思った。モチーフの取り方も独特であるし、デッサンもしっかりしていると思う。きびきびした気分を感じる絵で、他人の真似をしていないのがなによりも嬉しい。勝一平という人の「鳥と子供」もなかなか歯切れのいい作品で目立っていたし、萩原英一の「霧雨」「沼」「都会の幻光」の版画もとりえがあると思ったが、なにしろ油絵の間にはさまっては版画は損だし、それにもう少し数を見なくてはよく判らない。

西山圀二の「土佐教会」その他の民衆画はなつかしかった。僕が若い時、国画会の鑑賞にたずさわっていたが、そのころ毎年出品していた。素朴な美しさに注目したが、毎年少しも変わらないので、ついにあきてしまった。しかしこれは私達の誤りであったと思う。正規の絵画教育も受けず、また世界絵画の大勢はおろか、東京の情勢もまったく無知で、一人楽しんで描いている本当の民衆絵画に変化を求める方が無理なのである。変化のない民衆絵画は存在価値のないものであろうか。僕はそうは思わない。民衆絵画はそれなりに美しさがある。フランスでもアメリカでも民衆絵画は変化しないが、ちゃんとその価値を認め存在の場所を与えている。

一陽会の幹部野間仁根の芸術も一見民衆絵画のごとく見えるが、決して民衆絵画ではない。民衆絵画のように楽しんで作画している態度はおのずと素朴な美を生む結果になっているが、元来は現代の絵画情勢に通

五十年はずいぶん昔です（昭和三十年）

大野　隆之

昭和三十年（一九五五）の前年、私は全日本学生油絵コンクールに出品した。この年（昭和二十九年）、一年上の真鍋博、飯田四郎の二人が受賞した。私は、太海の江沢館からほど近い岩と波を描く菅宮一念の写生現場にいて、自分も大きい岩を中心に、打ち寄せる波を描いた十五号が入選した。このコンクールを後援するフナオカキャンバスが浦和市岸町に在ったので、翌年（昭和三十年）も再び搬入しようと三十号、四十号など三点を持って上野公園に向った。美術館に行き着いたところが一陽会の搬入口で（註・共立女子大学大講堂と東京都美術館のニ箇所で搬入作業をしていた）、『アトリエ』や『みづゑ』で見知った鈴木信太郎、野間仁根といった偉い先生方が立ち働いておられた。――考えるも考えなくも、いとまなく作品は先生方の手に渡ってしまっていた。

第一回展は日本橋高島屋の画廊、入口で買い求めた第一回展の図録に、私の作品「娘」が印刷されていて驚いた。「すず」と署名の入った緑色の美しい表紙の本だった。（元絵画部会長）

大野隆之「娘」（第1回一陽展）

じたむしろ知性的の作家である。彼の特徴はなんとなくおとけたユーモラスなところにある。絵画はつねに厳粛でなければならぬという道理もないし、絢爛で官能的でなければならぬということもない。ユーモラスな絵画もあっていいのだが、日本の画家にはまことに例が少ない。その意味で野間は特異の作家といえよう。こんどの出品では星座を描いた諸作品はやや野心的であるが、まだ手に入ってないうらみがある。やはり手なれた貝や魚の作品の方が優れているように思う。

鈴木信太郎も素朴な美を持つ作家で、素朴にしておだやかな美しさが持ち味である。大作「窓」は出来のいい作品といえよう。島岡徳太郎は少し生まじめすぎるほどの写実に入ってしまったのではないか。以前のように幾分主観の強い方が私は好きである。荻野康児は感覚は新しいけれど、なんとなくもの足りないように思われるし、長谷川三千春もおもしろいところはあるが、まだ私は確信が持てない。》（『日本経済新聞』昭和三十年九月四日付「文化」欄）

福島繁太郎（註1）は、その優れた批評眼と収集家としての眼福に定評があり、この時期まだ確立していなかった、わが国の西洋画を見据えた、美術ジャーナリズムを先導した人だった。上野の大きい美術館ではなく、高島屋を会場としたほどの展覧会の規模と、民衆絵画の穏やかで素朴な興趣とに好感を寄せている。大きい壁面に大作主義を至上とする既成の美術団体の志向とは離れたところに、一陽会の歩むべき可能性を観たとも取れる評である。

「秋の美術展　変わった画壇地図をたどって　瀬木慎一」
《秋のシーズンがはじまるまえに美術界には、既に問題が起きていた。周知のように、鈴木信太郎、島岡徳太郎、野間仁根の三人が二科会を脱退して、新たに一陽会を結成した。他方、二科会では、東郷青児が引っ込んで、岡本太郎が乗り出した。行動美術では、新人の有力作家数名が脱退し、それぞれ二科会と自由美術に移った。こんな画壇地図の変化を念頭において、展覧会をのぞいてみよう。》

遠い日（昭和三十年～）

山田　忠

私は官展系の団体（日展）に出品していたが、どうにも物足りなく、在野の団体を探していた。

世の中は熱い抽象真っ盛りの頃で、折柄関西の具体派などが大変高く評価されていた。そんな時、デパート（高島屋）で開催されていた二陽展を観てびっくりした。百号のキャンヴァスに、男の顔が一つ大きく描かれているだけ。肌色など何処を探しても見当たらず、全面ブルシャンブルー。それが受賞作品だった。私の画生活の中には全く存在してなかった世界だ。「何だこの会は」と思った。マニフェスト（宣言書）を読み、「素晴らしい。これだ」と思った。

荻野康児が送った祝の葉書。

第十回展で受賞し、九年待たされて、やっと会友推挙の通知を受け取った時は嬉しかった。そんな折、全く言葉を交わしたこともなく、ましてやお顔も存じあげない荻野康児先生から祝いのお葉書を頂き、どんなに感激したことか。

「これからも頑張ります」とご返事申し上げたことを思い起こす。

もう四十年も前のことになるのか。

（絵画部会員）

◇主張と逆さまな「一陽会」　歴史の順序に従って、先ず一陽会に車を乗りつけよう。この会の主張をみると、「量より質を、醜より美を」とあるが、これは大変結構。ところが入選発表をみていささか驚いた。絵画総搬入数二五二点（八四九名）から一三点（九七名）という数字だ。この会が結成されたのは、確か、二ヶ月ほどまえだったと思うが、これでは十年まえから存続している団体と別段変わらないではないか。

作品のスタイルは、扇のカナメともいうべき三人の周辺はおとなしいが、どちらかというと粗くどぎついものが末ひろがりになっているようだ。この点でも、十年まえから存続している団体と変わらない。展覧会にあらわれた事実は明らかに主張と逆である。

形こそちがえ、既成のものと同工内容がまたしても出来上がったという感じで、妙ないい方をすれば作家の団体本能ともいうべきものの根づよさをおもわせる。

「量より質を、醜より美を」というのは画壇に共通の現象で、それは日本画のような特殊で閉鎖的な世界にもみとめられる。長い伝統の延長線上にある。青龍展でも、既成のパターンを破ろうとする動きが、それぞれ多少のニュアンスがちがってもこういった形であらわれていることは否定出来ない。もちろん、これは好ましくない現象だが、しかし、そこには発展へ向かう芽生えはすこしも無いのだろうか。……》（読売新聞）
昭和三十年九月五日付　「文化」欄

昭和三十年当時、美術評論の筆を執り始めて間もない瀬木慎一（注2）は、戦後の復興とともに隆盛のきざしを見せ始めた日本の美術の現状、殊に上野の美術団体の動向に熱い関心を寄せていた。このことは瀬木に限ることではなく、次第に国際化の度合いを早めつつあった日本の美術界の現状を、その最先端である画壇の内に見極めようという切実な思いがあった。

戦後の経済の復興とともに、芸術文化への一般の関心の深まりと、創作者の裾野の広がりはめざましいものがあった。だが、上野で開催される美術団体の毎年の展覧会は、「戦前の縦系列の旧弊を脱したのか、自由で明解な美術の殿堂になりうるのか？」その見極めは、日本の美術評論にとっても重要な問題であった。

「変容する美術展　二科、行動美術、一陽会展評　土方定一」
《展覧会を見にゆくぼくの社会心理的な興味は、各会を通じて、今年は今年のファッションをもって変容していることである。この変容の現象は表現主義風な抽象絵画、カンディンスキー、ピュッフェ、ロルジェ、またメキシコ的写実主義といったものが今年のファッションのようだ。こういうファッションの現象の面白さは、他の展覧会と比較にならぬ点数を展示している二科展に当然、一番、面白く現れている。したがって、二科展はいつもこういうファッション・ショーとしての面白さがあり、二科の興行政策ともなり一般の観衆も笑いの一歩手前のような顔をしてみている。日本の美的観衆も進歩してきて、こういうショーを深刻な渋面を作って見なくなった。なかには部屋ごとに置かれている冷房用の氷柱のなかに、なにか二科的シカケがありはしないかとのぞく人もいるが、といって、こういう現象の背後にある作家を侮辱するつもりは毛頭ない。

一陽会は第一回の公募展として手薄な会場になったことは、やむをえないかもしれない。野間仁根の民衆芸術風な幻想的な絵画は大切な要素だが、もっと素直に大きく成長していい。ともかく「前人未踏」の新分野を明らかに樹立していただきたいと、皮肉なしに、思うものである。》（「毎日新聞」　昭和三十年九月六日付「学芸」欄）

源流は一つだが

二科・行動・一陽会の絵画

一様に精神の貧困

本間正義

当時、すでに「ヨーロッパの現代美術」「世界美術館めぐり」を著し、後の美術館時代のさきがけとなった、陽館開もない神奈川県立近代美術館（昭和二十六年十一月開館）の副館長という要職にあった土方定一（註3）は、洋の東西を通観する視野の広い美術評論、美術史観を早くから展開していたが、この時期盛んに美術団体の展覧会評を書いている。やはり、美術団体の現況の見極めに懸命だったということなのだろうが、その筆鋒はおおむね先鋭なものだったが、この第一回一陽展評では、率直な好感を述べている。

〈…「前人未踏」の新分野を明らかに樹立していただきたい…〉というくだりには、「野間仁根の民衆芸術風の幻想絵画」を前面に押し出すということにとどまらず、既成の美術団体では実現し得なかった、日本人の西洋美術の開花の可能性を、心待ちにする思いがあった。さらに一陽展評は続く。

「一陽会　サロン的空気　河北倫明」

〈一陽会は今夏出発したばかりの第一回展だが、主力会員の親しみやすい素朴な傾向が中心となって、柔らかなサロン的空気をかもし出しているのが特徴である。むろん画風の上にこれといった性格も主張も見られないが、作品もいったいに小品で、平和な感じを漂わせている。鈴木信太郎の「海辺の村」「波と船」、野間仁根の「アンドロメダ」「蛇つかい」、高岡徳太郎「バレリーナ」あたりがこの会の水準で、それ以外にきわだった見ものはない。ちょっとサラつきすぎだが、森由太郎の「海辺の断崖」に一種の熱っぽさのある受賞作の橋戸茂「真昼の倦怠」などが注目される程度。抽象傾向では河井光吉「風景の略図」がかなりの密度を示している。〉（「朝日新聞」　昭和三十年九月八日付　「学芸　続・美術展評」欄）

「源流は一つだが　二科・行動・一陽会の絵画　荒城季夫」

〈この三つの会は、周知の通り、源流はみな一つである。形式的にはフォーヴ、キュービスム、アブストラクトの複雑な混血であり、それに近代写真の一派も加わっているが、ここにおのずから各自異なった性格を示している。近代造形の打ち出し方を方法論的にみると、二科は都市的な抒情、行動と一陽会は、より一層造形面を重視しているように見える。

それともうひとつ目につく現象は、二科は上層よりも下部構造の青年層の力が強く、後の二者は反対に上部構造が強力である。二科に意識過剰の大作が多く、したがって、浮き上がっているのはそのためであり、行動と一陽会の方は大地に足がついている感じである。会場効果からいえば、むろん派手な二科が優位に立っているわけだろうが、その歴史的な大看板が今日もなお支柱になってはいるものの、すでに限界点に来て

いるように思われるのである。……

一陽会は準備期間が短かったので多少不安だったが、会場効果が意外に良く、出品の質もなかなかいい。抽象作品も適度に織りこまれてあり、急いだ第一回展としては先ず成功といえるだろう。とくに重責を負う野間仁根、鈴木信太郎、高岡徳太郎、荻野康児、米良道博などが力一杯の仕事をみせているので、影絹の植木力と共に、会場を引き緊めている。たとえば、漁具を主題にした野間にしても、鈴木の海景にしても、高岡のバレリーナにしても、荻野の幻想的な構想や米良の静かな装飾性にしても、その作品のうえに、新たな会を起こしたという自覚がはっきりあらわれている。むしろ、この会の将来を決定づけるものは、今後どのような新人を送りだすだろうかという一点にかかっているといえよう。（『産経新聞』　昭和三十年九月九日付）

そして、第一回展ながらも、大阪、福岡、盛岡へと巡回した一陽展への関心は各地でも高かった。殊に「現代性の認識と新時代的創意創造」を会是として掲げた展覧会に、新しい時代の美術文化の新風を迎える思いだったようだ。折しも、東京首都圏の復興整備も整い、上昇する経済的機運とともに「地方の時代」の到来が喧伝され始めていた。

「一陽会展福岡会場をみて　谷口鉄雄」

《秋の美術シーズンも、九州では一季節おくれて初春にめぐってくるのが普通であるのに、一陽会展は、東京、大阪についではやばやと福岡で開かれ、美術シーズンのさきがけをなした。新発足した一陽会の意気込みのほどもうかがわれる。

一陽会は、その発足に当たって『星より質を、醜よりは美を、実を発揮したい』とうたっているが、その主張どおりに、馬鹿でかい作品もなければ、鬼面人を驚かすごとき作品もない。鈴木信太郎、高岡徳太郎、野間仁根といったこの会の主導者の作品は、かつての二科展の会場では、どこか異質なそぐわないものがあっただけに、いつかは別れるのが当然であったかも知れないが、それだけに一陽会展の空気には、そういう主導者の人柄の作風の下に、ケレンのない地道なものがある。覇気と野心に物足りぬものがあるかも知れないが、誠実に絵画の道を歩んでいるといった感じがある。

この会場を廻って感じることは温雅なポエジーをふくんだ作品やマチエールの洗練された作品の多いことである。彫刻にしてもそういうことがいえる。

鈴木信太郎「窓」「長崎の海」「林檎園」は、堂に入った温雅滋潤な色彩で、静かな自足の境地にあり、野間仁根「星座アンドロメダ」はユニークな発想と色彩で、明るくほのぼのとした詩情をかもし「生物A」は大胆なマチエールの試みに不思議な力がある。この作家の詩魂の振幅には、まだまだ測り知れないものがあろう。高岡徳太郎の日本舞踊の取り上げ方にはうなずき難いものがあるが「バレリーナ」などは、さすがに熟達した手法である。

この会のさわやかな空気を代表しているのは、荻野康児、米良道博、山路真護、山谷鉄一、長谷川三千春あたりであろう。荻野の「聖堂（山口市ザビエル記念堂）」は、赤いバックに黒の建物を清潔な線で描き、香

一陽会展（福岡会場）をみて
谷口鉄雄

港に取材した「追憶」「街に想う」も、線描と、いきなり色彩で香り高いポエジーを描いている。長谷川「浜辺の静物」三点も、発想こそかならずしも新鋭とはいえないが、温雅な色彩と遠近の処理に近代的な詩情をたたえている。米良の色彩と形体の整理、山路の発想、山谷の素朴な力なども見るべきものであろう。

この会の空気として、社会的テーマをほとんどあつかうことなく、温雅な詩情の世界に沈潜しているのはけっこうであるが、同じ詩情にしても現代の先鋭な感覚の追求を望みたいのは筆者だけであろうか。一般出品者には、マチエールの面ではなかなかこったものもあるが、その発想にしっかりした基礎が欠けており、せっかくの画面を弱いものにしているものが多い。若々しさを大胆に打ち出してもらいたい。……》（「西日本新聞」　昭和三十年十月）＊筆線編集部。

新聞各紙、美術雑誌、週刊誌の美術欄というように少なからぬ報道媒体が、第一回一陽展の展覧会評を掲載したが、その論評は、新しい門出を祝す意味で概ね好意的なものであった。既成の美術団体の有り様から目に見えた革新を求めるあまりに、失望感を顕にするものもあったが、大壁画・大画面を至上のものと標榜する団体展の趨勢から離れた、鈴木信太郎、野間仁根の絵画や植木力の彫刻作品に代表される温雅な詩情溢れる民衆芸術に、欧米の写しではない独自の芸術の可能性を直感していたことも事実だった。

一陽会の今後の展開を期し、有為の後進の輩出を待つとしながらも、さらに踏み込んで、社会的テーマ、つまり現代人の先鋭な感覚こそを、積極的に画題に取り込んで追求してほしいとする評者（谷口鉄雄）もあった。この評言などは、一陽会のその後の行方を教唆するようで大いに注目に値する。

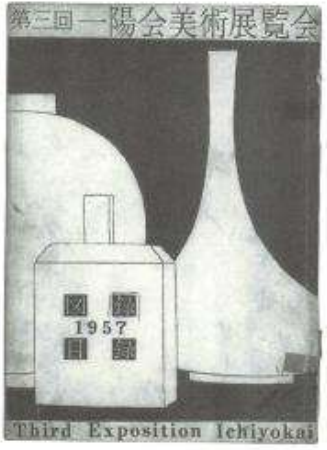
ともあれ、第一回一陽展は無事にスタートを切った。

高岡徳太郎は、安堵の胸を撫で下ろしながら以下のように回想している。

幸先のいいスタートだった。東京が終わったあとは、大阪、福岡、徳島でも開催、どこも予想以上の成果があって、僕は心の底から湧いてくる喜びを抑えることができなかった。思いきって一陽会をつくって、ほんとうによかった、と思った。

（前出「平地の大木　高岡徳太郎」）

第二回一陽展図録



第三回一陽展図録

◇創立会員の周辺

第一回展を無事開催、一陽会は名実ともに公募美術団体としての歩みを始めた。だが、会の創立とほぼ同時に公募団体としての準備に追われたために、会の創立に加わった人々、創立会員は、まさに八面六臂の大奮闘だったようだ。その当時の、創立第一回展の舞台裏の様子の一端を、創立会員の中では若手の山谷錬一の回想が偲ばせてくれる。

> 昭和三十年、二科会が分裂する。内紛が拡大し鈴木信太郎、野間仁根などは東郷二科と決別して古参、中堅会員と二科を退会し全国公募の一陽会を結成し、創立会員のなかに私を加えた。この分裂騒ぎは当時新聞紙上に大きく取り上げられ、九月には高島屋で第一回展を開催、大阪・福岡・徳島まで巡回し、会員も少ないので私も出張、制作の合間、審査、展示などに追われる激務だった。……
>
> （山谷錬一「走馬灯」『GOKO BY』二〇世紀―油彩とエッセイ―』平成十二年十月）

山谷は、同郷（房総千葉）の画友の紹介で、学生と趣味の釣りのために当時しばしば房総の地を訪れていた野間仁根と知り合い、以後師事して二科会に出品し、一陽会の創立にも従っている。一陽会を立ち上げた鈴木信太郎、野間仁根はもとより、三人に従って一陽会の創立に加わった作家たちにはとりどりに、それまでの来し方があった。

ここで、十四名の創立会員の、「それまで」の経緯を、一陽会という、至って等身大の素顔を見せてくれる美術団体の有り様を探るために、ぜひ見ておく必要がある。

鈴木信太郎（一八九五―一九八九）は、明治二十八年に東京・八王子に生まれる。黒田清輝が主宰する白馬会洋画研究所に入所し洋画を学ぶ。大正五年文展に初入選するが、自由な創作を求めて二科会に出品、大正十一年二科展に初入選する。大正十五年二科展で樗牛賞を受賞する。昭和十二年二科会会員に推挙される。昭和三十年七月野間仁根、高岡徳太郎とニ科会退会、同志をつのって一陽会を創立する。

◇斎藤茂太「長崎」（談）（『一陽会会報』第二号　昭和五十六年三月二十日）

〈…父（斎藤茂吉）の死ぬ一年ほど前に、つまり昭和二十七年の頃に鈴木信太郎画伯に父の肖像を描いていただいた。いかにも画伯らしい飄々とした父が描かれた。鈴木画伯は長崎がたいそうお好きだが、また父と長崎の関係を考えられたのだろうか、「バックは長崎にしましょうね」と言われて、小高いところから、多分南山手の丘のあたりから見おろした長崎の港をバックにされた。

長崎のことどもを書いた雑誌を画伯に差し上げたら折り返しご返事をいただいた。その中に杠葉（ゆずりは）先生のことがあった。画伯がはじめて長崎に行かれたのは昭和二十四年だったろうか、結核をわずらって杠葉病院に絵をかきに行かれたそうである。当時杠葉先生は私が「猫だけがいる西洋館」と書いた建物（その頃病院の本館だった）に居られ、青ペンキで塗られた二階のベランダへ洋蘭の大きな株をもって来て飾られたが、画伯は窓外より古い家具のコレクションがいっぱいつまった室内の不思議な雰囲気に心が動いたのだそうである。その頃はまだ自動車が不自由で、リヤカーに乗って行かれたそうである。「あの前の道が美しい棒の茂みで、天皇陛下長崎御巡幸で三菱造船所の船に万国旗が飾られ、旗行列の小学生があの石畳を

来良 道博

ぞろぞろとつづいて行きました。戦後初めてあの様に沢山の日の丸を見て感激致しました」と画伯は書いて居られる。

私の杜葉先生訪問より少しあとにも画伯は長崎に行かれたが、画伯は杜葉病院旧館の急な階段がお上りになれないので、電話で杜葉先生と話をされた由である。……》

野間仁根（一九〇一～一九七九）は、明治三十四年に愛媛県に生まれる。大正八年画業を志して上京し、川端画学校に通う。大正十三年二科展に初入選する。大正十四年東京美術学校西洋画科を卒業する。中川紀元に師事する。昭和三年二科展で樗牛賞を受賞する。昭和四年二科会会員に推挙される。昭和三十年七月鈴木信太郎、高岡徳太郎と二科会退会、同志をつのって一陽会を創立する。

◇山本蘭村「あの頃　黒色展とS・P・A」（『繪』昭和四十二年八月号　日動画廊）

《文化学院大学部の美術科にいた頃（註・昭和十年頃）の私は、未だ文学と美術のいずれを選ぶべきかに迷いがあった。その頃丁度、駿河台下にモダーンなお風呂屋さんが出来、その階上が洋画の研究所になりフランス帰りの藤田嗣治、東郷青児、野間仁根、阿部金剛という二科会の先生方、又度話役には巌康三さんが当たって、そこのメンバーの中に、斎藤義重（ビエンナーレ展で、柱ユキ子（「女ひとりアフリカをゆく」）広幡憲、清野恒（山形の風俗創展）同克巳、平野弘（秋田美術館長舎弟）、金煥基（京城大学教授）、横本徹、佐宗美郎、李仲生などがいてとても活気があった。

この駿河台洋画研究所（スルガダイ・パンテュール・アカデミー、略称S・P・A）は藤田先生や野間先生の感化でとても自由で愉快な所となった。野間仁根先生の童顔をほころばせての指導ぶりも人気があった。山手の高田馬場駅の近くにあったメキシコ風の藤田先生のアトリエに全員で伺って、未だお元気だったマドレーヌさんから銘々が嗣治先生御愛用のネクタイ、そして「メキシコのマドレーヌ」にマドレーヌさんのサインをして頂いて感激したことを今でも憶えている。……》

高岡徳太郎（一九〇二～一九九一）は、明治三十五年に大阪府堺市に生まれる。大正四年画業を志して天彩画塾（松原三五郎に師事）に入塾する。大正十一年本格的な絵の勉強を志して上京し、遠縁の辻永を訪ね、本郷洋画研究所、川端画学校に通う。大正十二年関東大震災に遭い堺阪し、大阪高島屋宣伝部に入社する（昭和六年退社）。仕事のかたわら画業をめざし大正十三年信濃橋洋画研究所に入所する。この年二科展に初入選する。昭和七年上京する。昭和九～十年渡仏。昭和十一年二科会会員に推挙される。昭和二十年疎開先で東郷青児の訪問を受け二科会再開への協力を約す。昭和二十八年二科会会員努力賞を受賞する。昭和三十年七月鈴木信太郎、野間仁根と二科会退会、同志をつのって一陽会を創立する。

来良道博（一九〇三～一九八三）は、明治三十六年に和歌山県に生まれる。画業を志して信濃橋洋画研究所に通う。鍋井克之に師事する。昭和四年二科展に初入選する。昭和二十三年二科会会員に推挙される。昭和三十年二科会を退会し、一陽会の創立に参加する。

荻野康児

鱸利彦

山路真進

丹下富士男

森由太郎

中田豊

荻野康児（一九〇二～一九七四）は、明治三十五年に横浜市に生まれる。京都市立美術工芸学校を中退後、川端画学校で学ぶ。白日会、日本水彩画会展に出品する。昭和九年日本水彩画会会員に推挙される。昭和十五年水彩連盟の創立に参加する。昭和二十一年から毎年、東京日本橋高島屋、大阪高島屋で個展を開催する。昭和二十五年二科会会員になる。昭和三十年二科会を退会し、一陽会の創立に参加する。

鱸利彦（一八九四～一九九三）は、明治二十七年に千葉県に生まれる。画業を志して本郷洋画研究所に入所、藤島武二に師事する。大正七年東京美術学校西洋画科を卒業する。文展、帝展に入選、旺玄会展に出品する。昭和二十一年二科会会員になる。昭和三十年二科会を退会し、一陽会の創立に参加する。

山路真進（一九〇〇～一九八九）は、明治三十三年に埼玉県所沢に生まれる。本名壱太郎。京都絵画専門学校を中退する。昭和四年第一美術協会展に入選する。昭和五年渡仏（昭和七年帰国）。パリ、アカデミー・ジュリアンで学ぶ。サロン・ドートンヌに出品する。昭和七年二科会に滞欧作を出品する。昭和二十一年二科会会員に推挙される。昭和三十年二科会を退会し、一陽会の創立に参加する。

丹下富士男（一九〇二～一九八二）は、明治三十五年に岩手県盛岡市に生まれる。画業を志して上京し、大正八年川端画学校に入学する。大正十三年帝展に入選する。大正十四年東京美術学校西洋画科を卒業する。昭和七年二科展に初入選する。昭和三十年二科会を退会し（会友）、一陽会の創立に参加する。

森由太郎（一九〇一～一九八九）は、明治三十四年に福井県に生まれる。鈴木信太郎に師事する。二科展に出品する。昭和三十年二科会を退会し（会友）、一陽会の創立に参加する。

中田豊（一九〇二～一九九五）は、大正元年に和歌山県に生まれる。本郷洋画研究所で学ぶ。二科展に出品する。昭和三十年二科会を退会し（会友）、一陽会の創立に参加する。

山谷銭一（一九一〇～　）は、明治四十三年に千葉市に生まれる。昭和八年同郷の画人、無縁寺心澄（水彩画家）に師事し、無縁寺が所属する白日会、日本水彩画展に出品する。野間仁根に師事し油絵を学び、昭和十五年から二科展に出品する。昭和十六年藤田嗣治の知遇を得る。昭和十七年応召、北満州に出征するが病を得て帰郷する。昭和二十二年野間仁根のすすめで再び二科展に出品する。昭和三十年一陽会の創立に参加する。

長谷川三千春（一九一〇～一九七一）は、明治四十三年に広島県に生まれる。昭和九年京都高等工芸学校を卒業する。昭和十二年二科会に初入選する。昭和三十年一陽会の創立に参加する。

山谷 祐一

長谷川 三千春

植木 力

浅野 孟府

植木　力（彫刻）（一九一三〜二〇〇三）は、大正二年に東京に生まれる。昭和十三年二科会に初入選する。昭和十五年東京美術学校彫刻科を卒業する。昭和十五年、十六年、舞台美術家の吉田謙吉らと「新生活美術　展示会」（資生堂ギャラリー）を開催する。美術学校在学中から二科展に連続入選し、昭和二十二年二科会彫刻部会員に推挙される。昭和三十年二科会を退会し、一陽会の創立に参加する。

浅野孟府（彫刻）（一九〇〇〜一九八四）は、明治三十三年に東京市渋谷に生まれる。本名猛夫。大正二年東京築地工芸学校の建築科に入学する。大正七年東京美術学校彫刻科選科に入学し、北村西望教室で学ぶ（大正十一年に中退）。第一回、第二回未来派美術協会展（大正九、十年）に出品する（尾形亀之助、ブルリュック、宍明共二（柿瀬正夢）、稲垣足穂、笠置季男がいた）。大正十一年二科インデペンデント展に出品し、この年「アクション」の結成に参加する（中川紀元、古賀春江、横山潤之助、神原泰、矢部友衛、吉田謙吉がいた）。大正十三年三科造型美術協会（アクション、未来派、マヴォなどの合同）の結成に参加する。大正十四年第一回三科展造型結成に参加する。同年築地小劇場で「劇場の三科」や仮面制作を担当する。昭和二年造型美術家協会結成に参加する（神原泰、岡本唐貴、矢部友衛、吉田謙吉、吉斡二郎がいた）。昭和四年日本プロレタリア美術家同盟の結成に参加する。昭和六年国際革命演劇デーの大阪戦旗座公演「装甲列車」の舞台装置を担当する。昭和七年前進座大阪初公演「歌舞伎王国」の大道具制作を吉田太郎と担当する。昭和八年戦旗構成合同公演「太陽のない街」の舞台装置を担当する。昭和十一年柏尾喜八郎、田川勤次らと青年美術研究所（大阪、浪花区恵比寿町）を設立する。この頃から映画の特殊撮影に携わるようになる。昭和二十一年二科会の再興に会員として参加する。アメリカ博、高島屋百貨店の展示装飾などに携わる。昭和二十三年第一回大阪新劇団合同公演「ロミオとジュリエット」（吉田謙吉演出）の舞台美術を担当する。昭和三十年二科会を退会し、一陽会の創立に参加する。

浅野孟府の来歴紹介が長くなったが、大正末から昭和戦前期にかけて、日本の近・現代美術が、文学、演劇、映像、あげく目的意識の共同体としての社会主義思想との接点を模索し続けた歩み（軌跡）があった。半世紀以上の時間の経過によって淘汰されたものも多いが、時代・世相と向き合った表現者の主張として、狭義の美術史の枠を越えて語り継がれてゆくものは決して少なくはない。このことも、一陽会の創立に流れ注がれてゆく、日本の美術の大きな一つのうねりではあった。

◇第四回展を東京都美術館で開催

旗揚げの第一回展から第三回展まで、毎年、東京日本橋・高島屋を皮切りに一陽展は開催された。

一陽会の設立が発表されたのが昭和三十年七月で、第一回展の初日が同年の九月一日、一般の愛好家はもとより、新聞各紙をはじめ関係者が、その迅速な立ち上がりに驚きの声を上げたのも無理はなかった。準備、会の発足準備と同時に展覧会の準備が進められていたということなのだが、当時を折々に回顧して、創立会員は一様に会場を提供してくれた高島屋に深い感謝の思いを述べている。

事実、この折の高島屋の会場提供がなかったら、一陽会旗揚げの理想はむなしく霧散していたやも知れない。少なくとも公募展の実現は不可能だったに違いない。これには、鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎らの二科会時代、あるいはそれ以前からの高島屋との厚誼があってのことなのだが、ここでは、高島屋との会場借用の折衝が、随分早くから進められていたようだという指摘をしておきたい。

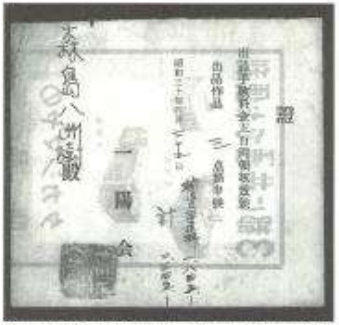
それについては、第一回展の福島繁太郎の展覧会評が一つの示唆を与えてくれている。〈…鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎の三君が二科会をやめた時、公募せずに三人展を開いた方が純粋であるという声が多かった。僕もぼんやりそんなふうに感じていた…〉というくだりである。植木力の回想にもあるように、鈴木、野間、高岡の三人の名前で出された「二科会退会声明」（七月五日）を新聞が報じた朝、植木は高岡の来訪を受けて、一緒に二科会の彫刻部の作家のもとを勧誘に回っている。つまり、福島が書いているように、鈴木、野間、高岡の三人がただ単に反旗を掲げて漫然と三人だけの作品発表の場を求めたのではなく、当初から同志を募って二科会を退会し、独自の発表の場としての展覧会開催をめざしたというのが妥当なところだった。ただ、同人展にするのか公募展の開催をめざすのかという選択の余地は残ったのだろうが、団体展が作品発表の場として絶対的な重みを誇っていた時代のことでもあり、若い作家仲間を誘う以上、全国公募の美術団体をめざす以外に、結果としては道はなかった。――ただし、全国公募の展覧会を開催し得る会場が確保できるかどうかに総てがかかっている。それも、全国公募を謳う以上、東京以外に複数の会場の手立てがなければならない。――このように経緯を辿ってくると、高島屋の全面的な協力はまさに僥倖というべきものであった。

さて、その高島屋と一陽会の関わりをもう少し遡ってみておく必要がある。

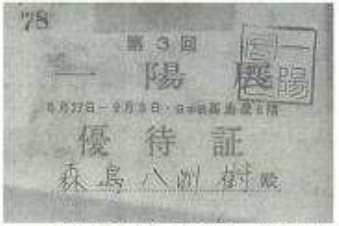
高島屋の前身は、天保二年（一八三一）に初代飯田新七が京都で古着・木綿商を始めたのが起こりで、二代新七、三代新七が木綿呉服商をいとなみ、四代目新七が明治二十一年（一八八八）に家督を相続し、大阪、東京に呉服商の支店を出し後の百貨店の基礎を築いた。明治四十二年に高島屋飯田合名会社となり、呉服を中心に衣類百貨を扱い、大正八年（一九一九）に株式会社高島屋に改組している。

美術界（日本画、西洋画、伝統工芸）との活発な交流、展覧会企画において、高島屋は他を抜きん出てまさに魁の観があるが、その礎を築いたのは、川勝堅一であった。川勝は、自身幅

大正11年に竣工した高島屋大阪長堀店。



高島屋のチラシの裏を使用した、第1回展出品料の領収書（提供　森嶋八洲樹）



第3回展の入場優待券（提供　森嶋八洲樹）

広い美術の愛好家で、絵画、書、工芸、あげくベルシャ絨毯にまで及ぶ収集家であった。この川勝堅一が関東大震災（大正十二年）後の東京店の再建を終えて、大阪の高島屋・長堀店の支配人代理として赴任したのが大正十五年（一九二六）のことで、その三年前（大正十二年）から高岡徳太郎は長堀店の宣伝部に勤めていた。美術に造詣深い川勝との出会いは高岡にとってはまさに僥倖といってよかった。大正十三年の二科会初入選以来、次第に画業への比重を高めていた高岡は昭和六年に高島屋宣伝部を辞して他に移るのだが、高島屋の本業である、服飾流行（ファッション）の基調を作り出す図案部には早くから（大正十年代の初め頃から）、多くの美術家が出入りしていた。京都の本店では、創業者の飯田家との関係が深い竹内栖鳳をはじめ、津田青楓、榊原紫峰、勝田哲、福田翠光なども一時図案部に籍を置いていた。大阪店には黒田重太郎、榊原一広、向井潤吉、福岡青嵐、村岡学柳、宮川長昌がいたし、朝日新聞社主催の全国中等学校野球大会大優勝旗の図案や、歌舞伎座、新橋演舞場の緞帳意匠を描いた森於菟次郎も図案部から出ている。さらに東京店の図案部では、篠原暁霞、桜井霞洞、鰐利彦が意匠の絵筆を執っていた。

さらに、野間仁根が二科会時代以来の高島屋との浅からぬ縁を次のように回想している。

大正から昭和にかけては日本は爛熟期であり、悠長なのどかな時代であった。二科会春季展の記録や目録を散逸してしまって、はっきり思い出せないが、高島屋の会場をうすぼんやり覚えている。年々歳々二科の春季展が高島屋のギャラリーに開花して盛況を極めたのである。

昭和十一年、春とはいえまだ寒く、その日は朝から雪になって、東京はすっかり白銀におおわれた。高島屋での二科春季展の招待日のことである。突如として東京を震撼させた二・二六事件が突発した。二・二六事件の当日のことである。デパートも急いで大戸を閉ざした。私は会場から地下鉄でそうそうに谷中の自宅に引き上げた。

翌昭和十二年には日中戦争が勃発し、九月の二科展には軍用機献納作品室を設けたりしたのだから、高島屋での春季展もそのような空気の中で展観が行われたものに違いなかった。

昭和二十二年は、それまでの春季展ではなくて、大阪の高島屋に於て二科会の本展を東京都美術館に引き続いて開催した。翌昭和二十三年も、春季展は三越で開催し、大阪展を高島屋で開催した。

回顧すると、高島屋での二科春季展がはたした功績は大きく、この長いつながりと幾多の追憶の織りなしが、昭和三十年の、結成第一回展の高島屋での会場につながっていくのである。

（『高島屋美術部五十年史』　昭和三十五年　株式会社高島屋本社）

この第一回一陽展開催の前年（昭和二十九年）の三月から、サンシュマン展GENTI CHEMIN（百の道）というグループ展が、東京、大阪の高島屋で開催されている（以後昭和四十年代後半まで毎年開催されている。このグループ展は、当時の有名画家が超画壇的人選で名を連ねている。そのメンバーは毎年若干の入れ替わりがあるが、注目したいのは、この第一回展の顔ぶれである。

（同人）　向井潤吉、高野三三男、鳥海青児、東郷青児、野間仁根、川口軌外、宮本三郎、林武、猪熊弦一郎、佐藤敬、鈴木信太郎、高畠達四郎、高岡徳太郎。

昭和二十九年三月の時点で、鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎の二科会離脱の思いが表面的になっていたのかどうなのか分からないが、残る方の総帥・東郷青児と離脱してゆく三人が、翌年（昭和三十年）、翌々年の高島屋の会場で、一体どのような交歓を重ねたのか興味深い。

高島屋を会場とした一陽展も第三回展で一応の区切りを迎えた。一般愛好家や報道関係の反応も概ね好評であった。

「三年の努力　一陽会展」

今秋の〝美術のシーズン〟は「青竜社展」「一陽会展」で幕をあけた。美術団体の危機がさけばれ、そのマンネリズムが批判の対象にあげられてきているものの、〝夏枯れ〟のあとをうけて、会場にはかなりの観衆が見受けられる。もっとも、会場はともにデパートだ。最近の傾向だと、上野の山の魅力よりも、都心のデパートの明るい会場で気軽に鑑賞する方が、一般の人たちには有難いようである。

一陽会展は三年目を迎えた。出品者の数もふえ、会場にはぎっしり作品がならんで、公募展らしいふんいきになってきた。〝三年の努力〟のかいがあったというのだろう。しかし、この半面、多忙になった幹部たちは、おそらく会務に追われてきたためか、作品から生気が失われている。鈴木信太郎には長崎の「風景」、野間仁根にはニンフを描いた「海」などがあって、会場のアクセントにはなっているものの、いわば疲れた表現である。美術団体の中心作家の悩みには、このわずらわしい展覧会の雑事が大きな比重をもっている。新人出世の介添役をつとめるのもいいが、本人がくたびれては元も子もなかろう。

ここでは、あらゆるスタイルが微温的な表現で示されている。アンフォルメル（非形式主義）の垂流から、温和な自然描写まで…。しかし、その多くが眠っているようにのどかである。もし、こののどかさを破る仕事を拾うならば、油彩では田辺栄次郎の「抵抗」と彫刻の金田忠あたりか。山崎猛の彫刻「屈折」はダイナミックな骨組をなかなか達者にもりあげているが、あまりにもイタリアの彫刻家ファッチーニの影響が濃すぎるのが残念である。（森）

（「朝日新聞」　昭和三十二年九月二日付）

昭和三十三年、一陽会は第四回展を念願の東京都美術館で開催することになった。

会の創立当初は都美術館への参入はできず、高島屋の協力で、公募団体展の命運ともいえる東京での開催が可能になり、三回展まで開催してきていたが、やはり、団体展のメッカともいえる東京都美術館での展覧会の開催は一陽会にとっては宿願であった。それに、第一回展で新会員二名、会友六名。第二回展で会員三名、会友四名。第三回展で会員一名、会友十三名というように、次第に仲間も増え、それにつれて一般出品者も増加していて、都美術

美の殿堂として偉容を誇った旧東京都美術館（昭和元年開館）。

「一陽会マメ通信」（提供　渡辺喜久緒）

館における会場確保は主上の課題であった。

当然、美術館を管轄する都の関係部署への借館の申請や、新規参入へ向けての働きかけを行っていたし、三回展まで一貫して公募展の形態を貫いた実績の積み上げが奏効したと思われるし、さらに、一陽会にとって幸運だったのは、この年、新たな美術団体の新槐樹社が設立されたり（一月）、日本美術会が社団法人日展に改組される（三月）など、美術団体を取り巻く状況が大きく変化し、それにともない、東京都美術館の会場の拡張工事が終了し、会場貸与の枠の拡大、条件の見直しがこの時機に行われたことであった。

この年（昭和三十三年）の二月から第四回展開催直後の九月まで、会の事務局から会員、会友に宛てて「一陽会マメ通信」（筆者）（註4）が出されていた。昭和五十五（一九八〇）年から発行される「一陽会会報」の前身といっていいものだが、このマメ通信子は、東京都美術館での展覧会開催決定を熱っぽく伝えている。

○都の美術館が改築され、一陽展も、いよいよ美術館に進出の予定でありますから、皆さまも大いに今からガンバッて下さい。恐らく壁画もふえることでしょうから、友人やお知り合いを今のうちからお誘いの上、出来るだけたくさん出品する御用意をして下さい。（第二号　二月二十五日消印）

○三月十七日（月）、東京上野蓬莱園で会員例会が催され、鈴木・野間・高岡・山路・米良・丹下・長谷川・片柳・荻野・中田・伊本の在京会員集合し、一陽会の発展にともなう諸事の打合せを行った。主なる点は、春季展をとりやめ秋季展にその力を結集することとなった。（第三号　三月二十九日消印）

○特報　秋の一陽展は九月二十二日より都美術館と決定。バンザイ（第三号　四月三十日消印）

○会員例会は在京会員参集して五月初旬開催され左の事項を決定した。出品料は従来通り千円。搬入受付は九月十三日（土）・十四日（日）、点数は一人五点迄。尚出品搬入目録その他は出来次第皆さんのところへ送付の予定。

○一陽会東京在住出品者並びに会員・会友の懇親会は五月十日（土）午後五時より上野美術館食堂で盛大に開かれた。近接地区よりも参加総勢七十余名、初夏の夕を愉快に語りあった。

○目下開催中の現代美術展（都美術館）（註5）には、一陽会より鈴木信太郎、野間仁根の両先生が出品し注目をあびている。（第四号　五月二十九日消印）

○会員植木力先生は秋の出品作に六尺大の女人半身像を製作中、その他鈴木、高岡、野間先生始め会員すべて秋にそなえて製作を開始された。（第五号　六月二十八日消印）

○秋の展覧会にそなえて、本部の広報活動が開始されました。去る六月二十四日朝、野間先生がＮＨＫラジオと、ＮＴＶテレビで放送、テレビでは夏の創作について語られました。八月上旬には鈴木信太郎先生にテレビへ出て貰う予定。引き続いて会員の創作情況をカメラにおさめテレビ放送にそなえている。その他、ポスター、立看板などすでに印刷製作中。地方の方にも、大いに広報活動を行って下さい。一人でも多くの支持者が必要です。

○秋の本展は会期会場とも最上、その上会場が広くなりますから新しい出品者をどしどしおくりこんで下さい。名実共に一陽展を最高に盛りあげましょう。

（第六号　七月二十九日消印）

○いよいよ会期がせまりました。全員の御努力をお願いします。

○八月十六日、ＮＴＶより米良先生がサトウハチロー先生と対談、一陽会の大宣伝をしました。

○八月二十五日、一陽会の宣伝カー（註6）は美術館前を出発し、新聞社、テレビ会社などを訪問、当夜及び翌日のテレビ、新聞等に大きく報じられました。

○すでにポスターはあちらこちらにはり出されました。

○鈴木先生はこの程北海道より帰京されました。

○九月一日、上野逸兼閣に在京会員及び会友も一堂に集まり、展覧会に関する協議とそれぞれの部処を定め一段と活動を強化致しました。

○今回は九月一日の例会に関する件を集録したかったので、発行期日がおくれました。御諒承下さい。

（第七号　九月四日消印）

一陽会　会章（バッジ）

（昭和三十三年～三十五年頃）

渡辺　喜久蔵

会の旧バッジは、変形の丸で直径約十五㍉くらいで、取り付けはスクリュウネジである。意匠の地色は銀色で虫の色は明るい空色、虫は現在のマークのように羽根を広げていない。ちょっと見にはホタルのようにも見える。購入時がはっきりしないが、第三回～五回展くらいまでの間である。

私は毎回の展覧会に、このバッジを付けて会場に行った。すると、懇親会の会場などで、野間傳治さんなどからいつもめずらしがられ、昔話のネタとなっている。

＊

「編集後記」（会第五回一陽会美術展覧会目録」昭和三十四年）より

一陽会入選出品者用のバッジができました。銀とコバルト色七宝製で、一個三〇〇円です。出品者の皆様にこのバッジを愛用していただいて会のＰＲをやっていただきたいと思います。このバッジに書いてあるサトリットという言葉は、衛星ということで、一陽に対しての星の意味です。最近何々会衛星展という言葉が流行しはじめましたが、これは一陽会が今としては最初に使った言葉です。衛星という言葉は太陽の一陽会が使ってこそ本当の意義のある名称だと思います。日本中どこの土地に行っても一陽衛星会が光っているように、皆様と手をつないで勉強したいと思います。

（一陽会目録編集部）

「会務記録　バッジの件」（一九六〇／昭和三十五年）より

会員に賞状とともにバッジを贈呈する。（バッジ　約一ヶ四〇〇円）

今回配った人　浅井、棟方、岡本、山田治、国本、中村秀、宮本、鍋、小池、佐野、大石、加藤、今後配布すべき人　市川、熊田、北山、中村亮、荻原、小松、野間傳、大羽、鈴木（信）、鶴田、斎藤、五十嵐、越智、角、上野、柳原、神戸、江川、山崎、猛波羅、大野、井黒、中島、森　約三十名。

（絵画部会員）

念願の東京都美術館での展覧会初日に向かって、次第次第に会をあげて高揚してくる様子が手に取るように分かる。まさに新たなる門出であった。創立会員も新しい会員も会友も八方手を尽くして宣伝・広報に走り回っている様子も分かる。……テレビ、ラジオ、新聞、著名詩人との対談、そして、二科時代の派手な前夜祭を思わせる、車体に大きなキャンバスを設えて絵とアピールを描きこんだ宣伝カーのデモンストレーションという具合である。

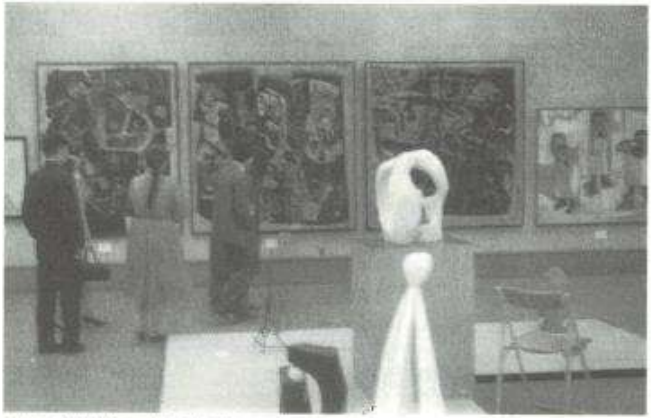
こうして一陽会は、宿願の都美術館での展覧会の開催に漕ぎ着けた。前回までの日本橋高島屋に比べて会場はかなり広くなったものの、一陽会に割り当てられた展示室は四室で、それこそ天井まで一杯の展示を行って、次第に増えてきた仲間や出品者の作品の受け入れに溢々とすることになるのである。こうした団体展への貸与スペースの割り当ては、すべて経年実績が最優先されていた。一陽会は、新制作協会、一水会という先輩の大団体に挟まれて幾分身を竦めるように、しかし意気揚々と公募団体としての歩みをはじめた。

創立会員や、次第に仲間に加わりはじめた会員たちは皆若く、会は活力に溢れていた。

ここで、一陽会が第四回展の開催に漕ぎ着けた、東京都美術館（旧都美術館）のことに触れておかなければならない。

大正十一年、上野の恩賜公園で東京府主催の平和記念東京博覧会が開催された折に、各方面から、仮設ではなく永久設置の美術館の建設を求める要望があがり、美術館建設の機運が高まった。そうした折、福岡県の実業家・佐藤慶太郎が美術館建設の資金として当時の金額で百万円を東京府に寄付をした。合わせて当時の宮内省から用地の貸与を

一陽会の宣伝バス「カッパ天国」。

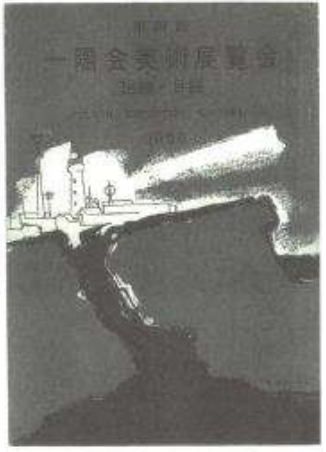


第4回一陽展会場（旧東京都美術館）。（提供　田所満雄）

得た東京府は、これらをもとに美術館の建設に着手した。そうして大正十五年五月、東京府美術館（昭和十八年から東京都）は竣工・開館した。

開館した東京府美術館は、資金の一部を寄付した佐藤慶太郎を顕彰する記念室や若干の収蔵施設をもつものの、その展示スペースのほとんどを団体展の会場として当てていた。フランス、パリのグランパレで開催される各種のサロンが念頭にあったとされているが、ともあれ、開館当初（大正十五年、昭和二年）は十団体（帝展、二科展、日本美術院、日本水彩画会、光風会、白日会、太平洋画会、国画会、春陽会、新構造社会）が利用していたが、一陽会が参入した昭和三十三年には八十三団体、昭和四十年代後半の新都美術館の建設が論議される頃には、二度にわたる増改築の結果、展示面積は約一万七千平方米余に広がり、およそ百団体が、春夏秋冬たえまなく入れ替わり展覧会を開催していた。

旧都美術館の一陽展の会場。



◇彫刻部の発展 ―

一陽会の第一回展の開催以来、彫刻部の展示は常に壁面を埋める絵画とともにあった。展示場全体の雰囲気を、時には絵画と競うように緊張感を高め、また壁面の絵画から視点を転じた鑑賞者の視覚を和ませてきた。壁面を埋める絵画と、鑑賞者が行き来する鑑賞空間に彫刻を同時に設置するという展示方法は、一陽会独特の展示思考としてすでに定着した観があり、一陽展の鑑賞者にとっては、絵画と彫刻を同一の空間で鑑賞できるという、実に効率のいい、しかも日常の生活感覚に近い美術との接点の場となっている。

だが、彫刻専用の展示場の確保がなかなか難しく、ために絵画との同一会場での展示を余儀なくされてきたという面もあり、そのことについての問題提議や提言も会内部で折々になされてきた。このことは、昭和五十年の新東京都美術館開館以降に確保された野外彫刻展示スペースの活用状況とともに項を改めて触れることにしたい。

まず、会創立以来の彫刻部の歩みを見ておかねばならない。

一陽会（この折はまだ一陽会という会の名称はなかった）の彫刻部は、「第一章　一陽会の創立」で触れたように、昭和三十年七月五日の二科会からの退会宣言後に、当時二科会の彫刻部会員の植木力が高岡徳太郎の訪問を受けた時に始まった。重複するが、植木力の当時の回想にもう一度耳を傾けてみたい。

戦後二科になると、東郷青児が彫刻部の審査に口出しし過ぎるようになったので、僕たち若手の彫刻部が集って「彫刻部の独自性を認めろ！」というような建白書を出そうということになっていた……。

昭和三十年の夏、高岡徳太郎氏が鈴木信太郎氏、野間仁根氏と三人で二科を脱けるというニュースは、あの朝新聞で初めて知ったが、それはもう驚いたなんてものじゃなかった。横着して寝床で新聞を拡げたら、写真入り、数段抜きの大きな記事が目に飛びこんだ。思わず僕は台所にいた女房に「おい、二科はもうダメだぞ」とどなったくらいショックは大きかった。

早速、彫刻部の一人から電話があり、「どうする？」と言う。それで、「彫刻部は厄介だから今度は作らないんじゃないか。俺達は次の分裂のとき参加しようや」などと答えたのを覚えている。

ところがすぐ、高岡氏がやってきた。

上野駅飾る二人の絵

高岡徳太郎と植木力の共同作業を伝える報道。

僕が、「随分、思い切ったこと、やりましたね」と言うと、「そう思いますか」といったん言葉を切ってから、「入ってくれますか」と訊かれた。僕は即座に「入りましょう」と答えて、それから高岡氏と二人で彫刻の何人かの家を廻った。

それまで二科を出たいと言っていたのに、いざとなるとガラッと態度が変わった人や、俄かに二科の看板が大事になった人がいて、こういう事態に直面すると、その人の本心が一度に露呈してしまうのが興味深かった。

（植木力「高岡徳太郎を語る」「平地の大木　高岡徳太郎」）

「彫刻部は厄介だから今度は作らないんじゃないか。俺達は次の分裂のとき参加しようや」と思っていたところに高岡徳太郎がやって来て、「入ってくれますか」という高岡の問いに、植木は即座に「入りましょう」と答えてしまった、ま

さにこの瞬間から一陽会の彫刻部は始まったと言っていい。

かつて、東郷青児が高岡徳太郎の練関先を訪ねて戦後の二科会再建への助力を求めたように、高岡は植木力を直に訪ねることで、新しく創設する会の彫刻部門の根幹を獲得し得たことになる。まさに「美術は人なり」、人肌の温もりを大事に伝える日本の画壇独特の風景が見えてくるが、これとても、長年の交友と互いの人格の見極めがあってのことではあった。

植木力は、東京美術学校在学中の昭和十三年に二科会に初入選を果たしている。当時、彫刻部（彫塑も含めて）のあった団体は、新文展、再興日本美術院、太平洋画会、東邦彫塑院、日本美術協会、二科会、自由美術家協会であったが、実質的には、新文展、再興日本美術院、二科会が出品の対象であった。

植木の回想によると、二科展に入選したものの会には知人が居らず、友人の舞台美術家の吉田謙吉に「誰か紹介してくれ」と頼んだところ、高岡徳太郎宛の紹介の名刺を書いてくれた。高岡は当時二科会の中枢作家で、以来あまり会話をする機会はなかったというが、絵画、彫刻のジャンルを越えた作家同士の交流はあったようだ。この出会いより少し後（戦中、昭和十五年頃か）になるが、高岡徳太郎と植木力は、上野駅中央の列車待合ホールに掲揚される五百号の大作の共同制作をしている。植木がリンゴ、馬、雪舟、こけしを彫りこんだ額縁に、高岡が描いた油絵「馬の親仔」を入れるというものだが、二人の共同作業の様子を写真入りで伝える報道記事が残っている。

高岡徳太郎と植木力の、作家同士の緊密な信頼関係を物語る逸話だが、鈴木信太郎、野間仁根と新しい団体の構想を語らった高岡の思案のなかには、迷うことなく当然、植木力の存在と彫刻部創設の考えがあったろうと思われる。

一陽会の彫刻部の草創期のことを辿ってゆく場合、どうしても、彫刻部の創立会員であり、優れたエッセイストでもある植木力の回想に多く耳を傾けなければならない。第一回展の作品公募、作品の審査前後のことを、次のように綴っている。

創立期の彫刻部を支えた植木力（左）と浅野孟府（右）。

野間、鈴木、高岡の三氏は、二科では好きな人だった。だから私が、（三人と）一行を共にしたとき、私の友人知己は当然の動きと思ったようだった。私は、参加する以上、自分を捨てる覚悟であった。で、彫刻部は浅野孟府とたった二人ときまった時も、別に驚かなかった。数年前の二科騒動（註7）で、彫刻部がごっそり抜けた時、穴埋めに動かされた体験があったせいか、極めて楽観的だった。ただ、みんなの居心地のいい、病身のツマでない彫刻部にしたいと、ただそれだけを念じてやってきたつもり。

十五年前の、最初の審査の日を、昨日のことのように覚えている。相棒の浅野孟府現れず、ということは私一人で床をはい廻ったわびしい風景を。

秋の第一陣に受付審査だけ美術館でやってたので、別れた二科の彫刻の諸彼が交替で激励に来てくれた。二科の彫刻部の仲間には、何のうらみつらみのあるわけもないのだ。それと、わが絵画の諸兄が親身にかばってくれたこと、大切にめんどうみてくれたことを有り難く思う。

以来、孟府氏は忽然と現れては消え、作品もまともに届か

ないので、ケシカランと怒る向きもあるが、彼は怠けているのでなく、ねっちり苦闘しているのである。ただ、仕事の進行と時間がズレてるのだと思う。審査二日目にやってきて、「植木さん、あの裸婦は素晴らしいですね」と落選作群の中から、大きいテラコッタを抜き出したりする。半日つきあって、「まだやりかけなので、帰って仕事しますワ」と大阪へ引き上げる。フタを開けて数日たって電話あり、「やっとるんですが、どうにもアカンのですわ、今年はかんべんしてください」。今時珍しい大正ヒューマニズム育ちの作家ではある。（略）

（植木力「同行二人・十五年」『第十五回一陽展』図録　昭和四十四年）

「アクション」「未来派」「マヴォ」「三科」「日本プロレタリア美術家同盟」というように、暗転の時代の向かい風の中を大急ぎで駆け抜けてきた浅野孟府は、この頃（昭和三十年）、日本高校野球連盟の歴代会長の肖像彫刻制作に忙殺されていた。記録では、第一回一陽展に、広島の原爆被災をテーマにした「八月六日」を出品している。

第一回展で、伊本淳。第二回展で中村輝を会員に迎えた。さらに、第三回展開催前までに会友に推挙された、根本勲、名塚樹也、金田忠、水野清、綿引淳人を加えて、総勢九名となった。

第三回展の彫刻の展示を、植木は幾分誇らしげに見渡している。

「一陽会も三回展で面目一新、見違える程よくなった。全くおどろいたよ」。これは身びいきのほめ言葉でなく、二科の旧友や方面違いの知人の讃辞で、私もニヤニヤ有り難くいただいた。都会的センスより、田舎侍のどろ臭いゲテ趣味の底流するのも認めるが、兎も角、野間、鈴木、高岡三先輩のあたたかい人間味がこの会の魅力だと思う。三枚看板の比重にもたれかかっているきらいがあるが、あわてなくても続々素晴

一陽会の彫刻は常に絵画と一緒の空間に展示された（旧東京都美術館）。

らしい新人が立派なのぼりを立ててくれるものと楽観している。

三回展で嬉しかったのは、沢田正太郎と彫刻の金田忠が共に一陽賞をとり、会友に推薦されたことだ。一陽会が掘り出して育てたユニークな作家として誇りに思っている。

一陽会の彫刻部は貧弱な会員四人と僅かな出品者諸君との編成で、此かの自惚れももってはいないが、毎年若い出品者諸君にドキリとさせられているから、追いつ追われつ、そのうち何とか格好がつくと思っている。

（槌木力「一陽会日誌」『新国華』昭和三十二年十月号）

さらに米良道博が、彫刻の新人の作品に対して、まんざら「身びいき」とばかりは言い切れない感嘆の声を上げている。

彫刻の綿引淳人の「女」は正に場中の至宝であるが此んなすばらしい作家が無名のまま現存して居る事こそ、ほほ笑ましいし、同時に何時の世の中にも盲目千人と言う言葉が通用するとも言える。

〔米良道博「第三回一陽展評」『新国華』　昭和三十二年十月号〕

一陽会に限らず公募美術団体は一様に、画一に堕でしきられた展示スペースを前にして、おそらくその容量を倍加する膨大な作品を抱えて敢然と格闘を繰り返してきた。それは、まさに格闘と言いたくなるほど腕力と創意工夫のバランスを必要とすることだった。この、植木力と米良道博の、小さな個の創意への驚きに聞き入っているうちに、いつか、何かが入れ違ってしまった、と思えてくる。それは新旧を問わず東京都美術館を舞台に繰り広げられてきた。……効率よく会場を貸与し、一点でも多く能率よく展示する機能性と、本来は感動との出会いの場としての展覧会場を、みんなが求めているということとの相関関係においてである。

このことは一陽会のなかで、一陽会の歩みを辿ってゆくなかで考えてゆかなければならない。絵画も、そして彫刻の場合も……。

この創作と展示の問題は、後の章でも改めて考えてゆかなければならないが、一陽会の彫刻部の軌跡を辿ってゆくにあたって、その背景としての、日本の戦後の彫刻事情を見ておきたい。

戦後の近代彫刻の招来は、絵画に比べてかなり遅れて昭和三十年代のはじめから本格化した。その主なものを拾ってゆくと、昭和三十一年巨匠ブルデル彫刻絵画展（ブリヂストン美術館）が開催され、また昭和二十六年から隔年開催された日本国際美術展（東京都美術館）の第三回展（昭和三十年）、第四回展（昭和三十二年）にペリクレ・ファッチーニ、エミリオ・グレコなどイタリアの現代彫刻家の作品が出品され、第三回展に出品されたファッチーニの作品に対して外国部門最高賞（外務大臣賞）が与えられて大きい話題となった。さらに第五回展（昭和三十四年）に出品したイギリスの作家ヘンリー・ムアに同じく外国部門最高賞が与えられ、第七回展（昭和三十八年）にイギリスの現代彫刻が特別展示され、その内バーバラ・ヘップワースにたいして外務大臣賞が与えられた。

昭和三十六年にイタリア現代彫刻展（高島屋）、翌三十七年にチャドウィック、アーミテージ彫刻展（神奈川県立近代美術館）が開催された。リン・チャドウィック、ケネス・アーミテージはともにイギリス人で、チャドウィックは一九五六年（昭和三十一年）のヴェネチア・ビエンナーレ彫刻部門でグランプリ受賞、アーミテージは五八年（昭和三十三年）のヴェネチア・ビエンナーレ彫刻部門で新人賞を受賞した作家であり、世界の最先端で活躍する作家と作品が即時に招来されはじめていた。

昭和三十八年には、世界近代彫刻　日本シンポジウム（神奈川県真鶴海岸）、現代日本彫刻展（宇部市常盤公園　第一回展は「全国彫刻コンクール」と名称。神戸市須磨離宮公園で開催される具象系の彫刻展と隔年ごとに交互に開催）が開催され、海外からの招待作家とともに、日本国内の作家が国際的な舞台に登場してくるのは、この頃からのことであった。このシンポジウムという制作展示・顕彰の方法は、一九五〇年代後半頃からヨーロッパを中心に盛んに行われるようになった。作家が開催現地に集合し制作・展示を行うという、輸送に困難な彫刻の難点を逆手にとった方策は、作家の交流、芸術の交流をいっそう活発にした。

こうしたことが、一陽会彫刻部発展の背景であった。

◇地方別ブロックの確立 ―

東京都美術館での展覧会の開催が実現して、一陽会は公募美術団体としての体裁を名実ともにととのえたが、会場の借用面積においては当分画期的な改善の可能性は無く、畢竟、展示方法の工夫を余儀なくされている。このことは一陽会だけに限られたことではないが、回を追う毎に新しい仲間を迎え、活動の輪を広げている一陽会としては、こうした中央での頭塞状態を早期に打開する必要があった。

その有効な方策として、各地方のそれぞれの当地出身の会員を中心とした、ご当地の展覧会活動、つまり、各地方ブロックの活発な活動を中央が積極的に奨励し、支援してゆく方針を、創立会員の世代が早期に打ち出している。いまだ各地方ごとの活動歴と練度の差異はあるものの、この地方ブロックの一層の拡充が、一陽会の新たなる可能性を開くことになる筈である。

【関西支部の開設】

＊（関西支部の展覧会・活動記録は筆末にまとめて掲載）

一陽展は東京日本橋高島屋、大阪高島屋での展覧会開催を嚆矢として、公募美術団体の歩みを進めて来た。この東京、大阪での本展開催は一貫して変わらず、昭和三十年の第一回展から現在まで、関西全域の要として大阪で一陽展を開催してきた。

その開催会場を辿ると以下の通りである。

第一回展から昭和四十二年・第十三回展までが大阪高島屋。

昭和四十三年・第十四回展が大阪丸善画廊（会員展として開催）。

昭和四十四年・第十五回展が大阪市立美術館。

昭和四十五年・第十六回展から昭和五十年・第二十一回展が大阪天王寺美術館。

昭和五十一年・第二十二回展から大阪市立美術館（平成四年から新設の地下の団体専用展示場を使用）。

関西地区グループの動向としては、昭和三十年の第一回展（大阪展）の開催直後から大阪周辺の出品作家を中心に次第にグループとしての纏まりができていった。昭和三十三年には関西一陽展（兵庫県民会館、奈良文化会館、兵庫県民アートギャラリーなどで開催）が公募展形式で始まり、本展の大阪開催展とともに関西地区グループの大きい柱として、次代を担い得る若手作家の発掘と作品の質的向上をめざして活動している。

関西地区グループの組織面での大きな特徴としては、本展の大阪開催の折や、関西一陽展の指導のために常時東京本展から委員、会員が大阪を訪れていて、その活発な人的交流が挙げられる。そしてその地環の輪が広がり、次第に確りとした支部グループの組織が形成されていった。

昭和五十五年の支部会議で決められた、佐野儀雄事務所（昭和六十一年度に交替）を中心とした、土井稔、吉田英智、大石可久也、卿和男（一郎）、中澤蓉子、田崎徹、島本芳伸、そして土師修、川辺嘉章、古川晶弘、橋本紀夫、水谷喜美子、田中繁雄、藤

第3回一陽展（大阪展）の懇親会（10月12日　於・広田屋旅館）。（提供　中澤蓉子）

本元美、福家省造、上田春雄、宮口観、三阪雅彦、北村吉郎、奥谷卓則、古曽成樹、阿十玄蔵、石塚博、渡辺勝彦、佐藤知臣、永田啓子、上田純子、丹後香子、高孝壬津子、奥村佳弘、国見縫子、佐伯武彦らが広域に渡る関西支部の活動を支えてきた。

関西支部の傘下に在って各地区別に活動しているグループを、記録に現れる順に見てゆくと次の通りである（初出のみ取拾）。開催年月日、出品作家などは、巻末の記録（関西支部の記録）を参照されたい。

・一陽会京都展（昭和五十五年三月）　・一陽会関西作家小品展（西宮市　昭和五十五年四月）　・一陽会関西作家展（洲本市　昭和五十五年五月）　・一陽会豊岡グループ展（豊岡市　昭和五十五年七月）　・一陽会はりまグループ展（姫路市　昭和五十五年十一月）　・一陽会関西作家小品展（神戸市　昭和五十五年十二月）　・一陽会関西作家展（西宮市　昭和五十六年四月）　・関西一陽会新鋭展（大阪府　昭和五十六年六月）　・関西一陽会選抜展（大阪市　昭和五十七年五月）　・一陽会関西作家展（京都市　昭和五十七年十一月）　・関西一陽会版画展（大阪市　昭和六十年四月）　・一陽会神戸作家展（昭和六十二年七月）　・一陽会広島グループ展（平成二年三月）　・一陽会中国・四国作家展（広島市　平成三年四月）　・1995一陽会愛媛広島作家展（松山市　平成四年十二月）。

一陽会関西クラブ

（昭和三十年〜三十二年）

昭和三十年の一陽会の発足、第一回展の開催以来、東京で立ち上がった一陽展（本展）は今日まで欠かすことなく大阪に巡回されて、大阪展（本展）は、東京展と並ぶ一陽会のメインイヴェントとして毎年開催されてきた。この大阪展の開催をはじめ、広範な関西各地域の活動の母胎となってきたのが関西支部であるが、この支部としてのまとまりが顕在化するのは、昭和三十三年の第一回関西一陽展の開催以前、つまり、昭和三十年から三十二年にかけて、この地域の一陽会の作家の拠りどころとして活動していたのが「一陽会関西クラブ」（当初は関西一陽クラブと呼称）であった。後の関西支部の前身というべきものであるが、当時配布されていた『クラブニュース』（謄写版刷B4判　一九五七年九月号）からは、発足して間もない団体展の若い気概と熱気が、B4の紙面にいまだ冷め遣らずに横溢している。以下抄出してみる。

《秋の遠足　十月六日（日）　南海岸公園自然動物園／研究所　夏休み中だった研究所は十月十三日（日）午後二時より毎日曜再開します。「旧文楽座前、心斎橋ドレメ女学院階上」　クラブ員は従来通り無料故精々御利用下さい。同外来者は四回分二〇〇円に改定しました。――研究所（会計）白石、（事務）村尾、斉藤／大阪本展　今年は大阪が最後になって十二月上旬に開催、クラブで万端やるつもりですので極力御協力願います。／荻野康児先生個展　九月二十四日〜二十九日　於高島屋六階／会費納入について　クラブも皆様の絶大な御協力のおかげで公募関西展を考え得るまでに発展して参りました。いよいよ積極的に活動を要する時期に当たって会費の納入を遅滞なくお願い致します。あなたの会費は一陽勢を強化します。十月末に会費未納者を退会として整理します故よろしくお願い致します。

九月二十三日　幹事総会の結果（出席者十九名）／名称　従来の「関西一陽クラブ」を「一陽会関西クラブ」と改称／顧問　飯田慶三氏を顧問に推挙（計四名　＊浅野孟府、荻野康児、末長道馬、飯田慶三）／委員　小出泰弘、村尾克巳氏を運営委員に推挙（計五名）／幹事　新入選者を迎えて幹事は二十四名となる。／幹事会費　研究所維持などの為幹事会費を年間二二〇〇円に改定。《クラブ員は従来通り年間一〇〇〇円》／クラブ事務　（会計）森島史一、（事務）亀井広栄、森嶋八洲樹／クラブ展　春シーズンのトップに天王寺美術館（＊大阪市立美術館）で公募展として開催すべく準備を進めます。関西での一陽勢の名にかけて今から力作をお願いします。／クラブ員募集　この際クラブ員を増員します故御知友の御をかく人、美術愛好家のよい方をどしどし御推挙願います。

◇一陽会関西クラブ　（事務所）大阪府泉佐野市上町　森島アトリエ内　（以降佐野第一六七日　イロナシ）

（五十年史編集室）

【北陸支部の開設】

＊（北陸支部の展覧会・活動記録は巻末にまとめて掲載）

北陸支部は、福井、石川、富山の、北陸三県にまたがる広域を対象に、在住、もしくは出身の会員、会友を中心に、さらに一陽展の出品者が加わって、相互交流と、研究会と展覧会を通して有意義な創作活動をしていくことを目的に活動を行っている。

「北陸支部」の始まりは、第二回一陽展（昭和三十一年）に石川県在住の国本克己（当時二紀会在籍）が入選し（昭和三十三年に会友推挙）、さらに、同じく二紀会に出品していた田辺栄次郎が第三回一陽展（昭和三十二年）に入選した（同年に会友推挙）ことに始まる。当時、田辺は地元の中学校の美術教師で、ヨーロッパ遊学から帰朝したばかりで新しい美術の道を模索していた。この田辺の誘いで中村秀雄も第三回一陽展に出品した。

田辺の回想（第五章「◆高岡徳太郎の逝去」所収「思い出は今も息づく」参照）によると、第三回展の開催前に、突然高岡徳太郎が田辺を訪ね、北陸地方に一陽会の拠りどころを築いてゆきたいので協力して欲しい旨の熱心な要請があった。田辺は早速、国本、中村と計らって、一陽展（本展）招致のための手配、準備をはじめた。

こうして、田辺栄次郎、国本克己、中村秀雄らの奔走の甲斐あって、第三回一陽展（本展）の石川県金沢市への巡回、開催が実現した。当時は、中央の著名な美術団体展が北陸地方に巡回することは稀で、この一陽展の開催実現は、こと一陽展の出品者だけではなく、地元の美術家、一般愛好家に与えた影響・刺激は甚だ大きかった。

この金沢での一陽展の開催を機会に、田辺栄次郎らが中心となって北陸三県の一陽展出品者が語らって、まず「北国一陽会」が結成された。以後、石川一陽会の具体的な始動も、そして北陸三県に広がって、一陽会北陸支部の活動もここから始まった。

昭和三十二年の第三回展から昭和三十四年の第五回展まで、一陽展（本展）が金沢に巡回開催されて、地元の美術界全体に大きな影響を与えたが、この、東京の本展を三年連続して金沢に誘致した田辺ら地元一陽会グループの意気はすこぶる軒昂で、昭和三十三年の一月から十二ヶ月連続して「北国一陽会展」を開催するなど、地元でも大いに話題となった。この連続の展覧会に出品した顔触れは、金沢在住の作家を中心に、田辺栄次郎、国本克己、大宮弘、中村秀雄、美谷順一、三輪孝一、伊藤吉太郎、島田徳三、宮本清、野島武司、表義孝、瀧川昭三、

芸術の香りあふれて

一陽展 全作品の飾り付け終る

第4回一陽展（金沢展）の展示の様子を伝える報道。

創立30周年 一陽展金沢展が開幕

迫力あふれる個性美

県立美術館 地元、選抜の105点

第30回記念一陽展（於：石川県立美術館）の初日。

土生誠恵、千田拓、臼井修、木越太美夫などである。

「石川グループ」「福井グループ」「富山グループ」の活動を統括する北陸支部の礎が確立されてくるのは、関西支部とほぼ同時期の昭和五十四年頃からで、この頃の支部の活動を担った人々が、北陸支部の気風を今日に伝えている。前出との重複を避けて列挙すると、大場吉美、酒井幸雄、判三教、山内芙宏、本村良枝、和泉洸、番匠建次、野中末知子、今美男、浮田正樹、古曽成樹などの人々である。

「文化の谷間」といわれた県へも最近相次いで美術展が誘致され、昨年（昭和三十三年）来の一水展、一陽展、今月はじめの行動展を数えている。行動展はことしがはじめてだが、一水展と一陽展は二回目、この五月には、光風展を、という計画もあるから地元の美術ファンには喜ばしい限りだが、美術観賞層は県下で（といってもほとんど金沢中心だが）ざっと三千ないし三千五百人と推定され、このうち展覧会に常時動員できる熱心なファン層はせいぜい二千人ぐらいだから、中央から美術展を誘致するといっても主催者側は必ず採算割れを覚悟しなければならない。まして戦前の官尊民卑がたって多分に事大主義的な県民性から、画家といえば日展系がもてはやされ、いわゆる「アカデミックな絵」に対しては作品の良し悪しを抜きにして賛辞を呈するのが多いので、現在ですら前衛派や在野団体はヒヤメシを食っているのが現状である。地元画壇

「加能各界A級ライン洋画壇」（昭和三十四年）

といっても正面なところ中央審査員のヒキでつくられているのが多く、団体の中にはそれにからむ感情的対立がないでもない。師弟関係、親分子分の縁は何も画壇独自のものではないといってしまえばそれまでだが…。

在野の一陽会系作家は最近金沢支部（全国支部）を結成、田辺栄次郎氏を支部長に（国本克己、中村秀雄、美谷順一、三輪孝一、臼井修、洲崎謹四郎らニ十六氏、田辺は北陸二紀会の創始者だったが、その後会の運営指導に不満もあって脱会、渡欧を契機に一陽会へ参加した。金沢支部が七人の運営委員で民主的に運営されているのもそのときの苦労だと思われる。一陽会に大量の入選者を出すなど目ざましい活躍ぶりで作風は非具象、豊じゅんな心象風景を表現している。ここでは中村、臼井がホープ。…

（『北陸毎日新聞』（北陸版）昭和三十五年二月二十四日）

【中部支部の開設】　＊（中部支部の展覧会・活動記録は巻末にまとめて掲載）

一陽会本展（東京展）の名古屋での開催は、創立会員の高岡徳太郎の尽力で計画され、さらに植木力（彫刻部）の指導を得て、昭和三十六年に名鉄百貨店において第七回一陽展の開催が実現した。以後毎年、東京、大阪と並んで名古屋の名鉄百貨店で本展を開催してきたのだが、平成元年の第三十五回展を最後に、名鉄百貨店での本展開催に幕を閉じた。例年、名鉄百貨店での展覧会開催日には諸々の広報イヴェント（註8）を百貨店と共同企画して行い、数々の話題を呼んだ。

第20回記念一陽展（名古屋展）のポスター。

創立25周年記念一陽展（名古屋）のポスター。

中部地区グループの独自の動きとしては、昭和三十三年に一陽会中部グループが発足した。後藤泰洋（絵画、鰐悦三（彫刻）に、第二回展入選の三輪乙彦、第三回入選の浅井一介、久保田正剛が加わりグループの骨格が出来た。昭和三十三年（六月二十四日～二十九日）に名古屋市内、栄町の文天堂画廊で第一回のグループ

第30回一陽展（名古屋・名鉄百貨店）会場。

展が開催された。出品作家は、後藤泰洋、郷悦三、三輪乙彦、浅井一介、久保田正剛、高橋勝。賛助出品は長谷川三千春、植木力。応援出品は彦根の中嶋正治であった。

第四回グループ展に大羽哲郎。第五回展に宿澤浩。その後市川裕康、多治見雅昭と本展入選者が続々グループに加わった。そして昭和三十八年には、公募形式による第一回中部一陽展の開催に漕ぎつけた（出品者六十九名、絵画・彫刻合わせて百十点の展示）。こうして、中部一陽会グループはいっそう活況を呈した。以後、愛知、岐阜、三重、静岡県在住の会員、会友、一般出品者で一陽会中部支部（初代支部長　久保田正剛）が構成されている。

中部一陽展は、昭和四十九年から名古屋を中心とした「中部グループ」と「浜松グループ」（昭和五十年、第一回グループ展）が別個に毎年春季展を開催するようになり、また岐阜（大垣中心）でも「岐阜グループ」（昭和四十九年、第一回グループ展）が独自のグループ展を開催し、秋には一陽会本展の開催に総力を傾けるという活動を続けている。

昭和五十三年一月、支部内での連帯意識を高め、相互の創作意欲の高揚をめざして「中部一陽会報」（註9）が発刊され

第35回一陽展（名古屋・名鉄百貨店）会場。名鉄での最終回。

名鉄店頭での公開制作（第29回展）。

一陽展（名古屋展）の宣伝バス。

一陽展初日の街頭デモンストレーション（第33回展）

野間仁根の名鉄店舗での制作（第15回展）。

第39回中部一陽展会場（於・愛知県美術館）

た。

作品制作過程の中で起こる疑問点や、技術面での指導が受けられる場所が欲しいという要望に答えて、昭和六十二年から「名古屋グループ研究会」が行われている。公共の会議室等の施設を借用し、三輪乙彦（彫刻部委員、当時）と、河井一郎（絵画部会員、当時）を講師として、月一回研究会が開催されている。本展（東京展）や中部一陽展への出品作のエスキース小品、水彩などを持ち寄って合評会を行い、さらに展覧会評、作家論など、各自の身近な問題から相互の理解と、意思疎通を深めることを目的としている。また、教本として後藤泰洋会員（平成十三年退会）が発行した研究会報に、講習内容や研究報告が掲載され、支部内に広く配布されて、多くの参加者耕合に大きな役割を果たした。

またこの研究会には、小池郁男（彫刻部常任委員）をはじめ中部地区の会員も指導に加わっている。

「充実した新人群　第3回中部一陽展」（昭和四十年）

一陽会中部グループ展（昭和三十二年）のポスター　第十回中部一陽展会場（於・愛知県美術館）

一陽会が二科会から分かれて出発したのは昭和三十年、その歴史はけっして長いほうではない。名古屋地方での活動も、あまり目だつものではなかったが、昨年の第十回展（全国展）あたりから、にわかに精彩をはなつようになった。その最大の原因は新人群の意欲が、たんに意欲として空転する段階を終わり、実力となって作品に反映するようになったためであろう。その層も、かなり厚く、それがこんどの中部地区展（二十五日まで、愛知県美術館）の会場を見ごたえあるものとしている。

油絵では浅井一介、大羽梧郎、清田英作あたりが中心。それぞれ特色ある画風となっていたが、それ以上に興味をひいたのは宿澤浩、市川裕康、安田一彦、久保田正剛らであった。表現形式はさまざまだが、いずれも新鮮な体臭を感じさせてくれた。山本博子、水野いさ子、河井一郎、山田治、前田金光、桑原隆一らも、かいっぱいに仕事をしている印象であった。

彫刻では加藤博二が石、三輪乙彦がブロンズで、ともに球形の世界を構築し、存在への確証を試みていた。郷悦三は鉄骨とパイプによって、これまた現代の人間像を探究している感じであった。大西隆司、武井英男の女性像が、対照的なフォルムで効果をあげているのもおもしろかった。（高橋）（「福日新聞」（中部版）昭和四十年十月）

註1　「福島繁太郎」――（明治二八・一八九五～昭和三五・一九六〇）美術評論家、収集家。東京帝国大学政治学科を卒業後渡英。後にフランスに移り、モネ、マティス、ピカソらと交友し、その作品を収集し福島コレクションを残す。昭和三年にパリで美術雑誌「フォルム」を創刊。昭和九年に帰国し、戦後は東京銀座でフォルム画廊を経営する。代表的な著書として『印象派時代』『エコール・ド・パリ』がある。

註2　「瀬木慎一」――（昭和三・一九二八～）昭和二十八年頃から美術評論の筆を執る。西欧、日本を問わず幅広い評論活動を行う。現代日本美術展、秀作美術展などの審査に携わり、多摩美術大学、和光大学などで教鞭を執る。代表的な著書として『抽象芸術論』『江戸美術の再発見』などがある。

註3　「土方定一」――（明治三七・一九〇四～昭和五五・一九八〇）美術評論家、美術史家。水戸高校から東京帝国大学に進むが、水戸高校時代から詩作活動を行ない、後に『歴程』創刊同人に加わる。ドイツ留学後、昭和十年頃から美術評論を手がけ、昭和二十六年の神奈川県立近代美術館の開館とともに副館長に就任（昭和四十年館長就任）。以後多年にわたって近現代美術の振興に携わる。多くの著者があるが、『土方定一著作集』（全十二）に集大成される。

註4　「一陽会ヌメ通信」――昭和三十三年二月から九月までの予年間余、一陽会事務局から会員、会友に宛てて、主に会務事項の通信として葉書に印刷して出された。毎月二十五日発行。会員の個展の情報、支部の情報などを伝達する目的があったようだが、昭和三十三年は東京都美術館での展覧会初年にあたったこともあって、報告の多くが都美術館での展覧会準備事項などの伝達に当てられている。発信者は「東京都中央区銀座東一の十一　オリオン社内　一陽会ヌメ通信部」（提供・渡辺喜久蔵）

註5　「現代美術展」――第三回現代日本美術展（五月十五日～六月二日　東京都美術館）。各美術団体、会派を横断して人選、招待し出品を依頼した展覧会で、文字通り当代日本画壇を代表する作家を募った。毎日新聞社が主催したことから「毎日現代展」と通称された。鳥海青児「ピカドール」、岡田謙三「元禄」など。

註6　「一陽会宣伝カー」――（車の横っ腹にカンバス、美術の秋に宣伝戦、二十九日、東京上野の都美術館前では美術団体の一陽会の会員が、宣伝カーの横っ腹にカンバスをかけ、雪せ描きの筆をふるった。これで都内を練り歩き、展覧会シーズンにお客をたくさん集めようという。いくぶん茶目っ気の方が勝ったアイデア。現王格の野間仁根画伯ら約十人がワイワイはしゃぎながら「カッパ天国」と題する"名画"を描き続けるかたわらでは早くも展覧会の大看板が何枚も立ちはじめて、美術の秋、を告げていた。）（読売新聞　昭和三十四年八月三十日夕刊）

註7　「数年前の二科騒動」――昭和二十一年、二科会の戦後の立ち上がりに際して、彫刻部の渡辺義知、松村外次郎、絵画部の名井万亀らが「二科会は官展絶対不参加の在野精神を貫くべきである」と唱えて、官展の立ち上げに加わろうとする東郷青児をはじめとする大多数にたいして、「二科会を名乗る資格はなく、自分たちこそ正統二科である」と主張し、その首を報道機関を通じて公的に声明を出した。二科会はこの三人を除名処分とし、昭和二十一年九月一日の戦後最初の二科展は、同時に二つの二科展が並行するという事態となった。これが「正統二科」「ふたつの二科展」騒動のいきさつであるが、この折、笹沢季男を除く彫刻部の会員がこぞって渡辺と行動をともにした。

註8　「名鉄百貨店でのイヴェント」――名古屋名鉄百貨店における一陽展の開催は、昭和三十六年の第七回展から平成元年の第三十五回展まで、足掛け二十九年間に及んだ。中部地区における一陽会の伸張、発展はもとより、一陽会全体の発展の上でも大きな実績となった。そして、展覧会初日（毎年十一月）の百貨店店頭における開催作は、師走の近づく名古屋の風物詩となっていた。即興で制作された作品パネルや大帆は公的施設に寄贈されたりしたが、また、チャリティー額布会が会場でも催された。この、百貨店と一陽会の共同企画で行われたイヴェントには、東京から展覧会初日に駆けつけた、勝一晃、北山泰斗、五十嵐一朗、櫛渕修次らと、中部支部の有為の作

家が携わった。

註9
「中部一陽会報」――B4判二つ折・手書き簡易印刷。昭和五十三年一月から、中部支部に所属する会員、会友、出品者に配布している。一陽展（本展）が巡回開催（於名古屋名鉄百貨店）されていた平成元年までは、巡回一陽展と中部一陽展の報告、平成二年以降は中部一陽展の報告と支部内の情報交換、伝達に活用されている。
《：われわれ作家は質としてのプロの絵を目標にしなければならない。同じ懇親会場でK委員が名古屋の会場をマイナスにしているのは中部作家の作品であるというきびしい指摘があったが、これこそ、プロとして質の高い作品を描けというはげましと受けとりたい。かつては中部の絵はドロくさいといわれた。では、今はどうか。どうも一陽会パターンのスタイルだけにしばられていると思うがどうか。
今や地方の時代という。このあたりで、東京中心に果たし状をつきつける位の強烈な仕事をみせたいものである。中部作家の中にも一陽賞受賞者が二人もいるではないか。目先にとらわれない、もっともっとスケールの大きい仕事がしたいものである。かつてこんな絵が存在しただろうかという仕事がやりたい。まさに実現なる未完成である》（第二十一号　昭和五十九年十二月一日刊　欄外書き込みより）

第3章 高度成長期の一陽会

【第十回展・昭和三十九年～第十九回展・昭和四十八年】

野間仁根（左手前）の主導で審査は快調に進む（昭和40年頃）

第3章　高度成長期の一陽会

第十回展（昭和三十九年・一九六四年）～第十九回展（昭和四十八年・一九七三年）

一陽展（東京本展）及び会員・会友推挙　授賞の記録

昭和三十九年（一九六四）

第十回展覧会——（九月二十二日～十月十日　東京都美術館）

オリンピック協賛

（会員推挙）鶴田猛、大石可久也、峯岸義太、山田首、小林丙、中村秀雄（以上絵画）、加藤博二、山崎猛（以上彫刻）。

（会友推挙）浅井一介、大羽梧郎、佐野儀雄、松本幸治郎、柳原謙三、村尾克巳、山田治、大塚伊次、中村亮一郎、鈴木国威（以上絵画）、小池郁男、蜜波羅伸三、石黒功、石原照治（以上彫刻）。

（受賞者）◎**会友賞**　市川勉（絵画）、郷悦三（彫刻）　◎**一陽賞**　益子昭雄（絵画）、小池郁男（彫刻）　◎**青麦賞**　山田忠（絵画）、丸山映（彫刻）　◎**ひまわり賞**　吉村外人（絵画）、蜜波羅ゆを（彫刻）　◎**特待賞**　宇野富美代、野島久世喜、熊田藤作、渡部貞、畦田ミツ子、園田剛夫、中澤春子、清田英作、今村春吉、飯田庸夫（以上絵画）、今井田一巳、佐々木英夫、飯島健、宮脇経行、小林国夫（彫刻）。

◇名古屋・名鉄百貨店（十月）、大阪・高島屋（十一月）で開催。

＊六月、会友・村尾克巳（絵画）逝去。

＊九月、会員・福士勝男（彫刻）逝去。

第十一回展覧会——（九月二十二日～十月十日　東京都美術館）

（会員推挙）月見里シゲル、北山泰斗、鈴木力、岡本耕典、浅井一介、大羽梧郎（以上絵画）、横沢英一（彫刻）。

昭和四十年（一九六五）

第十二回展覧会——（九月二十二日～十月十日　東京都美術館）

（会員推挙）郷悦三、森川正之（以上彫刻）。

（会友推挙）神門四郎、都慧子、江川光信、清田英作、後藤泰洋、丹治伊三郎（以上絵画）、丸山映、高嶋文彦、六崎敏光（以上彫刻）。

（受賞者）◎**一陽賞**　鶴田室子（絵画）、丸山映（彫刻）　◎**青麦賞**　長谷川忠男（絵画）、松本基（彫刻）　◎**会友賞**　角美貴子、栗原和美、佐野儀雄（以上絵画）　◎**特待賞**　野中未知子、安藤節雄、斎藤富蔵、平口幸枝、大場吉美（以上絵画）、関口昌孝、高橋勝、宮田淑子（以上彫刻）。

◇名古屋・名鉄百貨店と新潟・BSN新潟美術館（十月）、大阪・高島屋（十一月）で開催。

・九月五日、一陽会事務所会議室において緊急総会を開催し、第

昭和四十一年（一九六六）

（会友推挙）熊田藤作、益子昭雄、小松久子、吉村外人、中澤春子、永井芳永、今村春吉、葛西康、森嶋八州樹、飯田庸夫（以上絵画）、桜井克也、三輪乙彦（以上彫刻）。

（受賞者）◎**一陽賞**　萩原宗晃（絵画）、高嶋文彦（彫刻）　◎**青麦賞**　野間博治（絵画）　◎**会友賞**　与儀達治（絵画）、蜜波羅伸三（彫刻）　◎**特待賞**　菊池豊、鶴田室子、細堂省三、平口幸枝、後藤泰洋、若林三郎、野島久世喜、清田英作、湯浅豊子、伊藤博二、清水源太郎（以上絵画）、関口昌孝、小林国夫（以上彫刻）。

◇名古屋・名鉄百貨店（十月）、大阪・高島屋（十一月）で開催。

＊会友・土井要輔（彫刻）退会。

第十三回展覧会——（九月二十二日～十月十日　東京都美術館）

（会員推挙）郷悦三、森川正之（以上彫刻）。

（会友推挙）神門四郎、都慧子、江川光信、清田英作、後藤泰洋、丹治伊三郎（以上絵画）、丸山映、高嶋文彦、六崎敏光（以上彫刻）。

（受賞者）◎**一陽賞**　鶴田室子（絵画）、丸山映（彫刻）　◎**青麦賞**　長谷川忠男（絵画）、松本基（彫刻）　◎**会友賞**　角美貴子、栗原和美、佐野儀雄（以上絵画）　◎**特待賞**　野中未知子、安藤節雄、斎藤富蔵、平口幸枝、大場吉美（以上絵画）、関口昌孝、高橋勝、宮田淑子（以上彫刻）。

◇名古屋・名鉄百貨店と新潟・BSN新潟美術館（十月）、大阪・高島屋（十一月）で開催。

・九月五日、一陽会事務所会議室において緊急総会を開催し、第

再出発

十三回展を、よりよき展覧会として盛大に開催するため、出席会員の総意により一応解散の決議を採択。その後協議の結果、次のメンバーの組織により、新たに出発することとなった。

新会員メンバー

〈絵画部〉浅井一介、長谷川三千春、堀内千里、萩原英一、飯田慶三、片柳忠男、小出泰弘、岡本経典、勝一晃、北山泰斗、米良道博、森由太郎、楠方寅雄、松下明治、村上英男、峯岸義太、野間仁根、野間佳子、中村秀雄、萩野康児、小川哲郎、小野竹郎、大石可久也、国本克己、大羽悟郎、鈴木信太郎、指田由米、沢田正太郎、鈴木力、高岡徳太郎、田辺栄次郎、田所満雄、鶴田猛、月見里シゲル、上田春雄、山路真護、山谷謙一、八重垣逸郎、山田首。

〈彫刻部〉浅野孟府、伊本淳、金田忠、加藤博二、宮川和博、中村輝、根本熱、柳山勝、植本力、山崎猛、横沢英一、郷悦三、森川正之。

第十三回展覧会――（九月二十二日～十月十日　東京都美術館）

〔会員推挙〕斎藤光子、五十嵐一朗、山田治、越智映介（以上絵画）、蜜波羅伸三、小池郁夫、大野春代（以上彫刻）。

〔会友推挙〕野間傳治、對島久世喜、宇野冨美代、長谷川忠男、荻原宗晃、頼田寛子（以上絵画）、渋谷三郎、関口昌孝、高橋正祐、佐々木英夫（以上彫刻）。

〔受賞者〕◎**会友賞**　中村亮一郎（絵画）　◎**一陽賞**　森秀雄（絵画）、松本董（彫刻）　◎**青麦賞**　安藤節雄（絵画）、今井由緒子（彫刻）　◎**特待賞**　大場吉美、井上正美、天野赫二郎、島本芳伸、竹中昭（以上絵画）、山田茂夫、岩澤勇、渡会息土、森島昭道、斎藤純子（以上彫刻）。

◇名古屋・名鉄百貨店（十月）、大阪・高島屋（十一月）で開催。

＊会友・松本幸次郎（絵画）退会。

昭和四十三年（一九六八）

第十四回展覧会――（九月二十二日～十月十日　東京都美術館）

〔会員推挙〕佐野儀雄、角美貴子（以上絵画）。

〔会友推挙〕大場吉美、森秀雄、野中末知子、斎藤富蔵、安藤節雄、網笠省三、島本芳伸、菊池豊、平田幸枝、湯浅恵子（以上絵画）、松本進、今井由緒子、高橋勝（以上彫刻）

〔受賞者〕◎**一陽賞**　安藤節雄（絵画）、渡会息土（彫刻）　◎**青麦賞**　酒井幸雄（絵画）、森島昭道（彫刻）　◎**会友賞**　中島マミ、江川光信（以上絵画）、六崎敏光、高嶋文彦（以上彫刻）

◎**特待賞**　大野隆之、長名鈴夫、垣内カツアキ、垂尾一朗、野中重利、谷岡久、若林三郎、伊藤信義、玉川浩、西元治、市川裕康、平賀正勝、土井稔、高尾千代光（以上絵画）、斎藤純子、小宅淑子、今井田一巳、福田喜美子、高橋信一、中久木秀一（以上彫刻）。

◇名古屋・名鉄百貨店（十月）、長野・信濃美術館（十一月）で開催。

＊一月、会友・山内靖己（絵画）逝去。

＊七月、会員・森由太郎（絵画）逝去。

昭和四十四年（一九六九）

第十五回展覧会――（九月二十二日～十月十日　東京都美術館）

創立十五周年記念展

〔会員推挙〕荻原宗晃、中村亮一郎、熊田藤作、市川鶴、上野富盛、与儀達治、小松久子、野間傳治、柳原謙三、神門四郎、江

川光信、宮本清、鈴木国威、井黒四郎、中島マミ、森秀雄（以上絵画）。

〔会友推挙〕　岬一郎、平賀正勝、市川耕康、若林三郎、大野隆之、西元治、土井稔、石塚博、高橋甲、谷岡久、酒井幸雄、宮越弘三（以上絵画）、渡会意士、多治見胤昭（以上彫刻）。

〔受賞者〕　◎**一陽賞**　玉川浩（絵画）、中堀嘉雄（彫刻）　◎**青麦賞**　高岡徹（絵画）、中久木秀一（彫刻）　◎**会員努力賞**　大石可久也（絵画）　◎**会友賞**　栗原和美、島本芳伸（以上絵画）、丸山映、関口昌孝（以上彫刻）　◎**特待賞**　神部修一、田崎徹、片山比呂志、スマルモ、久保田正剛、大山美信、山口芯子、安田一彦、兎月人、小山幸彦、垣内カツアキ、棚瀬修次、市橋哲夫、杉山汎、佐々木吾郎、宿澤浩、北条紫鳴、酒井又兵衛（以上絵画）、岩澤勇、小山重利、中川征男、高木和文（彫刻）。

◇名古屋・名鉄百貨店（十月）、長野・信濃美術館（十一月）、大阪市立美術館（十二月）で開催。

＊十月、会員・山路真護（絵画）逝去。

＊会友・山本ひろの（絵画）退会。

第十六回展覧会——（九月二十二日～十月十日　東京都美術館）

〔会員推挙〕　栗原和美、島本芳伸、細笠省三、葛西康、丹治伊三郎、中澤寧子（以上絵画）、関口昌孝、丸山映、石黒功、六崎敏光（以上彫刻）。

〔会友推挙〕　佐々木吾郎、宮川慶輔、天王寺谷卓三、小宮惣太郎、宿澤浩、多賀堂岳、玉川浩、神部修一、棚瀬修次、沢オイ、久保田正剛（以上絵画）、森島昭道、岩澤勇、中川征男（以上彫刻）。

昭和四十六年（一九七一）

〔受賞者〕　◎**一陽賞**　市橋哲夫（絵画）、田畑進（彫刻）　◎**青麦賞**　林田滋（彫刻）　◎**会友賞**　土井稔（絵画）　◎**特待賞**　平畑筆一、河野日出雄、酒井又兵衛、中嶋正治、向井林三、松政盟子、渡部貞、岡田彌生、杉山汎、高橋茂、坂本ハクト、池田喜重、鼻井正威、福村隆宅、西井義隆、吉川俊夫、三田恭子、神林茂、本田弘、渡辺喜久蔵、堀江優、雨谷達夫、小林源次、佐川文子、渡辺百合子（以上絵画）、高木和文、阿部雪子、松本鉄太郎、福田順忠、中山正樹（以上彫刻）。

◇名古屋・名鉄百貨店（十月）、長野・信濃美術館と新潟・BSN新潟美術館（十一月）、大阪・天王寺美術館（十二月）で開催。

＊二月、会員・長谷川三千春（絵画）逝去。

＊八月、会員・森川正之（彫刻）逝去。

第十七回展覧会——（九月二十二日～十月十日　東京都美術館）

〔会員推挙〕　棚瀬修次、湯浅豊子、今村春吉、對島久世喜、安藤節雄、大塚伊次、宮川慶輔、天王寺谷卓三（以上絵画）、高嶋文彦、高橋正祐、三輪乙彦（以上彫刻）。

〔会友推挙〕　市橋哲夫、池田喜重、河野日出雄、杉山汎、田崎徹、山口芯子、平畑筆一、堀江優、西井義隆、酒井又兵衛、高岡徹、兎月人、清水源太郎、安田一彦、野中重利、垣内カツアキ、中嶋正治、大山美信（以上絵画）、田畑進、中堀嘉雄、高木和文、児嶋務、阿部雪子（以上彫刻）。

〔受賞者〕　◎**一陽賞**　岩永勝彦（絵画）、福田順忠（彫刻）　◎**青麦賞**　河野日出雄（絵画）、小山重之（彫刻）　◎**会友賞**　宇

野冨美代、沢オイ（以上絵画）、多治見嵐昭（彫刻）　◎**特待賞**
小山幸彦、土屋貫一、赤木政明、福村隆壱、神林茂、松政圀子、
白井一雄、田中繁雄、碓田順彦、上田仁、三田恭子、斎藤孝利、
奥山三郎、船屋泰治、佐藤達雄、能股勇、八原芳右（以上絵画）、
湊谷達平、松本邦夫、加藤邦彦、今井瑾郎、中山正樹、丸山良平
（以上彫刻）。
◇大阪・天王寺美術館（十月）、名古屋・名鉄百貨店と長野・信
濃美術館（十一月）で開催。

昭和四十七年（一九七二）

第十八回展覧会——

（九月二十二日～十月十日　東京都美術館）
〔会員推挙〕　土井稔、那須慧子、森嶋八州樹、谷岡久（以上絵画）、
吉田英智、関野初代、今井由緒子（以上彫刻）。
〔会友推挙〕　本多弘、ロウエル恒子、萩中幸雄、渡部貢、福村
隆壱、神林茂、岩永勝彦、向井林三、松政圀子、佐川文子、スマ
ルモ（以上絵画）、福田順忠、今井田一巳（以上彫刻）。
〔受賞者〕　◎**一陽賞**　林一英（絵画）　◎**青麦賞**　古谷吉三
（絵画）、今井瑾郎（彫刻）　◎**会員努力賞**　田所満雄（絵画）
◎**会友賞**　市橋哲夫（絵画）、渡会意士（彫刻）　◎**特待賞**　河井
一郎、佐伯武彦、田中基之、後藤稲比古、伊藤公二、小島織男、
北川忠一郎、國重陽子、木村保夫、前野昌市、宮口親、永谷喜美
子、岡田彌生、岡崎洋児、佐藤達夫、白井一雄、高橋茂、碓田順
彦、八原芳右衛門、吉田佳意子、山林文子（以上絵画）、佐光庸
行、吉本陽一、成瀬真澄、丹羽輝南、天木房子、ふじい忠一、窪
田政隆、八木ヨシオ（以上彫刻）。
◇大阪・天王寺美術館と名古屋・名鉄百貨店（十月）、長野・信

昭和四十八年（一九七三）

第十九回展覧会——

（九月二十二日～十月十日　東京都美術館）
〔会員推挙〕　石塚博、市橋哲夫、清田英作、益子昭雄、沢オイ、
堀田宰子、高橋甲、多賀堂岳、田崎徹、宇野冨美代（以上絵画）、
佐々木英夫、渡会意士（以上彫刻）。
〔会友推挙〕　林一英、伊藤公二、小林源次、永谷喜美子、岡崎
洋児、土屋貫一、吉田佳意子、山林文子、船屋泰治、新井田捨策、
岡田彌生、高橋茂、碓田順彦、山田忠、白井一雄（以上絵画）、
八木ヨシオ、林田滋、ふじい忠一（以上彫刻）。
〔受賞者〕　◎**一陽賞**　小林源次（絵画）　◎**青麦賞**　岡崎洋児
（絵画）、植木舜一（彫刻）　◎**会友賞**　大山美信、池田喜重（以
上絵画）　◎**特待賞**　野三教、馬場尚子、藤井正威、角越一人、
武田太郎、國重陽子、黒松ひろ子、馬淵正、松下絹子、宮春生、
森下正夫、中嶋薗、奥谷卓則、西倉一男、小川孝、白川晃、作田
外喜雄、島倉哲郎、鈴木雅弘、塚崎もとえ、田方泉子、田中基
之、吉川俊夫、八木沢恒蔵（以上絵画）、佐光庸行、大和田正人、
吉本陽一、中村明二、阿部玄楓、今美男（以上彫刻）。
◇大阪・天王寺美術館、名古屋・名鉄百貨店、札幌・三越（十月）、
長野・信濃美術館、金沢・名鉄丸越百貨店（十一月）で開催。各
会場で同時に、会員小品展開催。
＊会友・長谷川忠男（絵画）逝去。

濃美術館（十一月）で開催。
＊会友・石原照治、桜井克也（以上彫刻）退会。
＊七月、会友・平畑筆一（絵画）逝去。

◇価値観の多様化の時代と一陽会

昭和三十九年（一九六四）、一陽会は第十回展を迎えた。

"オリンピック協賛"と謳ってあるように、この年、第十八回オリンピック東京大会（十月十日～二十四日）が開催され、日本国内はもとより、世界中の耳目がこのスポーツの祭典にくぎ付けとなった。日本が戦後の復興期から完全に立ち上がり、高度成長の波に乗って世界の先進国の仲間入りをする、まさにそのとば口に立った瞬間だった。

この機に、東京首都圏をはじめ各主要都市の近代化が計られ、さらに都市と都市を結ぶ交通網の整備が一挙に進められた。そして日本国中がこの熱気に大いに煽られた。——後年、日本の政治・経済はもちろんのこと社会・世相、そして芸術文化を顧みる時、必ずこの東京オリンピックの年、昭和三十九年がターニング・ポイント（転機）として語られている。それほどこの時期から日本は大きく変わった。

オリンピック協賛　第10回一陽展図録（装画　野間仁根）

美術の最先端の現場である上野の森も、むろん例外ではなく、この年各団体が、"祝東京オリンピック""オリンピック協賛"という標語を掲げて展覧会を開催した。一陽会も"オリンピック協賛　十周年記念一陽会美術展覧会"としている。敗戦後二十年、東京オリンピックの開催、新時代の到来……。では、展覧会の当事者の真情はどのようなものだったのか。展覧会の図録に野間仁根が寄稿した「新時代」という文章が、会の主張を代弁している。

一陽会は十周年を迎えた。紀念すべき年である。しかも東京都はオリンピックを開催する年である。今までとはちがって、新生し、生まれかわった新時代が始まろうとして日日が活発な生命にあふれ、躍動している。東海道新幹線が開通された。新時代来るである。このことは夜明けを知らす新時代の幕かしい成果である。芸術は常に時代に先行するもののように考へたが芸術よりもかへって科学が時代に先行した。或いはこのような科学をも含めたものが芸術なのかもわからない。

知らぬ間に急速なテンポで世の中が回転し、あっという間に変転する。大きな変化に花咲き始めた。吾々もまた何にかに襲うたれ、何にかに迫われているのを感ずる。新芸術の胎動が感じられる。一陽会が十周年を迎へて、しかもオリンピックのこの年こそは、希望に満ちみちた、生命のよろこびの年である。

（野間仁根「新時代」『第十回一陽展』図録　昭和三十九年）

日常の制作余話が寄せられる中で、野間仁根はさすがに時代の大きな転換を敏感に察知して、「急速なテンポで世の中が回転」しているこの変化に、一陽会も花を咲かさなければ、と決意の熱い思いを筆に託している。それは、「何にかに襲うたれ、何にかに迫われているのを感ずる」ほどに、ある種予感のような焦燥でもあったようだ。

一陽会は、東京都美術館での第四回展開催以来、順次会員、会友を増やし、第十回展開催直前には、絵画部会員三十一名、彫刻部会員十名。会友は、絵画部二十八名、彫刻部十一名という陣容であった。さらに、第十回展の審査の結果、絵画部新会員六名、彫刻部新会員二名。絵画部新会友十名、彫刻部新会友四名を新たに仲間として迎え

「お元気な野間仁根先生」（第10回展審査会場にて）（提供　田所満雄）

ている。したがって、第十回一陽展が開幕した折の新しい陣容は、絵画部会員三十七名、彫刻部会員十二名であり、創立以来十年、ようやく公募美術団体をうたうに相応しい規模にまでに会が育ってきた。……これからは会員、会友各個の創作の一層の質の向上と、次代を託すべき広範な新人の発掘に多く意を払うべきだと意を決したようだ。そこのところに、野間仁根の一陽会の「希望に満ちた」未来像があった。

新人の発掘の具体的な方法としては、地方支部においては、各支部が独自に組織して開催する支部展が大きくその役割を担っている。さらに、本展（東京展）や支部展への出品を目標とした研究会がその裾野を広げてきていた。また首都圏においても、関東支部（平成七年から東京、神奈川、千葉各支部と茨城グループに分かれる）の春季展（神奈川、昭和五十九年から神奈川一陽展）にジュニア部を併設して、新人発掘に努めている。東京、神奈川、千葉支部と茨城グループが独自に活動するようになってからは、それぞれ地元で開催する支部展、あるいは研究会でも新しい仲間の発掘に努めていた。

*

野間仁根の思いの中にかすかな戸惑いとしてあった、あまりに早い時代の変転と、それにともなう当時の美術の現状は、どのようなものだったのだろう。このあたりで、少し遡って昭和三十年代前半以降の美術の潮流を眺めておきたい。

やはり、美術の潮流を押し上げるのは、いつの時代も経済の隆盛であり、昭和三十年下半期以降の日本経済の好景気（神武景気、さらに昭和三十六年下半期まで続く岩戸景気）は、一般の生活水準を格段に高め、消費経済到来の機運がこの時期にできあがった。さらに、活発な海外との経済交流（貿易、人的交流など）は、海外との文化交流も飛躍的に促進し、ことに美術においては、ヨーロッパ、アメリカから、情報、作品、作家が日本に押し寄せた。敗戦直後に奔流となってアメリカから押し寄せてきたアンフォルメル（抽象概念による非具象の絵画・彫刻）旋風ほどではなかったとしても、日本の美術に与えた影響は計り知れなく大きなものだった。

その顕著な例としては、まず日本の美術家の表現方法・視野が豊かに広がったこと。そして押し寄せる情報を整理し吸収するための美術ジャーナリズムが誕生し始めたことと、さらに公立主導型とはいえ美術館の設立が各地で論議されるようになったことだった。このこと自体は、元来海外から招来された西洋絵画・彫刻を扱う以上、大いに歓迎すべきことではあったのだが、問題はその美術ジャーナリズムや美術館を運営する側の成熟を待ついとまがなく、次々としかも新旧、抽象・具象を問わずさまざまな情報や作品が、しかも方々から押し寄せてきたことにあった。もちろん、情報が統制されていい訳はないが、きちんと消化されてきたのかどうかという心配が残る。

さらに、昭和三十年代後半になると、美術ジャーナリズムの一端を担う新聞各社が、読者への還元をうたって文化事業に進出し始めた。その文化事業の対象となったのは主に海外から招来される美術展で、美術館の収蔵作品やコレクション、そして著名作家の作品展が、当時まだ十分に整備されたとはいえない美術館や、各地の百貨店を会場にして行われるようになった。もともと西洋美術の基礎的知識も作品も満足に無い日本のことである、このことが、後の「美術館の時代」の導線の一つになったことは間違いないし、組織的に美術の情報や作品、作家がもたらされることについては、大いに歓迎すべきことではあった。

陣頭に立って展示指導をする野間仁根会員。

ともあれこの時期、年々歳々、あるいは、月を経るごとに、もたらされる美術や情報の量は増大し、複雑に堆積されていった。

さらに、企業や個人の購買力の増大が、画商の活躍の場を広げ、この頃から美術の商品化が加速されていったことも価値観の多様化に拍車をかけた。もちろん、画商が美術を商品にするのは当たり前のことだが、商品かどうかで美術を左右するのとは大きな相違がある。

＊

昭和三十九年の第十回一陽展を取り巻く美術の潮流は、おおよそこのような情況だった。

では、展覧会場の様子はどうだったのだろうか。秋の美術シーズン第二陣、新制作協会、一水会、一陽会が展評の対象になっているのだが、はなはだ手厳しい。

小川正隆（註1）「秋の公募展から　新制作・一水会・一陽会（第九回展）」

こんとんとした現代の美術――一体、何を目指して進もうとしているのか。こんな疑問が作品を眺めるたびに、ふと頭をかすめる。

秋の第二陣は、「新制作協会」「一水会」「一陽会」の発表だ。ざっと千七百点ほどの絵画が展示されている。抽象あり、具象あり。そのスタイルは千差万別だが、ここでいう〝こんとん〟とは、何もそのさまざまなスタイルの洪水をいうのではない。むしろ、そのスタイルが、それぞれ独自の性格をもって、新しい領域を開拓しているのだったら、その開拓の姿勢に、現代の方向を読み取ることができるけれど、現状はあるひとつのワクのなかで、右往左往しながら、足ぶみしているといった状態なのだ。

もっとも、こうした安定した仕事で、一番私の目をとらえたのは、鈴木信太郎（一陽会）の「静物」だった。のどかな、おおらかな、果物やものの描写だが、うるおいのある輝きをもって、純真な作家の人柄を素直に表現している。

（朝日新聞）　昭和三十八年十月四日付）

河北倫明（註2）「秋の公募展から　一水会展と一陽会展（第十回展）」

一陽会は、少数の作家以外は残念ながら第二陣の三展中では見劣りがした。

ぜんたいの傾向は例によってライラクな日本的自由画というところで、型をはずした勝手な描きぶりの中に味を求めたものが多い。なかではさすがに野間仁根の二点が生気をはらんで目立ち、「薔薇」は小品だが、気持ちのよい作調を示している。鈴木信太郎は今年はとくに注目するほどでなく、それ以外では小川哲郎「日本海を望む」がこの会でめずらしく繊細な風景画をなしている程度。

ところで、こうした団体展を見て、いつも感じるのは、若い有為の人材をどうして補給するか、つねづねその工夫があるのかどうかの疑問である。

（朝日新聞）　昭和三十九年九月二十九日付）

小川正隆、河北倫明、いずれも公募団体展を長年見守ってきた眼で、手厳しい評言を投げかけている。

会員、会友、そして一般の出品者の作品を含めると、百点、二百点、大きい団体になると三百点を越えるような大展観の中で、一点、一点の作品の妙味を嗅ぎ分けることは、ほとんど至難の技といっていいだろう。それも、一度に三つの団体展の展評取材をするために、広大な会場を、注意深く壁面の下から上まで視線を移してゆく。しかも、三つの会場ということになると、その緊張感の持続だけでも容易なことではない。

こうした公募美術団体の展評の中で、作家名と作品名、あるいは名前だけの羅列の一齣に登場するだけでも、作家にとっていかに感銘深いものであるかということが、実際に、膨大な量の作品で埋まった会場を丹念に一つ一つの作品を見て歩くとよく分かる。……そうした作家個々の思いと、狭く扱いづらい限られた壁面・スペースに一点でも多く展示しようとする側の思惑と、けっして鑑賞ではなく作品の質を、効率よく見極めようとする評者の視点と、そして、ただスペースを分けて貸与する会場の管理感覚とが、一度も噛み合うことなく、わずか十日前後の短い会期が終了してしまうというのが現状である。……結果、公募美術団体に負わされている、現状では是正のしようのない行き違いがここには残る。

「公募展再興のための一つの提言」と題する文章がある。筆者は、美術ジャーナリストで美術評論を多く手掛けた、植村鷹千代（一九一一～一九九八）で、戦後の日本の美術界の動向を丹念に見守り続け、公募美術団体の展覧会評も多く書いている。

戦後、美術団体の公募展形式に最初に批判的な形で表れたのは、日本美術会と読売新聞がはじめたアンデパンダン展であった。このアンデパンダン展は、上野の都美術館以外で開催されるグループ展や個展形式の抬頭とともに一時非常に盛況であった。……これらは、公募展形式の美術団体にたいする絶望や不満から生まれたもので、その絶望や不満の捌りどころとなるものは、自主的で自由な表現にたいして、現今の公募展が門を閉ざしたり、ブレーキをかけるということであった。そして、展覧会の経営を商業化することによって維持しようとする傾向への批判が、公募展離れをする世論の定評となった。公募展の影を薄くしているもう一つの現象は、新聞社やその他の機関によって、選抜展や、授賞コンクール形式が強力に設立されて、登竜門としてはこの方が有利になったということは、周知のことである。

野間会員の指示を周囲は固唾を呑んで待ちうける。

日本では、作家の自主的な発言の姿勢を強めるためには、まだ当分さまざまな発表の形式が並存して、その混乱の摩擦を通過して、日本の美術界に適した形式の秩序になるのを、待たねばならないだろうと私は思う。外国にこんな美術団体の乱立はないからといって、日本の公募展を責めても意味はないようだ。いまの日本では、団体展の離合集散、発表形式の混乱などという不合理が、むしろ創意の刺激になるとともに、一つの安全弁になっている事実を無視できない。そして、その混乱を動かしている力のなかに、作家の自主的発言をもとめる意欲が作用していることを、過小評価することは誤り

絵画の展示会場（旧東京都美術館）。

だろう。

（「みづゑ」　昭和三十六年十一月号）＊傍線編集部

公募団体への提言、批判（公募団体無用論）は、この頃（昭和三十年代後半）から昭和五十年の新東京都美術館の開館直後あたりまで、まさに枚挙にいとまなく繰り返されていくのだが、評者の側からは、ほとんど具体的な提言は出ていない。多くは大所高所からの批判で終わっており、つまるところ、植村のこの「提言」に集約されている。

むしろここで注目しておかなければならないのは、植村も触れているように、「新聞社やその他の機関によって、選抜展や、授賞コンクール形式が強力に設立されて、登竜門としてはこのほうが有利になった」というくだりである。……本来、公募美術団体が果たさなければならない、社会的に負った責務としては、まず、新人作家の登竜門としてあるということだろう。もちろん、所属作家の一年間の集大成としての作品発表の場という大事さはあるとしてもである。

新聞社が企画主催した日本秀作美術展、文化庁主催の現代美術選抜展、そして新人作家の登竜門をうたって登場してきたのが、シェル美術賞展（昭和三十一年・第一回展）と、安井賞候補新人展（昭和三十二年・第一回展、昭和四十四年・第十二回展から安井賞展～平成九年・第四十回展最終回）である。

特に安井賞候補新人展は、第十一回展（昭和四十二年）まで東京国立近代美術館で開催され、受賞者は言うに及ばず、賞候補、つまり出品者として招待されるだけでも栄誉とされた。昭和四十四年から改組されたものの、平成九年まで実に四十年間も具象系絵画の新人の登竜門として美術界に名を馳せた。ちなみに、シェル美術賞展は具象・非具象を問わず作品を一般公募とした。

昭和三十年に第一回展を開催した一陽展と、これら有力な新人作家の顕彰展とは、ほぼ同時期を歩んだことになる。植村氏が指摘したように、「この方が有利」と思う向きもあったに違いない。

ただ、安井賞に関していえば、当初主催者は、新人作家発掘の実績をもった公募美術団体に配慮して、各団体に候補作家の推薦（三名以内）を求めた。記録に従うと、

第一回展の作家推薦は、二十三団体から六十六作家（一一七点）――展示六十六作家（六十六点）。

第二回展の作家推薦は、二十三団体から六十七作家（一一九点）――展示六十七作家（一一九点）。

第三回展の作家推薦は、二十四団体から六十四作家（一一〇点）――展示六十四作家（一一〇点）。

というように、各団体からの推薦（三名以内）がほぼそのまま招待出品作家になっている。これならば、作家にとっては、自分の仕事の傾向に合った団体で存分に力を発揮して、その団体の推薦でさらに上への登竜門をこじ開けられる、と思ったし、団体の内部での競争心も煽ったろうし、若手作家育成への意欲を大いに燃やしたに違いない。

ちなみに第一回展で推薦された作家の所属団体は、――示現会、立軌会、新制作協会、東光会、第二紀会、春陽会、白日会、創元会、美術文化協会、光風会、モダンアート協会、旺玄会、新世紀美術協会、行動美術協会、太平

洋美術会、女流画家協会、国画会、一陽会、独立美術協会、新樹会、二科会、鬼集会、一水会そして無所属作家からの選抜である。では、一陽会からの推薦（出品）作家を見てゆこう。

【一陽会からの招待出品作家】

［第一回展］（昭和三十二年）　沢田正太郎「西洋風の見世物小屋（掛小屋）」「観覧車（廻転飛行）」、高尾千代光「北陸のミナト」。

［第二回展］（昭和三十三年）　大石可久也「工場」「クレーン」、神門四郎「北国の冬1」「北国の冬3」、小林内「鮨」「網」。

［第三回展］（昭和三十四年）　鶴田猛「機関車A」「貨車」、堀内千里「樹と鳥1」「樹と鳥2」、山本ひろの「チェコの馬」「サーカスの馬」。

第四回展は、団体からの推薦枠は同様として、美術評論家連盟に属する評論家十名が各二作家を推薦し、別途委嘱した選考委員が招待作家を選定することになる。

［第四回展］（昭和三十五年）　市川勉「ロバと夢」「馬と車」、国本克己「武装せる島と奇怪なるミイラ」「負者の歌」、岡野正章「室内」。

［第五回展］（昭和三十六年）　角美貴子「あそぶ」「秋」、山本ひろの「不思議なランプ」「沈みゆくもの」。

第六回展からは、団体からの推薦枠は同様として、美術評論家連盟に替わり美術評論家・美術記者十九名が各二作家を推薦し、選考委員が招待作家を選定する。

［第六回展］（昭和三十七年）　月見里シゲル「〇〇族2」、峯岸義太「テーブル2」。

［第七回展］（昭和三十八年）　出品者なし。

［第八回展］（昭和三十九年）　中村亮一郎「古木の神秘」。

［第九回展］（昭和四十年）　出品者なし。

第九回展での推薦団体は、三十二団体に増えているが、美術評論家・美術記者の推薦委員も二十四名に増え、推薦は一一七名（二二二点）――展示作家六八名（七五点）。

［第十回展］（昭和四十二年）　出品者なし。

［第十一回展］（昭和四十二年）　山本ひろの「王の夢」。

［第十二回安井賞展］（昭和四十四年　於・西武百貨店）　出品者なし。

［第十三回展］（昭和四十五年）　五十嵐二朗「春」、大石可久也「ガールドリヨン」、北山泰斗「青空の中の青空」、斎藤満夜「室内裸女」。

第十四回展での推薦団体は三十二団体、推薦委員は三十四名となり、事実上団体からの推薦作家よりも美術評論家・美術記者が推薦する作家の方が徐々に優位になってきている。この傾向は一層強くなっていく。

［第十四回展］（昭和四十六年）　大石可久也「カフェ」、長谷川忠男「ユーカラA」、森秀雄「偽りの青空B」。

［第十五回展］（昭和四十七年）　大石可久也「魚うり」「浜辺の店」、森秀雄「偽りの青空――とらわれた空――」。

岩手作家の作品が壁面高く吊り上げられてゆく。

「一点でも多く、一人でも多く」。展示担当者の苦心の策。

［第十六回展］（昭和四十八年）　大石可久也「市のおばあちゃん」。

＊（本章で顕彰すべき項目は昭和四十八年の動向までだが、記録の連続性を重み最終回分まで記載する。）

［第十七回展］（昭和四十九年）　大石可久也「北国の人」。

［第十八回展］（昭和五十年）　北山泰斗「他人の空シリーズ　青い土地」、鈴木力「沈みゆく太陽」。

［第十九回展］（昭和五十一年）　小松富士子「PENNSYLVANIA DUTCH COUNTRY TWILIGHT」、森秀雄「偽りの青空―諸―」。

第十九回展から団体枠が無くなり、推薦二六二作家（二八八点）――展示六九作家（七二点）、となっている。推薦された作家数と展示作家（招待出品した作家）数を見ると、半分以下に絞り込まれている。これでは、推薦制がまったく機能を果たしていない。

［第二十一回展］（昭和五十二年）　船越二人「冬木立」。

［第二十二回展］（昭和五十三年）　小松富士子「THE SKY NO ONE SAW-B」、田崎徹「イチジク」。

［第二十三回展］（昭和五十四年）　小松富士子「THE SKY NO ONE SAW-B」。

［第二十三回展］（昭和五十五年）　碓田順彦「屋上」」、小松富士子「SCENIC PORTRAIT-1」。森秀雄「偽りの青空―蘇えるヴィーナス」。

［第二十四回展］（昭和五十六年）　土嶋敏男「人と物（関係）」。

［第二十五回展］（昭和五十七年）　舘野弘「樹化Ⅰ」、浜田清「遠い日（玩具箱）」。

［第二十六回展］（昭和五十八年）　舘野弘「樹化Ⅱ」、浜田清「遠い日（時の忘れもの）」。

［第二十七回展］（昭和五十九年）　浜田清「遠い日（記憶Ⅱ）」。

［第二十八回展］（昭和六十年）　小山佐敏「Another Face 84-2」、舘野弘「光に向う物Ⅰ」、土嶋敏男「人と物（軌む）」、浜田清「遠い日（記憶）」。

［第二十九回展］（昭和六十一年）　土嶋敏男「人と物（傾斜）」、浜田清「遠い日（マイ・スペース）」。

［第三十回展］（昭和六十二年）　鈴木力「グレコの街並」、舘野弘「大いなる蜂」。

第三十回展では、推薦二七作家（三七二点）――展示七二作家（七二点）、となっている。

［第三十一回展］（昭和六十三年）　浜田清「遠い日（マイ・スペース）」。

［第三十二回展］（昭和六十四年／平成元年）　土嶋敏男「人と物（光・圏）」。

［第三十三回展］（平成二年）　久郷眞「ファンタジア2」、須田良雄「Play（夜の街から）Ⅱ」、舘野弘「トリギ（鳥影）」、土嶋敏男「人と物（EXISTENCE IN TIME）」。

［第三十四回展］（平成三年）　舘野弘「象の街」、玉田健二「埠頭の午後」。

［第三十五回展］（平成四年）　畠中陽一「記号の街（窓）」。

［第三十六回展］（平成五年）　舘野弘「象の街（Cats goes Home）」。

［第三十七回展］（平成六年）　泉谷淑夫「Paradise Paradox」。
［第三十八回展］（平成七年）　玉田健二「自転車のある風景」。
［第三十九回展］（平成八年）　舘野弘「僕たちの将来」。
［第四十回展］（最終回）（平成九年）　出品者なし。

この項は、安井賞候補新人展、安井賞における個人の顕彰を目的としているのではなく、当初、公募美術団体の推薦作家による展覧会構成を打ち出しながら、次第に規約を改定し、事実上団体からの推薦が反映されなくなっているということを、一陽会からの出品作家を引いて例証している。

安井賞が最終回を迎える平成九年（第四十回展）まで、一陽会はほぼ切れ目なく招待作家を送り出している。さらに、昭和五十一年からは事実上団体（三十三団体）の推薦枠も無くなってしまうのだから、一陽会の奮闘を大いに多としなければならない。「新生一陽会」、このことは次項で改めて顕彰することになる。

◇「新生一陽会」への道

「団体展の雑合集散、発表形式の混乱などという不合理が、むしろ創意の刺激になるとともに、一つの安全弁になっている事実を無視できない。」――先に引いた、植村鷹千代のこの指摘は、昭和三十年代後半以降の、美術公募団体の内なる情況を代弁して余りある。創立十周年を過ぎ、団体展としての陣容をようやく整えた一陽会も、内部の小さな動揺（註3）を経ながら、常に「新生一陽会」への足取りを速めていた。

ここで、一陽会の会内部の骨格、会の庶務、総務を統括して動かす「会務」の有り様、移り変わりを見ておきたい。

公募団体の会務は実に繁忙である。――展覧会の会場確保の確認、作品公募のための広報・広告の手配、作品搬入の受付、作品の審査、選外作品の搬出、入選発表・目録の作成、報道機関などへの広報、会場の設営・展示、展覧会初日の行事、展覧会、そして地方巡回への手配――。これは、本展と言われている東京を皮切りに開催される展覧会の推移概略であり、これに各地方で独自に開催する地方展への支援・指導、さらに研究会（中央、地方、規模の大小を問わず）の指導・支援という具合である。本展の巡回が二箇所、三箇所と増え、各地方組織が充実、増加してくると、会中央の会務がその分さらに繁忙となる。

会務の大筋の概要は、会創立の頃も半世紀を経る時点もそう変わらないとしても、量の上でも質の上でも、その繁忙の度合いは年々歳々高まり、極まるところを知らないというのが実情である。

一陽会の創立当初から、昭和三十年代後半ころまでは、第一世代、創立会員が先頭に立って会を引っ張っていて、鈴木信太郎、野間仁根が一番前の中央に鎮座し、当初野間仁根の自宅に会の事務所を置き、次いで髙岡徳太郎が片柳忠男、勝一晃らの助力を得て会務を差配するという様子だった。さらに、一陽会が新生を期して会内部の刷新を

始めた昭和四十一年以降は、事務所を片柳忠男のもとに移し、野間、高岡の意見を仰ぎながら勝一晃、大石可久也、北山泰斗らが会務の実務を担当した。その後、会の事務所は五十嵐二朗、坪井正光へと引き継がれてゆき、第二世代の勝一晃、北山泰斗、萩原光親、大石可久也、佐野儀雄、森秀雄、棚瀬修次らが会の指導を行ってゆくのだが、ここは「新生一陽会」の再出発に立ち会わねばならない。

昭和三十九年の第十回展の開催前から、四十年代の後半まで会務の事務を預かった勝一晃の記録がある。「一陽会日誌」という表題が付けられた数冊のノートに、本展開催時の諸手配・準備、地方展への対応というように、細かな手配りが備忘録として記されている。その中から、記念すべき第十回展の搬入、審査日の項を引いてみたい。作品搬入と審査当日の繁忙の様子が、活き活きと記録されている。

昭和三十九年（第十回展）

九月一日　各会にあいさつ。二科会、行動美術、日本美術院。（当日、「祝　二科会様　一陽会」と書き清酒それぞれ届ける。後引継ぎのため。）

黒田運送店に集画のために連絡（電話）。要旨・九月十一、十二頃、各会員宅を回り作品を集めてほしい。十三日より高林写真が撮影するため。

九月三日　アルバイト連絡。・女子（事務）　鱸（利彦）先生の共立女子大、及び学徒援護会に連絡。

結局　共立女子大　三名。　学徒援護　三名。　期間は十三日～十七日。

＊十三、十四日　搬入日は彫刻部用として三名でよろしい。

＊十五、十六日　審査日は六名は必要。

＊二十一日　飾り付け　彫刻部の運搬としてホシヤ（彫刻専用運搬）よりの必要人員＋学徒援護会より六名男子獲得。

九月七日　黒田運送店に萩野（康児）先生の冷蔵庫を会場事務室に運ぶ件、確認。

高林写真に十三日撮影の件、再確認。富士孔版（ガリ版名簿）鈴木氏に連絡。要旨・原稿を十七日午後二時に取りに来てほしい。十九日午前十一時迄に製作してほしい。これは入選者名簿。

九月八日　入賞者用の金札、銀札をオリオン社（註1）後藤氏に依頼。搬入日頃持ってきてもらう。今年は大きすぎたので後で切りそろえる。来年はもうすこし小さいのを。

九月十一日　野間先生宅に行き、十三日よりの事務用品の補充、事務打ち合わせ。

懇親会の用意は、田所（満雄）、小川（晋郎）両氏が進めつゝあり。

九月十三日（搬入日）

・野間先生、美術館に借館手続きを行う。

・椅子、テーブル等の借用手続き、川出、内藤さんに相談、依頼す。

・搬入受付、事務を行う場所を作る。

・受付札、ポスターはり、事務用品の荷解きを行う。

・美術館入口ののぼり、依頼確認。川出さんに相談。

・表看板、切符売場等の装飾依頼、伊藤商華堂。

・搬入係　主として、山谷（瑛一）氏、沢田（正太郎）氏、萩原（光親）氏。

・事務係　主として、田所（満雄）氏、八重垣（逸郎）氏、勝。

○事務　優待券、招待券、一般券、団体券、前売券、学生割引券、一切の券に捺印す。

その内、団体券、学生割引券、一般券等美術館入口で売る券は、枚数を数えて、川出さんに渡す。
○招待券、招待状　・会員、会友、新聞各社、美術館、高島屋、オリオン社、ホシヤ、彩美堂、美術館食堂、一水会、新制作、独立、二紀、自由美術、翠養軒、美術館内の他の店、その他スポンサー、他。（失礼なき様、事前に研究の要あり。）
・各個人宛、会社宛、学校宛等、招待状表書き。
・高林写真、撮影開始。
○表示　「落選搬出は、九月二十五日（九時～十七時）迄に美術館　一陽会事務所入口迄」
九月十四日（搬入第二日）
・前日よりの残務を引き続き行う。
・賞状用の諸品購入。
九月十五日（審査第一日）
・審査事務用品（搬入用紙、目録、赤白チョーク、ザラ紙、墨、鉛筆他）
・入落選者通知用切手購入。
・入落選者通知に捺印。
・必要事項書き入れ。（懇親会日時・場所、其の他）
・入選者優待券　捺印・ナンバリング。
・全落選者性明次第、通知作成。十六日夕迄完了。
・賞状、金・銀札　森（由太郎）氏に墨書依頼、手渡す。
・画題札　指田（由米）氏に書いていただく様、了解を得ておく。書く日は十七日午後。

勝一見事務所の苦心、苦闘の足跡が刻まれている『一陽会日誌』

九月十六日（審査第二日）
・事務の残り整理。
・富士孔版に再連絡。
・十九日の新聞社あいさつ持参品（目録、授賞結果他）の用意、田辺（栄次郎）氏に依頼。
・授賞会議の日取りを野間先生に決めてもらい、全員に確認してもらう。
・十七日が一番事務忙しきため、必ず人員を確保しておく。

こうして審査が終了し、翌日から展覧会初日に向けてさらに目が回るような繁忙な日々が続く。……時が過ぎ、パソコンやコンピュータというように、身のまわりの品々やあらゆるものがどのように便利に変化しても、この展覧会直前の事務の繁忙さは、いささかも変わってはいない。

◇「一陽会の解散」と、第十三回展の再出発

一陽会は、昭和四十年の第十一回展を迎えた段階で、新たに七名（絵画六名、彫刻一名）の新会員を迎え、合わせて絵画部会員四十三名、彫刻部会員十二名となった。双方を合わせると五十五名という大陣容である。最初十四名で始まったことを思うと、鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎は一様に感無量の思いだったに違いないが、一方、当然予測されていたとはいえ、厄介な問題も表面化してきた。それは、会員が増えたことによって、会としてのまとまりが希薄になった、ということだった。会を挙げて「尖鋭なる未完成こそ推薦し、前人未踏の新分野の確立に努力する」新しい開かれた団体を標榜する以上、この精神に燃える会員は皆平等であり、創立会員も新会員も、建前の上では平等でなければならない。だがそれでは、会が四分五裂する恐れがある。この時期に、自分たち三名の責任で強力な指導体制を作り、その指導体制を自分たちが支えるかたちで、会を一本にまとめ直そうと考えたようだ。

勝一晃が書き記した備忘録によると、経緯は以下の通りである。

デモンストレーションの日

（昭和四十三年八月三十日）

十時頃、デモンストレーション開催の現地・数寄屋橋に行く。十時半より大きな垂布制作にとりかかり、十二時半頃終了。ニッポンテレビ、NETのテレビに乗り、毎日新聞にも出る。

大変見物人が多く居り、大いに美術の秋、一陽会の宣伝効果があった。終了、一時三十分頃。

出席会員、野間、片桐、伏原、八重垣、小川、北山、金田、指田、鶴田、植木、田辺、諸、（『会報記録』から）

〝美術の秋〟街頭へ進出　「交通安全のお役に」

タタミ二枚分もある二〇〇号大キャンバスの連作は、名付けて「幸福の森」「幸福の海」。

二十日朝、東京・数寄屋橋で行なわれた一陽会の「交通安全のための色紙即売会」の出しもので、色紙は野間仁根、鈴木信太郎、片桐忠男各画伯らの作品が一枚二千円から五千円、普通の五分の一くらいの値段とあって、見物の銀座っ子も気軽にサイフを出す。

この売上げは都交通安全協会などに寄付されるが、美術シーズンの幕明けを前に、上野の森から街頭に出てきた画伯たちは「幸福の首都」づくりに一役と大張り切りだった。（『毎日新聞』昭和四十三年八月三十日夕刊）

美術の秋＝街頭へ進出
「交通安全のお役に」と絵筆走る

街頭制作と色紙即売の様子を伝える報道

街頭制作の大画面に向かう野間仁根。

鈴木信太郎先生祝賀会

（日本芸術院会員叙任）

（昭和四十四年）

昭和四十四年（一九六九）、鈴木信太郎は日本芸術院会員に叙任された。一陽会の中心作家であることは勿論のこと、日本の現代洋画壇を代表する画家として高く評価されてきた。その稚趣豊かな画境は日本の油彩画が辿り着いた一つの極みとして、多くの愛好家を魅了し続けた。

昭和四十五年五月三十日、東京都港区白金台の八芳園において「鈴木信太郎画伯の栄誉を記念し長寿をお祝いする会」が、徳川夢声、野間仁根、高岡徳太郎、片柳忠男（世話人・勝一晃）の発起で催され、一陽会の会員、会友五十名を含む約百二十名が参席した。宴のたけなわに参会者が画伯を囲んで記念撮影におさまる。（＊写真には塩川正十郎元代議士も写っている。）

鈴木信太郎画伯を囲んで祝福する顔、顔。

昭和四十年（一九六五）の十二月九日、高岡徳太郎は、同月十九日に開かれる会員総会に諮るための意見書を勝一晃に託した。その内容は、「鈴木、野間、高岡の三名は会の運営から退き、三名以外の創立会員を運営委員とすること。」というものであった。

そして、十二月十九日の会員総会は、鈴木、野間、高岡の三名の連名で直接会員に呼び掛けられた。総会は、かなり紛糾したようで、「午後二時より、オリオン社に於いて総会を開き、六時頃までかかる」と日誌に記されている。生憎この総会の結果は資料では読めないが、後の経緯から辿ると、「鈴木、野間、高岡の三名を除く創立会員を運営委員とする」という案に対して、創立会員のうち特定の人物（米良道博を名指ししている）に対する非難が持ち出されたが、提示案通りに、運営委員会の準備会としての「運営委員会案協議会」の設置が採択された。結果、鈴木、野間、高岡の三名を除く創立会員十一名が「運営委員会案協議会」委員となり、なお継続して審議することとなった。だが、このなりゆきに異を唱える鰐利彦が、その場で退会届を提出してしまった。この退会届は中田豊の預かりとなった。……鰐の意とするところは、鈴木、野間、高岡が退いて、他の者（米良）が会運営の役職に残るのは承服できないというものであった。

そして、翌昭和四十一年（一九六六）の一月二十六日、上野の蓬莱閣で一陽会の新年会が行われたが、この日の出席は大変少なく、高岡徳太郎、植木力、長谷川三千春、米良道博、山谷鎌一、沢田正太郎、八重垣逸郎、田所満雄、堀内千里、峯岸義太、鶴田延、田辺栄次郎、荻原光親、北山泰斗、勝一晃の十五名であった。その席で高岡は、会の体制を確りさせるために、創立会員を運営委員にしなければならない旨の発言をした。だが、その日はあまりにも出席者が少数で積極的な反応がなく、後日高岡が書面で改めて

意見書を会に提出することになった。

そして、二月二十日、高岡から書面で、「創立会員を運営委員にすること（鈴木、野間、高岡は顧問としてささえる）。現在高岡のところにある会の事務所を片柳忠男のところに移すこと。」という意見書が会に提出された。すると、運営委員設置に対して反対する会員約十名が、三月三日、高岡のもとを訪れて、高岡に意見書の撤回を求めた。

高岡の意見書に反対する会員たちが提示した案は、①鈴木、野間、高岡の三名を運営委員とする。②それ以外の創立会員は運営委員としない。③片柳忠男の事務所は全面的に賛成する。④米良に関する前年十二月の騒動（鰹の退会届提出）は、②が約束されれば今後白紙に戻す。というものであった。

その後、この運営委員設置の問題はさまざまに議論され、挙げ句「改革同志会」なるものが発する怪文書が出るに及んで、昭和四十二年（一九六七）九月四日、一陽会は、第十三回展の開催の前に問題の決着を図るべく、緊急総会の開催を、会員・会友に向けて、電話、電報で通知し、出席を呼びかけた。

そして、翌九月五日、午後一時からオリオン社で緊急総会が開催された。総会は片柳忠男の司会で進められ、経緯をめぐって議論された後、「一陽会をこの際解散し、新たに会の発足を計る」旨の提言が議論され、「会の解散」を鈴木、野間、高岡の三名に委任することとし、三名の意思で「一陽会は解散」された。そして、小憩の後、出席会員及び委任状を提出した会員全員を新会員とすることとし、決議に異議のあるものは退場を求め、委任状を提出せずに欠席した会員の扱いは、鈴木、野間、高岡の三名に一任することとなった。結果、新組織の会員に推挙されなかった会員は、近藤長三郎、小林内、鰹利彦、中田豊（以上絵画）、綿引淳人（彫刻）の五名であった。なお会友は以前の通りとされた。新組織の会員は以下の通りである。

〔絵画部〕

浅井一介、長谷川三千春、堀内千里、萩原光親（楽二）、飯田慶三、片柳忠男、小出泰弘、岡本精典、勝一晃、北山泰斗、米良道博、森由太郎、棟方寅雄、松下明治、村上英男、峯岸義太、野間仁根、野間佳子、中村秀雄、萩野康児、小川哲郎、小野忉郎、大石可久也、国本克己、大羽梧郎、鈴木信太郎、指田由来、沢田正太郎、鈴木力、高岡徳太郎、田辺栄次郎、田所満雄、鰹田猛、月見里シゲル、上田春雄、山路貞護、山谷鉄二、八重垣

荻野康児先生の思い出

荻野先生からの葉書――（昭和四十四年十二月）

飯田庸夫

先生が体調をくずされ回復に向かわれていた頃、お宅を訪問したことがあります。先生は、「友人が訪ねて来てくれるとモデルになってもらっている」リハビリをかねてスケッチをしているということで、「今日は飯田君をモデルにしよう」と言ってスケッチをされました。私のような若輩を友人と言われる、先生の広いお心とお人柄に思わず目頭が熱くなりました。

その後も、訪問するたびにご自身で入れてくださったお茶をご馳走になりながら、世間話をして辞去するのが常でしたが、その都度二、三日すると必ず先生からの葉書絵が届いたものでした。その葉書絵は今でも私の宝物です。

荻野康児会員から飯田庸夫におくられたクリスマスカード。

（図　葉書絵）「今日はアトリエもあたたかく、ゆっくりお話しできてたのしいひとときでした。／ヨーロッパの思い出、ゆっくり拝聴したいたのしみにしております。奥様、坊ちゃん達と共にお幸せな新年をお迎へ下さい。」

展示作業の合間にひといき入れる野間会員。

逸郎、山田首。

［彫刻部］

浅野孟府、伊本淳、金田忠、加藤博二、宮川和博、中村輝、根本熱、神山勝、植本力、山崎猛、横沢英一、郷悦三、森川正之。

こうして、一陽会は新しい組織として再出発し、昭和四十二年九月、第十三回展を迎えることになった。結局、創立会員二名を含む五名の会員が退会する形で決着が図られたのだが、鈴木、野間、高岡の三名が企図した、運営委員会を設置して強力に会を指導してゆく体制作りは、新都美術館に移る前年の、昭和四十九年の第二十回展開催前夜まで、先送りされることになった。

◇版画部の独立

戦後の、わが国の西洋（現代）版画の隆盛は、影響・影刻と同様に昭和三十年代のはじめ頃から顕著になっていった。ことに一九五六年（昭和三十一年）に開催されたヴェネチア・ビエンナーレ版画部門で棟方志功がグランプリを受賞したことは、国内の版画家に多くの希望をもたらし、さらに世界に勇躍すべき道を拓いた。もちろん、日本の現代版画が世界的に注目されてゆく礎は、その少し以前から確かに広がっていて、その概要を見てゆくと、昭和二十八年に関野準一郎、浜口陽三、駒井哲郎、浜田知明らによって日本銅版画協会が結成され、日本人の精緻な版画技術が世界に知られる一つの契機となった。さらに海外からの招来展が続き、昭和二十九年に西洋近代創作版画展（ブリヂストン美術館）、同年ゴヤのエッチング展（東京国立博物館）が開催され、翌昭和三十年には現代アメリカ版画展が開催された。

日本国内で現代版画の隆盛が決定的となるのは、昭和三十二年に第一回東京国際版画ビエンナーレが開催されたことに大きく起因している。この日本で開催された国際版画展（コンクール）は、当時世界的に名を馳せていたルガノ国際版画展、シンシナティ国際版画展（ともに一九五〇年創設）、リュブリアナ国際版画展（一九五五年創設）に次ぐ第四の国際版画コンクールとして高く評価されてゆくことになる。

一陽会は、こうした現代版画の隆盛とはほぼ同時期に歩みを始めていて、絵画部の出品作品の内に、次第に版画作品の搬入例を多く見るようになっていた。

そして、一陽会の版画について特記すべきことは、昭和三十四年の第五回展に、スタンリー・ウィリアム・ヘイター（註5）主宰の版画研究所「アトリエ17」の作品が招来されて、特別陳列されたことである。これは、当時パリ青年ビエンナーレに版画作品を出品するなど、国の内外で幅広く活躍していた野間仁子の提唱によるものであっ

第49回展における版画部の展示。

た。

こうした前段を受けて、一陽会の版画部が歩みを始めるのは、昭和四十四年の第十五回展で野間傳治が会員（絵画部、第三十三回展以降版画部委員）となり、さらに版画作品で多賀堂岳（平成元年逝去）が昭和四十八年の第十九回展で会員（絵画部）に推挙されたことによる。そして、昭和五十七年の第二十八回展で田中正秋が版画部会員として推挙されて、一陽会版画部が名実ともに創作のジャンルとして独立することになった。以後、大森澪（昭和六十二年・第三十三回展で会員推挙、平成十一年退会）、古川晶弘（昭和六十三年・第三十四回展で会員推挙）、中西俊佳（平成三年・第三十七回展で会員推挙）、小澤美雪（平成十一年・第四十五回展で会員推挙）、池田美津恵、大木啓義（平成十二年・第四十六回展で会員推挙）というように、その基盤を広げている。

また、昭和六十三年に中西俊佳を中心に十一名の仲間が集って「愛媛一陽会版画会」が結成され、〝（版画会の）会員相互の研鑽の場として、また愛媛の現代版画の新しい発展に寄与することを目的に活動している〟との意気込みも高く、地方への広がりも見せている。

第三十五回展を目前にした第三十四回展の感想を、版画部のリーダーである野間傳治は次のような感慨を述べている。

版画部の会員は、漸増して来て幾年を経るのか。毎年発表される作品は、各個に視点が異なっているので、個展で鑑賞する様な統一された美感とは異なって来る。しかし、一陽展が育んで来た、美の認識は、版画部の作品にも現れて来ている。

出品作品全体を通じて作品に甲乙はつけがたい。版種それぞれに、特有の困難な技法がある。しかし、この難点を一歩一歩越えていくことで、技法に拘りがなくなり、自己の絵のイメージを豊かにして行けるものと信じている。

（野間傳治「私の感じた作品」「一陽会会報」第十七号　昭和六十三年十一月三十日）

◇地方別ブロックの確立 II

〔関東支部（関東ブロック―東京支部）〕

＊〔関東ブロックの展覧会・活動記録は巻末にまとめて掲載〕

一陽会本展（東京展）の膝元、東京首都圏に在住する、会員、会友、出品者の本展出品へ向けての研究や、相互の意思の疎通、情報交換を目的として発足し、発展してきたが、基本的には一都六県の関東圏を広く視野に入れて活動してきた。一陽会は、会の創立時から一貫して、地方支部活動を積極的に奨励・支援してきたこともあって、地方（関西支部、北陸支部、中部支部）での支部組織の確立と基盤の拡大が早く、会の創立からそう時間を経ずに地方組織が広がっていった。関東支部も、膝下の首都圏の内、神奈川、千葉、茨城の組織が充実し、独自の活動を行うようになり、それにともなって、対象とする地域を東京都一円と埼玉、栃木、群馬に及ぶ地域を視野に入れた活動に変わってきた。

将来にわたって、一陽会においては、ますます地方支部の充実・発展、活動の活発化が図られる筈であり、またそのことが、一陽会全体の活性化に繋がることには相違ないが、関東ブロックは、首都圏一体を合わせると、会全体の約半数の勢力を数える大家族であり、東京支部をはじめ、神奈川支部、千葉支部、茨城一陽会、埼玉グループ、栃木グループ、群馬グループが、それぞれ首都圏の各地方として活発に活動して、一体となって会全体を支えている。

関東支部（関東ブロック―東京支部）の活動の概要は、昭和三十年の会創立以来、一陽会本展の開催を中心に、昭和三十一年から一陽会春季展（昭和三十四年まで日本橋高島屋、昭和三十五年から横浜高島屋）を合わせて開催して来た。

昭和五十三年に千葉一陽会が設立されて同年から千葉一陽展がはじまり、昭和五十四年には、それまで懸案だった一陽会関東グループ展がはじまった。昭和五十五年には神奈川グループの活動も活発になり、この頃からまとまった動きが見られるようになった。また、関東ブロック一円を対象とした一陽会会員小品展（秀作小品展）が昭和四十六年から、一陽会会員作品展が昭和五十六年からはじまり、さらに、翌昭和五十七年からは、相互の研究促進と、意識の向上を目的として、「関東ブロック研究会」（関東支部研究会）が開催されるようになった。これは、日常の創作意識の向上と、創意のヒントを得ることを目的に、会外部から講師を招いて講話を拝聴し、講演のあと全員で討論会をおこなうというもので、林紀一郎、宗左近、三木多聞、ヨシダ ヨシエ各氏が、通算十四回にわたって講演している。

さらに、関東ブロック全体の創作上の研究会として、本展出品作品の下見会を、委員、会員の指導のもとでおこなった。また、関東支部選抜展（昭和五十二年から）、関東ブロック選抜展（昭和五十七年から）、関東支部秀作展（昭和六十年）、関東支部春季展（昭和六十一年から）が随時開催され、地域全域の創作者としての連帯と質の相互向上を目指してきた。

「千葉一陽会」は、毎年本展開催の前に千葉一陽展を行い、本展での一層の成果向上と新入作家の発掘と創作の向上を目指している。また、昭和五十五年には「神奈川グループ」が具体的

東京支部展（平成9年1月）の会場

なまとまりをみせて、神奈川一陽展が翌五十六年からはじまった。また、昭和六十一年頃から、茨城、埼玉などのグループがまとまった活動を見せ始めた。昭和六十二年には、一つの芽吹きとして注目すべき関東支部女流展が開催された。また千葉一陽会女流四人展（石川、鶴田、大久保、大北／平成五年）も開催されている。

そして、平成七年に、千葉一陽会、神奈川グループの支部への昇格を機に、関東支部を発展的解消して、東京首都圏、栃木、群馬の各グループを統括した「東京支部」、「千葉支部」、「神奈川支部」、そして茨城一陽会としてそれぞれ活動することになった。埼玉在住の作家は当面、東京支部を活動の場としている。

そして、茨城一陽展と一陽会群馬絵画グループ展が平成七年からはじまっている。

平成八年以降の「東京支部」（東京支部の展覧会・活動記録は春末にまとめて掲載）の活動は、関東ブロック研究会を引き継いだ東京支部研究会（本展出品作品の下見会）を開催し、常任委員、委員が指導をして本展に向けた研究助成をおこなっている。支部活動としての展覧会は、東京支部展、一陽会群馬絵画グループ展、一陽会版画部展、湘南一陽会グループ展が開催されている。

「千葉支部」（千葉支部の展覧会・活動記録は春末にまとめて掲載）は、昭和五十三年のグループ結成以来、関東ブロックの中で早くから独自の活動を確立していて、支部として活動をはじめた平成八年には千葉一陽展は第十九回を数え、一陽会千葉小品展、一陽会千葉会友選抜展、一陽会千葉同人展、と活発に活動していて、県内でのグループ展や、他の都県への積極的な出品が見られる。

千葉一陽展の会場で作品の講評をする勝一晃、北山泰斗の両常任委員。（平成5年6月）

「神奈川支部」（神奈川支部の展覧会・活動記録は春末にまとめて掲載）の平成八年以降の活動としては、神奈川一陽展の開催とその成果を、東京の本展で発揮することに大きく主眼が注がれている。神奈川一陽会作品ド見研究会も活発で年々成果を上げている。また、新しい表現、技法への研究も盛んで、一陽会版画部展にはジャンルを問わず支部所属の作家が出品している。そして、活動の領域が東京首都圏と重なることもあって、都内で開催されるグループ展などにも多く出品している。

茨城一陽会の前身「茨城グループ」が発足したのは昭和三十六年十月で、絵画の峯岸

神奈川支部の研究会活動（平成12年）

第5回土なかま彫塑展の会場（平成8年11月　於・東海ステーションギャラリー）

義太、益子昭雄、斎藤敏、彫刻の山崎猛、六崎緻光、丹下保が創立に参加した。その後、岩澤勇はかの仲間が加わり、昭和四十五年に「茨城一陽会」と改称した。平成七年の関東支部の発展的解消以来、「茨城一陽会」（会の展覧会・活動記録は巻末に年ごとまとめて掲載）は独自の活動を活発にさせて、第一回茨城一陽展（つくば美術館で開催）を同年に開催したのをはじめとして、この茨城一陽展を隔年開催し、茨城一陽展開催の翌年は茨城文化団体連合美術展（水戸市で開催）にグループで出品している。茨城県は伝統的に彫刻・工芸の盛んな地域で、ここでも、一陽会創立以来の彫刻部のよき伝統が茨城一陽会に息づいている。

春友彫刻の森・運動公園

［ホームページ］
http://homepage.mac.com/
zangoshow/ichiyo/

註1　「小川正隆」――（大正二四・一九二五―）東京大学を卒業。朝日新聞社に入社。長年学芸部美術担当記者として健筆をふるう。富山県立近代美術館館長を勤める。代表的な著書として「杉山寧」「現代日本画全集　高山辰雄」がある。

註2　「河北倫明」――（大正三・一九一四―平成九・一九九七）美術評論家。京都帝国大学を卒業。文部省美術研究所勤務、東京国立近代美術館次長を経て、京都国立近代美術館長を歴任する。代表的な著書として「青木繁」がある。

註3　「内部の小さな動揺」――近藤長三郎、小林内、鰺利彦、中田豊、綿引淳人の会員五人が、昭和四十二年九月五日に開催された緊急総会に出席せず、会の解散、即再出発の決議に加わらず、自動的に退会となった。（一陽会の解散）と、第十三回展の再出発）項で詳述。

註4　「オリオン社」――セールス・プロモーション、宣伝のプログラムと企画、催し物・展覧会などと企画、その業務を代行する会社で、当時、東京の他に、大阪、名古屋、福岡、札幌に支社があった。一陽会は早くからこのオリオン社内に事務所をおいていて、会員、会友、地方支部との連絡の拠点としていた。第二章で紹介した「一陽会マメ通信」もオリオン社から発送されている。また、関西支部、中部支部、長野支部で開催された地方展の会場設営、運営も、早い時期このオリオン社が関わっていた。さしずめ、現在の感覚でいうと（広告代理店）を想定すると妥当か。

註5　スタンリー・ウィリアム・ヘイター――一九〇一年ロンドンに生れる。ロンドン大学で科学を学ぶが、二六年版画家を志してパリに渡り、版画研究所「アトリエ17」を開設、銅版画の新技法の開拓に努めるが、第二次世界大戦中はニューヨークに移る。戦後パリにもどりアトリエを継続し、後進の指導にあたる。細描による多彩な表現の銅版画の世界を開く。

第4章

経済高揚期の一陽会

［第二十回展・昭和四十九年
～第三十三回展・昭和六十二年］

名古屋・名鉄百貨店のショーウィンドウ

（写真提供：沢 オイ）

鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎の三人が審査会場の中央に着座する。

第4章　経済高揚期の一陽会

第二十回展（昭和四十九年・一九七四年）～第三十三回展（昭和六十二年・一九八七年）

一陽展（東京本展）及び会員・会友推挙　授賞の記録

昭和四十九年（一九七四）

地方別ブロック

・六月、今後の会の連携を計るため、各地方別ブロックを明確化し、世話人を置く（於・日本美術家会館会議室）。

委員制の導入

＊六月、会員・萩野康児（絵画）逝去。

・七月、委員制を出席会員の同意を得て確立し、次のメンバーにより発足（於・日本美術家会館会議室）。

（絵画部）鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎、米良道博、片桐忠男、山谷錬一、勝一見、小川哲郎、北山泰斗、大石可久也、萩原楽一、田所満雄、佐野儀雄。

（彫刻部）浅野孟府、植木力、中村輝、山崎猛。

第二十回展覧会

（九月二十二日～十月十日　東京都美術館）

創立二十周年記念展

（会員推挙）河野日出雄、岬一郎、神部修一、大場吉美、高岡徹（以上絵画）。

（会友推挙）古谷吉三、武田太郎、田中繁雄、船越一人、判三教、國重陽子、木村保夫、斎藤孝利、河井二郎、吉川俊夫、宮口親、渡辺喜久蔵（以上絵画）、植木舜一、小山重之、佐光庸行、内田源一、中村明二（以上彫刻）。

（受賞者）◎**一陽賞**　古谷吉三（絵画）、成瀬真澄（彫刻）　◎**青麦賞**　馬場尚子（絵画）、飯村史郎（彫刻）　◎**会友賞**　菊池豊（絵画）、松本進（彫刻）　◎**特待賞**　雨谷達夫、山内美宏、奥山三郎、小川孝、小島鐵男、斎藤敏、杉山司、滝沢浩司、中鍋強、西沢伊太郎、平野正毅、本吉誠一郎、山口清子、八木沢恒蔵、鈴木雅弘（以上絵画）、木村巌、大和田正人、松本鉄太郎、篠原洋、天木房子、加納明文（以上彫刻）。

◇大阪・天王寺美術館、金沢・名鉄丸越百貨店（十月）、名古屋・名鉄百貨店、長野・信濃美術館、札幌・五番館（十一月）で開催。各会場で同時に、会員小品展開催。

＊会員・今井由緒子（彫刻）退会。

＊五月、会員・柳原謙三（絵画）、加藤博二（彫刻）逝去。

昭和五十年（一九七五）

第二十一回展覧会

（九月二十三日～十月十日　東京都美術館）

（会員推挙）池田善重、大山美信、新井田捨策（以上絵画）、阿部雪子、多治見風昭、岩澤勇、松本進（以上彫刻）。

（会友推挙）馬場尚子、奥山三郎、小島鐵男、鈴木雅弘、平野正毅、白川晃、藤井正威、滝沢浩司（以上絵画）、松本鉄太郎、成瀬真澄、天木房子、小宅淑子（以上彫刻）。

（受賞者）◎**一陽賞**　松倉稔輔（彫刻）　◎**青麦賞**　小松富士子、岩瀬徳矢（以上絵画）、大和田正人（彫刻）　◎**会友賞**　伊藤公二、碓田順彦（以上絵画）、八木ヨシオ、内田源一（以上彫刻）　◎**特待賞**　雨谷達夫、高橋栄二郎、大島満男、山内美宏、田中正秋、指澤紀子、上嶋敏男、山門直三、石崎義政、島倉哲郎、高橋典子、平林和郎（以上絵画）、中村ミナト、渡辺勝彦、篠原洋、小田部実、酒井章夫、加納朋文（以上彫刻）。

◇大阪・天王寺美術館、札幌・五番館（十月）、名古屋・名鉄百

貨店、長野・信濃美術館（十一月）で開催。各会場で同時に、会員小品展開催。

＊会員・高橋正衛、関口昌孝退会。会友・ふじい忠一（彫刻）退会。

昭和五十一年（一九七六）

第二十二回展覧会

（九月二十一日～十月八日　東京都美術館）

（委員推挙）横沢英一（彫刻）

（会員推挙）飯田庸夫、菊池豊、武田太郎（以上絵画）、福田順忠、高木和文、八木ヨシオ（以上彫刻）。

（会友推挙）石川三知代、石崎義政、岩瀬悠矢、小松富士子、島倉哲郎、高橋栄二郎、土嶋敏男、中嶋強、桝澤紀子、三吉亮久、山内美宏（以上絵画）、松倉藍輔（彫刻）。

（受賞者）◎一陽賞　土嶋敏男（絵画）、勝又豊子（彫刻）　◎会友賞　船越一人、松政圀子（以上絵画）、福田順忠（彫刻）　◎特待賞　加須屋万美、平林和郎、西沢伊太郎、三阪雅彦、中村昭子、曽根延子、中田實、西倉一男、作田外喜雄、田中正秋（以上絵画）、中村ミナト、小坂和美、大越二郎（以上彫刻）　◎奨励賞　矢島良夫、葛巻さと子、森下正夫、中嶋美恵子、加藤安佐子、大島満男、越井田日出麿、高橋典子、舘野弘、やまぐちかずお、鵜見繁男、坂井幸司、中村仁、鈴木利行（以上絵画）、横部敏之、篠原洋（以上彫刻）。

◇大阪市立美術館、札幌・五番館（十月）、金沢・名鉄丸越百貨店、名古屋・名鉄百貨店、長野・信濃美術館（十一月）で開催。

＊会友・吉谷吉三（絵画）、児嶋務、松本鉄太郎（以上彫刻）退会。

昭和五十二年（一九七七）

第二十三回展覧会

（九月二十一日～十月八日　東京都美術館）

（会員推挙）久保田正明、小林源次、佐久川圀子、高橋茂、兎月人、平賀正勝、渡部貢（以上絵画）。

（会友推挙）加藤安佐子、佐伯武彦、田中正秋、平林和郎、小川孝、高橋典子、大島満男、南谷達夫、山口清子、西沢伊太郎、山門直三、中田實、宮森王（以上絵画）、木村廣、勝又豊子、太和田正人、渡辺勝彦、湊谷達平、今美男、篠原洋、土屋瑞穂（以上彫刻）。

（受賞者）◎一陽賞　三阪雅彦（絵画）、高橋朗（彫刻）　◎青麦賞　岡崎昭夫、舘野弘（以上絵画）、幾山芳男、木村廣（以上彫刻）　◎オベリスク賞　小池郁男（彫刻）　◎会友賞　小松富士子（絵画）、植木舜一（彫刻）　◎特待賞　浅野健、大川きよ子、加須屋万美、国見健子、杉山司、末田光一、曽根延子、中村昭子、西野松夫、鵜井田日出麿、森下正夫、保田穂子（以上絵画）、津野充聡、加納朋文、富山省三、立和名宏安（以上彫刻）　◎奨励賞　石川賢、糸山文子、江川扶美子、海老沢千里、奥谷卓朗、衣石季志史、佐藤正実、白石武、鈴木利行、上屋マサ、坪井正光、古屋勉、安村賢一、矢島良夫、山田秋一（以上絵画）、中村義孝、町井美奈子、鈴木史子、花田正盛、西田亨（以上彫刻）。

◇大阪市立美術館、名古屋・名鉄百貨店（十月）、札幌・五番館、長野・信濃美術館（十一月）で開催。

昭和五十三年（一九七八）

第二十四回展覧会

（九月二十七日～十月十二日　東京都美術館）

昭和五十四年（一九七九）

第二十五回展覧会

〔委員推挙〕　田辺栄次郎（絵画）

〔会員推挙〕　碓田順彦、小松富士子、酒井幸雄、玉川浩、土嶋敏男（以上絵画）、土屋瑞穂（彫刻）。

〔会友推挙〕　江川扶美子、大川きよ子、岡崎昭夫、加須屋万美子、鈴木利行、曽根鉦子、舘野弘、中村昭子、穂井田日出磨、松下裕子、三阪雅彦、森下正夫（以上絵画）、窪田政隆、有賀典子、鈴木史子、加納朋文（以上彫刻）。

〔受賞者〕　◎**一陽賞**　坪井正光（絵画）　◎**青麦賞**　葛巻さとこ（絵画）、富山省三、立和名宏安（以上彫刻）　◎**会友賞**　土嶋敏男（絵画）、松倉敬輔（彫刻）　◎**オベリスク賞**　松本進（彫刻）　◎**特待賞**　石川賢、海老沢千里、北嶋正明、清水義行、末田光一、中嶋美琥子、浜田清、細川尚、矢島良夫、保田頌子、安村賢一（以上絵画）、小林達也、星眞子、津野充聡（彫刻）　◎**奨励賞**　青木みちあ、大森美重子、尾島守、越智修、沖正治、神崎元志、国見健子、古曽成樹、小山佐敏、沢野雅美、仙波浪、田畑武雄、寺島広美、西宮房子、山川武夫、綿田克巳（以上絵画）、笠井啓子、小橋隆三、小野青次（以上彫刻）。

◇大阪市立美術館（十月）、札幌・五番館、名古屋・名鉄百貨店、長野・信濃美術館（十一月）で開催。

＊会員・国本克己、宮本清、会友・平口幸枝（以上絵画）退会。

（九月二十七日～十月十二日　東京都美術館）

創立二十五周年記念展

〔会員推挙〕　河井一郎、神林茂、國重陽子、小島織男、後藤泰洋、斎藤富蔵、白川晃、鈴木雅弘、林一美、羽三教、山林文子、ロウエル恒子（以上絵画）、今井田一巳、中鶴嘉雄、林田滋、森島昭道（以上彫刻）。

〔会友推挙〕　海老沢千里、奥谷章則、葛巻さとこ子、国見健子、末田光一、杉山司、坪井正光、中嶋美琥子、矢島良夫、保田頌子、安村賢一、石川賢、作田外喜雄（以上絵画）、高橋朗、津野充聡、富山省三、西田亨（以上彫刻）。

〔受賞者〕　◎**一陽賞**　浜田清（絵画）　◎**青麦賞**　小山佐敏（絵画）、吉村典幸、津野充聡（以上彫刻）　◎**会友賞**　由内美宏（絵画）、登坂真澄（彫刻）　◎**会員努力賞**　五十嵐二朗、高橋甲（以上絵画）、高嶋文彦（彫刻）　◎**会友努力賞**　田中繁雄（絵画）、林田滋（彫刻）　◎**オベリスク賞**　山崎猛（彫刻）　◎**特待賞**　青木みちあ、浅野健、大森美重子、越智修、小出順子、高田節子、細川尚、やまぐちかずお、吉田光雄（以上絵画）、斎藤照子、番匠建次、笠井啓子（以上彫刻）　◎**奨励賞**　竹内斗望、和佐一三、有賀邦夫、北嶋正明、古曽成樹、小松興重、生地太久、神藤偉司、山川武夫、竹村晴夫、長尾清春、二宮久義、野中春士、府川貢、森田多美子（以上絵画）、中村義孝、桜井寿人、星眞子、森山良民（以上彫刻）。

◇大阪市立美術館、札幌・五番館（十月）、名古屋・名鉄百貨店、長野・信濃美術館（十一月）、飯田市教育文化センター（十二月）で開催。

＊会員・河野日出雄、棟方寅雄、宮川慶輔、小野忉郎（以上絵画）、蜜波維伸二（彫刻）、会友・渋谷三郎（彫刻）退会。

＊十二月、委員・野間仁根（絵画）逝去。

昭和五十五年（一九八〇）

「一陽会会報」創刊。
＊二月、会員・大野春代（彫刻）逝去。
＊九月、会員・指田由米（絵画）逝去。

第二十六回展覧会

（九月二十六日～十月十二日　東京都美術館）
〔会員推挙〕岩永勝彦、岡田爛生、加藤安佐子、木村保夫、佐々木吾郎、杉山汎、田中繁雄、滝沢浩司、野中みち子、平野正毅、水谷喜美子、山田忠（以上絵画）、植木舜一（彫刻）。
〔会友推挙〕青木みちゑ、浅野健、岡崎洋児、土師修、北嶋正明、北村修、古曽成樹、小山佐敏、長尾清春、西倉一男、浜田清、細川尚、やまぐちかずお（以上絵画）、吉村典幸、小田部実、番匠建次（以上彫刻）。
〔受賞者〕◎一陽賞　水野勲（絵画）、星眞子（彫刻）◎青麦賞　細川尚（絵画）、島田洋子（彫刻）◎野間賞　土鳴敏男（絵画）◎会友賞　三阪雅彦（絵画）、大和田正人（彫刻）◎特待賞　有賀邦夫、安藤能旦、糸山文子、小塩達蔵、小出順子、高田節子、鴇田喜美、ドマ・イシュトヴァン、秀島有子、丸山節子、吉田光雄、大森美枝子、和田一三（以上絵画）、伊藤正人、番匠建次、中根達矢（以上彫刻）◎奨励賞　大木啓義、小木曽雅子、鹿又保子、神崎元志、斎藤敏、佐藤知臣、清水裕、白石寛子、生地太久、根川秀人、谷秀雄、竹内斗望、辻本光彦、中村仁、中西俊佳、浜口知暁、福家省造、広瀬積、平野孝之、宮副晴美、森田多美子、山下潤志（以上絵画）、松沢登美雄、笠井啓子、石井正美、小田部実、森山良民（以上彫刻）◎安田火災奨励賞　小山佐敏、浜田清、吉田光雄（以上絵画）、小林達也（彫刻）。

昭和五十六年（一九八一）

第二十七回展覧会

◇大阪市立美術館、札幌・五番館（十月）、名古屋・名鉄百貨店、長野・信濃美術館（十一月）で開催。
＊委員・横沢英一、会員・丸山暎（以上彫刻）、山田首、鈴木国威、松下明治、野間佳子（以上絵画）、会友・吉村外人（絵画）、元木房子（彫刻）退会。
＊一月、会員・丹治伊三郎（絵画）逝去。
（九月二十日～十月六日　東京都美術館）
〔会員推挙〕石川三知代、佐川文子、三阪雅彦（以上絵画）、松倉藍輔、木村曠（以上彫刻）。
〔会友推挙〕有賀邦夫、糸山文子、辻本光彦、森田多美子、吉田光雄（以上絵画）、大森澪（版画）、小林達也、星眞子、笠井啓子、中村義孝、町井美奈子（以上彫刻）。
〔受賞者〕◎一陽賞　吉田光雄（絵画）、伊藤正人（彫刻）◎青麦賞　中村義孝（彫刻）◎野間賞　萩原宗晃（絵画）◎オベリスク賞　髙嶋文彦（彫刻）◎会友賞　館野弘（絵画）、富山省三（彫刻）◎安田火災奨励賞　海老沢千里、坪井正光（以上絵画）◎特待賞　安藤能旦、栗原清司、谷口あつ子、塚崎もとえ、鴇田喜美、長谷川清晴、浜口知暁、秀島有子（以上絵画）、山川武夫（版画）、安見悦子、都留由子（以上彫刻）◎奨励賞　尾島守、小田勝、川辺嘉章、小泉晶子、富樫貞平、中本光省、新村則一、畠中陽一、広瀬積、平田慎一、平野孝之、松村一夫、吉村雅利（以上絵画）、古川晶弘（版画）、高木一郎、小林一夫（以上彫刻）。
◇大阪市立美術館（十月）、札幌・五番館、名古屋・名鉄百貨店、

昭和五十七年（一九八二）

第二十八回展覧会

長野・信濃美術館（十一月）で開催。
＊会員・小出泰弘、峯岸義太（以上絵画）。会友・小宮惣太郎、島倉哲郎、高橋典子、平林和郎（以上絵画）、佐光康行、田端進（以上彫刻）退会。
（九月二十一日～十月六日　東京都美術館）
（会員推挙）石川雪、石崎義政、海老沢千里、杉山司、曽根鉦子、舘野弘、坪井正光、浜田清（以上絵画）、田中正秋（版画）、勝又豊子、中村明二（以上彫刻）。
（会友推挙）安藤能巨、小木曽雅子、小出詩子、高田節子、谷口あつ子、塚崎もとえ、鍋田喜美、中村仁、水野勤（以上絵画）、古川晶弘、山川武夫（以上版画）、小林一夫（彫刻）。
（受賞者）◎**青麦賞**　谷口あつ子（絵画）、東修二（彫刻）　◎**野間賞**　沢オイ（絵画）　◎**オベリスク賞**　六崎敏光（彫刻）　◎**会友賞**　小山佐敏（絵画）、吉村典幸（彫刻）　◎**安田火災奨励賞**　鍋田喜美、中村昭子（以上絵画）　◎**特待賞**　泉谷淑夫、小田勝、川辺嘉章、栗原清司、竹村晴夫、富樫貢平、畠中陽一、長谷川清晴、浜口知暁、平田慎一、府川貢、丸山節子（以上絵画）、高橋しのぶ、野口辰夫（以上彫刻）　◎**奨励賞**　和泉洸、岡村順一、小塩達磯、卓園洋子、佐藤知臣、白石寛子、渡川秀人、鈴木武樹、高橋和夫、常世田喜美子、永岡章、野村幸子、野呂園男、幡谷フミコ、橋本紀夫、松井勝二郎、水谷仁美、山本桂右、宮副晴美、渡辺美津男、柳井弘（以上絵画）、池田美津恵、三崎洋一（以上版画）、中牧一二美、和田正義、篠原みとり（以上彫刻）、勝谷子ヨ（絵画）。

◇大阪市立美術館（十月）、名古屋・名鉄百貨店、長野・信濃美術館（十二月）、高知県郷土文化会館（翌年一月）で開催。
＊会友・藤井正蔵、本多弘（以上絵画）退会。
＊十一月、会員・武田太郎（絵画）逝去。
＊三月、委員・根本土竜（彫刻）、会友・渋谷達平（彫刻）逝去。
（九月二十一日～十月六日　東京都美術館）
（会員推挙）小山佐敏、中村昭子、穂井田日出磨（以上絵画）、登坂真澄、有賀典子、大和田正人、渡辺勝彦（以上彫刻）。
（会友推挙）川辺嘉章、栗原清司、竹村晴夫、長谷川清晴、浜口知暁、秀島有子、平田慎一（以上絵画）、高木一郎、舘留由子、森山良民（以上彫刻）。
（受賞者）◎**一陽賞**　富樫貢平（絵画）、赤穂治（彫刻）　◎**青麦賞**　畠中陽一（絵画）、松井純尚（彫刻）　◎**野間賞**　棚瀬修次（絵画）　◎**オベリスク賞**　石黒功（彫刻）　◎**会友賞**　高橋朗（彫刻）　◎**安田火災奨励賞**　上師修（絵画）、舘留由子（彫刻）　◎**特待賞**　岡村順一、小田勝、佐藤知臣、生地太久、槻川秀人、平野孝之、丸山節子（以上絵画）、榛葉俊男、渕岡秀樹、中牧一二美（以上彫刻）　◎**奨励賞**　久保幸夫、斎藤茂、白石武、鈴木武樹、高橋和夫、田畑富彦子、中田耕造、幡谷フミコ、松井勝二郎、夫伏純市（以上絵画）、池田美津恵、原田幸夫（以上版画）、桜井邦彦、神山み江子（以上彫刻）。
◇大阪市立美術館（十月）、名古屋・名鉄百貨店（十一月）で開催。

昭和五十八年（一九八三）

第二十九回展覧会

昭和五十九年（一九八四）

第三十回展覧会

＊会員・市川勉、今村春吉、林一英（以上絵画）、鞏悦三（彫刻）、会友・岩瀬徳矢、酒井又兵衛、西井義隆、森下正夫（以上絵画）退会。

＊会員・神山勝（彫刻）、会友・小出詢子（絵画）逝去。

（九月二十七日～十月十三日　東京都美術館）

〔委員推挙〕　五十嵐二朗、荻原宗晃、森秀雄（以上絵画）、高嶋文彦（彫刻）。

〔会員推挙〕　大川きよ子、小川孝、国見綾子、斎藤孝利、中田實、萩中幸雄、土師修、松下絹子、吉川俊夫、吉田佳意子（以上絵画）。

〔会友推挙〕　岡村順一、小田勝、斎藤茂、佐藤知臣、生地太久、白石寛子、白石武、鈴木武樹、硯川秀人、高橋和夫、富樫貢平、畠中陽一、平野孝之、府川貢、丸山節子（以上絵画）、中西俊佳（版画）、伊藤正人、和田正義（以上彫刻）。

〔受賞者〕　◎**一陽賞**　泉谷淑夫（絵画）、楠藤俊男（彫刻）　◎**青麦賞**　高橋和夫（絵画）、菊地由美子（彫刻）　◎**野間賞**　五十嵐二朗（絵画）　◎**記念会員賞**　大場吉美、小山佐敏（以上絵画）、小池郁男（彫刻）　◎**記念会友賞**　吉田光雄（絵画）、星眞子（彫刻）　◎**記念特待賞**　安達弘章（絵画）、東修二（彫刻）　◎**安田火災奨励賞**　谷口あつ子（絵画）、小林一夫（彫刻）　◎**野外彫刻賞**　高嶋文彦（彫刻）　◎**特待賞**　大伏純市、浮田正樹、小畑恭子、加藤圭子、中田耕造、渡辺美津男（以上絵画）、大木啓義、三崎洋一（以上版画）、谷田喜美代、榊岡秀樹、内田美（以上彫刻）　◎**奨励賞**　岡本容子、金子孝子、小泉晶子、五十嵐公

昭和六十年（一九八五）

第三十一回展覧会

江、椎名政治、塩川慧子、田島正子、橋本紀夫、福家省造、藤本元美、水谷仁美（以上絵画）、中根達矢、敦賀美如（以上彫刻）。

◇大阪市立美術館（十月）、名古屋・名鉄百貨店、石川県立美術館（十一月）で開催。

＊会員・中村亮一郎、小山佐敏、村上美男、石川誉、斎藤光子（以上絵画）、山林文子（版画）、会友・岡崎洋児、作田外喜雄（以上絵画）退会。

＊四月、会員・井黒四郎（絵画）逝去。五月、委員・片柳忠男（絵画）逝去。

（九月二十七日～十月十三日　東京都美術館）

〔委員推挙〕　小池郁男（彫刻）。

〔会員推挙〕　高嶋栄二郎、加須屋万美、細川尚、吉田光雄（以上絵画）、高橋朗、番匠建次（以上彫刻）。

〔会友推挙〕　加藤圭子、塩川慧子、神崎元志、松井勝二郎、福家省造、安達弘章、大伏純市、橋本紀夫、蜂谷史子、藤本元美、泉谷淑夫、中田耕造、浮田正樹、金子孝子、渡辺美津男、小泉晶子（以上絵画）、三崎洋一（版画）、榊岡秀樹（彫刻）。

〔受賞者〕　◎**一陽賞**　安達弘章（絵画）　◎**青麦賞**　加藤圭子（絵画）、吉田里絵（彫刻）　◎**野間賞**　浜田清（絵画）　◎**会友賞**　谷口あつ子、鍋田喜美（以上絵画）、番匠建次（彫刻）　◎**安田火災奨励賞**　江口標子、畠中陽一（以上絵画）　◎**特待賞**　和泉洗、岡本容子、小畑恭子、清水正男（以上絵画）、張子隆、海野健治、太田ひろ子（以上彫刻）　◎**奨励賞**　新居田公子、泉宏、小林健志、東信昭、安田淳、竹氏広、入口ふじ子、洲崎幸七（以

昭和六十一年（一九八六）

第三十二回展覧会

上絵画）、上原郁巳（版画）、谷津喜美代、石黒晉（以上彫刻）。

◇大阪市立美術館（十月）、名古屋・名鉄百貨店（十一月）で開催。

＊委員・山谷鍬一、会員・小川孝、会友・西沢伊太郎、山口清子（以上絵画）退会。

＊三月、会員・岡本耕典（絵画）逝去。

（九月十八日～十月三日　東京都美術館）

（会員推挙）　糸山文子、鍋田喜美、谷口あつ子、山内美宏（以上絵画）、今英男、内田源一、津野充聡、星眞子（以上彫刻）。

（会友推挙）　新居田公子、岡本容子、尾島守、小畑恭子、久保幸夫、勝谷チヨ、定岡三紀、神藤偉司、田島正子、常世田喜美子、野村幸子、平野真佐子（以上絵画）、大木啓義（版画）、松井鈴尚、谷津喜美代（彫刻）。

（受賞者）　◎**一陽賞**　張子隆（彫刻）　◎**青麦賞**　定岡三紀（絵画）、金野恵（彫刻）　◎**野間賞**　中村秀雄（絵画）　◎**会友賞**　安藤能豆（絵画）、中村義孝（彫刻）　◎**安田火災奨励賞**　小林健志（絵画）、海野慶治（彫刻）　◎**特待賞**　北村吉郎、清水正男、洲崎幸七（以上絵画）、池田美津恵（版画）、石黒晉、河口伸一、坂田恒雄、篠原みとり（以上彫刻）　◎**奨励賞**　梅田剛子、大久保綾子、奥村佳弘、北嶋三智子、下村沖雄、竹氏広、野村秀久、須田良雄、半澤てる、松館祐親子、松村一夫、松本京子、安田淳、山員芳枝（以上絵画）、内田英、田中英次（彫刻）　◎**野外彫刻賞**　林田滋。

◇大阪市立美術館（十月）、名古屋・名鉄百貨店（十一月）で開催。

＊会員・松倉藍輔、勝又豊子（以上彫刻）、会友・長尾清春、保田

昭和六十二年（一九八七）

第三十三回展覧会

頃子、松井勝二郎、犬伏純一（以上絵画）、都留由子（彫刻）退会。

＊十月、会員・大塚伊次（絵画）逝去。

＊九月、会員・高橋茂（絵画）逝去。

（九月十八日～十月三日　東京都美術館）

（会員推挙）　青木みち子、雨谷達夫、安藤能豆、末田光一、府川貢、森田多美子（以上絵画）、大森澪（版画）、小林達也、中村義孝（以上彫刻）。

（会友推挙）　和泉洗、江口穣子、小林健志、清水正男、洲崎幸七、須田良雄、田方淑子、竹氏広、松村一夫、水谷仁美、安田淳（絵画）。池田美津恵（版）。内田英、極藤愛男、張子隆（彫刻）。

（受賞者）　◎**一陽賞**　北村吉郎（絵画）、藤垣桂子（彫刻）　◎**青麦賞**　東信昭（絵画）、野口政子（彫刻）　◎**安田火災奨励賞**　大山美信、鈴木力（以上絵画）　◎**野間賞**　鴨田猛（絵画）　◎**会友賞**　小林達也（彫刻）　◎**特待賞**　大久保綾子、玉田健二、松館祐親子（以上絵画）、太田清、高橋将典、滝川照吉（彫刻）　◎**奨励賞**　赤崎正代、岡野哲也、草野万寿美、斉藤美子、下村沖雄、辻よしみ、二宮久義、野村秀久、萩原舞作、半澤てる、福田利明、古川美保子、本間くみ、村田広人（以上絵画）、早川恭子（版画）、高橋しのぶ、村山悦子（彫刻）　◎**野外彫刻賞**　上屋陽穂。

◇大阪市立美術館（十月）、名古屋・名鉄百貨店（十一月）で開催。

＊会員・加藤安佐子（絵画）、高橋朗、中村明二、林田滋、会友・笠井啓子（以上彫刻）退会。

＊会友・中嶋正治（絵画）逝去。

旧東京都美術館の審査会場にて、前列右から高岡徳太郎、荻野康児、野間仁根、山谷鉄一、田辺栄次郎、その左奥沢田正太郎。荻野の後方北山泰斗。

◇委員制の導入

第十三回展（昭和四十二年）の直前に開かれた緊急会員・会友会議で、一陽会は、鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎の判断で一度解散し、改めて、三人の意思と、会議に出席した会員、会友の総意で会は再結成された。その詳しいいきさつは前章で触れた通りだが、この騒動の根幹のところで燻り続けていた三人の創立会員の危惧は、まだ解消されないままで棚上げになっていた。……三人の創立会員の危惧とは、つまり、毎年、会員、会友が増え続けていて、確実に会組織は大きくなっている。創立会員が団結して集団指導体制を維持してきているとはいえ、新旧の別はあっても会員同士の間では建前の上では同等である。集団・団体組織の常の習いとして、明確な中核がない状態が長く続くと、些細な意見の相違でもって簡単に組織が割れてしまう。早く強力な指導体制を築き上げないことには会の将来に関わる。……この、焦慮といってもいい三人の創立会員の思いは、次第に明確な意思となって動き始めた。

昭和四十七年五月四日、午後三時から都内（こけし屋）に、創立会員と事務所、会務に携わる会員十二名が集った。顔触れは、野間仁根、高岡徳太郎、荻野康児、米良道博、植木力、山谷鉄一、片柳忠男、中村秀雄、小川哲郎、萩原楽一（光親）、北山泰斗、勝一晃。鈴木信太郎は当日所用で欠席。

この席で、高岡から改めて委員制の導入についての意見があり、即座に皆が諒承し、委員制設立に踏み切ることになった。正式には六月十五日に開催する総会で決定することにし、この席を《委員会》とし、早速基本案が一同に示された。

〔相談役〕　鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎。　（委員と同等の待遇）

〔委　員〕　荻野康児、米良道博、山谷鉄一、片柳忠男、小川哲郎、萩原楽一（光親）、北山泰斗、勝一晃、大石

動物園公募の児童画の審査にあたる一陽会の会員。右手前から、萩野康児、片柳忠男、野間仁根、左端長谷川三千春。

可久也、（以上絵画）。
植木力、浅野孟府、中村輝（以上彫刻）。

○役割

運営委員　小川哲郎、萩原楽一（光親）、北山泰斗、勝一晃、植木力、中村輝。＊運営委員は事務局と連絡を取りつつ会の運営にあたる。

・来良道博、大石可久也は関西の運営にあたる。

・他の委員、相談役は運営委員会に全面協力する。

＊

昭和四十七年六月十五日、一陽会はこの五月四日の〈委員会〉での協議を受ける形で、対話形式の総会「懇話会」を開催した。

議題は前年の本展及び地方展の報告から支部の情況説明へと進んだが、議題の中心は「委員制の導入」についての説明だった。この総会を前に、鈴木、野間、高岡の三人の相談役（五月四日の会議の結果、正式名称という扱いになっていた）は、会を通じて意見書を送付していた。その要旨はおおよそ次のようなものだった。

「大所帯となった一陽会を能率よく統括し、運営してゆくには委員制を確立しなければならない。今年が無理にしても二、三年のうちには必ず必要になる。したがって、自分たち相談役三人と会の事務所とで、委員制設置に向けて準備をすすめている。会員、会友諸氏におかれては、よろしくご諒承・賛同して欲しい。」という内容で、相談役、委員の紹介とともにその役割を発表した。

総会では、一部大阪からの会員が委員制の不服撤回をもとめたが、〈委員会〉（五月四日）で全員一致で決定されたことであるとして、異議却下、委員制度の導入が承認された。

六月十五日の総会「懇話会」で承認された委員制の導入案は、第二十回展の直前の昭和四十九年（一九七四）七月に日本美術家会館会議室で開催された会員会議で正式に承認され、発足した。

「懇話会」での承認から正式発足まで実に二年余の時間を置いている。この二年間の間に一体どのような議論が重ねられ、どのようなやり取りがあったのかは詳細を伝えていないが、ともあれ委員のメンバーは次の通りに発表された。

〔委員〕　鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎、来良道博、片柳忠男、山谷鉄二、勝一晃、小川哲郎、北山泰斗、大石可久也、萩原楽一（光親）、田所満雄、佐野儀雄（以上絵画）。
植木力、浅野孟府、中村輝、山崎猛（以上彫刻）。

ここで付記しておかなければならないのは、創立会員で、昭和四十七年の時点で当然名前が上がっていた萩野康児が、正式に委員のメンバーが発表される一ヶ月前に、会員のままで逝去している。そして、当初名前が上がっていなかった田所満雄、佐野儀雄、彫刻の山崎猛が委員として加わり、会の運営に加わることになった。

こうして一陽会は、強い指導体制を確立してより強固な美術公募団体としての地保を築くことに、邁進し始めた。

懸賞児童画の審査をする左奥から2人目荻野康児，野間仁根，高岡徳太郎。

より多くの仲間を募り、より強固な会の運営組織を作り上げ、少しでも大きな発表の場を確保して、さらに多くの仲間を募る……。この時期（昭和四十年代の後半から五十年代にかけて）、一陽会に限らず、春夏秋冬上野の森を舞台に美を競う美術公募団体はこぞって、自己拡張に奔走した。それは、あらがいようのない奔流に身を委むような、発表の場としての団体展の存続を賭した、余分の選択肢のない道程であった。いきおい入落選の審査の基準がゆるくなり、会友、会員が増え、挙げ句、展示内容の質の低下を新聞の学芸欄をはじめとする美術ジャーナリズムが酷評するという、一見負の連鎖が深まりを増していった。その背景にあったのは、経済の得体も知れない高揚とそれに伴う価値観の多様化という、のちに、嘘しようのない後遺症で国中が辛吟することになる、バブル経済の発進の時期であった。

第三章（◇価値観の多様化の時代と一陽会）でも触れたように、海外からの美術文化の招来が常態となり、新聞社の文化事業の売り物として、国公立の美術館や全国各地の百貨店・デパートで泰西名画を中心とした展覧会が日常的に開催されるようになると、マスコミ（新聞・雑誌・テレビ報道）に先導された美術に関心を持つ耳目が、一挙に上野の森から彼岸に移ってしまうことは、どうにもあらがいようのないことだったし、さらに、昭和四十年代の始めから好調な経済を背景に伸張してきていた美術商が、作家の生存権を決定的に掌握してしまう美術市場をこの時期に確立してしまった、という状況にあった。

そして、美術公募団体の専権事業であり使命とされていた、新人作家の発掘、登竜門としての役割さえも、有力な公募コンクールの相次ぐ出現で、だいぶん削がれてしまったというのが、昭和四十年代後半から五十年代のはじめ頃にかけての、美術公募団体を取り巻く状況であった。

かつて、東郷青児が戦後の二科会を舞台に果たそうとしていた「見せる展覧会」としての事業性も、また文展・帝展、白馬会、二部展（在野、二科の前身）以降、良くも悪しくも作家の生存権を左右してきた画壇の権威も、ひいては新人作家の登竜門としての役割さえも、この時期希薄なものになってしまっていた、というのが実情だった。

先に引いた植村鷹千代の指摘（「公募展再興のための一つの提言」）のとおり、「なお公募団体の質的向上への内部努力を強く喚起する」ものの、一概に「公募展を責められない事情がある」、というのはまさにこのことであって、美術公募団体の是非を言う場合、まずこれらの状況を想念に置いておくべきだろう。……作品発表の場を確保し続けるために、そして美術公募団体として存続してゆくために、美術公募団体は独自に存続・自立の方策を探ってゆくことになる。……こうして、美術公募団体を取り巻く状況をほとんど斟酌することなく、あくまでも展覧会場の質の低下を糾弾し続ける美術ジャーナリズムとの乖離が、この時期から次第に顕著になってゆく。

◇第二十一回展を新東京都美術館で開催

さらに、美術公募団体がこぞって会勢拡大に奔走せざるを得ない事態が、昭和四十年代のはじめから進行していた。大正十五年（一九二六）に開館し、一陽会が第四回展（昭和三十三年）から会場として使用していた東京都美術館の建て替え、新東京都美術館の建設構想が持ち上がっていた。

開館以来四十年を経た時点（昭和四十年）で、九十八団体が四季折々にひしめき合い、さらに参入希望の団体が増え、既に会場を借用している団体もそれぞれ組織拡大という状況にあり、各方面から抜本的な現状の改善を求める要望が寄せられるようになっていた。

東京都は早速、東京都美術館運営審議会を通じて、使用実態調査をおこない（建築家で当時東京工大教授の清家清に調査を委嘱）、結果「構造的にも機能的にも今日の時代には不適格」という答申が出された。

答申を受けて、昭和四十三年五月十六日に建設準備委員会［註1］が早々と発足した。

正式に建設準備委員会が発足してしまえば、各団体の最大の関心事は、出来得る限り既得権を生かして少しでも有利な条件で会場を確保することであり、そのためには新美術館の完成までに少しでも会勢を拡大しておきたいと勇み立つのも当然のことであった。

一陽会は、新都美術館の建設準備委員会が発足した昭和四十三年の第十四回展以降、積極的に新会員・新会友の推挙を行っていった。このことは、新美術館の開館時を視野に入れた会勢の拡大を意図したものであることには相違ないが、この時期に逐次登用された人々が、会創立五十年を迎える時点で大きく会務を要所で支えていることを思うと、新都美術館が開館する（昭和五十年）までのこの時期の多くの台頭は、一陽会の歩みのなかでも確かにひとつのエポックメーキング（新しい時代の開拓）を画する動きではあった。

現在の東京都美術館（昭和50年３月竣工）。

先の項で触れてきた「委員制の導入」からは時間的に遡り、章の始めに掲げた年表と重複するが、この時期の一陽会の活動を通るよすがとして、昭和四十三年の第十四回展から昭和五十年の第二十一回展までの間に会員・会友に推挙された人々を列挙してみたい。

昭和四十三年・第十四回展　［会員推挙］佐野儀雄、角美貴子（絵画）。／［会友推挙］大場書美、森秀雄、野中末知子、斎藤富蔵、安藤節雄、網笠省三、島本芳伸、菊池豊、平田幸枝、湯浅豊子（絵画）、松本進、今井由緒子、高橋勝（彫刻）。

昭和四十四年・第十五回展　［会員推挙］荻原宗晃、中村亮一郎、熊田藤作、市川勉、上野富蔵、与儀達治、小松久子、野間傳治、柳原謙三、神門四郎、江川光信、宮本清、鈴木国威、井黒四郎、中島マミ、森秀雄（絵画）。／［会友推挙］岬一郎、平賀正勝、市川裕康、若林三郎、大野隆之、西元治、上井稔、石塚博、高橋甲、谷岡久、酒井幸雄、宮越弘三（絵画）、渡会章士、多治見鳳昭（彫刻）。

昭和四十五年・第十六回展　［会員推挙］栗原和美、島本芳伸、網笠省三、葛西康、丹治伊三郎、中澤尊子（絵画）、関口

公募展示陸に繋がる地下一階のコンコース。多くの鑑賞者で常に賑わっている。

呂孝、丸山映、石黒功、六崎敏光（彫刻）。／［会友推挙］佐々木吾郎、宮川慶輔、天王寺谷卓三、小宮惣太郎、宿澤浩、多賀堂岳、玉川浩、神部修一、棚瀬修次、沢オイ、久保田正剛（絵画）、森島昭道、岩澤勇、中川征男（彫刻）。

昭和四十六年・第十七回展　［会員推挙］棚瀬修次、湯浅豊子、今村春吉、對馬久世喜、安藤節雄、大塚伊次、宮川慶輔、天王寺谷卓三（絵画）、高嶋文彦、高橋正祐、三輪乙彦（彫刻）。／［会友推挙］市橋哲夫、池田喜重、河野日出雄、杉山汎、田崎徹、山口芯子、平畑筆一、堀江優、西井義隆、酒井又兵衛、高岡徹、乗月人、清水源太郎、安田一彦、野中重利、垣内カツアキ、中嶋正治、大山美信（絵画）、田畑進、中堀喜雄、高木和文、児嶋務、阿部雪子（彫刻）。

昭和四十七年・第十八回展　［会員推挙］土井稔、郡慧子、森嶋八州樹、谷岡久（絵画）、吉田英智、関野初代、今井由緒子（彫刻）。／［会友推挙］本多弘、ロウエル恒子、萩中幸雄、渡部貢、福村隆壱、神林茂、岩永藤彦、向井林三、松政圀子、佐川文子、スマルモ（絵画）、福田順忠、今井田一巳（彫刻）。

昭和四十八年・第十九回展　［会員推挙］石塚博、市橋哲夫、清田英作、益子昭雄、沢オイ、額田室子、高橋甲、多賀堂岳、田崎徹、宇野富美代（絵画）、佐々木英夫、渡会章士（彫刻）。／［会友推挙］林一美、伊藤公二、小林源次、水谷喜美子、岡崎洋児、土屋貫一、吉田佳章子、山林文子、船屋泰治、新井田捨策、岡田彌生、高橋茂、篠田順彦、山田忠、白井一雄（絵画）、八木ヨシオ、林田滋、ふじい忠一（彫刻）。

昭和四十九年・第二十回展　［会員推挙］河野日出雄、岬一郎、神部修一、大場吉美、高岡徹（絵画）。／［会友推挙］古谷吉三、武田太郎、田中繁雄、船越一人、判三教、國重陽子、木村保夫、斎藤孝利、河井一郎、吉川俊夫、宮口親、渡辺喜久蔵（絵画）、植木舜一、小山重之、佐光靖行、内田源一、中村明二（彫刻）。

昭和五十年・第二十一回展　［会員推挙］池田喜重、大山美信、新井田捨策（絵画）、阿部雪子、多治見規昭、岩澤勇、松本進（彫刻）。／［会友推挙］馬場高子、奥山三郎、小島鐵男、鈴木雅弘、平野正毅、白川晃、藤井正威、滝沢浩司（絵画）、松本鉄太郎、成瀬真澄、天木房子、小宅淑子（彫刻）。

昭和五十年、第二十一回展開催時の一陽会は、委員十八名（うち彫刻五名）、会員百二名（うち彫刻二十三名、版画二名）という陣容を見せるに至った。会創立以来二十年を経てようやく、既存の公募団体と質量ともに比肩し得る展望を見せてきたといえる。それにこの年は、待望の新東京都美術館開館の年で、九月一日の使用開始に合わせて、美術の秋の第一陣、第六十回院展、第六十回二科展、第三十回行動展が開催された。第二十一回一陽展は、新制作協会、一水会とともに美術の秋第二陣を飾ることになった。

委員制を導入し、若い会員がだいぶん増えたとはいえ、美術界一般の注視はまだまだ会創立第一世代に注がれていた。ことに新聞各紙の美術欄は押しなべてその傾向が強かった。

前の二団体（一水会、新制作協会）ほど大きい規模ではないし、人気画家もそう多くないが、まとまりがある。

そしてひきつける作を発表するのは、例年のようにトップグループで、鈴木信太郎「古風な時計」、野間仁根「森の友達」がそれぞれの持ち味の色彩世界を打ち出し、高岡徳太郎「利根川にて」が滋味ある情感を表している。

（藤懸静也「一陽会展」『日本経済新聞』　昭和五十年十月三日付）

……「一陽会」は、具象から抽象へとさまざまな試みがみられるものの、構想の底が浅いとでもいうか、真に説得力のある仕事は乏しい。人柄から生まれる素朴さをたたえた鈴木信太郎「古風な時計」をのぞけば、棚瀬篠次、佐野儀雄、池田喜重らの仕事が僅かに目についたものである。

公募団体展は、団体自らがまず作品の選考、展示にきびしくなってほしいと思う。でなければ、自らの墓穴を掘るだけにすぎない。

いくら「公募団体展」で、一般からの出品が多いとはいえ、「美術展」ともなれば、おさらい会ではないだろう。しかし、近年、各団体ともその審査はきわめて甘く、入選の水準ははなはだ低いものになっている。だから勢い入選作品も増えるわけで、そうなると当然、限られた展示壁面に見やすい形で展示することは困難になってくる。だから臨時の袖壁を精一杯に設ける。そのため会場の空間は狭苦しいものになってしまう。そのうえ、作品を一段掛けにしてすっきり展示することも出来ないので、二段掛け、三段掛けと、壁面いっぱい、ぎっしりとならべたてる。上部に飾られた作品など、仰ぎ見なくてはならないから、とてもじっくり鑑賞するわけにはゆかない。おなさけで入選させ、その作品を鑑賞に堪えられない場所にならべる。それが一体どういう意味があるのだろう。企業化した団体展の出品料収益を増やすためなのか。私はまず鑑賞しにくいような「美術展」を構成する公募団体の態度そのものに疑問をもつ。

そして第二に、そうした公募団体にたいして会場を提供、「非美術展」の横行を黙認している都美術館にたいしても、はなはだ残念に思う。五十億円もの巨費を使って新しい美術館を完成させたのに、鑑賞しにくい点では相変わらずではないか。……

（小川正隆「朝日新聞」　昭和五十年十月二日付）

この小川正隆の痛評は、一陽会に限らず、この時期の公募美術団体全般にあてられたことではあるが、当時の、こぞって会勢拡大に奔走していた状況を鑑みれば、いずれの団体にとっても痛い評言ではあった。

だが、公募団体展が美術の動向を総て左右し、またその責務を付託されていた昔日の状況からすると、戦後年々団体展離れが顕著になり、美術の多種多様な現象と価値観に一般の関心が移ってしまってみれば、昭和四十年代後半以降の公募団体が自活・自営の方策を模索することは至極妥当のことではあった。そして第一に、こと絵画、彫刻に限らず、書、工芸、手芸、写真というように一般の創作への関心は年々増え続けていて、膨大な裾野の広がりを見せてくるのもこの頃からのことであった。計算ずくめの経済至上主義の世相が深まりを増してくるに従って、まるで精神の癒しを渇望するように、自己存立としての創作活動の方策を求める人々が増えてきていた。

戦前期の、専門教育を受けたプロの創作者の集団、発表の場としての公募団体の意味合いから、広く自己存立に根ざした創作発表の場としての公募団体の一面もこの時期から見せはじめていた。……このことさえも、後日大手新聞社などが企画運営する「カルチャーセンター」なる簡便な教養教室に侵食されていくのだが……。

ともあれ、新聞の学芸欄に代表される批評子の論旨のみ、「旧態依然として」不変であったというべきだろうか。

ここで問題なのは、むしろ、小川の記事の最後の部分、「五十億円もの巨費を使って新しい美術館を完成させたのに、鑑賞しにくい点では相変わらずではないか」というくだりである。この直接の論旨は、公募団体が経営を優先

公募展示棟の展覧会場入口付近（平成15年）

させるために二段、三段掛けにしていて鑑賞しにくいというもので、大半の責を公募団体に向けているのだが、「五十億円もの巨費を使って新しい美術館を完成させたのに、鑑賞しにくい」という痛評のうちには、美術館当局に向けての苦言とも読みとることができる。――まさにここに、以後借用する美術公募団体や一般鑑賞者、報道関係者を悩まし続ける問題の根源があった。

新東京都美術館は、昭和四十年代の初めに建設構想が持ち上がって、昭和四十三年五月に建設準備委員会が発足し、同四十七年十二月に着工、そして昭和五十年三月竣工、九月一日に開館、公募団体の使用を開始している。新美術館の概要は、地下三階、地上二階、総床面積は約三万二千平米で、常設企画展示棟、公募展示棟（三階建て四棟）、彫塑展示室、実習工房（アトリエ）、事務棟、食堂、講堂、会議室、図書室、収蔵庫を擁している。

建設構想当初、「時代の要請に応じられなくなった（旧）美術館に代わり、機能的にも施設的にも完備した美術館を建設する」（「建設準備委員会発足趣意書」から）ことを標榜して、隣接した運動場にまったく白紙の状態から新美術館の建設が

始まった。「時代の要請に応じられなくなった」、つまり借用希望団体が増加したことと、既存の団体の規模の拡大にともない、借用面積の割増し要求が相次いで、既存の美術館ではとうてい応じられなくなったということなのだろうが、寄せられた要望のなかには、実際に使用する側からの使い勝手の上での希望もあった筈であり、そのことが満たされてこそ「機能的にも施設的にも完備した」新都美術館が建ち上がる筈であった。だが、実際に使用し始めた団体からは一様に不興の声が上げられていった。

「旧館よりも長い使用壁面長を提示されて喜んでいたら、中仕切り壁（パネル）を目一杯使用した上でのことだった。これでは旧館時代よりも狭隘感はいなめない」「防災上の配慮として展示室の中央に開口部や展示不能の場所があり、展示効率が悪い」（宮城音蔵「新美術館に入るに当って」「春陽会」昭和五十一年）という使い勝手の悪さと、「旧館よりも天井が低い」「大きい作品がところによっては二段掛けになっていることは致し方ないとしても、後ろに引いて見る広さが無く甚だ見づらい」「展示場の配分が縦割りになっていて、上階から下階へ、下階から上階へと随分労力を強いられる」などと鑑賞する側からも苦言が発せられた。

多くの団体を能率よく受け入れ、一点でも多くの作品を展示すればそれでいいのかどうなのか……。そこには、一番肝心の美術を鑑賞するということへの配慮が欠落してしまっている。……この新都美術館の開館（昭和五十年）以降、公募美術団体展の芳しくないイメージが決定的に定着してしまったといえる。美術家の代表も加えた、しかるべき識者が参画して、長年月を掛け莫大な資金を投じて不都合な〝美の殿堂〟を作ってしまったとするならば、その及ぼす負の累積は計り知れなく大きいと言わざるを得ない。

◇『一陽会会報』の創刊（昭和五十五年）

昭和五十五年八月、一陽会は第二十五回展の開催（昭和五十四年）を記念して「一陽会会報」（註2）を刊行することになった。会の宣伝・広報と、会員、会友、そして出品者相互の親睦をはかることを目的としたと「あとがき」（荻原宗晃）に明記されているが、会に参加する一人一人の画業の足跡を克明に綴りあわせて、「一陽会」の歴史に編みこんで会の求心力を高め、さらにより広範な会勢の拡大を進めてゆくという、美術公募団体としては究極の円熟域への扉を、この契機に一陽会は開いたといえる。

この時期、会創立第一世代から引継ぎ、広範で多端な会務を中心となって担っていた勝一晃が「会報発刊のご挨拶」（「一陽会会報」第一号　昭和五十五年八月二十日）を寄せている。

一陽会が年々明るい希望と着実なる進歩をつかみつつ、二十六回展を迎えることが出来ますことは御同慶のいたりです。旧来の在り様から抜けだし、五月晴れの新緑の様なさわやかな気持で三十周年に向って前進したい心がまえでいっぱいです。

この期におきまして、特に大切なことは、会のPRだと思います。公募団体といっても、会の新旧、大小、内容に相違があるにもかかわらず、一律に同一視される傾向があります。この会報発刊を機会になんとしてでもそうした風潮を打破し、一人でも多くの方々に、わが会の在り様を理解していただき、会員、会友、出品者の皆様が一層会に対する誇りと、確固たる自信を持って心おきなく健筆健腕を揮っていただける環境をつくらなければと念願してまいりました。

そのためには先づ何をなすべきか、ということを委員の方々と相談いたしましたところ、全員一致の賛同をいただきまして、今回『一陽会会報』を発刊するはこびとなりました。

『一陽会会報』第1～3号

この会報が組織内におきましては、今までより一層、お互いの心のふれあいを深め、又各地方がお互いに認識しあい、よい意味で夫々積極的な制作活動を競い、よい収穫を得る大きな媒体となるように、一方対外的にも、会に対する認識を深めていただくための役目を果たすべく、重要な媒体となることを確信し、大いに期待しております。

この編集にたずさわる方々の御苦労も、それだけに大変なことと思いますが、出発した以上最高の効果をあげるように努力していただきたいと強くお願い致します。新聞形式にとらわれすぎて、かたくるしいものにならない様、きりとてチャランポランのものでなく、読んで教えられ、読んで微笑がもれ、そして開放的であり、そして結構権威もあり……、というようなものが出来たらと思っております。

一陽会が第二十六回展を開催した昭和五十五年当時は、書や工芸を含めると百九十四の公募団体が入れ代わり立ち代わり、上野の東京都美術館で展覧会を開催するという状況であった。絵画、彫刻に絞っても百二十八の団体があり、中には、新都美術館の開館（昭和五十年）以降に登録された新しい団体が六十二団体も含まれていて、ために老舗の団体の影が希薄になってしまった観さえあった。……「会の新旧、大小、内容に相違があるにもかかわらず、一律に同一視される傾向がある」という、会務を預かる立場での懊悩の所以はこのあたりにあったの

だろう。さらに、新たなる仲間、新人作家の発掘を目的とした、会のPR・宣伝の必要性があったのと、年々増えてくる会員、会友の間の緊密な連絡と、創作研究の情報交換の場として、会報という媒体が必要な時期に来ていたということになる。

また、「かたくるしいものにならない様」にとしながらも、会全体の会務の記録や、各支部（本展が巡回する、あるいはそれに準ずる地方組織）、地方グループ等の活動報告と記録、挙げ句個人やグループの発表活動の記録を、会の公式の「歴史」に編み込んでゆく作業が、この時期から明確に進められていったことも事実であって、この明確な「記録性」を持ったことが、一陽会を社会的な信頼性をともなう成熟した公募美術団体に昇華させたといっていい。

そのことを、絵画、彫刻それぞれの立場から、佐野儀雄、山崎猛が詳細に言及した文章を、同じく会報第一号に寄せている。

一陽会報を発刊すると聞き、まことに喜ばしく思います。編集にたずさわる方々のご苦労に対し深い感謝の意を表します。エネルギッシュな紙面ができ上がることと楽しみにしております。

さて、私見では、会報は三つの側面を持つことが望ましいと考えます。一つはいうまでもなく、一陽会内部のコミュニケーションの機能です。例えば、支部も組織されていない地方からの出品者にとって、一陽会内部の動勢、消息を少しでも知り得ることによって、何より勇気づけられることでしょう。昨夏、関西支部で五十数名の旅行団を組み、半月程ヨーロッパ旅行を楽しみましたが、破格の費用で参加できるものであったので、他支部の方もお誘いしようと考えたのですが、その手だてが困難で、会報のようなものがあればと思ったものでした。

二つ目の側面は、一陽会史としての存在です。毎年の本展の記録は残っていても、その他の個展や、グループ展や、各地での催し等をまとめて記録しておく必要があると思います。そういった年鑑的な部分が必要ですが、その収録のための経路も確立しなければならないでしょう。

第三の側面は対外的なPRの役目です。一陽会も二十六年目を迎えましたが、まだまだ会の活動や内容が、一般には浸透しているとはいえません。もとよりそれには長い年月と、地道な努力が必要ですが、やはり積極的な活動と、絶え間ないPRを積み重ねることが、会を名実共に一流にしていく道だと信じます。そのための一つの手段として会報を役立てたいと考えます。勿論、経費面での困難さは覚悟しなければなりませんが、一陽展や、各地での展覧会場にも置ける程度の部数があればと望みます。

以上、かなり欲張った期待かと存じますが、ぜひそうあって欲しいと願っております。

会報の発刊を契機に、私は支部連絡会議を提唱したいと考えています。それは毎年の本展開催時に設定するとして、各支部の情報や、企画、アイデアの交換をしたいと望んでいます。組織が増大するにつれ、支部間の関

のないことを願ってきたが、みなさんには、私が考えた以上に、手について深く組織的な関係をしてギットたちが世界を支配するよいたとしても、せめて、われわのみなさんにし、手仕ついて考えまないようる。このわざ多くのすくりあげてろうか。き力を発揮しいだろうかご依頼あした。

【昭和55年5月8日　東京都美術館講堂にて】

〈特集〉

第2回　一陽会関東ブロック研究会

＜パネルディスカッション＞——於 東京都

（文責・石川出知代、カメラ

「なぜ描くか、何を描くか、何の為に描くか、　したい、この研究会を意義ある

「一陽会関東ブロック研究会」の記事。（『一陽会会報』　第6号）

係が薄れることのないよう、そろそろ繁がりを考える時期ではないでしょうか。なにはともあれ、一陽会報の発刊に皆様と共に乾杯！。

（佐野儀雄「会報への期待」『一陽会会報』第一号　昭和五十五年八月二十日）

会報の創刊号を迎えて、愈々将来への大きなはばたきを感じます。

毎年つくられる一陽会の図録は、他にはない編集の妙味を覚えますが、今回発刊される会報にもきっと、腕の冴えを見せて、心のこもったものになることでしょう。

この会報は、年に二回刊行される（注3）そうですが、出品者にとって自由な発言の場が与えられるわけですから、建設的な意見や楽しいエピソード等の交換を通して、制作意欲をそそられるような内容になることを願っています。お互いに意志の疎通を欠き、話し合う場がなくなってしまうことは、大変危険なことですから、相互理解を図っていくためのみんなの声のひろばとして活用されたらよいと思います。（略）

この度、一陽会の会報が発刊されるという新しいこころみによって、一陽会を更に新鮮なものとして把えさせてくれるにちがいありません。偉大なる時代は、つねに未完成であったように、彫刻家としての積極的な思想と、独創的な彫刻的意図によって、自分の彫刻をつくっていきたいということを念願しながら、私達ひとりひとりが持っている詩を、心にふれるような真実の声を、そして彫刻への提言を、前向きの姿勢でくりひろげて頂きたいと考えています。

（山崎猛「会報発刊に思う」『一陽会会報』第一号　同前）

会報の刊行によって、「一陽会内部のコミュニケーション」の機能、「一陽会史」を整備する上での記録性、「対外的なPRの役目」を託すことが出来ると佐野儀雄は快哉を発している。

山崎猛は、「実（素）材と展示」という、広く議論と情報の交換を必要とする彫刻においては、「自由な発言の場」が得られることを多としたいとし、そうした自由な発言と提言が「一陽会を更に新鮮なもの」にするにちがいないと展望を広げている。

会創設から二十五年を経たとはいえ、いずれも次代を背負う若い決意を寄せている。……この生真面目なほどに真正面から創作の問題に取り組む姿勢は、一陽会の際立った特色として以後も貫かれてゆくことになる。

そして、『一陽会会報』を会内部の意思疎通と情報交換の場にとどめず、美術界全体の動きや世相にも目配りをして、一陽会を、あるいは個々の所属作家の創作活動を克明に顕彰してゆこうという、「一陽会の活動報告」（第三十号、平成七年六月刊が最終回）が北山泰斗の筆で連載されることになった。ともすれば、現代美術の奔流のなかで孤立しがちの、公募美術団体としての一陽会のアイデンティティー（独自の存在意識の確立）を唱え続けたという意味において、一陽会にとってはもちろんのこと、広く公募美術団体を考えてゆく上でも重要な記述となった。……第一号に掲載された「一陽会の活動報告」は、美術界の現況と上野で開催される公募団体の彼我の評価、一陽会所属作家の会外での活動、各地方支部、グループ

藤原　支部やグループのない所へは直接本人に発てて送っています。もっと反応や投稿が欲しいですね。

橋本　園内正和が新制作の頃はどうでしたかと聞いたと言ったという。一意思の疎通のために会報があると思うのだが……。ちょっとしたことでも気軽な通信のように利用してくれるといいのだけど。

一陽会を愛しよい彫刻を作っていきたいとしさの中で育す。だから、皆をもって、がら、彫刻部たいものです出品者各位に彫刻の本質に31周年に向戦をより活発と思います。

「座談会　30回記念展を終えて」の記事、（『一陽会会報』第9号）

の活動報告というように、広範な視野に立った「活動報告」がされている。これは、活動報告というよりも、一陽会と自らも含めた全所属作家に向けた叱咤、教導といっていいものである。ここに第一回掲載の「一陽会の活動報告」を引いて、一陽会の歩みを社会的な評価の中で位置付けてゆこうとする論述に、耳傾けてみたい。

公募団体のレベルの高低が問われることがある。長い歴史をもつ団体もあれば、大きな世帯の団体もある。しかし団体のレベルは歴史の長さでもなければ、大きさでもない。各々の団体が内容する画家や彫刻家、版画家の姿勢と資質が問われるのであって、優れた美術家をどれほど有するか否かであり、新人の育成に団体としていかに関わり助力するか否かが問われるのだろう。

また他方で団体展の対外的な評価、つまり公的な位置や役割も問われてしかるべきだ。たとえば文化庁行政の一分野に美術振興促進のシステム（註4）があって、選定された十一団体の中に一陽会は組み込まれている（上野都美術館を使用される美術団体は約一九〇団体です）。また、〝東京国立美術展覧会場建設を促進させる会〟（註5）十三団体の中にあって活躍している一陽会は決して弱小団体ではなく今日の画壇の中核を担っているといっても過言ではあるまい。

個人展やグループ展活動も目覚しいものがある。対外的な公募展でも多くの受賞者を輩出している。近年のシェル賞展を例にあげても、七七年土嶋敏男君が二等を受賞し、七八年には岡崎昭夫君、末田光一君の両君が三等を受賞し、昨年七九年坪井正光君が一等、小山佐敏君が三等を受賞した。そして今年は森秀雄会員が安井賞展で特別賞を受賞し、また日本国際美術展で小山佐敏君が国立国際美術館賞を受賞し、矢島良夫君が受賞候補として新聞紙上をにぎわし、多くの入選者を輩出している。また第二回ミニチュア大賞展で浜田清君が大賞を受賞し、これはヨーロッパ留学賞でもあるため今秋遊学するとか聞きおよんでいる。このような一陽会の現状を他の団体の友人が羨やましがることしきりである。

またこの七月だけでも東京をせましとばかり一陽会の委員・会員そして会友の個展が、十数ヶ所で開かれ拝見するのに悲鳴をあげたものです。もっとも、嬉しい悲鳴ではあったのですが。こうした現状は東京にかぎったことではなく、地方でもおなじように個展が開かれている。

また支部展やグループ展の発表活動もすさまじく、中部支部展、関西支部展、千葉支部展、北陸支部展、と積極的な活動が行なわれ、そして京都グループ展、浜松グループ展、蒲郡グループ展、富山グループ展、はりまグループ展と目じろ押しの発表活動は目覚ましいものがある。また海外では沢オイ会員がニューヨークの五七番街で個展を開かれ大盛会だったことを在ニューヨークの友人からの便りで知りおよんでいる。

これらは私の空覚えの一陽会の現況であり、他の団体の人達が羨ましがるのもムリからぬ活動ぶりである。一層のご活躍を心からお祈りして私の現況報告にかえます。（斗）

（「一陽会の活動報告」「一陽会会報」第一号　同前）

東京で開催される一陽展（本展）が移動展として巡回してゆく、あるいは巡回した実績のある地方や、盛んな活動実績のある組織を「支部」とし、関西支部（播磨グループ、京都・滋賀グループ、広島グループ、愛媛グループ、

野間仁根先生の水彩・デッサン展

作品に出会って

石川三知代

野間先生の没後10年、高島屋主催で水彩・デッサン展が開催されましたことは、先生のご業績がたたえますが、もしご在世であったならばというと感しみを、今更ながらあらたにいたしまし

い会場に足を踏みいれた途端、一気に30数年に遡ったような錯覚に目が眩みそうになりました。昭和30年代に外務省太陽に勤務しておられたと、私達のグループがご一緒させて頂いたことがあり、太陽の風景、メバルの群などを拝見しる機会を得ませんでしたが、50余点の作品が一堂に揃んで、鉛筆やクレパスの線は強弱が明瞭であるだけ、先生の息遣いが迫ってくるように、今始まあげたかとおもうほど、新鮮に躍動していま

「野間仁根先生の水彩・デッサン展」の記事。（「一陽会会報」第18号）

西日本（北九州）グループ、高知一陽会）、北陸支部（石川一陽会、富山グループ、福井グループ）、中部支部（名古屋グループ、浜松グループ、岐阜グループ、蒲郡グループ）、関東ブロック（関東支部）から発展分立した、東京支部（埼玉グループ、群馬グループ、栃木グループ）、神奈川支部、千葉支部、茨城一陽会、さらに長野支部、新潟支部、秋田グループ、青森一陽会、北海道支部というように、新しい時代を迎える一陽会の基本的な陣容が、昭和五十五年（一九八〇）の段階で、ほぼ整ったといっていい。従って、各支部、各地のグループを統括してゆく上で「一陽会会報」は格好の情報伝達の媒体となったし、そしてもっとも重要なことは、支部、グループの活動、所属作家の作品発表などの詳細な記録が、明確に残されてゆくことになった。

当然、一陽会以外の主要な公募団体もこぞって、「一陽会会報」に類する広報誌・会報を刊行しているが、どうしても中央志向が強く、地方支部、グループの活動記録を綿密に収集、記載しているという点において、「一陽会会報」は出色であると自負していい。

そして、会報という独自の媒体を持った利点を最大限に活かすために、様々な編集企画が具体的に実施された。会の組織内の意思の疎通をはかるために、機会に応じて座談会（パネルディスカッション）を開催し、それを克明に採録して掲載し、さらに会外部の識者を招いて講演会を開催し、また投稿を仰いで積極的に外部との交流の舞台として、会報を活用している。

バックナンバーを繰りながら、その成果を抜粋して辿ってみよう。　＊筆者、講師の肩書きはいずれも当時のもの。

◇第二号（昭和五十六／一九八一年三月二十日発刊）

・斎藤茂太（日本精神病院協会会長、日本ペンクラブ会員）「エッセイ　長崎」、・菅原猛（フランス文学者）　寄稿「若い人に自由な制作　第二十六回一陽展をみて」。

◇第三号（昭和五十六／一九八一年十一月一日発刊）

・植本誠一郎（ホルベイン工業株式会社技術部）　「〔研究・技法・画材〕　卵と油」。

◇第四号（昭和五十七／一九八二年六月二十日発刊）

・大日方忠夫（信越放送専務）寄稿「一陽会と信越放送」。

○第一回一陽会関東ブロック研究会（一九八二年三月二十一日　於東京都美術館講堂。講演会（講師）林紀一郎（美術評論家）「アイデンティティー」／パネルディスカッション　（出席者・パネラー）林紀一郎。北山泰斗、萩原宗晃、高橋甲、棚瀬修次（以上絵画）、松本蔓（彫刻）。（進行）鶴田猛、（編集文責）石川三知代。

◇第五号（昭和五十七／一九八二年十一月二十日発刊）

・西原康子（詩人）　寄稿「あて先のない手紙」。

○（座談会）「第二十八回展の反省と第二十九回展への提言」（出席者）勝一晃、小川哲郎、土鳩敏男（以上絵画）、山崎猛、石黒功、高嶋文彦（以上彫刻）。（編集部）北山泰斗、山田治、萩原宗晃、鈴木雅弘、石川三知代。

◇第六号（昭和五十八／一九八三年六月二十日発刊）

・植本誠一郎（ホルベイン工業株式会社研究室長）　「〔研究・技法・画材〕　地…キャンバス」。

○第二回一陽会関東ブロック研究会（一九八三年三月六日　於東京都美術館講堂。講演会（講師）林紀一郎「手」／パネルディスカッション　なぜ描くのか、何を描くのか、何のために描くのか（出席者・パネラー）林紀一郎。勝一晃、北山泰斗、萩原宗晃、土鳩敏男（以上絵画）、野間傳治（版画）、石黒功、六崎敏光（以上彫刻）。（進行）棚瀬修次、（司会）鶴田猛、（撮影・録音）鈴木雅弘、（編集文責）石川三知代。

◇第七号（昭和五十八／一九八三年十一月二十日発刊）

○彫刻部研究会（一九八三年六月五日　於新宿）講演会（講師）林紀一郎「彫刻について」／座談会（出席者）委員　植本力、中村輝、山崎猛。会員　阿部雪子、石黒功、植本舜一、岩澤勇、金田忠、佐々木英夫、高嶋文彦、松倉藍輔、松本進、宮川和博、六崎敏光、八木ヨシオ。会友　中村義孝、富山、森山、雨谷。出協者　青木、安見、石井、大越、篠原、一般　菊地、斎藤（内地留学生）、永島、谷津、吉田（茨城大学生）、坂寄（茨城大学ＯＢ）。（編集部）北山泰斗、石川三知代、鈴木雅弘。

○一陽会北陸支部研究会（一九八三年十月二日　於金沢市観光会館）『フリートーキング　制作のことを中心に』（出席者）　大場吉美、神門四郎、酒井幸雄、中村秀雄、野中末知子、安達弘章、和泉洸、浮田正樹、梅田ゆかり、上尾浩二、北川美穂恵、芝西広美、生地太久、中野久貴子、永村淳子、能波祥明、安田淳、山本桂右、吉田顕正、上田純子、田島道子（以上絵画）、番匠建次（彫刻）。（司会）中村秀雄。

◇第八号（昭和五十九／一九八四年六月二十日発刊）

○第三回一陽会関東支部研究会（一九八四年三月十一日　於東京都美術館講堂）。講演会（講師）宗左近（詩人）「見えるものと見えないもの」／パネルディスカッション（出席者・パネラー）宗左近。勝一晃、北山泰斗、五十嵐二朗、荻原宗晃、鎌野弘（以上絵画）、高嶋文彦、石黒功（以上彫刻）。（進行・編集部）荻原宗晃、山田治、（録音・撮影）鈴木雅弘、（録音）高橋和夫、（編集文責）石川三知代。

◇第九号（昭和五十九／一九八四年十二月十日発刊）

○第三十回展の反省と第三十一回展への提言・運営委員による座談会（出席者）小川哲郎、勝一晃、北山泰斗、大石可久也、佐野儀雄（以上絵画）、植本力、山崎猛（以上彫刻）。（進行・編集部）荻原宗晃、山田治、（録音・撮影）鈴木雅弘、（編集文責）石川三知代。

◇第十号（昭和六十／一九八五年六月三十日発刊）

・植本誠一郎（ホルベイン工業株式会社技術部）「〔研究・技法・画材〕　絵具の名称その由来」。

○第四回一陽会関東支部研究会（一九八五年三月十日　於東京都美術館講堂）。講演会（講師）宗左近（詩人）「あちらとこちら」／パネルディスカッション（出席者・パネラー）宗左近。五十嵐二朗、棚瀬修次、鎌野弘（以上絵画）、石黒功、松本進（以上彫刻）。（司会）北山泰斗、（撮影）杉山司、（録音）鈴木雅弘、（編集文責）石川三知代。

◇第十一号（昭和六十／一九八六年六月三十日発刊）

○第五回一陽会関東支部研究会（一九八六年四月二十日　於東京都美術館講堂）。講演会（講師）宗左近（詩人）「デッサンの必要性」／パネルディスカッション（出席者・パネラー）宗左近。森秀雄、沢オイ、大山美信（以上絵画）、高嶋文彦、金田忠（以上彫刻）。（司会）熊田藤作、（撮影）吉田光雄、（録音）鈴木雅弘、（編集文責）石川三知代。

◇第十三号（昭和六十／一九八六年十一月三十日発刊）

・植本誠一郎（ホルベイン工業株式会社技術部）「〔研究・技法・画材〕　ホワイト・ホワイト物語」。

◇第十四号（昭和六十二／一九八七年七月二十五日発刊）

○第六回一陽会関東支部研究会（一九八七年五月十日　於東京都美術館講堂）。講演会（講師）宗左近（詩人）「詩と美術の間」／パネルディスカッション（出席者・パネラー）宗左近。細川尚、浜田清、小島鐵男、杉山汎（以上絵画）、八木ヨシオ（彫刻）。（司会）熊田藤作、（撮影）杉山司、（録音）早川恭子、（編集文責）石川三知代。

◇第十六号（昭和六十三／一九八八年六月二十日発刊）

○第七回一陽会関東支部研究会（一九八八年四月十日　於フジテレビ第五スタジオ。講演会（講師）宗左近（詩人）「批評について」／パネルディスカッション（出席者・パネラー）宗左近。銀川秀人、松本哀子、小林健志、泉谷淑夫、岡野哲也（以上絵画）。（進行）北山泰斗、（撮影・録音）鈴木雅弘、（編集文責）石川三知代。

◇第十八号（昭和六十四・平成元／一九八九年六月二十日発刊）

○第八回一陽会関東支部研究会（一九八九年三月二十六日　於フジテレビギャラリー）。講演会（講師）宗左近（詩人）「美術の対象と方法」／パネルディスカッション（出席者・パネラー）宗左近。玉田健二、畠中陽一、小島鐵男、大山美信（以上絵画）、槙本群一（彫刻）。（進行）熊田藤作、（撮影・録音）鈴木雅弘、（編集文責）石川三知代。

◇第二十号（平成二／一九九〇年六月二十日発刊）

○第九回一陽会関東支部研究会（一九九〇年三月二十五日　於フジテレビギャラリー）。講演会（講師）宗左近（詩人）「見るのか見られるのか」／パネルディスカッション（出席者・パネラー）宗左近。畠中陽一、堀川秀人、岡村順一、泉谷淑夫（以上絵画）、石黒晋（彫刻）。（進行）熊田藤作、（撮影）鈴木雅弘、（録音）早川恭子、（編集文責）石川三知代。

◇第二十二号（平成三／一九九一年六月十日発刊）

○座談会「なぜ美術か」（出席者）宗左近（講師）、土鶴敏男、浜田清（以上絵画）。（進行）北山泰斗、（編集部）鈴木雅弘、早川恭子、（編集文責）石川三知代。

○第十回一陽会関東支部研究会（一九九一年三月二十四日　於フジテレビ・ラボルト）。講演会（講師）三木多聞（国立国際美術館長）「現代美術に思う」。

◇第二十四号（平成四／一九九二年六月二十日発刊）

○第十一回一陽会関東支部研究会（一九九二年四月十二日　於フジテレビギャラリー）。講演会（講師）林紀一郎（新潟市美術館長、池田二十世紀美術館長）「現代美術の中の一陽会」。

◇第二十六号（平成五／一九九三年六月二十日発刊）

○第十二回一陽会関東支部研究会（一九九三年四月十八日　於フジテレビギャラリー）。講演会（講師）林紀一郎（新潟市美術館長、池田二十世紀美術館長）「具象と抽象の差異」／パネルディスカッション（出席者・パネラー）林紀一郎。野間傳治（版画）、北山泰斗、舘野弘（以上絵画）、（司会）棚瀬修次、（録音）早川恭子、（編集文責）石川三知代。

◇第二十八号（平成六／一九九四年六月二十日発刊）

○第十三回一陽会関東支部研究会（一九九四年四月十七日　於フジテレビギャラリー）。講演会（講師）ヨシダヨシエ（美術評論家）「蛇の黙示録（アポカリプス）」。講演後にディスカッション。（司会）棚瀬修次、（撮影）小島鐵男、（録音・編集文責）石川三知代。

◇第三十号（平成七／一九九五年六月二十日発刊）

○第十三回一陽会関東支部研究会（一九九五年四月十六日　於フジテレビギャラリー）。講演会（講師）ヨシダヨシエ（美術評論家）「宇宙論としての現代美術」。

＊ちなみに、第一号から第九号までの題字は勝一晃、第十号から第三十号までの題字は鈴木信太郎による。

こうしてバックナンバーを辿ってみると、『一陽会会報』が会内部の意思の疎通をはかり、外部の識者からより広い見識を招来する拠りどころとして、有効に活用されていることがよく分かる。

さらに、作家個々の創作上の心情の吐露、作品発表（個展・コンクールなどへの出品）の記録、受賞の言葉などが克明に報告されてゆくのだが、会全体にとっても、この会報が会の主張と記録を公式に内外に向けて表示する媒体となったという意味において、また一陽会が権威ある公募美術団体として広く認識される上において、『一陽会会報』の刊行は大きな契機となった。

『一陽会会報』第31、36、37号

Woman at Lakeside

森秀雄個展～8月
昨年の2001年12月
展が開催されました。
3ヶ月前の9月11日、
発テロ事件が起り、米国
航空機の利用は極力避
最中です。私共銀座地
ープニングにはぜひお
実の来、開催が可能な
10月に先生に会った
原市民、又世界の人々
きな距離があるので、
早速有志をつのり、観
会場のウェストウッド
ンハイム美術館の正面
長い列でした。室内は
六米と高く、広さは、池
われます。この会場に
ったひと点称を持って展示され、観客の関心には
オフホワイトの広い壁面に、青ブルーの透明感溢れ
その調和しさが、一層印象づけられました。
夕刻六時頃から多数の観客と来場され、さし
参会者の中には、テロ事件のクレと関係の国務
長官）CHIEF・FIRE・MARSHAL（主席消防署長
リウッドの女優や、ニューヨーク証券社長のコッ
集われ、私服姿の先生ご夫妻を囲まれて談笑され
見聞された先生の画業作家は、来場者が三百五十
が全く足りない状況となり、急遽お断りするの
世情不安定なこの時期に、この様の方々が
作品に対する熱心の深さと、米国市民の元気さ、

「森秀雄個展」紹介の記事。（『一陽会会報』　第37号）

だが、会内部の意思の疎通が図られればその分、組織が、あるいは個々が抱える問題が顕在化して来ることも一方事実であり、度重ねて開催された座談会の記録から、個々の制作のこと、展示のこと、会と個々のかかわりのこと、挙げ句、一陽会そのものの明日の展望など、……それらのことを、項を改めてなお検証してゆかねばならない。

◇彫刻部の発展 II

昭和五十年九月（二十三日～十月十日）、一陽会は第二十一回展を新装なった東京都美術館で開催したが、従来（旧美術館時代）借用していた展示スペースを、少しでも余分に確保したいという念願もあって、一陽会は美術館当局への働きかけや申請に努めていた。公募団体への会場貸し出しの配分は、旧都美術館時代も新都美術館においても基本的には大きな差異はなく、当該団体の経年実績と会勢、つまり会員数の多寡が配分割り当ての大きな目安とされていた。したがって、新美術館における会場貸し出しの配分の改定を目前にして、各団体、会派とも会勢の拡大に意を払うのは当然のことであった、という事情については前項で触れた。

ただ一陽会の場合は、たんなる会勢拡大の手段としての、余分の展示スペースの要求にとどまるものではなく、彫刻部の専用の展示空間をなんとか確保したいという、永年の宿願が根底に強くあった。

絵画と彫刻が壁面と空間を分け合うように共存する、一陽会の展示場の光景は、一種趣のあるものとして広く認識されるようになってはいたが、鑑賞のための充分な空間をもたない展示場においては、鑑賞者にかえって余分の注意を喚起する仕儀にもなり、必ずしも好評とばかりはいえなかった。まだ比較的ゆったりと展示スペースを組み立てられた旧都美術館時代から、会員の数も格段に増えて新美術館に移るにあたっては、彫刻部専用の展示スペースの確保が絶対必要なことであった。

当然、会務を預かっていた当時の事務所や執行部、彫刻部の植木力、中村輝などは、新都美術館における彫刻の展示会場の借用に関する具体的な要望を早くから練り上げていた。

新都美術館においても、一陽会は一永久、新制作協会とともに秋の美術シーズンの第二陣を飾ることになっていたが（昭和五十年の新美術館から東京展が同時期開催となった）、新都美術館に新たに設けられる彫刻展示室の使用を、ともに彫刻部を持つ新制作協会と一陽会が競うことになった。旧都美術館時代には新制作協会の彫刻部も、一部絵画と

新装なった東京都美術館の地下3階の審査室（昭和50年/第21回展）。（『中村舞展』　平成14年　図録より）

一緒の展示を余儀なくされていて、新都美術館の彫刻展示室の借用についての要望は並々ならぬものがあった。一陽会の希望も当然同じところにあった筈なのだが、やはりここで優劣を決したのは、団体個々の経年実績の差異であった。

新制作派協会彫刻部の発足は昭和十四年（新制作派協会そのものの発足は昭和十一年）で、昭和十二年から東京都美術館を会場に使用していた。さらに戦後の混乱期を経て新制作協会として再出発したのが昭和二十六年であり、その後一貫して都美術館を会場に展覧会を開催してきている。かたや一陽会は昭和三十年の発足で、都美術館に登場したのは昭和三十三年の第四回展からであった。優劣は容易についていた。

だが、団体展としての先達・新制作協会を向こうに回して、一陽会は彫刻展示室の使用権獲得をめざして大いに奮闘したようだ。新都美術館の具体的な借用に関する協議が盛んにおこなわれ始める昭和四十五年から四十七年頃にかけて、当時の会務記録メモを繰ってゆくと、美術館当局への陳情を重ねる一方、会場使用団体で任意に作られた連絡協議会の席で、一陽会は彫刻展示スペースの借用に関する要望をしきりに訴えている。……かといって、二つの大きい団体がスペースを分けるほど彫刻展示室は広くはない（第二彫塑室ギャラリー、第一、第二彫塑室の三室あわせて千三百六十八平米）。

おそらく、新制作協会と一陽会のこうしたやりとりが、美術館の年間の使用計画の随所で繰り広げられたに相違なく、そうした強い要望に応えるかたちで、近い将来、「野外彫塑展示場」（東京都美術館は一貫して彫塑の名称を使用している）を設置するという、希望の扉が開かれることになったようだ。

これは、旧都美術館時代においても美術館の建物脇のスペースを借用して一部彫刻の野外展示をするべく、一陽会が昭和四十五年九月はじめに、「野外彫塑展示場」の設置についての申請を都美術館当局に提出したことにも起因している。この申請要望は早速実現することになった。……このことが、新都美術館における「野外彫塑展示場」設置の有力なる前例になったことは間違いない。だが、新都美術館における第二十一回展の一陽会の彫刻部は、専用の彫刻展示室の確保は叶わず、従来通りの絵画展示室での展示で始まったが、粘り強い継続した折衝の甲斐あって、昭和五十九年（一九八四）の第三十回展から野外彫塑展示場の使用が決まり、以後絵画展示室と野外彫塑展示場の二ヶ所に分けて作品を展示することになった。これは一陽会彫刻部にとっては大きな前進であった。

東京、JR上野駅の公園口の改札を出て、東京文化会館（コンサートホール）と国立西洋美術館の間を抜けると、欅、楢、桜の木々に囲まれた上野公園の中央広場に出る。向かって正面に上野動物園

室内展示場での彫刻部の作品講評会（第49回一陽展）

の入口を望み、樹陰に埋もれて望見出来ないが動物園の右手前に東京都美術館の正面入口がある。中央広場の石畳を、正面をやや右斜めに横切り、桜、ヒマラヤ杉の樹陰をくぐって小径をゆくと、樹間を透かしてワインレッドの外装の東京都美術館が見えてくる。公募団体展や企画展の鑑賞者や、展覧会の関係者の列はこの小径の先へと急ぐ。

足早の流れに従って樹陰を抜けると、東京都美術館の東門に辿り着く。展示棟の入口に繋がる地下一階のコンコースに降りてゆく階段がすぐ目の前にあるが、門を抜けてすぐ右手の方に、「野外彫塑展示場」の標示に従ってゆくと、会議室、図書室、実習室（アトリエ）などがおさまった文化棟の裏手に回りこむ。そこは、周りの公園とを隔てる垣に囲まれた、五百十平米のスペースが建物に沿うように奥深く開けている。ここが、一陽会彫刻部が彫刻の野外展示に使用している「野外彫塑展示場」である。

この野外彫塑展示場の確保は、彫刻展示スペースの拡大という彫刻部積年の宿願の成就ではあった。この新たなる展開が、一陽会彫刻部の仕事を確実に前進させたことは間違いない。この間の事情を、彫刻部を中心となって尊いた椎木力、山崎猛など彫刻部の作家の回想に尋ねてみたい。

……第二十六回展（昭和五十五年）を迎える彫刻部としては、出品者も次第に多くなってきてひしめき合っている感じになりました。創立当初、出品者は十五名（二十七点）でしたが、創立十周年を迎えた時には四十九名（七十五点）そして昨年二十五周年記念展では、陳列作品数二三点となり、七十七名の仲間ができました。木彫や石彫をはじめ、ブロンズ、テラコッタ、それに鉄、ステンレス等、実材を通しての彫刻に強い関心を示しています。彫刻室を持たない為に、絵画の鑑賞空間をかなり占拠していて申し訳ないと思いますが、そこにはまた独特な雰囲気があってよいとも言われています。然し、サロン風な趣味性に流されて、小ぎれいな作品になり、工芸的な技巧に走ってしまうことを警戒せねばなりません。幸いなことに、野外彫塑展示場が全部使用で

一陽展と私

山崎　猛

一陽会創立の第一回展から四十二年間、一度も休まず出品し続けてきたということに私は大きな誇りを持っている。四十二回を年齢に置き換えてみると、私の場合は四十の手習いで、ローマの国立アカデミアへ勉強に行った年齢である。その年には第十七回一陽展（昭和四十六年）が開催された。外国留学のことで夢中だった時ではあるが、一陽展出品のことは忘れることはなく、いかに多忙であっても出品をあきらめてはいけないと、強く心に思っていた。

その第十七回展では、絵画の棚瀬修次さんをはじめ、彫刻の高崎文彦さんや三輪乙彦さんなど十一名が会員に推挙された時だった。一陽会の若き会員の人達の意気盛んな年でもあった。来る第二十回記念展に向けて、一陽会のレベルアップに皆一生懸命な時代であったように思う。そんな雰囲気の中で、私もまた一陽会を背負う一員としての責任を感じ勉強せねばならないと心に誓いながらのローマ行きだったわけである。（略）

さて、留学二年目の第十八回一陽展出品の時がやってきた時、これまた休むわけにはいかず、三ヶ月前の六月になって、四点のブロンズを船便にした。「セルモネタの夢」「モンテヴェルデの娘達」の群像であった。昭和四十七年当時のことでもあり、外国からの出品とあって手続き等で大変な苦労であった。横浜港へ着荷した時、彫刻の穴崎敏光さんが税関の手続きから美術館への搬入まで一切をやって下さった。然し船便のおくれから、展示されたのは開会一週間後だったとのことであった。外国生活に慣れるまでの生活苦と制作に没頭できるまでの諸事情から考えてみても、容易ではなかった筈なのに、澤伊作を四点も出品したということは、一陽会を思う一途な気持ちからのことであったし、こうしたことが一陽会彫刻部への刺激ともなれば幸いと念じたことであった。（略）

帰国してまもなく、福田彫刻の森美術館大賞展への出品候補として一陽会から推薦を頂いたが、残念ながら落選となり、その後続けて各種のコンクールへ出品の意欲を示した。以後十三年間も何故他流試合に挑戦し続けたのかを考えてみると、やはり一陽展出品者としての評価を得たいからであった。

一度も休まなかった一陽展出品と平行して、自分の仕事を他流試合させることによって高めていきたいと思ったし、ひいては一陽会のレベルアップにつながるものと信じたからであった。（終）

（『視点21』「一陽展と私」二一陽会会報」第二十二号、平成九年四月二十日刊）

《華の精》

山崎猛　［平成十二（一九九八）年八月二日没］
昭和五（一九三〇）年茨城県高萩市生れ。昭和三十二年第二回一陽展で特待賞受賞、昭和四十八年イタリア政府給費留学生として、昭和五十九年文化庁在外研修員として渡伊。第三回高村光太郎大賞展（紀尾の森美術館）で奨々賞高原美術館賞受賞、神戸具象彫刻大賞展八五で読売新聞社賞受賞、昭和六十一年第二回ロダン大賞展（東京展）で特別優秀賞受賞、昭和六十二年第二回現代日具象彫刻展で大賞受賞、昭和六十三年六月一陽会常任委員に推挙、第二回ロダン大賞展で優秀賞受賞、茨城県芸術祭で横山大観賞受賞、平成八年第三十二回茨城美術展で奨励賞受賞、平成十年「茨城賞受賞記念　山崎猛彫刻展」（五～六月　水戸京成百貨店）が開催される。

きるということで、ここでも是非一陽会独自の作品群に成長させられるよう努力したいものです。そして、いつまでもみずみずしい彫刻に挑戦していくための初心や無の状態を、いつも心に宿していくべきではないかと思います。……（彷徨編集部）

（山崎猛「会報発刊に思う」『一陽会会報』第一号　昭和五十五年八月二十日）

絵画展示室での絵画と彫刻の一緒の展示は駒会の一策であったとはいえ、一陽会独特の会場の風物と見るむきもあって、一般に好評でもあったようだが、山崎猛が言うように「サロン風な趣味性に流されて、小ぎれいな作品になり、工芸的な技巧に走ってしまうことを警戒せねばなりません」という危機感を煽る要因にもなっていたようだ。従って、野外彫塑展示場の確保は、作品の質的飛翔をも期すべき朗報であった。

……○○会会員だ委員だ理事だと威張った所で、その会の井の中だけの話で、一歩外へ出れば何のことやら、生花の会と間違えられたりして。肩書抜きで世間に通用する作家にならずばなるまい。

公募展に対するジャーナリズムの風当りは年毎に厳しい。気楽な暮しに小さくあぐらをかいて無気力な作品を並べ立てられては、どの会にも活気がないのは当たり前である。審査の時、一般と全員揃きまぜて鑑別し、不勉強なのはどしどし外すことが出来れば面白いのだが。……

今年（昭和五十六年・第二十七回）は各会のオエラ方が大分親にきてくれた。芸大の伊東佩（註6）達が珍しく控室へやって来て、一陽会の彫刻は一人一人がやりたいことをやっているのでユニークで面白い、絵と一緒に並んでいるのも美ましい、彫刻室は物置だからと言っていた。改悪された今の狭い会場で同棲するのはお互いに窮屈だが、以前は二科も新制作も彫刻室はなかった。行動は彫刻室に袖を立てて絵と彫刻を並べ長い間辛棒し

初めて野外展示場を使用したいきさつ（昭和四十五年・第十六回展）

高嶋　文彦

一陽会彫刻部は（旧）都美術館の彫刻室を使用していなかった。したがってやむなく寸法や重量に制限があった。回を重ねる毎に石彫など重量のかさむ作品が多くなるにつけ、野外にも展示場が望まれるようになった。しかし旧都美術館には野外に彫刻を展示するための施設がなかった。

十六回展（昭和四十五年）の時、当時会員の横沢英一氏の提案で、旧都美術館の裏側の庭を借りてここを野外展示場とすることになった。樹木も多く土の庭であったため、敷などを使用して整地するのを手伝った。当時会友であった渡会恵士氏が証言している。同氏によると、目立たない場所であるばかりか展示場の案内図もなく、見にいった人が作品を見つけられずにがっかりした、ということもあったようだ。

初めの頃は野外に展示する作品も少なかったが、一陽展では大きな作品や重い作品も出品できるということが広まって、次第に出品者が増えていった。

ちなみに、第十六回展の野外展示場への出品者は以下の通りであった。

会員　横沢英一。会友　丸山暁、渡会恵士、福田繁忠。一般　八木ヨシオ、林田満。

旧東京都美術館の一陽会の野外彫刻展示場（第16回展）

て来た。会場問題は簡単に解決されるものでなく、気長に時期の来るのを待つしかない。今暫くの我慢と思う。野外展も毎年理めるのは大変であるが一陽会がいつも一番見応えのあることは定評である。

百名近い同志がいるのだ、その一人一人が自分が一陽会を背負って立っているのだという自信を持って頑張れば、もっと魅力のある彫刻部に発展する可能性は十分にあると思うのだ。

（植木力「〔目指そう〕渋言・苦言―彫刻部の諸氏に望む―」『一陽会会報』第三号　昭和五十六年十一月一日）

一陽会彫刻部の総帥・植木力は、美術界全体を見渡す広い視野で一陽会のあり様、ひいては一陽会彫刻部の現況を見据えて、次第に大きくなってゆく会組織の内で会員が慢心することのないようにと強く戒めている。そして「一般と全員揃きまぜて選別し、不勉強なのはどしどし外すことが出来れば面白いのだが」と、会勢の拡大を会是とせざるを得ない公募団体の現況にも、鋭い一瞥を投げている。そして、公募団体の彫刻部の苦闘を、二科会、新制作協会、行動美術協会など先達の例を引きながら、「今暫らくの我慢」と後進にエールを送っている。

以後一陽会は、絵画部は二段掛け、三段掛けを少しでも解消するために借用スペースの割り当ての拡大を当局に申請し続けたし、彫刻部は、狭い展示場での絵画との共同展示を解消するために、彫刻専用の展示室の借用を折々に求め続けているのだが、一切実現の見通しを得ていない。

それでは、植木力から、現況を今しばらく我慢して「一人一人が自分が一陽会を背負って立っているのだという自信を持って頑張れ」と激励された作家たちは、各々の創作にどのような気概を膨らませていったのか、折々に「一陽会会報」に記録された記述の中から繰ってゆきたい。――この場合、植木は絵画、彫刻の別なく一陽会に集う総ての後進の作家に宛ててエールを送っているのだが、この項では、彫刻部の発展と明日への展望という視点で辿ってみたい。

＊座談会など口語体の記述は要約して集録した。

「内なる生命（いのち）」を彫刻に
―ありし日の中村輝先生を偲んで―

三輪乙彦

昭和三十年、当時錚々たる二科会のメンバーであった鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎、彫刻では植木力、浅野孟府ら十二名が二科会を退会し、公募団体「一陽会」を結成した。これは美術界に大きな反響を呼んだ出来事だった。この第一回展で中村輝先生は会友推挙、第二回展で会員となられた。そして長い間、植木先生と共に彫刻部の大きな柱として会の育成に努められた。東京美術学校出身の植木先生と帝国美術学校（武蔵野美術大学の前身）出身の中村先生は共に大正二年生まれ。作風もタイプも対照的で、大きな存在だった。自由でのびのびと発言をかわす審査会場。暑い暑い九月、上野の森の旧都美術館のあの当時の光景がとてもなつかしく思い出される。

（略）

（「中村輝展―内なる生命―」図録　平成十四年　大垣市）

中村輝（平成五（一九九三）年八月逝去）
大正二（一九一三）年岐阜県大垣市生まれ。昭和十年帝国美術学校彫刻科を卒業。昭和三十年第一回一陽展に出品、会友に推挙。第二回一陽展で会員に推挙。昭和四十九年十月一陽会委員に就任。昭和五十二年「中村輝彫刻展」（日本橋高島屋）を開催。昭和五十五年朝経済章を受賞。昭和六十三年六月一陽会常任委員に就任。「大垣市制七十周年記念納涼展　中村輝彫刻作品展」（大垣市郷土館）を開催。平成十四年「スイトピアセンター開館十周年記念　中村輝展―内なる生命―」（大垣市スイトピアセンター）が開催された。

［展示について］

山崎猛――絵画の中に展示するので出品者が自分から大きさに制限を加えてしまう。高さに制限があるとて頭を切って持って来たというのを聞いてドキッとした。そういう制約で作られては困るので、大きなものは野外〔展示場〕で勝負してほしいと言った。だが会の創立以来絵画の中で彫刻が育てられてきたので、他の会にはない独特の味わいが〔会場全体に〕出来てきたように思う。

石黒功さん、小池郁男さん、六崎敏光さん、髙嶋文彦さん、松本蕙さん、林田滋さんが頑張って、野外展示でしか発揮できないような作品群になりつつある。三十周年（昭和五十九年）には〔当代の一第一線級に比肩しうるのではないかと期待している。

彫刻の制作は経費がかかる。なんとか補助できる方策はないか。植木力先生や中村舜先生とも随分話合って考えているが、会の責任でスポンサーを見つけようじゃないかと言っている。百万位出してもらって作品はスポンサーにお渡しするということになるが。われわれ〔会〕がお金集めをしなくては、なかなか大きな作品を作るのが難しい。新人作家育成のために、留学賞を作ってほしいと小池郁男さんが提案している。

石黒功――関東ブロック展（関東ブロック、支部展）の際、壁面を一つ空けてもらって彫刻を並べたことがあるが、本展でもそういう展示がわずかでも出来れば、背の高い作品を作ったために柱の陰に追いやられるということがなくなる。

髙嶋文彦――彫刻で大事なことは、まずどこへ置くかを考えることが先決である。室内に置くならば室内に適した材質をきめることが大事。ただ漠然と作らない方がいいと思う。

野外彫刻展示について考えられることが二つある。折角野外に展示するのだから、まず大きさがほしい。もう一つは完成度を高めること。素材によっては、例えば石のように途中の面白さがあり、ついやめてしまう場合があるが、もう一歩突っ込んだ方がいいのにと思うことが多い。

〔「特集　一陽展」二十八回展の反省と二十九回展への提言」「一陽会会報」第五号　昭和五十七年十一月二十日〕

山崎猛――〔絵画展示室での〕彫刻の飾り付けについては、かなり神経をつかっている。「宿命的な空間」に並べるのだから大変悲壮感がある。長年、絵と彫刻が共存することの意義を考え、展示の方法を工夫してきた。かつて旧都美術館での行動展がそうであったように、何とかして絵よりも彫刻が良いと言われるように、粒揃いの作品を並べてみたいものだ。〔「三十回展の反省と三十一回展への提言」「一陽会会報」第九号　昭和五十九年十二月十日〕

植木力――相変わらず二部屋に、日本の縮図のように押し込められた雑居世帯の宿命は、当分どうにもなりそうにない。お互いに縁あって結ばれたのだから仲良く長持ちさせようではないか。国立美術館建設案も何回か会合をしただけで何のメドも立っていない。野間さんが健在なら、「そう、いらつきなさんな。今では立派にやっているんだからいいわな」といわれると思う。今の狭さを逆手にとって、充実した他の会に見られない団結の和を見せたいものだ。辛抱我慢もあるが、二部屋は見る側からは丁度いい大きさで、隅から隅まで見落とさないし、この所の入選作の展示は最後まで見劣りするものはなく、どこにも負けない見事なものである。私達が他の会を見に行く場合、先ず彫刻室をのぞいて、絵の方は目星しいのを探して二室巡るのが精一杯で、三、四団体展を歩き廻われば疲れ果てる。一陽会の彫刻は数こそ少ないが、会員の頑張りで頗る好評である。去年より又一段とよくなったとの評判をよく聞いた。

〔「第三十三回展　私の感じた作品」「一陽会会報」第十五号　昭和六十二年十一月三十日〕

［創作について］

髙嶋文彦――私が石を使っている動機は、石が好きで使っているのだが、発想としては人間の住む環境をテー

マにしている。だが漠然としたとりとめのない世界なので、未だに試行錯誤を繰り返している。一つには何故作るのかという意識が曖昧なのかも知れない。かつて芸術家は哲学者のように、真理を追究するという社会的使命があったのだが、今は彫刻を作る時に社会的重要性が少なくなっているのかも知れない。

石黒功――最近は野外彫刻展示場に、木の二メートル位の大きい作品を出品している。自分の作品と一般鑑賞者との関わり合いで、何か感銘を与えるものが出来ればいいわけだが、とてもそれを計算したり意識したりするところまでいかないのが現状である。木の塊――南方のラワン材で直径一メートル以上あり、横にしても胸まである丸太が転がっているわけで、その中に自分の願っている形を見つけたいのだが、なかなか見つからない。

（第三回一陽会関東支部研究会）「一陽会会報」第八号　昭和五十九年三月十一日）

松本進――美術学校の時は具象で、人体・女性のヌードを作っており、それが半分位であとは石や木や金属を扱ったが、素材的には一番表現し易いのは粘土で時間も長かった。学校では解剖学的に骨格や筋肉の勉強ができるが、生身の人間を作る場合はその人の全身から受ける人間的要素を土の中で何とか表現しようと作家は長い時間をかける。学校を出ると経済的にも時間的にもモデルを使い切れないし、ぼくの場合は抽象的な表現になった。

技術的なことを言えば、鉄だとたたいて溶接する仕事や磨き、錆をとめる方法などについて考える。小品の場合は材料費の安いテラコッタ（鉄分が多く粒子が荒い土で焼いた素焼）の具象や抽象の作品を作っている。また縄文土器と同じ方法で粘土をひも状に積んで焼くと、ひびが入っても爆発せずに焼けるので最近よくやっている。土を積んでいく時、粘土の乾燥の度合いに制作の流れをうまく合わせると、気持ちよく最後まで積んでゆける。

（第四回一陽会関東支部研究会）「一陽会会報」第十号　昭和六十年六月三十日）

八木ヨシオ――抽象の（仕事をしている）人々が、経済的な意味ではなく不幸な作家活動をしているということは確かである。ぼくらも当初お絵かきや手仕事が好きだったり具象の作品をつくっていたが、物をつくっているうちに抽象作品をつくるようになり、手わざを喜ぶことができなくなった。ミケランジェロの時代（ルネッサンス期）は目的がひとつで何も迷わず物をつくることの喜びが感じられたのじゃないか。

ぼくらの場合、物をつくるとき頭で感じるより身体で感じるところがあり、文学的思考ではなく、むしろ音楽やスポーツに近い考え方で制作の発想をしている。直接的であまりロマンチックではないが、自然とか宇宙を見つめることでは同じだが、夢のあるロマンチックな宇宙の真髄を見つめるというのではなく、頭の中で物理的に組み立てるというように違いがある。思考的な作品というより直接的な「物」をギャラリーに並べて、物自身が何かを言うのを発見しようというところだろうか。

（第六回一陽会関東支部研究会）「一陽会会報」第十四号　昭和六十二年七月二十五日）

石黒功――（私の）作品のテーマは一貫して「坐像」。半抽象的な表現を続けてきた。同じテーマを自分に課して、いかに新しい形を発見するか、いかに美しい量感を作り出していくかを心がけてきた。しかし、木彫なので素材の木の形や大きさに制約される。ヒビ割れやフケている（老廃化した）部分が思いのほか深かったり、肝心な所に隠れ節が出てきたり、思わぬ伏兵に手こずることも多い。結局、素材に歩み寄らざるを得ない。十年ぐらい前は、野外陳列場に、高さ二メートル余の作品をドンと置いたりもしたが、二メートルとはいかなくても、素材を組み合わせるなどして、少しは大きい作品を作ってみようかと考えている。

〔明日の一陽会彫刻部へ〕

植木力――今年（昭和五十八年、第二十九回展）の彫刻部は、一陽賞も青麦賞も特待のいくつかも初出品の人がとった。一般出品に多くの優秀な作品が見られたのは心強く有難い。久し振りに熱気を感じて審査が盛り上がった。逆に会友、会員諸氏の中に並べたくないような作品のあったのは残念であった。誰彼言わなくても御本人が承知の筈である。無気力に停年を待っていると愛妻に逃げられそうだ。

どこの彫刻部も固定して下り坂にある時、一陽展が上向きであることは嬉しいことだ。

彫刻部に彫刻展示室を！

中村　義孝

（略）日本では公募展が活発であるが、このような展覧会形式はイタリアで見かけることがなかった。これは恐らく日本独自の文化であるように思える。しかしこの公募展も一時に比べて勢いが下降ぎみになってきているようにみえる。戦後、会を創設し引っ張ってきた作家達が高齢になって世代交替の時期に入っていることや、若い世代の作家達の公募展ばなれが原因しているのだろうか。現代においては、発表の場が公募展ばかりでなく、コンクール展や個展など、自作の表現スタイルにあった選択肢が以前よりぐっと広がってきたため、若い作家の何割かはそちらに流れていっているのだろう。どこの会でも一般出品者の数はひと頃に比べれば少なくなったという話をしている。

一陽会彫刻部の仲間が集まると、若い人たちを集めるにはどうしたらいいだろうかという話題が必ず出てくる。そうした折、最後は、まずは魅力ある展覧会にして行くことが肝要で、そのためには会員一人一人がいい作品を作り会場を充実させて行くことだ、そうすることで若い人も自然と集まってくるだろう、というところに話は落ち着く。しかし、意気込んで制作している時に頭をよぎるのが展示スペースのことだ。

絵画を展示してある会場に自分の作品を置いた時のことを考えると、絵画の壁面の視界を遮ってしまってはと、つい小さく作ってしまう。一陽展は絵画と彫刻の共存を謳ってスタートしたかもしれないが、四十四年経って時代も作家の作る物も変わってきた。公募展の彫刻室や野外コンクール展や個展の会場でも大きな作品をよく見かけるようになり、四十年前とは比べ物にならないくらい大作を扱う技術や道具が進歩している。必ずしも大きな作品が良いとか、石や木などの素材の方が石膏の作品より良いという短絡的なことを言っているのではないが、素材や大きさで存在感が出てくるのも否めない事実である。一陽会彫刻部のなかには、大きな作品を作ろうとしても遠慮してしまい、思い切った制作ができないでいる作家が多いのではないだろうか。また、大きな作品を室内で展示したいと搬入して来ても、彫刻部の方で自制して野外に出してしまう事が多い。（略）

もはや今の展示場では、彫刻部の作家、特に若手の作家が作ろうとしている作品の展示に対応できなくなっているように想う。現在の都美術館のような広い空間としっかりした床をもった彫刻室が使用できれば、彫刻部の人達は持っている力を出し切って迫力のある仕事を見せてくれるのではないだろうか。（略）

かつて旧都美術館から新都美術館に建て替わったとき、国展や自由美術展の彫刻部は絵画展示室から彫刻室に移ることができた。今をさかのぼること二十数年前、私が大学生で旧都美術館に国展を見に行った時は、現在の一陽展のように彫刻は絵画の展示室に置かれていた事が思い出される。その時、一陽展は同時期開催の新制作の彫刻部と話し合いを持ったが、大小二つの彫刻室は新制作が全部使うことになり、その代わり野外の展示場だけは一陽会が使うことができることになったそうだ。その経緯は年配の委員の先生方からお話を伺った事があるが、野外展示場を確保するだけでも大変なご苦労をされたようだった。（略）

現在、一陽展は既に彫刻室を使用するにふさわしい団体に成長しているし、今後、美大を卒業したての若手彫刻家の受け皿となって育成していくためにも、彫刻部内部では彫刻室の要望はますます高まっている。

今回ナショナルギャラリーができることで、旧都美術館から新都美術館に公募団体が移った時のように、彫刻展示室を一陽会が確保できるチャンスがまた巡って来たように思う。絵画部の方々にとっても、彫刻が彫刻室に移り絵画室の空間が広がったほうが、ゆったりと絵画を鑑賞できて好都合なのではないだろうか。（略）

（『現代21　彫刻部に彫刻展示室を！』「一陽会会報」第三十四号、平成十一年四月二十日）

「野外彫塑展示場」での彫刻部の作品講評会（第49回一陽展）

野外展示場は他の会も使っているが、一陽会が毎年一番いいと作家仲間でも定着している。しかしこの広場を毎年埋める晋さんの大変な頑張りには驚くばかり。……一陽会の皆さんは個展やグループ展を実によくやられる。若い作家が手馴れた仕事の他に新しい意欲作を並べたら、見に来てくれた先輩が、こんなのは駄目だと否定されたと悲観していた。自分のやりたいことを忠実にやるのが本来で、簡単に一蹴すべきではあるまい。＊傍線は編集部

（「酒課・熱年賛歌」「一陽会会報」第七号　昭和五十八年十一月二十日）

土屋瑞穂――（「一陽会彫刻部について」）私の想念に去来することが二つばかりある。一つは東京都美術館の移転問題であり、団体展の行く末の問題である。現在の美術館が新築された時の、各会派の動きも複雑な経緯があったと聞いている。一陽会としてどんなビジョンを描くのか、また彫刻部としてはどう対応すべきなのか、どんな場で検討すべきなのか。

もう一つは、若い作家の団体展離れにどう対処すべきかである。美術志向の若い人々が減少しているとは考えにくいのであるが。……行政や（公募団体展以外の）他の団体なり組織によるコンクール形式の賞金付公募は増加している。この現象は歓迎するとしても、将来に向けて、新鮮で魅力ある団体展の企画が考えられるとすれば、結果は違ってくるのではないかと思えてならない。

（「委員推挙によせて」「一陽会会報」第三十三号　平成十年四月二十日）

津野充聡――確りとした主題もなく、追求すべきシリーズももたず、その時々の感じ取った事柄からつくりたいものをつくり発表してきた。そのような中途半端な制作者をも、一陽会はその懐の深さで受け入れてくれた。それは個性を尊重し、あらゆる表現を認め、その個人の可能性や進展を引き出していこうとする一陽会のすばらしい特徴だと思う。審査における、各作品への丁寧な審議、入落決定、賞選出に至るまで、過程での充分な話し合いを見るにつけ、作者や作品への真摯な態度でのかかわり方が感じられる。

ひとつ希望を述べさせて戴くならば、彫刻部の会員数からして、全員での審査が可能であれば、数多くの貴重な意見を拝聴できるし、彫刻部の総体的な意見交換もできると思う。ご検討を。

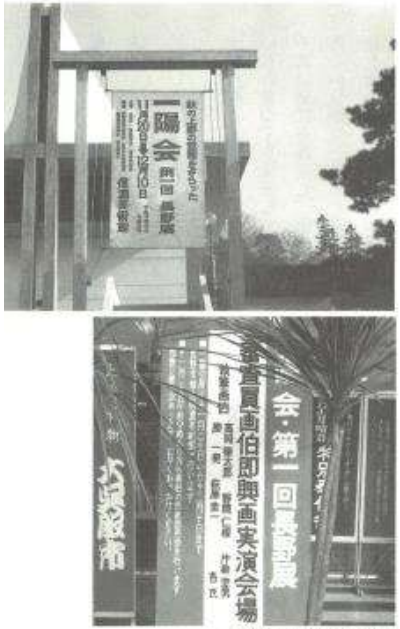
（「視点21」「一陽会会報」第三十七号　平成十四年四月二十日）

◇地方別ブロックの確立 III

〔長野支部〕

＊〔長野支部の展覧会・活動記録は巻末にまとめて掲載〕

昭和四十三年、一陽会と信越放送の共催で第十四回一陽展（本展）を長野市の信濃美術館に巡回し、中央から招来した大作に、地元出身の会員、会友、出品者の作品を加えて、第一回一陽会長野展として開催（十一月）した。それまで中央画壇の大作に接する機会があまりなかったこともあって、地元の美術界に新風を吹き込み、大きな刺激を与えた。この中央本展が巡回する形で開催された一陽会長野展（於・長野市、信濃美術館）（注7）は、昭和五十七年の第十五回まで継続され、第十六回展以降は、長野支部独自の公募展形式の支部展として開催されている。一陽会は、中央本展が巡回した（またそれに準ずる）地方組織を「支部」として処遇し、展覧会活動、広報の支援をおこなってきたが、一陽会長野展の開催についてもしばしば指導の会員、委員の派遣をおこなっている。長野支部の展覧会活動は、この一陽会長野展を中心に展開されていて、松本市のあがたの森文化会館（昭和五十八年第十六回展～第十九回展）、松本市の井上百貨店（昭和六十二年第二十回展）、長野市の信濃美術館（昭和六十三年第二十一回展）、県民文化会館（平成元年第二十二回展）、長野市のギャラリー82（平成二年第二十三回～第二十六回展）、県



一陽会第一回長野展の会場

一陽展（本展）長野初巡回の頃

（昭和四十三年）

垣内カツアキ

一陽会の歴史の中で、長野県にとっては、また出品者として記憶に明記されているのは第十四回展（本展　一九六八年）から今日まで、支部としても一県で独立して展観を行い続けていることです。第十四回展は東京本展の一部の作品と共に、県内からの公募を行い、長野一陽展として盛大に行われました。当時の出品者は県内からは未だ少なく、故人となられた絵画の綿笠省三、伊藤公二、それに雄田順彦、彫刻の渡会意士、そして私垣内くらいでした。写真は、当時、長野市の目抜き通りに出来たばかりの商業、門前町長野の中心的存在の丸光デパート前で行なわれた、街頭でのデモンストレーションとしてのスナップです。

確か、展覧会オープンの前日か、当日の朝だったと思います。当時まだ気力、体力、旺盛な会のリーダー、野間仁根先生、高岡徳太郎先生、片柳忠男先生、勝一晃先生、萩原光観先生、植木力先生等が来長されて騒々しいものでした。その後リーダーの先生方は替わりましたが、当時の先生方は数回、秋が訪れるとやって来て下さいました。信濃美術館での私の若い頃の一陽展は、忘れることの出来ないとても良い思い出を作ってくれました。

（絵画部会員）

長野市丸光デパート前での共同制作デモンストレーション。高岡（右）、野間両氏。

手前片柳忠男、奥左勝一晃、右萩原光観（衆一）の諸氏。

民文化会館（平成六年・第二十七回展）、長野市のギャラリー82（平成七年・第二十八回～第三十回展）、伊那文化会館（平成十年・第三十一回展）、長野市のギャラリー82（平成十一年・第三十二回展～　）というように、毎年県内随所で開催している。

長野支部全体の活動としては、昭和五十七年、絹笠省三、武田太郎歴代支部長から引き継いだ雄田順彦支部長のもとで支部の活動要綱が整えられて、独自の支部展の運営、研究会（夏季、於・松本市内）が開催され、渡会章士、神林茂各支部長のもとで、長野県下で盛んに開催される彫刻展、彫刻シンポジウムへの参加、一陽会長野支部小品展が開催（平成五年）された。また、平成七年に、やまぐちかずお新支部長のもとで「一陽会会報長野」（年二回刊行）が編まれ、支部構成員（会員、会友、出品者）相互の情報交換・意思の疎通、支部活動要項の円滑な伝達がはかられるようになった。

「一陽音頭」（昭和五十一年頃）

昭和五十一年九月十五日の付のある、一陽会長野展事務局（絹笠省三方）の用箋の表紙が付された一枚の楽譜が、長野支部に残されている。作曲者は武田太郎。作詞は付されていない。

作曲者の武田太郎（昭和五十三年から五十六年にかけて長野支部長を務める）は、昭和五十一年・第二十二回展で絵画部会員に推挙されている。昭和五十七年十一月二十六日に逝去するが、絵画制作とともに郷里の民俗学研究にも多くの成果を残したと伝えられており、音楽にも深い造詣があったと思われる。

長野展を振りかえって

神林　茂

昭和五十八年十一月に、松本で最初の一陽会長野支部展（第十六回）が開催された。松本で開かれる支部展は前年まで長野で十五年間実施されて来た、中央（東京展）の作品と地方で公募した作品の展示ではなく、長野支部の同人（長野県内の一陽会出品者）と会友、会員の作品で規模は幾分縮小されたが、一人二点から五点出品が出来て、いい展覧会になったと自画自賛している。これも松本在住の雄田、渡会会員、中村、山口、西沢会友、山本さんや同人の皆さんの並々ならぬ努力によるものと頭がさがる思いをしている。

長野展を振りかえって見るに、絹笠支部長を助けて十五年間、私なりに長野展のために努力して来たつもりである。この十五年間には、非常に多くの出来ごとがあって簡単には書きつくせないが、絹笠会員、故武田会員の御苦労に感謝したい。これも、中央の委員である勝先生をはじめ、植木先生、小川先生、北山先生、佐野先生や時々長野までお出掛けて下さった大石先生、荻原先生などの先生方の多方面の御助力があったからと感謝申し上げる次第である。（略）

（長野展が）開催される前日頃から信越放送でテレビ中継をしたり、善光寺の山門近辺で野間先生、片柳先生、小川先生、荻原先生、勝先生の諸先生方による、作品制作が公開されたりしたものである。そして夕方になると野間先生の講演会等があり、中国の古い話などを引用した非常に蓄積のある話を聞いたり、有意義な夜を過ごしたものである。（略）（「一陽会会報」第八号　昭和五十九年六月二十日）

長野一陽展会場（松本市、あがたの森文化会館）

長野支部展会場（長野市、ギャラリー82）

北山幸生、森秀雄両委員による講評会。

〔新潟支部〕　＊（新潟支部の展覧会・活動記録は巻末にまとめて掲載）

昭和三十六年、かねてより中央画壇の大作、秀作を地元で展示公開して欲しいという要望があり、それに応える形で、第七回一陽展（本展）を新潟市（於・小林百貨店）で開催し、中央から招来した作品と県内出身作家の作品を展示公開した。これを契機に新潟グループの活動が活発になり、新潟支部への礎となった。

本展の巡回展としては、昭和四十一年の第十二回一陽展（於・BSN新潟美術館）が開催され、地元独自の活動としては、昭和五十年代のはじめ頃から上越、中越地区の本展出品者が長岡市内のデパートでグループ展「新潟一陽展」を開催していたが、昭和五十六年（一九八一）に下越、佐渡地区の出品者が加わり、改めて「81新潟一陽展」として新潟市内のデパートで作品の発表をおこなった。翌年「82新潟一陽展」を開催、以後会場側の都合などで中断のやむなきに至っていたが、平成三年に新潟市美術館に市民ギャラリーが開設されるにおよんで、この市民ギャラリーを会場に、従来の新潟一陽展を「一陽会新潟支部展」と改めて毎年春に開催することになった。この一陽会新潟支部展には県内在住の会員、会友、出品者が新作および本展出品作品を展示し、関東ブロック（関東支部）の研究会で数度にわたって講演をされた、美術評論家で新潟市美術館長の林紀一郎氏を招いて研究会をおこなっている。

支部所属の会員、会友、出品者の創作発表活動は活発で、県展、県芸術美術展、県美展、などに意欲的に出品を重ねている。

第1回一陽会新潟支部展
（平成3年　於・新潟市美術館市民ギャラリー）

第10回記念一陽会新潟支部展
（平成12年　於・新潟市美術館市民ギャラリー）

〔秋田グループ〕　＊（秋田グループの展覧会・活動記録は巻末にまとめて掲載）

昭和三十一年、第二回一陽展（本展）が地元の要望に応えて秋田市（木内百貨店）で開催された。東京展の展示の中から、鈴木信太郎、野間仁根、髙岡徳太郎、植木力など創立会員をはじめとする主要な作家の作品と、秋田県出身の作家の作品を加えた展示であり、地元では大きな関心を呼び、秋田グループ結集に向けての第一歩となった。

一陽会秋田グループは平成七年現在七名と決して多くはないが、平成八年以降、一陽会秋田展を随時開催しその成果を本展で次第に明瞭にしてきている。

さらに、秋田県展（総合美術展）、秋田美術作家協会展、秋田県秀作美術展、秋田県総合美術巡回展（秋田現代美術展）、公募日本海美術展などに活発に出品し、その裾野を広げている。

一陽会秋田展（平成15年）の出品者

第19回青森一陽展（平成9年7月　於・NHK青森放送会館）

〔青森一陽会〕　＊（青森一陽会の組織等、活動記録は巻末に表とめて掲載）

昭和五十四年、棟方寅雄会員を中心に、県内在住の一陽展出品者が集って青森一陽会を結成し、同年青森一陽展が開催された。平成元年には青森一陽会小品展が開催され、以後年年、夏期に大作を出品する青森一陽展と秋期に青森一陽会小品展を開催している。青森一陽会の全体の活動としては、昭和五十五年以降對馬久世喜が中心となって、青森一陽会の活動として裸婦研修会、クロッキー会、デッサン会などの研究活動や、本展に向けての研究会を行ってきた。当初、徐々に「一陽会東北支部」結成を視野に入れた活動を考慮してきたが、東北全域を対象範囲とするためには、当該地域在住の作家間の意志の疎通は容易ではなく、広大な展望は次期に託しつつも、東北地域合同の研究会、展覧会開催の機会を採っている。

なお近年の課題としては、県内で広範に得ている展覧会、研究会活動をさらに密にし、新しい仲間の発掘、養成を目指している。

〔札幌グループ〕　＊（北海道支部の展覧会・活動記録は巻末に表とめて掲載）

昭和三十年の会創立以来、少人数ながら本展に出品して来たが、昭和四十六年、一陽展会員小品展が札幌（於・札幌丸善　十二月）で開催された。北海道における一陽会の本格的な活動は、この時を嚆矢とする。本展の札幌巡回は、昭和四十八年から昭和五十六年の第二十七回展まで継続されていて、会場はそれぞれ、昭和四十八年・第十九回展（於・札幌三越）、昭和四十九年・第二十回展～昭和五十六年・第二十七回展（於・五番館／札幌マスカットモア）となっている。当初、新井田捨策などが、本展受け入れの会場探しに奔走したが公設の展示施設が乏しく、どうしても足場のいい札幌中心のデパートが会場になった。

北海道における公募展の状況は、全道展、道展、新道展が主なもので、最も古い道展（北海道美術協会展　大正十四年第一回展）は平成三年に第六十六回を数えた。会員の石崎義政、富樫貞平は昭和三十年代からの道展の会員である。

本展の巡回は九回を数えたが、北海道支部のグループ展としては、一陽会札幌展（昭和四十九年～昭和五十六年まで八回開催）、北海道支部展（昭和五十四年～　／昭和六十二年から「一陽会北海道作家展」を開催している。統一の北海道支部とはいえ、大変広域にわたる北海道全域での支部活動は困難で、どうしても札幌近郊の作家を中心とした小規模の活動が中心となってしまった。

平成十三年、北海道支部を解散し、まとまった活動を休止することになった。以後各個人が活動することになったが、翌平成十四年に札幌在住の出品者が集って「札幌グループ」が発足した。

札幌五番館における一陽展（第23回展）のポスター

◆創立会員 野間仁根の逝去（昭和五十四年）

昭和五十四年十二月三十日、一陽会の創立会員、常任委員の野間仁根が、都内港区の慈恵医科大学付属病院で肺炎のため逝去された。

昭和三十年、鈴木信太郎、高岡徳太郎とともに一陽会を創立。「なにものにも制約を受けない、自由で清新な創造」を信条とされ、創立間もなく若い一陽会を引っ張ってこられた。経済高揚（バブル）期の価値観の多様化と、それに伴う公募団体展離れが進み画壇の低迷が危惧される折にも、磊落な「絵描き魂」で紀憂を一掃し、「前人未踏の新分野」を拓こうとする一陽会の先頭に立って、ともに夢む若い作家たちの精神的な支えであり続けられた。

その画業と人となりの軌跡を採録して、得難く稀なる「画人」の生涯を偲ぶ項としたい。

野間仁根

（昭和五十四／一九七九年十二月三十日逝去）

明治三十四（一九〇一）年愛媛県越智郡津倉村に生まれる。大正八年今治中学卒業後、母と上京。大正九年二月川端画学校に入学。四月東京美術学校に入学。大正十一年美術学校在学中に西友と久遠社を結成、美校彫塑部で第一回展を開催。大正十二年伊藤廉、中谷健次、一原五雪、山本稚彦（彫塑）、斎藤瑞俊（木彫）と童画社を結成、後に沢健太郎、水野清が加わる。大正十三年第十一回二科展に初入選。神田竹見屋で個展開催。大正十四年東京美術学校卒業。卒業制作「裸婦」（白号）。十二月香田眉山寺の第十一連隊山砲隊に砲兵として短期入営。昭和元年現役満期除隊。二科展に出品以後毎年出品。昭和二年第十五回二科展に「夜の床」など三点出品。第十五回樗牛賞受賞。昭和四年第十六回二科展に「ぜ・ふうるむうん」「友達」を出品、二科賞受賞。「槐樹社」の同人となる。昭和五年二科会会友に推挙。昭和六年佐藤春夫の小説「むさしの少女」に挿絵を描く。昭和七年永瀬志華子と結婚。昭和八年第二十回二科展に「画室」「縛れる旅人」を出品、二科会会員に推挙。昭和九年長女佳子生まれる。昭和十年長男傳治生まれる。昭和十一年坪田壌治作「風の中の子供」（東京朝日新聞夕刊の連載小説）に挿絵を描く。昭和十二年次男雅二郎生まれる。坪田壌治作「三平チャンと善太君」（大阪朝日新聞夕刊の連載小説）に挿絵を描く。昭和十三年臨時召集により第十一連隊山砲隊に応召。中国大陸に渡る。昭和十四年召集解除。昭和十五年一月から子供服安房郡太海へ写生旅行。八月伊豆、十月茨城県龍ヶ崎町へ写生旅行。小川未明著『童話集』、坪田壌治著『童心の花』、舟橋聖一著『愛児烏賊』の装丁を行う。昭和十六年四月妙義山に写生旅行。五月長野県初谷鉱泉に写生旅行。次女利根生まれる。十月文化奉公会出征画家展に「広東の回想」を出品。昭和十七年井伏鱒二の小説「花の街」（東京日日新聞夕刊）に挿絵を描く。昭和十九年二科会解散。愛媛県に疎開。昭和二十年二科会再建に応じて上京。三男博生まれる。昭和二十七年改組目展に審査員として出席。「瀬戸内海・南浦風景」を芸大文庫が買上。石川達三の小説「青色革命」に挿絵を描く。昭和三十年鈴木信太郎、高岡徳太郎と二科会を退会。七月鈴木信太郎、高岡徳太郎らと一陽会を結成、九月日本橋高島屋で第一回一陽展を開催。「星座アンドロメダ」「星座蛇つかい」「貝殻」「生物A」「生物B」「海」「夏魚」を出品。昭和三十一年第二回一陽展に「森のニンフ」「海と魚」「二尾の魚」を出品。昭和三十二年第三回一陽展に「海」「潮瀬」「魚介」を出品。昭和三十三年第四回一陽展に「水浴」「水辺の物語」を出品。昭和三十四年第五回一陽展に「夜々の星」「森の物語」を出品。昭和三十五年第六回一陽展に「ダリア」「波太風景」「波太風景」を出品。昭和三十六年第七回一陽展に「聖人文庫のダリア」「外房波太漁村」「太海海岸採石の山」を出品。昭和三十七年第八回一陽展に「浜木綿」「魚の家」「魚の散歩」を出品。昭和三十八年第九回一陽展に「聖人文庫のダリア」「漁村の岩山」「漁村の岩礁」を出品。昭和三十九年第十回一陽展に「天涯」「薔薇」を出品。昭和四十年第十一回一陽展に「来島水道」「魚の散歩」を出品。昭和四十一年第十二回一陽展に「吉浦漁村」「天面漁村」を出品。昭和四十二年第十三回一陽展に「来島水道 仲度島付近」「能島水道」を出品。昭和四十三年第十四回一陽展に「瀬戸内海早川」「瀬戸内海 能島鯛崎」を出品。昭和四十四年第十五回一陽展に「瀬戸内海 石槌山遠望」「瀬戸内海 早川の景」を出品。昭和四十五年第十六回一陽展に「森の友達」「虫の演奏会」を出品。昭和四十六年第十七回一陽展に「瀬戸内海 仲度島付近」「瀬戸内海 漁港」を出品。昭和四十七年第十八回一陽展に「瀬戸内海 伯方島遠望」「瀬戸内海 南浦の朝」を出品。昭和四十八年第十九回一陽展に「雪石の眺望」「森の人々」を出品。昭和四十九年第二十回一陽展に「天ノ河」「森の友達」を出品。昭和五十年第二十一回一陽展に「森の友達」「虫の演奏会」を出品。昭和五十一年第二十二回一陽展に「森の猿」「森の妖精」を出品。昭和五十二年第二十三回一陽展に「蛙と猿」「ニンフの午睡」を出品。昭和五十三年第二十四回一陽展に「マリオネットの散歩」「森のヒッピイ」を出品。昭和五十四年第二十五回一陽展に「芸術家の散歩」「森の楽人」を出品。十二月三十日逝去。享年七十八歳。

釣キチ天狗　交遊録

―日本美術家釣クラブ始末記（一陽会外史）昭和四十四年～―

田所　滿雄

私は子供の頃は川で遊ぶ釣り好きの少年であった。

杉並文化団体連合会美術クラブの理事を、一水会の田中春弥さんとしていた昭和四十三年頃、一水会の岡田行一さん、版画協会の北岡文雄さん、熊谷吾良さん、親縁の田中行雄さんと阿佐ヶ谷の喫茶店で釣りの話にはずみがつき、何時の間にか同好の会が生まれた。

月一回、海や川での釣りの例会が開かれた。釣りに関してそれぞれ自分の特技を持っていたり、全然釣りを知らない人もいる自由な集まりであった。その頃はまだ河川や海は綺麗で魚もよく釣れた。船酔いになり寝ていたら置き竿に大物がかかり、賞品の立派な竿をもらったり、館山沖でイナダがクーラー一杯になった事もあった。よく釣れると自然と夢中となり、酒の肴は自慢の話に花が咲く親睦会であった。

釣り同好の士が集う。北岡文雄、池田憲二、本郷新、熊谷吾良、飯田四郎、田所滿雄ほか。昭和43年頃

日本美術家釣クラブ創立総会にて（伊豆、大仁ホテル）初代会長・野間仁根の挨拶。昭和44年。

翌年の伊豆狩野川での例会には二十六、七人が出席。その後大仁のホテルで日本美術家釣クラブの創立の会となった。当日、東京から馳せつけた野間仁根先生も、米良、片桐先生と総会に出席された。四国、瀬戸内海の出身で子供の頃から海に青ち海に親しんでこられた野間先生は、二科の頃から房州では二ヶ月も、三ヶ月も宿に泊まり込んで釣りをしながら海の絵や魚の絵を描き、「香間先生釣日記」という随筆集迄も出版され、当時から有名な太公望。

画家で釣りに関しては右に出るものはない存在、という事で初代会長に推薦となった。

その時の出席者は、当時芸大の教授であった菊地一雄、新制作の本郷新、舟越保武、へら鮒釣りのベテランで後の日本美術家連盟理事長の北岡文雄と熊谷吾良、日展の桜田精一、安藤軍治、行動の田中穂之、新制作の飯田四郎、伊藤礼太郎、三井永一、国画の橋野富彦、二科の柱ゆき、主体の川合喜二郎、院展の池田憲二、モダンアートの勝本富士雄、棒絵の岡本奥太、魚博士の檜山義夫先生他、多士済々の顔触れであった。例会は、海、川、沼と遠征が頻やかに続いた。創立六年目には四国の南端・柏島まで出掛けて海釣りを楽しんだり、下呂、北海道まで足を延ばし、又、デパートで釣りの絵画彫刻展も開催したりした。

又、三月の大雪に見舞われ、雪に閉じ込められて身動き出来なくなり、入試の試験官であった菊地一雄先生、挿絵の連載を持っていた岡本奥太さんは大あわてをした事など。

会長も本郷新、菊池一雄、桜田精一、北岡文雄、舟越保武先生と替わり、高度成長期、バブルの崩壊と時代の変遷を経ながらも、永年事務を努力して支えて頂いた熊谷吾良さんのお蔭で、三十年の命脈を保ち続ける事が出来たのであった。

今や殆ど故人となられた先輩先生方の当時がなつかしい思い出となってしまった。（二〇〇二年八月）

（総務部常任委員）

註―新東京都美術館の建設準備委員会――昭和四十三年五月十六日発足、「準備委員」谷口吉郎（建築家・日本芸術院会員）、有光次郎（武蔵野美術大学学長）、小林行雄（東京国立近代美術館長）、鶴田総一郎（国立自然教育園次長）、太田和男（元東京都副知事）、山崎覚太郎（工芸作家・日本芸術院会員）、宮本三郎（洋画家・日本芸術院会員）、苗村伊良（東京都財務局管繕工事部長）、城内亨一（東京都首都整備局都市計画第一部長）、北村信正（東京都建設局公園緑地部長）、佐藤正憲（教育庁総務部長）、佐野政雄（教育庁社会教育部長）、今井治夫（東京都美術館長）の十三名で委員長は有光次郎。肩書きはいずれも当時。／実務に携わる「幹事」は、岡山誠二（東京都財

第5章 新時代の一陽会

【第三十四回展・昭和六十三年～】

第49回展の会場

務局営繕工事部計画課長）、有沢清一郎（東京都首都整備局都市計画第一部地域計画課長）、菊地弛倍（東京都建設局公園緑地部都市公園課長）、植野一男（教育庁総務部財務課長）、杉山文雄（教育庁社会教育部文化課長）、山田宏（東京都美術館副館長）の六名。

＊肩書きはいずれも当時。

註2 『一陽会会報』――昭和五十五年八月二十日号が第一号。一頁あたりB5判・当初は全十二～十六頁の編成。発行者は「一陽会事務局広報部」。

＊編集責任者は以下の通り。第一号～第二号　北山泰斗、荻原宗晃、山田治、鈴木雅弘。／第三号～第十三号　北山泰斗、荻原宗晃、山田治、鈴木雅弘、石川三知代。／第十四号～第十七号　北山泰斗、山田治、鈴木雅弘、石川三知代、早川恭子。／第十八号～第二十八号　北山泰斗、鈴木雅弘、石川三知代、早川恭子。／第二十九号～第三十号　北山泰斗、鈴木雅弘、石川三知代。／第三十一号～　須田良雄。

註3 年に二回刊行――第二十九号（一九九四年）まで年二回刊行する。第三十号、一九九五（平成七）年から年一回の刊行となる。

註4 美術振興促進のシステム――昭和五十五年の時点で、東京都美術館を使用する団体は百九十四団体で、絵画および総合（絵画、彫刻）ジャンルの団体は八十を数えた。その八十団体のうち日展、二科展、日本美術院、光風会、白日会、太平洋画会、国画会、春陽会、新構造社、東光会、旺玄会、一水会、新制作協会、創元会、朱葉会、行動美術協会、創日会、水彩連盟、示現会、二紀会、モダンアート、新槐樹社、一陽会など都美術館を使用する主要な団体が、都美術館使用に関する諸問題を任意に協議する集い。

註5 東京国立美術展覧会場建設を促進させる会――「美術振興促進のシステム」に参画している団体が共通に抱えている会場問題を解決するために、公募団体展専用の国立の展示施設の建設を提起し、そのための諸問題を討議するための任意の集い。

註6 伊東俊一――大正七年生まれ。東京美術学校彫刻科卒業。日本秀作美術展などに出品。東京芸術大学名誉教授。新制作協会会員。

註7 「本展が巡回する形で開催された一陽会長野展」――昭和五十四年の第十二回一陽会長野展は、一陽会創設二十五周年記念の事業の一環として、従来の長野市、信濃美術館のほかに飯田市教育文化センターでも開催された。

第5章　新時代の一陽会

第三十四回展（昭和六十三年・一九八八年）～第四十九回展（平成十五年・二〇〇三年）

一陽展（東京本展）及び会員・会友推挙　授賞の記録

昭和六十三年（一九八八）

常任委員制

・六月、会組織を改正、現委員が常任委員に就任し、委員を次の通り推挙（於・日本美術家会館会議室）。

上田春雄、大場吉美、大山美信、角美貴子、細笠省三、神門四郎、沢オイ、沢田正太郎、鈴木力、舘野弘、棚瀬修次、谷岡久、土橋敏男、坪井正光、鶴田猛、中村秀雄、浜田清、山田治（以上絵画）、野間傳治（版画）、金田忠、三輪乙彦、六崎敏光（以上彫刻）。

＊八月、会員・浅井一介（絵画）逝去。

第三十四回展覧会

（九月十八日～十月三日　東京都美術館）

（会員推挙）安達弘章、伊藤公二、市川裕康、小木曽登子、奥山三郎、川辺嘉章、中嶋強、渡辺喜久蔵（以上絵画）、古川晶弘（版画）、小山重之、小林一夫、高木一郎（以上彫刻）。

（会友推挙）大久保綾子、鹿又保子、北村古郎、下村沖雄、二宮久義、野村秀久、萩原輝作、萩原輝夫、半澤てる、東信昭、古川美保子、松館祐爽、八木沢恒蔵、山貝芳枝（以上絵画）、海野健治、大越二郎、小坂和美（以上彫刻）。

（受賞者）◎**一陽賞**　太田清（彫刻）　◎**青麦賞**　玉田健二（絵画）、滝川鯉吉（彫刻）　◎**安田火災美術財団奨励賞**　小松富士子（絵画）、松井勅尚（彫刻）　◎**野間賞**　谷岡久（絵画）　◎**会友賞**　畠中陽一（絵画）、高木一郎（彫刻）　◎**特待賞**　小倉正之、久郷眞、辻よし美、中村陽江、福田利明、松本京子、室田照男、山田裕子、吉井とみ子（以上絵画）、早川慈子（版画）、武田守弘、丸山竹男（以上彫刻）　◎**奨励賞**　赤崎正代、五十嵐公江、石川慈子、伊勢亀君代、入口ふじ子、上田純子、大東明宏、岡田誠、岡野哲也、奥村佳弘、小倉怜子、北嶋三智子、北爪節夫、小林学、坂口かほる、白上浜子、高井知乗、寺林正雄、永倉一徳、松木正代、山室正子、吉村精二（以上絵画）、末吉由利子、小澤美雪（以上版画）、大鍬英治、篠原みとり、征矢真一（以上彫刻）

◎**野外彫刻賞**　八木ヨシオ（彫刻）。

◇大阪市立美術館（十月）、名古屋・名鉄百貨店（十一月）で開催。

＊会員・土師修（絵画）、会友・窪田政隆（彫刻）退会。

＊十二月、会員・越智映介（絵画）逝去。

＊一月、委員・山田治（絵画）逝去。

＊三月、会員・猛子昭雄（絵画）逝去。

＊五月、常任委員・鈴木信太郎（絵画）逝去。

＊七月、会員・滝沢浩司（絵画）逝去。

第三十五回展覧会

（九月十九日～十月三日　東京都美術館）

（会員推挙）阿部知暁、斎藤茂、笹尾誠一、沼澤浩、生地太久、白石寛子、銀川秀人、高橋和夫、塚崎もとえ、辻本光彦、富樫貢平、中嶋美琥子、畠中陽一、秀島有子、宮口眠、やまぐちかずお（以上絵画）、内田英、張子隆、松井勅尚、和田正義（以上彫刻）。

（会友推挙）赤崎正代、伊勢亀君代、石川慈子、入口ふじ子、上田純子、岡田誠、奥村佳弘、久郷眞、斉藤与志子、坂口かほる、

昭和六十四年・平成元年（一九八九）

玉田健二、蓮尾一則、松本京子、室田照男、山下潤志、山田裕子、吉井とみ子（以上絵画）、早川恭子（版画）、石黒晋、太田清、滝川鯉吉（以上彫刻）。

〔受賞者〕　◎**一陽賞**　室田照男（絵画）　◎**青麦賞**　住山佳子（絵画）、石黒晋（彫刻）　◎**野間賞**　神門四郎（絵画）　◎**安田火災美術財団奨励賞**　大場吉美、舘野弘（以上絵画）　◎**会友賞**　小畑恭子、須田良雄（以上絵画）、松井勉尚（彫刻）　◎**特待賞**　榎江里子、中村陽江、山室正子（以上絵画）、小澤美雪（版画）、大鍬英治、金井良輔、ピクトル永沼（以上彫刻）　◎**奨励賞**　呉日煥、大波多幸子、小倉正之、北爪節夫、草野万寿美、高井知乗、寺林正雄、中本邦夫、高田謙治、永倉一徳、芳本郁（以上絵画）、佐伯孝昭（版画）、東修二、奥貫由美子、高橋将典、武田守弘（以上彫刻）　◎**野外彫刻賞**　星眞子（彫刻）。

◇大阪市立美術館（十月）、名古屋・名鉄百貨店（十一月）で開催。

＊会友・古川美保子（絵画）退会。

＊十一月、会員・多賀堂岳（版画）逝去。

＊十二月、会員・清田美作（絵画）逝去。

＊三月、会員・葛西康（絵画）逝去。

第三十六回展覧会

（九月十九日～十月三日　東京都美術館）

〔会員推挙〕　奥谷卓則、竹村晴夫、桥澤紀子（以上絵画）。

〔会友推挙〕　榎江里子、岡野哲也、小倉正之、北嶋三智子、北爪節夫、草野万寿美、住山佳子、高井知乗、寺林正雄、中村陽江、永倉一徳、福田利明、山室正子（以上絵画）、小澤美雪（版画）、大鍬英治、金井良輔、田中英次（以上彫刻）。

〔受賞者〕　◎**青麦賞**　榎江里子（絵画）、鈴木博之（彫刻）　◎**鈴木賞**　北山泰斗（絵画）　◎**野間賞**　鈴木力（絵画）　◎**安田火災美術財団奨励賞**　高橋和夫（絵画）、谷津喜美代（彫刻）　◎**会友賞**　伊藤正人（彫刻）　◎**特待賞**　園佳枝、小林学、田邊光則、中村一仁、羽下政雄（以上絵画）、神山茂樹、丸山竹男（以上彫刻）　◎**奨励賞**　石井悦夫、鴨沼世里子、大北節子、大東明宏、唐崎妙、桑原収、斉藤美子、白上浜子、竹原隆子、田沼和夫、千野清和、中本邦夫、永井新吾、永岡章、山本安雄（以上絵画）片岡福光（版画）、伊沢のぞみ、ピクトル永沼、三代博紀（以上彫刻）　◎**野外彫刻賞**　渡会意士（彫刻）　◎**大心苑賞**　六崎敏光（彫刻）。

◇大阪市立美術館（十月）、石川県立美術館（十一月）で開催。

＊委員・大山美信、会員・高橋甲、会友・安村賢一（以上絵画）退会。

＊十月、会員・天王寺谷卓三（絵画）逝去。

＊二月、会員・上野富蔵（絵画）逝去。

第三十七回展覧会

（九月十九日～十月三日　東京都美術館）

〔会員推挙〕　小畑恭子、垣内カツアキ、古曽成樹、洲鎌幸七、須田良雄、福家省造（以上絵画）、中西俊佳（版画）、谷津喜美代（彫刻）。

〔会友推挙〕　園佳枝、大東明宏、小林学、斉藤美子、白上浜子、田邊光則、中本邦夫、中村一仁、羽下政雄（以上絵画）。

〔受賞者〕　◎**一陽賞**　中本邦夫（絵画）、丸山竹男（彫刻）　◎

平成四年（一九九二）

青麦賞　唐崎妙（絵画）、前嶋英輝（彫刻）　◎**野間賞**　坪井正光（絵画）　◎**安田火災美術財団奨励賞**　谷岡久、石川三知代（以上絵画）　◎**会友賞**　玉田健二（絵画）、谷津喜美代（彫刻）　◎**特待賞**　三原路子、山口教子（以上絵画）、中沢俊晴、木幡光子、北沢努（以上彫刻）。◎**奨励賞**　池田修、石井悦夫、大久保隆文、小倉怜子、川本満子、嶋田玲子、武田洋子、田沼和夫、寺井三泰、新村則一、山口功、山根泰治、結城俊彌（以上絵画）。片岡福光、谷岡琥（以上版画）、武田守弘、神山茂樹、吉川直美（以上彫刻）　◎**野外彫刻賞**　福田順忠（彫刻）　◎**大心苑賞**　登坂真澄（彫刻）。

◇大阪市立美術館、富山県民会館（十月）で開催。

＊会友・草野万寿美、西倉一男、永野勤（以上絵画）、権藤俊男、森山良民（以上彫刻）退会。

＊十月、常任委員・髙岡徳太郎（絵画）逝去。

＊二月、会友・土屋貫一（絵画）逝去。

＊六月、会友・平野眞佐子（絵画）逝去。

（九月十八日～十月三日　東京都美術館）

（委員推挙）石黒功（彫刻）。

（会員推挙）スマルモ、田島正子、野村幸子、平田慎一、松村一夫（以上絵画）、伊藤正人（彫刻）。

（会友推挙）石井悦夫、唐崎妙、田沼和夫、永岡章、山口数子、結城俊彌（以上絵画）、片岡福光（版画）、武田守弘、丸山竹男（以上彫刻）。

（受賞者）　◎**青麦賞**　三原路子（絵画）、吉川直美（彫刻）

平成五年（一九九三）

第三十九回展覧会

◎**野間賞**　吉川俊夫（絵画）　◎**安田火災美術財団奨励賞**　栁瀬修次（絵画）、有賀典子（彫刻）　◎**会友賞**　滝川鯉吉（彫刻）　◎**特待賞**　坂井幸子、古野恵美子、前田睦、望田一美（以上絵画）、前嶋英輝、モンテル＋R・フィリップ（以上彫刻）　◎**奨励賞**　池田修、宇留野信章、岡田武男、北谷茂子、鈴木啓造、竹田明男、田中一郎、丹後香子、寺井三泰、永井新吾、生田目満夫、森山敬典、山根泰治、山本安雄、吉村雅利（以上絵画）、加藤英夫、佐伯孝昭（以上版画）、岩島進、神山シゲキ、北沢努（以上彫刻）。

◇大阪市立美術館（十月）で開催。

＊会友・北村修、三吉亮久（以上絵画）、山川武夫、三崎洋一（以上版画）、高橋勝、西田亨（以上彫刻）退会。

＊一月、会友・勝谷チヨ（絵画）逝去。

＊二月、会員・兎月人（絵画）逝去。

＊四月、会員・斎藤富蔵（絵画）逝去。

＊八月、常任委員・中村輝（彫刻）逝去。

＊九月、会員・笹尾誠一（絵画）逝去。

（九月十八日～十月三日　東京都美術館）

（会員推挙）泉谷淑夫、浮田正樹、神崎元志（以上絵画）。

（会友推挙）池田修、坂井幸子、永井新吾、新村則一、古野恵美子、前田睦、三原路子、望田一美、森山敬典、山本安雄（以上絵画）、佐伯孝昭（版画）、神山茂樹、前嶋英輝（以上彫刻）。

（受賞者）　◎**青麦賞**　北沢努（彫刻）　◎**野間賞**　笹野弘（絵画）　◎**安田火災美術財団奨励賞**　福川秀人、平賀正勝（以上絵画）　◎**野外彫刻賞**　小林達也（彫刻）　◎**特待賞**　鈴木啓

平成六年（一九九四）

第四十回展覧会

遠、橋本侑理恵、三原拓身（以上絵画）、小田明広、ジャン・ルイ・マルモラ、田辺宏子（以上彫刻）◎**会友賞**　小林学（絵画）、太田清（彫刻）◎**奨励賞**　芦沢宏子、今西精二、宇留野信章、大塚好雄、長船侍夢、小嶋英子、小西信英、小山時子、高山静子、寺井三泰、永田啓子、山田マサ子、吉岡真、吉村雅利（以上絵画）、岩島進、春原功（以上彫刻）。

◇大阪市立美術館（十月）で開催。

＊会友・小林健志、白石武、中村仁（以上絵画）、早川基子（版画）退会。

＊十月、会友・白井一雄（絵画）逝去。

＊十一月、会員・飯田慶三（絵画）逝去。

・五月、第四十回記念展に向けての委員総会を開催、棚瀬修次・坪井正光両委員を常任委員に推挙（於・日本美術家会館会議室）。

（九月十八日～十月三日　東京都美術館）

（会員推挙）　岡村順一、金子孝子、久保幸夫、佐伯武彦、塩川慧子、下村沖雄、鈴木武樹、高井知巣、玉田健二、長谷川清暉、桶谷フミコ、水谷仁美、宮春王、安田淳、山貝芳枝（以上絵画）、太田清、小田部実、小宅淑子、滝川鯉吉（以上彫刻）。

（会友推挙）　今西精二、宇留野信章、鈴木啓造、武田遥子、寺井三泰、中野久賀子、中本光省、生田目満夫、橋本侑理恵、山根泰治、吉村雅利（以上絵画）、北沢努、田辺宏子、吉川直美（以上彫刻）。

（受賞者）　◎**一陽賞**　山根泰治（絵画）、田辺宏子（彫刻）◎**青麦賞**　青柳ナツエ（絵画）、矢野真（彫刻）◎**功労賞**　北山

平成七年（一九九五）

第四十一回展覧会

泰斗（絵画）◎**野間賞**　沢田正太郎（絵画）◎**安田火災美術財団奨励賞**　岡田彌生（絵画）、中村義孝（彫刻）◎**第40回記念会員賞**　木村廣（彫刻）◎**第40回記念会友賞**　上田純子、大久保綾子（以上絵画）、石黒晋（彫刻）◎**野外彫刻賞**　中堀嘉雄（彫刻）◎**特待賞**　小嶋英子、矢口清子（以上絵画）、斉藤貴子、高橋希多美、田辺靖、モンテル・リシェイル・フィリップ（以上彫刻）◎**奨励賞**　芦沢宏子、安藤義孝、古賀敦子、小山時子、島田広之、高田謙治、高山静子、立山邦洋、丹後香子、中村節子、中村猛、長尾晃、能波祥明、三原拓身、山口功、山田昌子（以上絵画）、常見一奈、渡辺拓治（以上彫刻）。

◇大阪市立美術館（十月）で開催。

＊会員・池田喜重（絵画）、高木一郎、重匠健次（以上彫刻）、会友・赤崎正代（絵画）、金井良輔（彫刻）退会。

（九月十九日～十月三日　東京都美術館）

（会員推挙）　石黒晋（彫刻）。

（会友推挙）　青柳ナツエ、芦沢宏子、大久保隆文、桑原収、小嶋英子、小山時子、高田謙治、高山静子、丹後香子、本間くみ、三原拓身、矢口清子、山口功、山田マサ子、山田昌子（以上絵画）、矢野真、小田明広、村山悦子（以上彫刻）。

（受賞者）　◎**一陽賞**　小田明広（彫刻）◎**青麦賞**　安藤義孝（絵画）、渡辺拓治（彫刻）◎**野間賞**　上田春雄（絵画）◎**安田火災美術財団奨励賞**　安藤能旦、市橋哲夫（以上絵画）◎**野外彫刻賞**　右貿典子（彫刻）◎**特待賞**　古賀敦子、立山邦洋、永田啓子（絵画）、斉藤貴子、磯山芳男、村山悦子（彫刻）

平成八年（一九九六）

第四十二回展覧会

◎**奨励賞**　五十嵐優子、大北節子、加藤美千代、下保隆義、木下隆裕、小松きぬ代、篠崎聡、竹岡明男、中村猛、西山恭申、平木教子、松野洋子（以上絵画）、谷岡暁（版画）、田辺靖、モンテル・リシェイル・ワイリップ（彫刻）。

◇大阪市立美術館（十月）で開催。

＊委員・金田忠、会員・星潤子（以上彫刻）、会友・加藤圭子、小林学、寺林正雄、松部佑親（以上絵画）退会。

＊十一月、会友・斉藤与志子（絵画）逝去。

＊一月、委員・沢田正太郎（絵画）逝去。

＊八月、委員・網笠省三（絵画）逝去。

＊九月、会員・郡琴子（絵画）逝去。

（九月十九日～十月三日　東京都美術館）

［会員推挙］　上田純子、大久保純子、小田勝、清水正男、渡辺美津男（以上絵画）。

［会友推挙］　安藤義孝、大北節子、北谷茂子、古賀敦子、小島金三、高孝壬津子、竹田明男、立山邦洋、中村猛、永田啓子（以上絵画）、谷岡暁（版画）。

［受賞者］　◎**一陽賞**　竹田明男（絵画）　◎**青麦賞**　五十嵐優子（絵画）、佐々木貴弘（彫刻）　◎**野間賞**　角美貴子（絵画）

◎**安田火災美術財団奨励賞**　杉山司（絵画）、土屋瑞穂（彫刻）

◎**野外彫刻賞**　張子隆（彫刻）　◎**会友賞**　山田裕子（絵画）、小田明宏（彫刻）　◎**特待賞**　逸坂清悦（絵画）、木内明、斉藤貴子、酒谷朱実（以上彫刻）　◎**奨励賞**　井上秀子、石近俊子、大西正雄、下保隆義、国井トミ子、仙北谷征子、田中知佳子、田中美紀、田中渉、棚倉英雄、西山恭申、畑野昭子、八十嶋求、楊銅狼（以上絵画）、萩原光之（版画）、磯山芳男、髙橋将典（以上彫刻）。

◇大阪市立美術館（十月）、石川県立美術館（十一月）で開催。

＊会員・中田實（絵画）、張子隆、和田正義（以上彫刻）、会友・葛巻さとし子、東信昭（以上絵画）、佐伯孝昭（版画）退会。

＊一月、会員・多治見胤昭（彫刻）、会友・橋本衛理恵（絵画）逝去。

・五月、常任委員会を開催。細川尚、卿和男（以上絵画）、土屋瑞穂（彫刻）の三会員を委員に推挙（於・日本美術家会館会議室）。

平成九年（一九九七）

第四十三回展覧会

（九月十八日～十月三日　東京都美術館）

［会員推挙］　栗原清司、山田裕子、唐鎌妙、藤本元美、有賀邦夫、森山敬典（以上絵画）。

［会友推挙］　五十嵐優子、西山恭申、下保隆義、田中渉、能波祥明、加藤美千代、逢坂清悦（以上絵画）、磯山芳男（彫刻）。

［受賞者］　◎**一陽賞**　齋藤貴子（彫刻）　◎**青麦賞**　田辺靖（彫刻）　◎**安田火災美術財団奨励賞**　安達弘章（絵画）　◎**野外彫刻賞**　石黒晋（彫刻）　◎**会友賞**　福田利明（絵画）、武田守弘（彫刻）　◎**特待賞**　小松きぬ代、棚倉美雄（以上絵画）、酒谷朱実、脇元伸（彫刻）　◎**奨励賞**　石近俊子、田中千佳子、鈴木美恵子、酒井俊雄、木下隆裕、大西正雄、河西由紀子、北島美巳、門田毅二、大友朋子、村杉哲子、北村五十一（以上絵画）、佐々木貴弘（彫刻）。

◇大阪市立美術館（十月）で開催。

平成十年（一九九八）

第四十四回展覧会

＊会員・神門四郎、田島正子、駒内千里（以上絵画）、太田清（彫刻）、会友・岡本容子、中村一仁（以上絵画）退会。
＊二月、常任委員・田辺栄次郎（絵画）、会友・萩原輝夫（絵画）逝去。
＊三月、会員・生地太久（絵画）逝去。
＊五月、会員・安藤能旦（絵画）逝去。
＊八月、常任委員・山崎猛（彫刻）、会員・塚崎もとえ（絵画）逝去。
（九月十八日～十月三日　東京都美術館）
（会員推挙）江口襟子、岡住枝、岡崎昭夫、福田利明（以上絵画）。
（会友推挙）右近としこ、大西正雄、北島英巳、木下隆裕、国井トミ子、小松き必代、田中知佳子、棚倉英雄（以上絵画）、斎藤眞子、田辺靖（以上彫刻）。
（受賞者）◎**青麦賞**　棚倉英雄（絵画）、酒谷朱実（彫刻）　◎**安田火災美術財団奨励賞**　大久保綾子（絵画）、木村廣（彫刻）　◎**野外彫刻賞**　滝川鯉吉（彫刻）　◎**会友賞**　矢野真（彫刻）　◎**特待賞**　鈴木美恵子、畑野昭子（以上絵画）、脇元伸、佐々木貴弘（以上彫刻）　◎**奨励賞**　赤井健治、井上秀子、岡田武男、河西由紀子、北村義宏、墨川広徳、廣門幸三、桝田律子、吉岡眞、吉田顕正（以上絵画）、田口哲也、渡辺耕治（以上彫刻）。
◇大阪市立美術館（十月）で開催。
＊会員・佐々木吉郎、野村幸子（以上絵画）、大和田正人（彫刻）、会友・浅野健、常世田喜美子、永井新吾、新居田公子、半澤てる、丸山節子（以上絵画）、高橋史子、田中英次、桝岡秀樹（以上彫刻）退会。

平成十一年（一九九九）

第四十五回展覧会

＊五月、会員・中堀嘉雄（彫刻）逝去。
＊六月、会員・鍋田喜美（絵画）逝去。
（九月十八日～十月三日　東京都美術館）
（会員推挙）石川基子、伊勢亀君代、榎江里子、佐藤知臣、住山佳子、松本京子、三原路子、吉井とみ子（以上絵画）、小澤美雪（版画）。
（会友推挙）井上秀子、岡田武男、河西由紀子、北村義宏、酒井俊雄、鈴木美恵子、田中一郎、畑野昭子、八十嶋求、吉岡真（以上絵画）、酒谷朱実、佐々木貴弘（以上彫刻）。
（受賞者）◎**青麦賞**　溝下美代子（絵画）、松浦圭子（彫刻）　◎**安田火災美術財団奨励賞**　小島蔵男（絵画）　◎**野外彫刻賞**　中村義孝（彫刻）　◎**第45回記念会員賞**　高岡敏、平田慎一（以上絵画）、吉田英智（彫刻）　◎**会友賞**　芦沢宏子、小嶋美子（以上絵画）、神山茂樹（彫刻）　◎**特待賞**　赤井健治、金綱照夫（以上絵画）、田口哲也、脇元伸（以上彫刻）　◎**奨励賞**　岩山義彦、大友朋子、菊池秀代、北村五十一、渋谷睦美、芝西広美、仙北谷征子、高橋亨、千坂健、中島みどり、西園敏子、廣門幸三、藤田裕子、松川勝男、山田久子（以上絵画）、和田惠美（彫刻）。
◇大阪市立美術館（十月十三日～十七日）、富山県民会館美術館（十月二十二日～十一月七日）で開催。
＊会員・熊田藤作、斎藤孝利、湯浅豊子、与儀達治（以上絵画）、大森澪（版画）、会友・小泉晶子、二宮久義、室田照男（以上絵画）退会。

平成十二年（二〇〇〇）

第四十六回展覧会

（九月十九日～十月三日　東京都美術館）

（会員推挙）　青柳ナツエ、芦沢宏子、和泉流、奥村佳弘、小嶋英子、中本邦夫、平野孝之、前田睦、山下潤志、山本安雄（以上絵画）、池田美津惠、大木啓義（以上版画）、神山茂樹、武田守弘（以上彫刻）。

（会友推挙）　赤井健治、長船侍夢、金綱照夫、菊池秀代、芝西広美、仙北谷征子、高橋亨、千坂健、廣門幸三、松川勝男、溝下美代子、美馬須美子、吉田鎮正、若杉美智子（以上絵画）、北村五十一（版画）、田口哲也（彫刻）。

（受賞者）　◎**一陽賞**　駄元伸（彫刻）　◎**青麦賞**　赤井健治（絵画）、田口哲也（彫刻）　◎**安田火災美術財団奨励賞**　小畑恭子（絵画）、渡辺勝彦（彫刻）　◎**野外彫刻賞**　小林一夫（彫刻）

◎**会友賞**　鈴木美恵子、中村猛（以上絵画）　◎**特待賞**　荻野静江（絵画）、松浦圭子、渡辺緋治（以上彫刻）　◎**奨励賞**　石川佳愛、伊藤裕一、井上峰子、今井武志、岩山義彦、上野義明、小西信英、墨川広徳、瀬島茂紀、高橋ひろえ、畑逸仁、山口陽子、渡辺雅子（以上絵画）、和田恵美、飯田政子（以上彫刻）。

◇大阪市立美術館（十月十七日～二十二日）で開催。

＊会員・青木みちあ、加須屋万美（以上絵画）、有賀典子（彫刻）、会友・北村暢、久郷眞、三原宅休身、向井林三（以上絵画）、谷岡暁（版画）、酒谷朱実（彫刻）退会。

＊十月、会員・月見里茂（絵画）逝去。

＊十一月、会員・伊藤公二（絵画）逝去。

＊十二月、会員・大羽悟郎（絵画）逝去。

＊三月、常任委員・小川哲郎（絵画）逝去。

＊五月、委員・角美貴子（絵画）、会友・片岡福光（版画）逝去。

平成十三年（二〇〇一）

第四十七回展覧会

（九月十九日～十月三日　東京都美術館）

（会員推挙）　入口ふじ子、石近としこ、鹿又保子、鈴木美恵子、高山静子、竹氏廣、竹田明男、永倉一徳、中村猛、横本紀夫、本間くみ、結城俊郷（以上絵画）。

（会友推挙）　石川佳愛、伊藤裕一、岩山義彦、大友朋子、大波多幸子、荻野静江、小西信英、渋谷隆美、墨川広徳、西園敏子、村杉哲子、渡辺雅子（以上絵画）、駄元伸（彫刻）。

（受賞者）　◎**一陽賞**　大友朋子（絵画）　◎**青麦賞**　土井敬真（彫刻）　◎**安田火災美術財団奨励賞**　泉谷淑夫（絵画）　◎**野外彫刻賞**　小林達也（彫刻）　◎**会友賞**　桑原収、古賀教子、千坂健（以上絵画）、大鍬美治（彫刻）　◎**特待賞**　上野義明、榮山桂子、渡辺雅子（以上絵画）、寺崎俊一、松浦圭子（以上彫刻）

◎**奨励賞**　荒井アツ子、井上峰子、上野ちづ子、加納勝子、川口文子、栗林みよ子、藤井悟、三井昭典、山口陽子、山田久子、山田幸彦、山本文郎、横須賀康子、依田千恵子、豆妙子（以上絵画）、岡本大助、和田恵美（以上彫刻）。

◇大阪市立美術館（十月十六日～二十一日）、石川県立美術館（十二月十二日～十七日）で開催。

＊会員・後藤泰洋、鈴木雅弘、スマルモ（以上絵画）、福田順忠、八木ヨシオ（以上彫刻）、会友・岡野哲也、白上浜子、田方淑子、

平成十四年（二〇〇二）

第四十八回展覧会

山門直三、山口芯子、山田マサ子（以上絵画）、海野健治（彫刻）退会。

＊八月、会友・美馬須美子（絵画）逝去。

（九月十九日～十月三日　東京都美術館）

〔会員推挙〕大北節子、大東明宏、小倉正之、桑原収、古賀敦子、坂井幸子、坂口かほる、鈴木啓造、田邉光明、田沼和夫、千坂健、西山恭申、羽下政雄、矢口清子、山口教子（以上絵画）、矢野真、大隅英治、前嶋英輝（以上彫刻）。

〔会友推挙〕井上蜂子、上野義明、榮山桂子、田中四郎、千野清和、藤井浩、山口陽子、山田久子（以上絵画）。

〔受賞者〕◎**一陽賞**　榮山桂子（絵画）、松浦圭子（彫刻）　◎**青麦賞**　白井正浩（絵画）、関本大助（彫刻）　◎**損保ジャパン美術財団奨励賞**　溝下美代子（絵画）、矢野真（彫刻）　◎**野外彫刻賞**　土屋瑞穂（彫刻）　◎**会友賞**　赤井健治、溝下美代子（以上絵画）、前嶋英輝（彫刻）　◎**特待賞**　河野緋紗子（絵画）、鈴木博之、土井敬真（以上彫刻）　◎**奨励賞**　池原映子、上野ちづ子、小原猛、小堀貴美子、鈴木利久、瀬島茂紀、千崎勝廣、高橋ひろえ、林紋人、林裕子、平野栄作、藤田裕子、保坂美恵子、堀口やよい、本田佑一、宮坂和子、米山渉、吉田多賀子（以上絵画）。

◇大阪市立美術館（十月十六日～二十日）で開催。

＊会員・有賀邦夫、佐久川隆、杉山汎、竹氏廣（以上絵画）、田中正秋（版画）、石黒晋（彫刻）、会友・大野隆之、八木沢恒蔵（以上絵画）退会。

＊九月、会員・斎藤茂（絵画）逝去。

＊三月、常任委員・植木力（彫刻）逝去。

（九月十八日～十月三日　東京都美術館）

〔会員推挙〕赤井健治、安藤義孝、石井悦夫、加藤美子代、北嶋三智子、北爪節夫、寺井三泰、中野久賀子、溝下美代子（以上絵画）、丸山竹男（彫刻）。

〔会友推挙〕荒井アツ子、上野ちづ子、川口文子、河野緋沙子、白井正浩、瀬島茂紀、高橋ひろえ、林紋人、林裕子、藤田裕子、堀口やよい、山本文郎、横須賀康子（以上絵画）、松浦圭子（彫刻）。

〔受賞者〕◎**一陽賞**　高橋壮治（絵画）　◎**青麦賞**　鈴木利久（絵画）、深谷直之（彫刻）　◎**損保ジャパン美術財団奨励賞**　福家省造（絵画）　◎**野外彫刻賞**　武田守弘（彫刻）　◎**会友賞**　立山邦洋（絵画）　◎**特待賞**　岡本武紫、吉田多賀子（以上絵画）、福田豊（彫刻）　◎**奨励賞**　石村慶子、大黒郁代、絹笠輝子、斉藤公子、塩田康雄、竹原隆子、田中夏子、茶畑顕子、戸谷由紀子、西浦まゆみ、西脇義照、保坂美恵子、幕田今日子、益田恭行、宮坂和子（以上絵画）、上井敬真、飯沢公夫（以上彫刻）。

◇大阪市立美術館（十月十五日～十九日）で開催。

＊十一月、会員・植木磊一（彫刻）逝去。

＊三月、常任委員・高嶋文彦（彫刻）逝去。

＊五月、常任委員・勝一見（絵画）逝去。

平成十五年（二〇〇三）

第四十九回展覧会

平成十六年（二〇〇四）

創立25周年記念に作られた藍染めの手ぬぐい

創立40周年記念につくられたTシャツ

◇常任委員制の導入（昭和六十三年）

第三十四回一陽展の開幕を目前にした昭和六十三年六月、一陽会は日本美術家会館会議室において運営委員会議を開催し、会組織の更改を協議、決定した。その主なる議題は、会組織の更なる強化をはかるために、求心的な会指導部確立の方策として、常任委員制の導入を実行することであった。すなわち、先の昭和四十九年七月に制定された委員制をさらに強化することを目的としたものであったが、何よりも会創立の第一世代の高齢化が進み、早急に世代交替を進める必要にかられたことにあった。殊に、昭和五十四年十二月末の、創立会員で一陽会の指導者であった野間仁根の逝去は、一陽会全体を深刻な危機感で覆い包んでいた。

危機感、それはすなわち、次代を担うべき第二、第三世代が、一陽会の足元をもう一度厳しく見つめ直してみようということであったろう。次代の一陽会を担うべき会の指導者は、口を極めて危機感を言い募っている

一陽会も明年三十五周年展を迎えようとしている。振り返って会が創立当時の三十五年前の社会状況と今日の現実との差異は想像を絶する変貌を遂げていることは容易に理解されよう。にもかかわらず会は当時と同様な様相とシステムで今日に至っている。しからば如何なる方策があるというのだろうか。旧態依然としたシステムを基底に、僅かでも改良を加えながら維持し存続させる責務を会の指導者は自覚している。一陽会に参集する総ての人たちの作品と観客との出逢いの場・討論の場づくりにつとめたいものである。したがって会に所属する自覚と、高揚が望まれる。

（北山泰平「一陽会活動情況」「一陽会会報」昭和六十三年十一月三十日）

第三十四回展は全体的に見渡して作品に進展が見られなかったように思う。各自の作風が、若い作家の中でも、早々とかたまってしまい、その殻から抜けようとする意図が見られず、小ぢんまりとまとまってしまって

いる作品が実に多い。

この人もやっている、この作品も面白くなった、こりゃ負けていられない、というように作品どうしで力を競い合っている熱気のようなものが、もっともっとあってよいと思う。この点が会の魅力の第一のポイントであるだけに、先を歩む者ほど心してのぞまなければなるまい。会友、一般出品者に迫力が足りないのも、会全体のこととして受けとめねば、と思う。（坪井正光「私の感じた作品」『一陽会会報』昭和六十三年十一月三十日）

常任委員制度の導入は、こうした次代を担う立場での危機感だけではなく、会創立以来三十五年という遠路を偲び、また新たなる歩みのための会組織の整備・拡充が目的であった。

昭和六十三年六月、従来の委員を常任委員とし、新たに委員を選任する形で人事の一新が図られた。

ここで、常任委員に補される委員の顔ぶれを見ておこう。――ついては昭和四十九年に定められた委員は以下のメンバーであった。

〔絵画〕　鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎、米良道博、山谷錬一、片柳忠男、勝一晃、小川哲郎、北山泰斗、大石可久也、荻原楽一（光観）、田所満雄、佐野儀雄。　〔彫刻〕　植木力、浅野孟府、中村輝、山崎猛。

その後の委員の去就は次の通りである。

昭和五十一年に横沢英一（彫刻）を委員に推挙。昭和五十三年に田辺栄次郎（絵画）を委員に推挙。昭和五十四年に野間仁根（絵画）が逝去。昭和五十五年に横沢英一（彫刻）が退会。昭和五十八年に米良道博が逝去。昭和五十九年に五十嵐二朗、荻原宗晃、森秀雄（絵画）、高嶋文彦（彫刻）を委員に推挙。昭和六十年に小池郁男（彫刻）を委員に推挙。片柳忠男（絵画）が逝去。山谷錬一（絵画）が退会。――結果、昭和六十三年六月の常任委員制の導入直前の委員は以下のメンバーであった。

〔絵画〕　鈴木信太郎、高岡徳太郎、勝一晃、小川哲郎、北山泰斗、大石可久也、荻原楽一（光観）、田所満雄、佐野儀雄、田辺栄次郎、五十嵐二朗、荻原宗晃、森秀雄。　〔彫刻〕　植木力、中村輝、山崎猛、高嶋文彦、小池郁男。　＊彫刻の浅野孟府は昭和五十九年に逝去。

この委員全員が常任委員に就任し、新たに次のメンバーが新委員に選任された。

〔絵画〕　上田春雄、大場吉美、大山美信、角美貴子、絹笠省三、神門四郎、沢オイ、沢田正太郎、鈴木力、舘野弘、棚瀬修次、谷岡久、土嶋敏男、坪井正光、鶴田猛、中村秀雄、浜田清、山田治。　〔版画〕　野間傳治。　〔彫刻〕　金田忠、三輪乙彦、六崎敏光。

常任委員十八名、委員二十二名、会員百四十二名（絵画百五、版画四、彫刻三十三名）。第三十五回展を目前にして一陽会が辿り着いた陣容である。

計らずも、翌昭和六十四年は平成元年と元号が変わり、文字通り新しい時代の到来を迎えることになった。期せずして一陽会は、新たに設けられた常任委員と、新しく選任された委員による指導部によって、新時代を切り拓いてゆくことになった。

創立会員鈴木信太郎、高岡徳太郎、植木力は、依然として若者たちの先頭に在ったが、事実上、会の運営は新しい指導部に託されることになった。

◆創立会員 鈴木信太郎の逝去（平成元年）

一陽会常任委員で、日本芸術院会員、文化功労者の鈴木信太郎が平成元年五月十三日、肺炎のため東京都渋谷区の日赤医療センターで逝去した。昭和三十年に野間仁根、高岡徳太郎とともに二科会を退会し、賛同した仲間を加えて一陽会を創立した。以後、一陽会の象徴的な存在として会内外から信望を集め、自らの画業の完成はもとより、美術公募団体としての一陽会の育成に、野間、高岡を始めとする創立会員や、順次会の指導部に加わった仲間とともに努めた。その篤実な人柄と、豊潤な画業を辿って追慕の項としたい。

鈴木信太郎（平成元年／一九八九年五月十三日逝去）

明治二十八（一八九五）年東京八王子八日町に生まれる。明治四十三年赤坂溜池の白馬会洋画研究所に入所。鈴木金平を通じて岸田劉生を知る。明治四十五年第一回ヒュウザン会展を見るために上京。大正二年八王子の府立織染学校（現都立八王子工業高校）の専科に入学、織物図案を学ぶ。大正五年第十回文展に「静物」が入選。大正八年使入萩原井泉水の主宰する絵の合評会（「砂文字会」）に参加、浜田庄司を知る。井泉水の俳人同人誌「層雲」の表紙絵、挿絵を描く。大正十年帰郷、図案の仕事を断念し油絵の制作に専念する。大正十一年第九回二科展に初入選、石井柏亭に師事する。鍋井克之の知遇を得る。大正十二年貞眞（ちか）と結婚。大正十四年鈴木金平の紹介で「中村彝画室倶楽部」に入会、京都に津田青楓を訪ねる。第十二回二科展に「人形のある静物」他を出品、以後退会まで毎回出品する。昭和元年第十三回二科展で樗牛賞受賞。曾宮一念の知遇を得る。「槐樹社」の同人となる。昭和三年二科会会友に推挙。初の個展「鈴木信太郎洋画個人展覧会」（九月　日本橋三越）を開催。昭和五年荻窪に転居。昭和八年この頃から本の装丁、挿絵を手掛ける。昭和九年長女も、代が生まれる。昭和十一年二科会会員に推挙。昭和十五年「鈴木信太郎個人展」（そごう神戸店）を開催。昭和十九年西多摩郡五日市に疎開、林武と知り合う。昭和二十一年疎開先から荻窪に戻る。二科会の再興に参加する。昭和二十四年長崎に被爆者の永井博士を訪ねる、同氏の新聞連載の随筆「長崎の花」に挿絵を描く。随筆集『お祭りの太鼓』（朝日新聞社）を刊行。昭和二十五年武蔵野美術大学教授に就任（昭和四十年迄）。昭和二十六年久我山に転居。昭和二十八年多摩美術大学教授に就任（昭和四十一年迄）。国立公園協会から依頼され「厳島」を制作。昭和二十九年随筆集『阿蘭陀まんざい』（東峰書房）を出版。画集『日本現代画家選10　鈴木信太郎』（美術出版社）を出版。昭和三十年野間仁根、高岡徳太郎と二科会を退会し、一陽会を結成。第一回一陽展に「窓」「林檎園A」「林檎園B」「真鶴風景」「渡し船」「海辺の村」「渡し広告」「長崎の海」を出品。昭和三十一年第二回一陽展に「長崎の家（ランプのある部屋）」「長崎の家（紫陽花の庭）」「長崎の家（土手のある景）」「長崎の家（古い二階家）」「長崎風景（港を望む）」を出品。昭和三十二年第三回一陽展に「東山手風景（長崎）」「長崎の丘」「夏の木々」「人形の国」を出品。昭和三十三年第四回一陽展に「鷺」「札幌風景（北大構内）」「札幌風景（北大構内）」「札幌風景（ポプラの池）」「牧草」「真鶴風景」「ダリヤ」を出品。第一回改組日展に「札幌風景（北大構内）」を招待出品。昭和三十四年第五回一陽展に「窓辺の静物」「札幌北大構内」「熱海室ノ窪風景」を出品。昭和三十五年第六回一陽展に「伊豆山風景」「熱海風景」「新緑の村」を出品。第三回日展に「白樺湖（東京都美術館蔵）」を招待出品。日本芸術院賞受賞。昭和三十六年第七回一陽展に「林檎園」「芍薬」「バスの通る道」を出品。昭和三十七年第八回一陽展に「熱海風景」「静物」「芍薬」を出品。第五回日展に「白樺湖（信濃美術館蔵）」を招待出品。第六回現代日本美術展に「新緑熱海風景」を出品。昭和三十八年第九回一陽展に「伊豆の漁村（赤）」「伊豆の漁村（青）」「静物」を出品。昭和三十九年第十回一陽展に「海」「桐の花」を出品。昭和四十年第十一回一陽展に「長崎風景（新緑の丘）」他を出品。昭和四十一年第十二回一陽展に「高原」「田園風景」を出品。昭和四十二年第十三回一陽展に「新緑の山」「噴煙のある街」を出品。昭和四十三年第十四回一陽展に「室内」「伊豆伊東風景」を出品。昭和四十四年第十五回一陽展に「桃と南日葵」「春の瀬戸内田園風景」を出品。日本芸術院会員になる。昭和四十五年第十六回一陽展に「室内静物」「人形の国」を出品。昭和四十六年第十七回一陽展に「下田港風景」「壺」を出品。昭和四十七年第十八回一陽展に「伊豆　伊東風景」「伊豆の海」を出品。昭和四十八年第十九回一陽展に「山の家々」「ベルシャ更紗と万暦赤絵」を出品。昭和四十九年第二十回一陽展に「ばら」「絵箱のある静物」を出品。昭和五十年第二十一回一陽展に「古風な時計」「早春の丘（伊豆）」を出品。昭和五十一年第二十二回一陽展に「森の中の洋館」「初夏の伊豆風景」を出品。昭和五十二年第二十三回一陽展に「伊豆の春」「黄色い壺の静物」を出品。昭和五十三年第二十四回一陽展に「河沿ひの村」「伊豆の山」を出品。昭和五十四年第二十五回一陽展に「窓の静物」「天城高原」を出品。昭和五十五年第二十六回

一陽展に「早春の武蔵野」「絵箱と壺のある風景」を出品。昭和五十六年第二十七回一陽展に「新緑の道」「憩さわの樓」を出品。昭和五十七年第二十八回一陽展に「石垣の上の家」「人形二人」を出品。昭和五十八年第二十九回一陽展に「ばら」「みどりの中のすべり台」を出品。昭和五十九年第三十回一陽展に「突堤のある港（伊豆）」「伊豆の漁村」を出品。昭和六十年第三十一回一陽展に「武蔵野風景」「百合のある静物」を出品。昭和六十一年第三十二回一陽展に「みかん畑の見える海」「新緑の伊豆高原」を出品。「鈴木信太郎展」（そごう美術館）が開催される。昭和六十二年第三十三回一陽展に「ばらとざくろ」「海の見える丘（伊豆）」を出品。随筆集「美術の足音 今は昔」（博文館新社）を出版。昭和六十三年第三十四回一陽展に「ひまわりとくだもの」「絵箱と桃」を出品。「鈴木信太郎展」（長崎県立美術博物館）が開催される。文化功労者として顕彰される。平成元年五月十三日逝去。享年九十三歳。五月十七日一陽会葬（於本願寺和田堀廟所）が執り行われる。第三十五回一陽展に遺作「南館」「晴れた日の港」「さぼてんと人形」「柿若葉」「ばら」が展示される。

＊

逝去の三年前・昭和六十一年四月に、「卒寿記念 鈴木信太郎油絵展」（二十三日～二十七日　於日本橋三越）が開催された。四十号の作品をはじめとする二十余点の新作による、瑞々しい色彩と光あふれる展覧会であった。当日の展覧会場と祝宴の模様を、田所満雄（絵画部常任委員）が伝えている。

あの一見稚拙とも思える独特のフォルム、画面の奥底から美しく妖しく光り輝く色彩と共に、珠玉の様な作品が生まれるのは、殆ど毎日絵筆を握るという先生の絵に対する固い信念、姿勢から生まれるのだと思います。人生は絵、絵は人生という哲学に裏打ちされた先生の毎日に、私達は敬服すると共に、何ものにも代え難い教えであると思うものです。

二十六日午後二時より別室でおこなわれたパーティーでは、大勢の一陽会の仲間、知人友人が拍手する中を何時もの車椅子で入場された先生は、九十歳とは思えぬつやつやかな笑顔で、以前よりは少し痩せられた感じのお顔で（却って体にはその方がよい）、にこにこと皆さんと歓談され楽しいひとときを過ごされた。お若い頃から、悪くされた足のハンディに随分と苦しみ耐えられた事でしょうが、今日迄の先生の人生は幸せに輝いていて、羨ましい限りと云う感じが致しました。（「鈴木信太郎先生新作展」「一陽会会報」第十二号　昭和六十一年六月三十日）

弔辞

高岡徳太郎

信（ノブ）さん。

昭和のはじめから、二科会、一陽会と六十年に亘る親しいつきあいでした。若い頃から二人でよく旅をしたものでした。

いつも感心するのは信さんの構図選びのユニークさでした。なんでこんな所を、もっと良い場所があるのに、というふうでした。描いている信さんの絵は、うまくないというより他人が見たら下手な絵と思えるもので、それが信屋に帰って眺めると、自分には真似の出来ない味わいがあり、美事に完成された作品がそこにあるのです。信さんには今はどき鳥海青児と通ずるものがあったように思う。そこには凡人の私らには到底及ばない感性がありました。

風景を見て絵を画くのではなく、感激をもってその風景にのぞみ、その感激を形にして行く、ここに信さんの作品の素晴らしさがあると思います。

小出楢重夫人の手作りの西洋人形に魅せられ、一時この人形を描きつづけた時期もありました。これも信さんが人形に惚れこみ、その感動を絵筆に託したものと思います。

一陽会を作った時も、信さんは「個性的な面白い会にしよう」と口癖のように言っていました。信さんのいう面白い会とは一体何なのか。これからも一陽会の皆さんが、信さんの言葉を胸に、面白い会、個性豊かな仕事を追いつづけると信じます。

信さん、いつまでも若い人達の行方を見守って下さい。

卒寿記念新作展の祝賀宴の折の鈴木信太郎委員

◆創立会員 高岡徳太郎の逝去（平成三年）

一陽会常任委員の高岡徳太郎が平成三年十月、肺炎のために逝去された。昭和三十年に鈴木信太郎、野間仁根とともに二科会を退会し、一陽会を結成して（七月）、第一回展を開催した（九月）。この二科会退会から第一回一陽展の開幕まで僅か二ヶ月間という、想像を絶する急場を乗り越え得たのは、高岡の優れた事務能力に多くを負っている。一陽会の象徴的存在として会の内外から篤い信望を寄せられた鈴木信太郎と、若い後進の先頭に立って創造力豊かな言動で会を引率した野間仁根と、そして美術公募団体としての基礎的な機構を築きあげた高岡徳太郎というように、まさに三者三様の指導者が手をたずさえて協力して、一陽会を育て上げてきた。

折柄、平成の新時代を迎えてまだ浅い日に、会を創設した三人の常任委員のうち、最後まで絵筆を執って第一線に在った高岡徳太郎を送ったことは、一陽会にとって痛恨事ではあったが、これは、創作の上でも、会の運営の面でも、会創立時の理想を未来に託すための歳々とした、しかも避けようのない交替の一幕であり、さらに一陽会新時代のプロローグ（序）でもあった。

ここに高岡徳太郎の画業の歩みと、先鋭な生活人としての来し方を辿り、追懐の頃としたい。

高岡徳太郎（平成三年／一九九一年十月逝去）
明治三十五（一九〇二）年大阪府堺市に生まれる。大正四年堺中学を退学し洋画を志す。天彩画塾に入塾、松原三五郎に師事。大正十一年画業を志し上京、遠縁の辻永を訪ねる。本郷洋画研究所、川端画学校に通う。大正十二年関東大震災に遭い帰阪。大阪高島屋宣伝部に入社。大正十三年大阪、信濃橋洋画研究所に入所。第十一回二科展に初入選（以後満欧期を除いて続けて出品）。大正十五年洲の師と仰ぐ川部巌一の知遇を得る。昭和四年結婚。昭和五年長女睦生まれる。昭和六年第十八回二科展で二科賞受賞、会友に推挙。高島屋宣伝部を辞し、禁原商店に入社。昭和七年「近代大阪」の装丁をする。東京に転勤、阿佐ヶ谷に住む。昭和八年長男孝一郎生まれる。昭和九年渡仏（林武と同道、翌年帰朝）。昭和十一年二科会会員に推挙。昭和十二年舞子又六の小説「達磨町七番地」（朝日新聞）に挿絵を描く。昭和十三年久我山に移転。次男徹生まれる。昭和十五年次女恵佐子生まれる。石川達三の小説「母系家族」（東京日日新聞）に挿絵を描く。昭和十八年二科展評議員になる。昭和十九年十月二科会解散、奥多摩の梅沢に疎開。昭和二十年三女葉子生まれる。八月十七日疎開先に東郷青児が訪れる。十月二科会復興に参加する。昭和二十一年第三十一回二科展開催。千歳工芸（ノバ・マネキンの前身）の設立に参加。昭和二十三年四女郁生まれる。昭和二十八年第三十八回二科展で会員努力賞受賞。昭和二十九年ノバ・マネキン設立。日本橋高島屋ショーウィンドウに岡本太郎デザインのオブジェ装飾を製作、納入。昭和三十年鈴木信太郎、野間仁根とともに二科会退会。一陽会結成。第一回一陽展に「雌（パレリーナ）」「雛（点紅）」「薔（くわでさあ）」「海（A）」「海（B）」「海（C）」を出品。昭和三十一年第二回一陽展に「海」「海」「海」を出品。昭和三十二年第三回一陽展に「海」「海」を出品。昭和三十三年第四回一陽展に「裸婦」「海」「海」を出品。昭和三十四年第五回一陽展に「利根川の夏」「利根川の冬」を出品。昭和三十五年第六回一陽展に「寄する波」「バスの停留所と鳥居のある海岸風景」を出品。ノバ・マネキン大阪店開店。昭和三十六年第七回一陽展に「伊豆の海」「相模の海」を出品。昭和三十七年第八回一陽展に「淀川」を出品。昭和三十八年第九回一陽展に「漁村」「犬吠埼の海」「犬吠埼を望む」を出品。昭和三十九年第十回一陽展に「隅田川（A）　両国にて」「隅田川（B）　両国にて」を出品。昭和四十年第十一回一陽展に「朝顔」「竹林」を出品。ノバ・マネキン名古屋営業所を設立。昭和四十一年第十二回一陽展に「海」「花」を出品。横浜高島屋に美術骨董品店「五趣」を出店。伊豆八十八ヶ所第六十六霊所の岩殿寺の住職になる。昭和四十二年第十三回一陽展に「海（A）」「海（B）」を出品。伊豆宮十見ランドに岡本太郎デザインの「太陽の塔」を製作、納入。山形県寒河江市役所市民ホールに岡本太郎デザインの「光る影刻」を製作、納入。昭和四十三年第十四回一陽展に「雨の果ての町」「海水浴場の雨」を出品。昭和四十四年第十五回一陽展に「夏の山（A）」「夏の山（B）」を出品。昭和四十五年第十六回一陽展に「犬吠1」「犬吠2」を出品。南伊豆町に陶芸窯「岩殿寺窯」を築窯。昭和四十六年第十七回一陽展に「伊豆の山々」「伊豆の海」を出品。昭和四十七年第十八回一陽展に「庭の草花」「庭のあじさい」を出品。昭和四十八年第十九回一陽展に「少女と小鳥屋」「小鳥屋」を出品。

ノバ・マネキン岡山営業所、札幌営業所を設立。昭和四十九年第二十回一陽展に「海からの道」「海への道」を出品。昭和五十年第二十一回一陽展に「君ヶ浜遠望」「利根川にて」を出品。昭和五十一年第二十二回一陽展に「利根川」「松林」を出品。株式会社ノバ商事設立。昭和五十二年第二十三回一陽展に「晴日の海」「漁村の守護神のある風景」を出品。昭和五十三年第二十四回一陽展に「舞ふおはんさん」「大徳寺立花大亀和尚像」を出品。昭和五十四年第二十五回一陽展に「漁村」「漁村の晴日」を出品。昭和五十五年第二十六回一陽展に「海辺（犬吠岬）」「晴日（犬吠岬）」を出品。昭和五十六年第二十七回一陽展に「寂寞の日の小原豊雲氏の像」「皇居の松」を出品。昭和五十七年第二十八回一陽展に「桜田門の見える三宅坂」「国会議事堂の見える三宅坂」を出品。ノバ・コーポレーションを設立。昭和五十八年第二十九回一陽展に「ある日の遠藤実さん」「庭の一隅」を出品。昭和五十九年第三十回一陽展に「杭中閑（福田赳夫先生像）」「君ヶ浜（犬吠岬にて）」を出品。昭和六十年第三十一回一陽展に「海辺（銚子の海）」「円照寺門跡 山本静山尼像」を出品。昭和六十一年第三十二回一陽展に「犬吠の海」「君ヶ浜（犬吠岬）」を出品。昭和六十二年第三十三回一陽展に「陽田川（両国にて）A」「陽田川（両国にて）B」を出品。昭和六十三年第三十四回一陽展に「皇居の松」「桜田門遠望」を出品。昭和六十四／平成元年第三十五回一陽展に「犬吠の海」「犬吠の海」を出品。「平地の大木　高岡徳太郎」「株式会社ノバ・マネキン発行」を刊行。平成二年第三十六回一陽展に「皇居の松と二重橋」「皇居二重橋」「平成の松」を出品。平成三年第三十七回一陽展に「犬吠埼灯台」を出品。十月逝去。享年八十九歳。平成五年六月「高岡徳太郎回顧展」（日本橋高島屋、豊中市博物館）

*

一陽会における高岡徳太郎の大きな功績は、一陽会創立期の迅速で的確な事務処理と、会務体制の早期の確立、そして地方組織の育成に力を注ぐ体制を作り上げたことだろう。

地方組織の育成は、一陽会に限らずどの団体も懸命に取り組んでいることではあるが、一陽会は会創立以来の伝統として、中央からの支援とは切り離して、ゆるやかに各地方組織に自治を委ね、仲間同士の和を尊重するという、こまやかな人間関係の繋がりを基本に運営してきた。関東・関西と次いで早くからまとまりを見せた北陸（最初北国支部）支部の創設と高岡徳太郎の関わりを、田辺栄次郎が回顧している。

ヨーロッパから帰って、視察してきた各地の美術教育や、フランス画壇の現状を随筆「欧路」にまとめて出版しようと、原稿を書いていたのは、昭和三十二年の初めであった。その折の金沢は寒さ身に沁む頃、戒日突然、高岡徳太郎先生の来訪があって驚いた。私の二科出品の頃、先生の御作品を敬服して眺めていたが、戦後二紀会が創立された時、招待を受け同人となってからは、二科とは縁遠くなった。しかし、高岡先生が二科の主軸として活躍されていることは知っていたし、第一回の一陽展が高島屋で開催されているのを見て、勇ましい旗上げだと見ていた。私が卒業した石川県立二中の先輩で、ソルボンヌ大学で経済学を学ぶかたわら、美術評論にも詳しかった中村恒夫氏が私に、「二紀会を離れた今、地方で頑張っていても無駄だから、中央画壇に属することが肝要だ」と薦めてくれていた。

一陽会はどうかと話していたのは正月頃だったろうか。そして何の前触れもなく、高岡先生が来られたのである。中村氏と高岡先生とは、パリ在住の頃のお馴染みとは云え、私をどんなふうにご紹介されたかは知らないが、余りにも突然なので驚きでもあり、感激もした。

先生の仰るには、「一陽会は今秋第三回展になる。東京、大阪に次いで北陸にも大きく発展したいので、君に一つの砦となって呉れないか」との事。当時、私は抽象に転じ始めていたので、「こんな未熟者でもお役にたつなら」とお答えし、参加させて頂くことにした。しばらくして、中村恒夫氏からの速達で、「上京し、ある料亭で、野間、鈴木両先生を交えて、お顔あわせをしたい」とのことである。私ごときがと思ったが、御招きに応じたからにはと、早速第三回展を金沢でも開催する旨、お約束したのである。

その後、「高岡先生からの御依頼で」と、山路貞護氏、荻野康児氏の来沢もあり、新聞社、放送局等、後援のマスコミ連絡や、出品者勧誘と準備は進められた。（略）

（「思い出は今も息づく」「一陽会会報」第二十七号　平成五年十一月二十日）

◇一陽会の平成の歩み

一陽会を結成し育て上げてきた三本柱が、平成の初年（平成三年）にして総て抜けてしまった。

平成という新しい時代の到来とともに、一陽会は第二、第三世代の和と力を結集して、「新時代の一陽会」を切り拓いてゆかなければならなくなった。

さらに、これまで多くの公募団体が果敢に取り組みながら、ついぞ結実させることができないでいる、「公募団体の有益性」を身をもって実現してゆかねばならない。

一陽会が設立された昭和三十年頃は、上野の森（東京都美術館）で開催される団体展を称して「美術のメッカ」「美の殿堂」と囁したてて、そこで四季折々に繰り広げられる美の競演は、まさに日本の美術の最先端であるとされた時代があった。……そして半世紀を経た今日、経済、社会、文化の仕組みの在り様の変貌に伴って、美術そのものの表現と価値観がすっかり変質、多様化してしまった。さらに、空前の経済高揚（バブル）期を迎えると、美術そのものが経済的な事業の一環に組み込まれ、挙げ句、美術品が莫大な投機の対象として扱われる事態さえ生じた。一般的に分かりやすい美術の換金化は、底知れない勢いで裾野を広げたものの、かといってその分、上野の団体展の会場が賑わったかというと、決してそうではなかった。

ここに興味深い記録がある。東京都美術館（新館）の使用団体（公募展）年間入場者数の年次比較である。各団体が集計した入場者数をまとめて年間入場者数として、それを年次比較したものである。

○新都美術館開館の年、昭和五十年度から七年間、昭和五十六年度までの記録を見ると、

・昭和五十年度　一、七九九、三四六人　（一、六五）＊使用団体数
・昭和五十一年度　一、七一四、七三三人　（一、七四）
・昭和五十二年度　一、九一九、二一六人　（一、七四）
・昭和五十三年度　一、九二九、四七四人　（一、八八）
・昭和五十四年度　二、〇六二、七二五人　（一、九四）
・昭和五十五年度　二、〇二五、二三七人　（一、九四）
・昭和五十六年度　一、八七〇、一七六人　（二〇一）

○経済高揚（バブル）最盛期前後の昭和六十年度から八年間、平成四年度までの記録をみると、

・昭和六十年度　二、〇六五、七五二人　（二一七）
・昭和六十一年度　二、〇五九、八二二人　（二一九）
・昭和六十二年度　二、一〇四、九四二人　（二一九）
・昭和六十三年度　二、一〇八、五八七人　（二二〇）
・平成元年度　二、一二五、六六八人　（二二一）
・平成二年度　二、二〇八、七二六人　（二二二）
・平成三年度　二、二五一、七五五人　（二二二）
・平成四年度　二、一八一、六四七人　（二二二）

○近年、平成八年度から六年間、平成十三年度までの記録をみると、

・平成八年度　二、〇一三、〇四八人　（二二六）

・平成九年度　一、九七八、六九〇人　（二三七）
・平成十年度　一、九一三、三四〇人　（二三八）
・平成十一年度　一、八六七、六八六人　（二三六）
・平成十二年度　一、八五六、九九五人　（二三六）
・平成十三年度　一、八四二、〇六七人　（二三五）

（平成十四年度　東京都美術館年報」より）

新都美術館が開館した昭和五十年から五十六年まで、経済高揚（バブル）最盛期前後の昭和六十年から平成四年まで、そして近年の平成八年から平成十三年までの集計を抄出してみた。

最下段のカッコ内の数字は、その年の使用団体の数で、ちなみに新都美術館が開館する前年、昭和四十九年度の使用団体数は百十五団体であった。新館の開館にともなって一挙に五十団体増加し、以後使用団体の数は徐々に増加の一途を辿っている。そして年間入場者数を見ると、昭和五十年から徐々に増加し、経済高揚（バブル）期の平成元年から平成三年をピークに、以後は逆に徐々に下降している。

たしかに経済高揚（バブル）期に入場者数は増えてはいるものの、昭和五十年度の使用団体数が百六十五団体であったのが、平成三年度には二百三十二団体と増えていて、むしろ一団体あたりの入場者数は減少している（平均すると、昭和五十年＝一〇、九〇五人、平成三年＝九、七〇五人）。さらに平成十三年には、使用団体数は二百三十五団体と増えているのだが、入場者数はかなり減少している（一団体あたり平均、七、八三九人）。――ちなみに、一陽展の平成十三年（第四十七回展　東京本展）の入場者数は、一〇、七三五人であった。

こうして見てくると、経済高揚（バブル）期に煽られた「美術ブーム」は、その分上野の森の団体展を賑わすことはなかったし、もう少し見てゆくと、昭和三十年代末以降から次第に顕著になっていった一般の団体展離れは、昭和五十年の新都美術館開館後も改善のきざしを見せず、以降も団体展に足を運ぶ人の数は減り続けている、という情況が見えてくる。……必ずしも、数字に表れていることが本質をついているとは限らないが、大変示唆に富んだ数値ではある。巨額の費用を掛けた団体展専用の展示施設が開館しても、国中が沸きかえるような好景気のもとでも、団体展の入場者数が、劇的な増加を記録することはなかった。

ただし一方で、減少してきているとはいえ、約二百三十の団体がそれぞれ、三週間の会期中に約八千人の入場者を迎えていることも事実なのである。

第49回一陽展の会場入口

公募団体としての一陽会の未来像

平成の新時代を迎える前年、一陽会が新しく常任委員制を導入し、さらに新委員を選出して新たなる体制で臨んだ、昭和六十三年の第三十四回展の展覧会場を描写した記述がある。現代の美術を顕彰する一つの視座として、公募団体の動向を常に注視してきた、美術評論家の宝木範義氏は次のように書き記している。

一陽会絵画部（第49回展）審査風景

東西スポーツ界の久しぶりの出会いの場として話題を集めたソウル・オリンピックも、期待されたほどの盛り上がりを示すことなく終幕を迎えたようだ。すべからく世紀末の時勢にあっては、瀰漫する倦怠の薄明の中で、劇的な光と影はことごとく力を失い、日常性の穏和な振幅にひきおろされてしまう。オリンピックといえども、たぶんこの例にもれなかったのだ。とすれば、かつては春秋を画する最大の文化行事であった団体展が、今では例年の慣行の気配を濃くし、日常に埋没したように見えたとしても、不思議はない。団体展もフランスのサロン展のように、形骸化してしまったのだろうか。

思うに、そう指摘される部分も、確かにあるだろう。だが、それと同時に、我が国の狭い油絵の歴史が、やっと土台らしいものを得て、日本人の感情を反映することのできる、表現の段階にようやく到達しようとしていることも、もうひとつの事実なのだ。劇的な起伏を欠いた表現は、一見しただけでおもしろさを感得できるほど、直截的なものではなくなっている。しかしその反面で、細部に感覚のゆきわたった、日本の油絵の型と言うべきものが、ひっそりと形成されつつある。屈折した表現の振幅の中に、世紀末の洗練を体験した。今迄とはちがう絵画が生みだされていることも忘れてはならないだろう。

一陽展はフォトリアリズムがとかく話題を集めがちだが、今日的な表現の集大成として、抽象、ポップ調なども含めた全体を見渡してみる必要があるだろう。神門四郎「臥待の宵」の日本画を想わせる画面があるかと思えば、岬和男「聖家族シリーズ」の建売住宅に住む平均的サラリーマンの、日曜の情景があったりする。このあたりのとりとめのなさが、いかにも一陽会らしいと思う。一水会とは歴然と異なるが、戦後生まれの団体らしくていい。写実的傾向の作品としては、安藤能亘「もうひとつの落日―セイブッ」、小松富士子「The Sky No one saw」、森秀雄「偽りの青空」と、例年のタイトルで連作が続けられているものに、安定した技量を見る思いがした。フォトリアリズムは一時の流行から、表現技法にふさわしい表現内容を獲得する段階にさしかかっているのだろう。その意味では、持続的に発表が維持されているこの会場は、思いつきだけで仕事をしがちな日本人の体質を超えており、やがて現代社会のあり方と結びついた表現という観点から、ひとつの成果を生み

一陽会の事務局の推移

一陽会全体の会務を束ねる事務局は、会創立当初は野間仁根が携わり、次いで高岡悠太郎、片柳忠男と引き継がれ、第九回展（昭和三十八年）で勝一晃が会員に推挙されたのを期に、勝一晃に事務局を委ねられることになった。以後一貫して勝のもとで会務全般が取り仕切られてきたが、昭和六十一年六月一日から五十嵐二朗に会務事務が引き継がれ、翌昭和六十二年四月一日から五十嵐二朗が事務局を引き継いだ。

五十嵐二朗は平成二年度末まで事務局をつとめ、平成二年四月一日から坪井正光が事務局を引き継いだ。

だすことになるだろう。

冒頭で日本人の油絵が今やっと成立しかかっていることを述べたが、団体の枠が確立されて居心地がよくなれば、それだけで自足してしまいがちである。しかし、絵画の歴史、わけても油絵の歴史は時代と結びつき、その時代を代弁する作品をこれまで生みつづけてきたことからすると、日本の油絵が遅ればせのスタートながら、ここへ来てやっとその素材と表現を身につけ、時代を代弁するに足りるメディアとなりつつあることを、

一陽会の授賞（賞の推移）

平成十五年（二〇〇三）現在の一陽会の授賞は、一陽賞、青麦賞、損保ジャパン美術財団奨励賞（平成十三年まで安田火災美術財団奨励賞）、野外彫刻賞、会友賞、特待賞、奨励賞であるが、第一回展以来、折目節目に出された記念賞他も加えて様々に推移してきた。毎回展覧会の初日に、会友推挙、会員推挙とともに発表されるのが通例で、大きい意味では、会友推挙、会員推挙も褒賞であろうし、授賞に限って見てゆくだけでも、折々の時代背景が伏見えて興趣をそそられる。

第一回展（昭和三十年）の授賞は、一陽賞、青麦賞のふたつで、ちなみに名誉ある第一回の受賞者は、一陽賞（高根秀雄）、青麦賞（椿戸茂）であった。一陽賞と青麦賞は若手作家を顕彰する褒章として授与（概ね絵画、彫刻双方に授与）されてきた。青麦賞の由来については、丹羽文雄の同名の小説「青麦」（昭和二十八年作）から頂戴したのだと一陽会内部で言い伝えられている。確かに一陽会を創立した鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎は、昭和初年頃から盛んに文学作品（新聞連載小説への挿絵）との共作を行っており、昭和四十四年の第十五回記念展の祝宴に、サトウハチロー、丹羽文雄、徳川夢声、近藤日出造が祝辞を寄せているところからすると、青麦賞の名称は、会の創立者たちと期界の巨匠との親交を記す記念碑と理解していいようが、ちなみに、昭和四十二年に高岡徳太郎が伊豆の真言宗岩殿寺の住職になっていることと、丹羽文雄が、三重県四日市市在のやはり真言宗の寒願寺の出であったことと、一つの縁にあったのかも知れない。

第二回展（昭和三十一年）から特待賞、第六回展（昭和三十五年）から会友賞が加わっている。有為の新人作家を格別に遇するという意味をこめた特待賞と、会員を目指す有望な会友を激励するのが会友賞で、いずれも若手の顕彰を目的としたものであり、第二十二回展（昭和五十一年）から授与されている奨励賞とともに多くの新人・若手作家の頭上に輝いている。

第十回展（昭和三十九年）はオリンピック協賛を謳って開催され、この年のみ、ひまわり賞（吉村外人、婆羅陀ゆるが受賞）が授与されている。

第二十三回展（昭和五十二年）から彫刻を対象とした**オベリスク賞**が授与されるようになった（第一回受賞者・小池邦男／第二十九回展まで授与）。オベリスク（古代エジプトなどの石造の方尖塔）の名の通り、限りなき雄大な彫刻空間への飛翔を促す褒賞であった。第三十回展（昭和五十九年）から**野外彫刻賞**（第一回受賞者・高嶋文彦）が設けられると、野外彫刻賞が彫刻部門の褒賞となった。そして、第三十六回展（平成二年）に、やはり彫刻を対象とした**大心苑賞**（第一回受賞者・六崎敏光／翌年と二回）が授与されている。

昭和五十四年に逝去した野間仁根の業績を記念した**野間賞**が第二十六回展（昭和五十五年）から授与されることになった（第一回受賞者・土崎敏男／平成八年・第四十二回展まで授与）。一陽賞と青麦賞が若手作家の顕彰の意味あいを強めてくると、替わって会の権威を担った。

第二十六回展（昭和五十五年）から授与されるようになった**安田火災奨励賞**（第一回受賞者・小山佐敏、浜田清、吉田光晴、小林達也）は、安田火災美術財団が約二十の公募団体の絵画、彫刻作品を対象に奨励賞を贈与するもので、この年（昭和五十五年）から、奨励賞を授与した作家の新作（絵画五十号以内／彫刻一〇〇×一五〇cm、高さ二〇〇cm以下、百kg以内）の内から優秀な作品を表彰する制度を設けた。第三十四回展（昭和六十三年）に安田火災美術財団奨励賞と改称（さらに第四十八回展・平成十四年で、損保ジャパン美術財団奨励賞と改称）した。

第三十回記念会員賞、記念会友賞、記念特待賞（昭和五十九年）、**第四十回記念会員賞、記念会友賞**（平成六年）、**第四十五回記念会員賞**（平成十一年）と記念褒賞が授与されているが、特別の褒賞としては、第三十六回展（平成二年）で一回のみ授与された**鈴木賞**（北山泰斗が受賞）と、第四十回展（平成六年）の特別褒賞として、長年第二、第三世代の実際に立って会務を執り、また三十年間に亘って『一陽会会報』の責任編集に携わった北山泰斗に**功労賞**が授与された。

もっと重い事柄として認識する必要があるにちがいない。

時代がいかに進んでハイテクが生活の根幹を為すようになったとしても、人間は絵を描く動物であることを止めようとはしないだろう。逆に、芸術創造がより大きくクローズアップされることになるだろう。そうした時代を前にしているだけに、私はより一層、画家が自分の時代をいかに捉え、いかに表現するかのコンセプトを、明確に持ってもらいたいと思うのである。

（「特集　秋の団体展・新制作・一水会・一陽展」『三彩』第四九四号　昭和六十三年十一月号）

油絵、彫塑・彫刻という、異文化のもとで醸成された西洋美術を咀嚼、吸収するにあたって、わが国の制作者たちは、精神的な意味でも技術的な意味でも、支えとなる「土台」を永く持たなかった。

「画壇」という《日本人の感情を反映することのできる》「土台」を得てようやく、《細部に感覚のゆきわたった、日本の油絵の壁と言うべきものが、ひっそりと形成され》はじめている。……つまり、日本人が日本人の油絵、彫刻をどのように作り上げてきたかという根本のところに、日本の「画壇」は密接に絡んでいる、というのである。

この場合の「画壇」とは、運営形態を示すところの「公募団体」の意味合いからは少し離れたところにある。

創立以来半世紀に及ぶとはいえ、戦後の昭和三十年に結成された一陽会は、「画壇」の内では《戦後生まれ》の比較的新しい部類に入っている。戦後の団体らしく《現代社会のあり方と結びついた表現》が見られることを多とし、さらに《画家が自分の時代をいかに捉え、いかに表現するかのコンセプト（考え方）を、明確に持ってもらいたい》と結んでいる。一陽会の作品群の中に、現代社会と生活人の素顔の表象に果敢に取り組む傾向が多く見られる、という指摘であり、一陽会の歩みのひとつの方向が見えているように思える。

もうひとつ、関東支部が主催する研究会でしばしば講演の演壇に立った、林紀一郎氏（新潟市立美術館長、兼田二十世紀美術館長）の「現代美術の中の一陽会」という、やはり関東支部の研究会での講話の中から抄出してみたい。

私は一陽会の作家たちとの関わりを振り返ってみると、もう鬼籍に入ってしまわれたが、山路真護さん、荻野康光さん、米良道博さんとか、一陽会を作った大先輩とのかかわりから、私の一陽会との出会いがあります。（一陽会創立の）昭和三十年頃以降ですから四十年近い歴史があり、過去茫々という感じがします。（略）

一陽会には鈴木信太郎さんに代表される、とてもいい意味での、アカデミックではない、アマチュアリズムがあります。これは一陽会のたいへん大事な財産だと思います。アマチュアリズムというのは決して非難されるべきものではなく、絵画の本来的なひとつのあり方ということになります。…純粋な素朴な絵画への考え方が歪んでしまうのは、いわゆるアカデミズムの教育が悪かった。…美術を体系化し、組織化して啓蒙していこうという美術のシステム化が、アマチュアリズムをどのくらい妨げ歪曲してきたか。（略）

二科から離れて一陽会を創った人達の多くが、いわゆるアマチュアリズムから出発したことを、私は非常に高く評価しています。…昔は二科でも国画会でも新制作でも、それなりの性格がありました。それはどういうことかというと、それぞれの会の画家たちの性格です。たとえば独立には海老原喜之助がいたり、須田国太郎がいたり、小林和作がいたり、林武がいたりして、その強烈な個性、創造力が会の性格を作っていた。春陽会というと春の日のごとくおだやかな会で、中川一政や岡鹿之助がいたり、中谷泰がいたりして会の性格を作っていた。二科はというと、東郷青児や吉井淳二たちがつくっていた性格ですね。作家自身が会の性格をつくっていた。一陽会の性格はなにかというと、皆さんひとりひとりの作品がそれをつくっているのです。なにも他の会の作風のまねをする必要はない。ありのままでいい。そのひとつはアマチュアリズムですが、片方でたいへんに幻想的なシュルレアリスティックな傾向があることも否めないと思います。これも一陽会の貴重な財産

として守っていってほしいと思います。

ただし一陽会の持っているシュルレアリスティックな性格というのは、かつての美術文化協会が持っていたものとは違います。つまり福沢一郎がヨーロッパから帰ってきて、一時独立に入ってまた離れて、仲間たちと

阪神淡路大地震に遭遇（一陽会関西支部）

平成七年（一九九五）一月十七日午前五時四十六分、阪神・淡路地方を空前の激震（震度七）が襲った。家屋の倒壊、道路交通網の破損とともに、折から神戸市長田地区を中心に広い範囲で火災が発生し、合わせて六千余名の尊い命が失われた。阪神淡路大震災である。

一陽会関西支部に所属する作家のうち、阪神地区（兵庫県南東部）に一陽会の会員・会友二十二名、出品者五十名余りが居住していたが、家屋等に多少の被害があったものの、一人の犠牲者もでなかったことは不幸中の幸いであった。

震災のために、一月二十二日に予定されていた支部予算総会が中止になったものの、第三十七回関西一陽展（三月）および個人の展覧会やグループ展活動は、むしろ積極的に取り組み、被災の克服を期し開催された。

なお、当該被災者に東京本部をはじめ各支部、地方組織から見舞い、激励の電話、手紙、義捐金が寄せられた。

兵庫県立近代美術館（建物）や野外彫刻などに深刻な被害が出るなど、当該地区の総ての美術家に与えた衝撃は測り知れないものであった。

＊

岬和男――『震災地からの近況』（抜粋）

傾いた床のアトリエに生活して、四ヶ月が過ぎようとしている。家族と離れての一人暮らしである。…崩壊は、解体撤去がようやく進み、段々畑のような空地が広がって、夜などは、ポツン、ポツンと外燈がみえるだけで妙に静かだ。以前なら、近所の犬の鳴き声や、カン高い笑い声が聞こえて来たのにと思いながら絵に向かう。

週に何度か大阪に出掛けるが、ここは全くの別天地、華やいで、何とも活気に溢れた以前のままの大阪に包まれて、神戸の現実が嘘のようにしてしまう。どちらも現実であるはずなのに。…最近、しばしば街の人々の会話に、人生観が変わってしまったという話を聞く。築き上げた生活が、一瞬にして壊滅してしまったのだから無理もないと思う。…ともあれ、神戸に住む我々にとって、未曾有の一大事だった。

震災直後、全く空白の頭で、起こった出来事、さし迫って本能に従って行動した時期を経て、今ようやく、人々は心の残像処理に向かい始めて来たのだと思う。

親しい人との死別、負傷、家屋の倒壊、あるいは職場の喪失等が、心に刻み込まれてしまった刻印であるとするなら、このことからの解放は一体どのようにすればいいのか。

私にとって有難いことは、家族が無事で、帰いた家があるということ。そして、これから何を描けばよいのかと悩まされることなく、以前どおりに絵を進めて良いのだという確信である。

土井稔――『五時四十六分激震の刻』（抜粋）

突然誰かに背中を押しつけられ、上下左右に体を揺すられているようで立ち上がれない。思わず「何だこれは」と叫んだように思う。五分位経過したか。やっと揺れが止まったので、スタンドのスイッチを入れたがつかない。暗がりの中で立とうとすると、小さな仏壇が台から落ち、中の物が飛び散って、ふとんは灰まみれ。もう少しで頭を直撃されるところだった。ろうそくとマッチを探しあたりを見ると、部屋の中のものは何もかもが飛び散り、倒れ、天井板はぶら下がり惨憺たるもの。

…水道を捻ったが出ない。外へ出ると近所の人が、ガス臭いので火をつけないようにと言っている。…電気、水道、ガス全部駄目。それでもそのうち何とかなるだろうと気楽に考えていた。

次第に明るくなってきたので携帯ラジオを探しつけると「淡路、神戸に巨大地震が発生」とアナウンサーの興奮した声が飛び込んできた。屋根に上り南の方を見ると全市が黒煙に包まれ、時々大きな破裂音と共に赤い炎がメラメラと立ち昇る。太陽が黒煙の間を不気味な色をして徐々に昇っていくのが印象的。初めて、これは大変な事態が起きたのだと思った。…

（「阪神大震災に遭遇して」『一陽会会報』第三十号、平成七年六月一十日）

一陽会平成15年度（第49回展）鑑賞会

美術文化協会をつくった頃の性格というのは、日本的な前衛美術の影響があった。…一陽会のシュルレアリスティックな作品は、戦後美術の展開のなかで日本人がやってきたような、シュルレアリスティックな作調を下敷きにしているというよりも、むしろ新しい傾向のファンタジー、例えば若い作家たちが自分と世界とのかかわりを、現実を越えたかたちで表現してみたいという、いわばポストモダン的な意味のシュルリアリズムの傾向がある。これはこれで大事にしてほしいと思います。

一陽会で、一番欠けているのは、例えば完全に純粋な意味での幾何学的抽象、これは、出発のときの土台自体がそういうものを持っていなかった。あえて一陽会の抽象をみるならば表現主義的抽象といえる。ルーツをたどっていくとモンドリアンにはいかない。無彩色と三原色と水平線と垂直線だけで宇宙の内在律を構成したような、客観的、構成主義的、分析的な抽象ではなく、内景の表現。モンドリアンに対してカンディンスキー的な要素があるといえるかもしれません。（略）

一陽会のレアリスムは、クールベのような純粋な立場にたったレアリスムでなくて、小説でいうと私小説的なレアリスム、自分の日常性の空間のなかに実感としてとらえたものを一生懸

命描くという、生活的レアリスム。これは一陽会に限ったことではないが、ロマンチックなレアリスム、どちらかというとメルヘン的な要素を持った、ちょっと少女趣味的なところがチラチラと画面にでてきているものがある。キャンバスの上では自己の弱点を厳しく規制し、コントロールしていくことを考えなくてはいけない。（略）

油絵具を使って日本人はまだ二百年経っていない。フランスのジャン・フォートリエが、「ファン・アイク以来油絵具は西洋人が使ってきて、もう四百年も経ってきた。今更われわれが油絵具を使う必要はない」と、きっぱりやめて、パテや他の材料を使った。そういうことのできるのは、油絵具にうんざりした、もう四百年も歴史のある西洋人であって、われわれはまだうんざりはしていない。あのどうしようもない油絵具にまだまだ挑戦する意味も可能性もあるし、どこまで日本人が油絵具を使いこなせるのか、完璧に使いこなせているかというと、まだ十分ではない。その途中で合成樹脂塗料のアクリル絵具が出てきたが、まだまだ捨てたものではないと私は思います。（略）

私は団体論についてはかなり肯定的です。かつて公募団体無用論がありましたが、私はそうは思わない。むしろ有用論です。作品をあれだけ多くの人が見てくれる「場」は他にありません。団体に所属する以上メンバーとしての責を果たしながら、いい仕事をしていくしかない。…団体に所属して堂々といい仕事をする。仕事をしつづけることしかない。「あなたが今していることをしなさい」ということになる。それも自己革新を絶えず試みながら続けてください。

（講演「現代美術の中の一陽会」「一陽会会報」第二十四号　平成四年六月二十日）

◇「国立新美術館」（東京・六本木の美術展示施設）への対応

平成十八年（二〇〇六年）開館をめざして、「国立新美術館」の建設工事が進められている。文化庁は、建設の理念を「美術への関心の高度化、美術活動の活発化、多様化、国際化等に対応するため、全国的公募展や大型企画展などへの施設の提供を行うとともに、国内外の展覧会情報などの収集・提供や教育普及活動を行うことにより、我が国の美術の振興と国民の美術鑑賞機会の充実を図り、もって文化の向上に寄与するため」と謳っていて、かねてより強い要望のあった国立美術館の機能拡充や、現在東京都美術館で開催されている公募団体へのより広範な会場提供をめざしている。

このことは、従来よりも広くて至便性の高い会場の新設を希望していた公募団体は、一様に新時代における新たなる展望と捉えているようだし、一陽会にとっても、より広い展示室と、彫刻専用の展示室を確保し、より高度な展覧会活動を進めてゆく上での好機であることには間違いない。

大正十五年に開館した最初の東京都美術館、昭和五十年に開館した東京都美術館と、一陽会は展覧会活動の基盤を置いてきたが、常に、拡大してゆく会勢と限られた展示面積との大きいギャップ（隔たり）に頭を悩ませてきた。殊に彫刻部専用の展示室確保の宿願は依然として満たされてはおらず（平成十六年春現在）、「国立新美術館」への対応の如何が――具体的な借館の要領、条件等は、今後あらゆる角度から協議が重ねられてゆくのであろうが――今後の一陽会の道程を占う重要な岐路となってきている。

さて、この新しい展示施設に関する具体的な働きかけは、平成の幕明けとともに早くから行われてきた。事は美術界全体に関わる大きい問題であるが、一陽会内部においても、平成二年に北山泰斗が「一陽会活動情況」（「一陽会会報」第二十号）で「東京国立美術展覧会会場建設を促進させる会」の陳情書を開示して、議論を促している。少し時間を遡るが、北山の経過報告とともに引いてみたい。

「東京国立美術展覧会会場建設を促進させる会」が、日本芸術院会員、各美術団体代表等により結成されており、わが一陽会も、勝一見常任委員と筆者が参画し、請願を重ねて久しいが、いまだ朗報を見ない。ここで請願書を記載してみよう。

（「国立現代美術館（ナショナルギャラリー）設立に関する陳情書」

第一　わが国における美術関係の施設は、今日、他の先進諸国に較べて十分とはいえず、とくにナショナル・レベルの美術館が著しく立ち遅れております。国立美術館は数少なく、規模も小さく、しかも展示されるのは、多くは歴史的美術品や、評価の定まった作品に限られ、到底現代の美術創作の国民的エネルギーを収斂する場とはいえません。そのため、全国的規模の公募展等の開催に際しては、これまで東京都美術館を借用していますが、これも現在の規模では、展示作品数や展示期間に多くの制約が加えられています。

第二　こうした状況を打開するため、去る昭和四十四年五月、美術家代表と政界各党の国会議員による懇談会で「国立現代

「国立新美術館」完成予想図

美術館設立」の合意を見たことを出発点として、広範な美術愛好者を含む運動が進められてきました。昭和五十三年には、日本芸術院会員による要望書の提出、美術関係者四七、四〇五名による陳情書の提出をはじめ活発な陳情、請願が重ねられ、政府もこれに応えて、昭和五十三年度および五十四年度予算に「国立文化施設整備のための調査研究費」を計上されました。

ところが、たまたま石油ショックによる財政事情の困難などもあり、この運動は中断を余儀なくされ、そのまま今日に至っております。

第三　この間、わが国の経済・財政事情は大きく変化してきました。また生活様式の発展と豊富化にともない、文化・美術活動に対する国民の要求は、かつてなく高まりつつあります。多年の懸案である国立現代美術館の設立に踏みだすには、きわめて適切な条件が整ってきたと思われるのであります。

第四　わが国は、二十世紀後半に世界に比類のない高度な経済発展をなしとげ、いまや国際社会で確固たる地位と影響力をもつにいたっています。この経済力にふさわしい文化水準を体現して国民生活の質的向上を図り、ひいては人類の進歩と平和に貢献することは、二十一世紀にむかうわが国の重要な課題でありましょう。美術の分野から、文化活動の一翼を担う私たちは深くこのことを自覚し、いまこそ、わが国が「世界文化センター」をめざすべきだと考え、概ね次のような構想の「国立現代美術館」が早期に設立されることを念願いたします。

①　「国立現代美術館」（仮称）は、国の責任において首都・東京に設立されるものであること。

②　その規模と内容は、欧米の同種施設に比較して遜色のないものであること。

③　この美術館が対象とする美術の範囲は、既成の観念にとどまることなく、例えば映像美術、建築・商工業デザイン、服飾デザイン、都市美術、地域の民芸なども含む広範なジャンルにおよぶものとすること。

④　この美術館は、たんに公募展に場を提供するだけでなく、全国的および国際的な美術情報と資料の収集、創作活動の交流、共同研究等のセンターとして機能するものであること。

⑤　この美術館の企画運営にあたっては、美術関係者の意見と自主性を充分に尊重して行うものとすること。

以上の基本的な構想についてご検討をたまわり、なにとぞ早急に具体化の措置を講じられるよう心から要請するものであります。）

このような請願が大臣が変わる度になされている。しかしいまだ実現されない現状をみるとき、経済大国日本は、文化の貧困大国であると慨嘆せざるを得ない。

平成二年、幾分翳りを見せ始めていたとはいえ、まだ経済高揚期の熱気を留めていた時期の報告である。

そして、事態は平成七年に動き始めることになる。

平成七年十月、文化庁は「新しい美術展示施設（ナショナル・ギャラリー）に関する調査研究会」（平山郁夫座長）を設置して、基本的な構想の検討を開始した。そして平成八年三月、調査研究会は「新しい美術展示施設（ナショナル・ギャラリー）設立の基本構想」を策定し、文化庁長官に報告した。それを受けて、文化庁は同年十二月に「新しい美術展示施設（ナショナル・ギャラリー）に関する基本計画検討協力者会議」（平山郁夫座長）を設置して、基本計画について検討を開始した。

そして、平成十一年三月に、基本計画検討協力者会議が「新国立美術展示施設（ナショナル・ギャラリー）（仮称）基本計画」を策定し、文化庁長官に報告した。この基本計画をもとに、同年九月、文化庁は「新国立美術展示施設（ナショナル・ギャラリー）（仮称）設立準備委員会」（平山郁夫座長）を設置した。

平成十二年三月、文部科学省は「新国立美術展示施設（ナショナル・ギャラリー）（仮称）の設計業務を黒川紀章・

日本設計共同体に委託し、平成十四年二月に「新国立美術展示施設（ナショナル・ギャラリー）」（仮称）の設計業務が完了し、建設工事が開始された。そして、平成十五年六月に名称を「国立新美術館」とすることが決定された。工事期間は平成十七年度末までとされていて、開館は平成十八年度とされている。

建物の概要は以下の通りである。

〔平面計画〕

建物は、地下一階、地上四階（一部地下二階地上六階）。（敷地面積三〇、〇〇〇平米／延べ床面積四五、〇〇〇平米）

地下一階には、展示作品の搬出入のための作業室や保管室、公募展のための審査室を配置し、上階の展示室と効率的に機能するよう配慮している。また、ミュージアムショップやレセプションホール等を配置している。

地上一階から三階までは、公募展示室、公募・企画展示室（約二、〇〇〇平米の展示室を七室）を配置し、美術団体が実施する全国的公募展の複数同時開催や大型企画展にも十分対応できる広い展示面積を確保している。

各展示室内は、柱の無い一体的な空間とし、大型可動展示パネルで自由に分割できるようにして、多様化する現代美術など急速に進展する美術活動への対応に配慮した、機能的で利便性の高い施設としている。

各展示室の天井は可能な限り高く確保し（五・五メートル、又は八・五メートル）、大型化する展示内容に対応するとともに、広々としたゆとりある展示空間を作り出すこととしている。

一階のエントランスロビーは、観覧者にわかりやすい四層吹き抜けの自然光あふれるアトリウムとし、来館者がスムーズに展示室へ移動できる。

地上三階には、展示室のほか、図書室、視聴覚コーナー、講堂及び研修室等を配置している。

〔外構計画〕

来観者や地域住民の憩いの場となるよう、敷地周辺の青山公園や青山霊園などの緑と繋がる森を計画し、都市の環境改善に資する計画としている。

屋外の緑の中で彫刻等の作品が鑑賞できるよう、野外展示場を計画している。

（「報道発表」平成十四年二月二十二日　文部科学省文化局芸術文化課）

「国立新美術館」の出現（平成十八年）は、美術界全体に一体どのような一石を投じることになるのか、公募美術団体の対応と共に大いに注目されるところだが、経済高揚（バブル）期からの長期低調に伴って、運営難は国立博物館・美術館にも及び、国の財政負担軽減のために独立行政法人化が推進されている。美術の最先端の現場が管理・統合されてゆくさなかに誕生してくる「国立新美術館」が、積年の一陽会をはじめとする公募団体の宿願を、規模、機能、そして経済的な面においても、充分に満たすことになるのかどうなのか、……借用料が格段に高騰する旨が伝えられており、このことが、さらに公募団体を経営本位の運営に走らすことになりはしないのか、そして、研究部署を持たない、公募展と企画展への会場提供が中心となる新国立美術展示施設に対して、また新たなる杞憂も生じて来ている。

ともあれ一陽会は、新美術館が開館したあかつきには、より広い展示面積と有効な活動機能をもとめて、新美術館への展覧会の移転を予定している。

文字通り、一陽会の明日への展望が幕明けしようとしている。

◇地方別ブロックの確立 Ⅳ

〔高知一陽会〕　＊〔高知一陽会の展覧会・活動記録は巻末にまとめて掲載〕

高知県における一陽会の歩みは、昭和四十三年・第十四回一陽展に谷岡久が初入選し、特待賞を受賞したことに始まる。以後谷岡の画業の進捗と会内部での谷岡の地保の確立とともに、新人作家の発掘、育成グループの結成が進められ、高知一陽会の礎が築かれていった。高知一陽会のグループの推移は以下の通りである。

「黎明の時期」……昭和四十三（一九六八）年～昭和五十一（一九七六）年

「一陽会高知グループの時期」……昭和五十二（一九七七）年～平成八（一九九六）年

「高知一陽会の時期」……平成九（一九九七）年～

（平成十四年作成の「高知一陽会の歩み」から抜粋）

「黎明の時期」は、谷岡の孤軍奮闘時代。「一陽会高知グループの時期」は、新人発掘、グループの育成期。「高知一陽会の時期」は、一陽会高知グループから高知一陽会へと組織が拡充し新たなる活動の時期である。

昭和五十二年に「一陽会高知グループ」が谷岡久を中心に結成され、翌昭和五十三年に第一回「一陽会高知グループ展」が開催された。昭和五十八年には第二十八回一陽展の高知開催が実現し、順次新人作家の加入も得てグループとしての活動も活発になっていった。平成四年に第四回目のグループ展「一陽会高知グループ92展」を開催し、以後同グループの主要な発表の場として毎年開催され、平成九年にグループの名称を「高知一陽会」と改称した。

谷岡委員を中心に、末田光二、竹村晴夫、平田慎一、阿部（濱口）知暁、岡崎昭夫、福家省造、安藤義孝、美馬須美子、片岡福光、宇田幸正、大黒郁代、清藤みち子、鈴木利久、田島栄、寺尾立子、浜田耕一などがグループの常連となっていった。

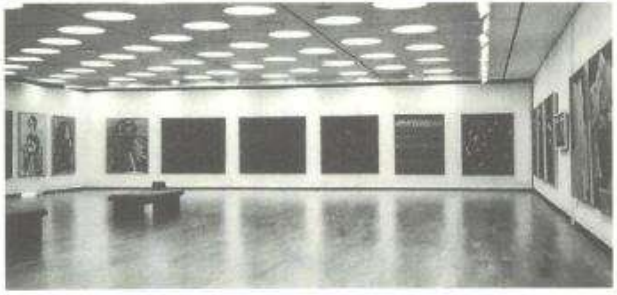
一陽会高知グループから高知一陽会へと三十年間にわたって代表としてグループの育成につとめた谷岡久委員が、平成十年四月に神奈川県茅ケ崎市に移転することになり、高知一陽会一同は以後も谷岡委員の指導を仰ぐべく、同委員を高知一陽会名誉会長として遇することにし、同委員の同意を得た。

谷岡委員の指導のもとに、毎年の一陽会高知展や本展への出品と、高知県美術家協会展や高知県女流展、高知市展、県展への出品というように活発な活動を続けている。

〔播磨グループ〕　＊〔播磨グループの展覧会・活動記録は巻末にまとめて掲載〕

昭和四十六年に、播磨地区（兵庫県西南部）在住の、彫刻部会員の水野清（昭和三十六年逝去）、絵画部会員の田中繁雄、絵画部会友の保田頌子

一陽会高知02展（第14回）　会場風景



一陽会はりまグループ展の合評会

（平成元年退会）、絵画部会友の北嶋正明の諸氏が中心となってグループを結成し、同年、グループの第一回展を姫路市内の百貨店・やまとやしき他で開催する。以後毎年、一陽会はりまグループ展を開催している。

出品作家は年毎に若干の変動があるが、田中繁雄、福田利明（絵画部会員）、北嶋正明、廣門幸三（絵画部会友）、菊井泉弥、塩田康雄、千崎勝廣、内田恭子、川崎徹、久保川道男、西林裕子、萩原正保、安藤慶一、鳥井廣夫、三宅由美、有年外志子（彫刻）などが参加、出品している。

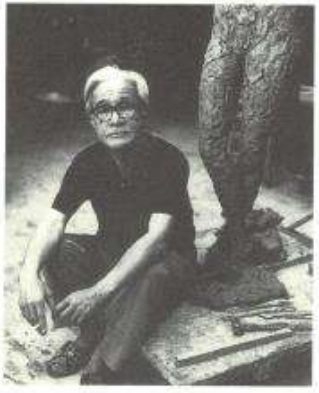
＊（京都・滋賀県グループ）（愛媛グループ）（西日本（北九州）グループ）（広島グループ）の展覧会、活動記録は、巻末の関西支部の活動記録の中で紹介、掲載する。

［追悼］植木力先生

高嶋　文彦

一陽会が創立以来五十周年を迎える二〇〇四年を待たずに、植木先生は他界されました。創立会員として、創立当初は多くの困難に立ち向かわれた事と思いますが、そうした苦労話につきましては、他の項で詳しく述べられている事と思いますので、ここでは省かせていただきます。

私が一陽展に初めて出品したのは十一回展でした。その頃の一陽会には他の大きな公募団体とは一味違った新しい気風に燃えた活気がありました。大学時代の私の師は淀井敏夫先生でしたから、本来ならば二科会に出品するのが常道でした。しかし、当時小さな団体であっても新しい息吹を感じる一陽会に賭けてみようと考えて、淀井先生に相談したところ、「一陽会には植木君が居るから期待している、頑張りなさい」と快く認めてくれました。



植木　力（創立会員・彫刻部常任委員／平成十五年三月逝去）

大正二年東京に生まれる。昭和十五年東京美術学校彫刻科を卒業する。在校中より二科展に入選、会員になる。昭和三十年一陽会創立に参加する。昭和三十二年大牟田駅前に「家族群像」を設置する。昭和五十一年「明治・大正・昭和肖像展」（彫刻の森美術館）に「役者の顔」を招待出品、買上げとなる。昭和五十二年作品「浴後」が文化庁買上げとなる。日本彫刻会会長となる。昭和五十五年作品「坂東三津五郎」（テラコッタ）が東京芸術大学芸術資料館に収蔵される。紫綬褒章を受章する。昭和六十年作品「裸婦」が美ヶ原高原美術館に収蔵される。

一陽会彫刻部内は、植木先生はじめ会員の皆さんが決して権威主義的ではなく、たいへん家庭的で、展覧会の折には、会員から一般出品者まで一緒になって役割を遂行する開かれた雰囲気がありました。これこそ、植木先生の人柄が生み出した彫刻部の風土ではないでしょうか。

植木先生は具象的な塑像を中心に発表してこられましたが、その多くはテラコッタでした。その作品は、縄文時代以来の日本独特の焼き物に適を持つ大らかさ、温かさで、作品と向き合う者を包んでくれます。それは理屈ではなく、醸し出す味わいであり無限に広がっていく大きさであり、不思議なエネルギーです。肖像彫刻も得意とされましたが、決して表面的な形態の描写ではなく、内面的な人間性を深く追求し表現されたものでした。

それにしても、先生は文化人や役者さんとの交友がなんと多かったことかと、肖像彫刻を見ながら改めて驚かされます。晩年はしばしばお孫さんをモデルにされていますが、慈愛に満ちた大らかな作品を発表されていました。

ところで、植木先生は大勢を前にしてお話をされる時は大変口下手でした。ところが一陽展の画集にはずっと随筆を投稿されていますし、著書『関中の関』を出版されていることでも分かるように、言葉を通しての表現力もたいへん豊かな方でした。

例えば、或る人の肖像を造った折のエッセイなどには、モデルの内面を造形の中にはどのように取り込んだのか、眼前に作品を見るごとく伝わってきます。

最愛の御子息である舜一君とその奥さまは共に一陽会に所属されておりましたから、晩年も安らぎの日々を送ることができたことと思います。

平成十五年三月、東京都あきるの市にある特別養護老人ホーム南聖園で静かに生涯をとじられました。

残念なことに、先生が亡くなられた同じ年の十一月、御子息の舜一君が病死されました。あまりにも早い天国での再会に、植木先生は舜一君にどんな言葉をかけられたのか、私は寂しく想像するばかりです。

お二人のご冥福をお祈り申し上げます。

高嶋文彦（彫刻部）常任委員は、平成十六年三月二十五日に病にて急逝されました。慎んでご冥福をお祈りいたします。

一陽会のホームページ

http://www2.ucatv.ne.jp/~itiyokai.snow/

❑一陽会の概要・構成員名簿（会友以上）・展覧会状況及び授賞記録・本年度出品規約・本年度出品用紙（実物）・巡回展・本部、支部連絡先の案内・個人ページ・そのほか

『一陽会五十年史』 一陽会五十年史編集委員会 編

発　行　二〇〇四（平成十六）年九月十八日

発行者　一陽会 ©
北山 泰斗
〒一九八-〇〇六一
東京都町田市鶴川六-一〇-一

編集・著述　『一陽会五十年史』編集委員会

製　作　美術の図書三好企画
〒二五〇-〇〇三一
千葉県松戸市新松戸一-一六-二
電話〇四七-三四七-二一一一／FAX〇四七-三四七-二一一二

印　刷　岡田印刷株式会社

【特別頒布価格】五〇〇〇円（税込み価格）